

博士学位論文

資源の再利用と古代社会
——土器再利用の基礎研究——

2010 年 3 月

埼玉大学大学院文化科学研究科（博士後期課程）

日本・アジア文化研究専攻（主指導教員 高久 健二）

坂野 千登勢

埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程

学位論文

資源の再利用と古代社会
——土器再利用の基礎研究——

坂野 千登勢

主指導教員 高久健二

副指導教員 粂山 明

副指導教員 権 純哲

2010 年 3 月

目 次

序	1
第1章 再利用に関する学説史と問題点の整理	3
第1節 再利用の理論的枠組み	3
第1項 研究目的と意義	3
第2項 遺跡・遺物の形成過程と再利用	4
1 再利用の視点	4
2 再利用と使用価値	4
3 再利用の局面	5
4 廃棄部物の基準	7
第2節 再利用と廃棄の整理	7
第1項 再利用と廃棄の関係	7
1 再利用の概念	7
2 遺物の形成と廃棄	8
(1) 廃棄に関する研究	
(2) 廃棄に伴う行動の分類	
第2項 再利用と研究方法の模索	11
第2章 土器再利用の分析方法	14
第1節 再利用の分析と理論	14
第1項 再利用の分析手法と問題点	14
第2項 再利用に関する研究方法	15
1 打ち欠きと再利用及び祭祀	15
2 再利用の分類概念	16
第3項 再利用の観察と形状分類	18
1 坏類の形状分類	18
2 蓋の形状分類	20
第2節 付着物と再利用の技術的背景	21
第1項 付着物と再利用	22
1 煤・油煙と漆付着との区別	22
2 煤・油煙と墨痕との区別	22
3 灯火具由来の付着物の分類基準	23
4 蓋の付着物等の分類	24
第2項 土器再利用の歴史的・技術的背景	25
1 破損・打ち欠きのプロセスとストック	25
2 土器再利用の歴史的変遷	26
(1) 上谷遺跡の概要	
(2) 古墳時代の剥離された土器群	
(3) 形状タイプ分類と再利用の用途	
第3章 灯火具としての土器の再利用	41
第1節 灯火具に関する研究史と問題点の整理	41

第1項	灯火具の変遷	41
1	古代の灯火具	41
2	中世・近世の灯火具	44
第2項	古代の灯火具復元モデル	45
1	土器再利用の灯火具復元モデル	46
	(1) 付着物の観察結果と灯火具復元モデル	
	(2) 付着物の数量と灯火具復元モデル	
2	灯火に使われた油	47
第2節	坏類の形状分類と付着物の数量結果	47
第1項	若葉台遺跡の土器再利用	47
1	若葉台遺跡の概要	47
2	須恵器・土師器の形状分類の結果	48
3	若葉台遺跡の灯火具	49
	(1) 須恵器坏再利用の灯火具	
	i 時期別・付着物分類結果	
	ii 形状タイプ分類と付着物との関係	
	(2) 土師器坏類再利用の灯火具	
	(3) 須恵器と土師器の灯火具の時期別分類	
4	土師器と須恵器再利用	52
第2項	住吉中学校遺跡の再利用	53
1	住吉中学校遺跡の概要	53
2	須恵器・土師器の形状分類の結果	53
3	付着物と再利用の用途	54
第3項	霞ヶ関遺跡群の土器再利用	54
1	霞ヶ関遺跡群と霞ヶ関関連遺跡の概要	54
2	坏の形状分類と再利用の用途	55
第4項	氷川神社東遺跡の土器再利用	55
1	氷川神社東遺跡の概要	56
2	坏類の形状分類と再利用の用途	56
第3節	須恵器蓋の形状分類と付着物の数量分析結果	57
第1項	若葉台遺跡	57
第2項	入間郡内の遺跡	58
第4章	硯としての土器の再利用	73
第1節	硯の研究史と問題点の整理	73
第1項	硯の学説	73
第2項	定形硯と再利用硯研究の問題点	76
1	定形硯の問題点	76
2	再利用硯の問題点と整理	76
3	文献史料と再利用硯	79
4	硯の研磨と使用痕	80
5	若葉台遺跡における硯の研磨	82
第2節	国直轄官衙における硯の出土状況	83
第1項	平城京の硯	83
第2項	多賀城跡の硯	85

第3項	大宰府の硯	86
第3節	定形硯と再利用硯の出土状況	88
第1項	武蔵国の主要遺跡の定形硯と再利用硯	88
1	武蔵国府の硯	88
2	郡衙関連遺跡の硯	90
3	入間郡内主要遺跡の硯	93
4	入間郡以外の主要遺跡の硯	95
5	生産地と消費地の硯の状況	97
第2項	武蔵国の定形硯の動態	97
1	定形硯の時期別動態	97
2	定形硯の社会的性格の変化	98
第3項	武蔵国の再利用硯の動態	99
1	再利用硯の時期別動態	99
2	再利用硯の器種別動態	100
3	供膳具の画期と再利用硯	101
第4項	東国の定形硯と再利用硯の動態	102
1	武蔵国の硯の動態と遺跡の性格	102
2	再利用硯の認識と実態	103
3	上総国と下総国の硯	104
4	地方官衙の整備と硯の動態	106
第5章	紡錘車としての土器再利用	124
第1節	紡織研究史と問題点の整理	124
第1項	紡錘車の概観	124
1	紡錘車の分類	125
2	紡錘車の使用方法	125
3	紡錘車の重量	126
4	紡錘車で紡いだ糸	127
第2項	日本の紡織に関する研究史	127
1	織機の型式と系譜	127
2	紡錘車の系譜と再利用	128
3	紡錘車としての基準	129
第3項	紡錘車の性格と変化	131
1	副葬・供献された紡錘車	131
2	日本の織機技術革新と社会	132
第2節	古代武蔵国の紡錘車	134
第1項	鉄製と再利用の紡錘車の性格	134
1	再利用の紡錘車	134
2	鉄製紡錘車	136
第2項	武蔵国の紡錘車の出土状況	138
1	武蔵国府周辺遺跡の紡錘車	138
2	入間郡主要遺跡の紡錘車	139
3	各遺跡出土の紡錘車	142
第3項	武蔵国主要遺跡の紡錘車の特徴	144
1	紡錘車の動態と社会背景	144

2 武蔵国紡織の類型	146
第3節 韓半島南部の再利用紡錘車の様相	147
第1項 瓦再利用の紡錘車	148
第2項 再利用の紡錘車と円形土製品	149
第6章 考察	171
第1節 古代社会における土器の再利用	171
第1項 再利用の分析	171
1 灯火具としての再利用	171
2 硯としての再利用	172
3 紡錘車としての再利用	175
第2項 再利用からみた古代社会	176
第2節 古代における再利用の体系化	181
第1項 古代の再利用	181
第2項 資源の再資源化モデル	182
第3項 モノの局面間の移動	184
第7章 結論	188
引用参考文献	192
図版出典	204
附表	206
英文要約	208

図版目次

第1章	
第2節	
第1項	
第1図 Schifferによる消費財のライフヒストリーのモデル	13
第2図 Schifferによる一次廃棄	
・二次廃棄及び事実上の廃棄のフローモデル	13
第2章	
第1節	
第3項	
第1図 坏類の再利用形状タイプ(模式図)	29
第2図 蓋の再利用形状タイプ(模式図)－1	30
第3図 蓋の再利用形状タイプ(模式図)－2	31
第4図 蓋の鈕残存タイプ(模式図)－3	31
第2節	

第1項		
第5図	付着物の分類模式図	32
第6図	若葉台遺跡 付着物 LA 類	33
第7図	若葉台遺跡 付着物 LB 類	34
第8図	若葉台遺跡 付着物 LC 類	35
第9図	若葉台遺跡 断面に認められる LC 類	36
第10図	若葉台遺跡 破片再利用による付着物の違い	37
第2項		
第11図	坏の打ち欠きプロセス	38
第12図	古代武蔵国の土器再利用に関する主要遺跡	39
第13図	打ち欠き痕(住吉中学校遺跡)	40
第14図	上谷遺跡 1・2・4: 剥離された坏、3: 剥離の模式図	40
第3章		
第1節		
第1項		
第1図	灯火具とその使い方	60
第2図	平城宮の灯火具或いは硯に再利用された土器の器種構成	61
第3図	灯火具の各種組み合わせモデル	63
第2節		
第1項		
第4図	若葉台遺跡 須恵器の形状タイプと灯火具の点数	65
第5図	若葉台遺跡 須恵器・土師器坏の灯火具時期別点数	67
第6図	若葉台遺跡 灯火具、形状タイプ坏の灯火具時期別点数	68
第2項		
第7図	住吉中学校遺跡 須恵器・土師器坏類の形状 タイプ灯火具時期別点数	68
第3項		
第8図	氷川神社東遺跡 灯火具としての再利用の組み合わせ	70
第3節		
第1項		
第9図	若葉台遺跡須恵器蓋の形状と時期別点数	71
第4章		
第1節		
第1項		
第1図	風字硯・再利用硯・猿面硯	108
第2図	百済(上段)と新羅(下段)の硯	109
第2項		
第3図	若葉台遺跡出土の円面硯-1	110
第4図	若葉台遺跡出土の円面硯-2	111
第2節		
第3項		
第5図	大宰府の定形硯と再利用硯	113
第3節		

第1項	
第6図	武蔵国の出土状況動態図・・・・・・・・・・・・・114
第7図	霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡出土の定形硯・・・・・・・・・・・・・117
第8図	霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡出土の再利用硯・・・・・・・・・・・・・118
第9図	定形硯・再利用硯時期別出土点数・・・・・・・・・・・・・119
第3項	
第10図	再利用硯時期別出土点数・・・・・・・・・・・・・119
第11図	再利用硯の器種・・・・・・・・・・・・・119
第12図	再利用硯 時期別器種の割合・・・・・・・・・・・・・121
第13図	八幡太神南遺跡1号住居跡の7世紀後葉の 須恵器供膳具器種構成・・・・・・・・・・・・・121
第14図	畿内地域金属器系食器の導入・・・・・・・・・・・・・122
第15図	上総稲荷台遺跡の円面硯と甕再利用硯・・・・・・・・・・・・・123

第5章

第1節

第1項	
第1図	紡錘車の種類・・・・・・・・・・・・・151
第2図	紡錘車の使用方法・・・・・・・・・・・・・151
第2項	
第3図	織機の種類・・・・・・・・・・・・・152
第4図	福岡県雀居遺跡出土の布送具・・・・・・・・・・・・・152
第5図	矢田遺跡紡錘車（6世紀後半～11世紀前半）重量/直径・・・・・・・・・・・・・153
第6図	矢田遺跡紡錘車（6世紀後半～11世紀前半）重量/孔径・・・・・・・・・・・・・153
第7図	武蔵国紡錘車（7世紀末～10世紀前葉）重量/直径・・・・・・・・・・・・・154
第8図	武蔵国紡錘車（7世紀末～10世紀前葉）重量/孔径・・・・・・・・・・・・・154
第3項	
第9図	中国漢代画像石に表された織機と復元された織機・・・・・・・・・・・・・155
第10図	地機中筒受け・・・・・・・・・・・・・155
第11図	布を単位とする大型壺の値段表示・・・・・・・・・・・・・156

第2節

第1項	
第12図	瓦再利用紡錘車・・・・・・・・・・・・・156
第13図	若葉台遺跡出土の須恵器坏底部の平均重量と点数・・・・・・・・・・・・・157
第14図	鉄製紡錘車の重量・・・・・・・・・・・・・157
第2項	
第15図	主要遺跡の紡錘車時期別変遷・・・・・・・・・・・・・158
第16図	再利用・鉄製紡錘車の時期別変遷・・・・・・・・・・・・・158
第17図	武蔵国府関連遺跡の紡錘車時期別変遷・・・・・・・・・・・・・159
第18図	落川遺跡の紡錘車時期別変遷・・・・・・・・・・・・・159
第19図	霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡の紡錘車時期別変遷・・・・・・・・・・・・・159
第20図	若葉台遺跡の紡錘車時期別変遷・・・・・・・・・・・・・159
第21図	東の上遺跡の紡錘車時期別変遷・・・・・・・・・・・・・160
第22図	熊野遺跡の紡錘車時期別変遷・・・・・・・・・・・・・160
第23図	北島遺跡の紡錘車時期別変遷・・・・・・・・・・・・・160

第 24 図	将監塚・古井戸遺跡の紡錘車時期別変遷	160
第 25 図	臼樹原・檜下遺跡の紡錘車時期別変遷	161
第 26 図	中堀遺跡の紡錘車時期別変遷	161
第 27 図	新屋敷遺跡の紡錘車時期別変遷	161
第 28 図	各遺跡における紡錘車の素材別構成 (グラフ 1~12)	162
第 29 図	霞ヶ関遺跡群と霞ヶ関遺跡出土の紡錘車	164
第 30 図	若葉台・千代田・富士見一丁目遺跡出土の紡錘車-1	165
第 31 図	若葉台・千代田・富士見一丁目遺跡出土の紡錘車-2	166
第 32 図	北島遺跡の木製紡織具	167
第 33 図	諏訪木遺跡の木製紡織具	167
第 3 項		
第 34 図	土器再利用の紡錘車重量	168
第 35 図	武蔵国主要遺跡の紡錘車時期別割合	168
第 3 節		
第 1 項		
第 36 図	韓国 7 世紀後半以降、8 世紀~9 世紀の紡錘車と瓦・土器 ・石製容器再利用の類型	169
第 37 図	新羅王京の瓦再利用紡錘車	170
第 38 図	新羅王京の円形土製品	170
第 6 章		
第 1 節		
第 2 項		
第 1 図	古代における土器再資源化と社会変容	185
第 2 節		
第 2 項		
第 2 図	消費地における土器再資源化の流れ (概念図)	186
第 3 図	局面間のモノの移行概念図	187

表目次

第 2 章		
第 2 節		
第 2 項		
表 1	土師器坏 形状大部と灯火具 (黒色付着物) 点数	40
第 3 章		
第 1 節		
第 1 項		
表 1	平城京の灯火具	62
第 2 節		
第 1 項		
表 2	若葉台遺跡須恵器の形状タイプと灯火具点数表	64
表 3	若葉台遺跡土師器の形状タイプと灯火具点数表	64
表 4	若葉台遺跡土師器灯火具付着物 (LA・LB・LC 類)	66
第 2 項		

表 5	住吉中学校遺跡須恵器	形状タイプと灯火具点数	68		
表 6	住吉中学校遺跡土師器	形状タイプと灯火具点数	68		
第 3 項	表 7	霞ヶ関遺跡群及び関連遺跡 須恵器坏形状タイプと灯火具点数	69		
第 4 項	表 8	氷川神社東遺跡ロクロ酸化炎焼成・還元炎焼成坏 形状タイプと灯火具点数	69		
第 3 節	第 1 項	表 9	若葉台遺跡の蓋タイプと灯火具・硯点数	71	
	表 10	住吉中学校遺跡の蓋タイプと灯火具・硯点数	72		
	第 2 項	表 11	霞ヶ関遺跡群の蓋タイプと灯火具・硯点数	72	
第 4 章	第 1 節	第 2 項	表 1	若葉台遺跡 定形硯出土状況	112
	第 3 節	第 1 項	表 2	武蔵国の主要遺跡における硯の出土状況	115
		表 3	定形硯の時期別出土状況	115	
		表 4	霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡 定形硯出土状況	116	
		表 5	霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡 再利用硯出土状況	116	
		第 3 項	表 6	再利用硯の時期別出土状況	120
		表 7	再利用硯に使用された器種	120	
		表 8	再利用硯の時期別出土状況	120	
第 5 章	第 1 節	第 2 項	表 1	紡錘車と紡錘車工具の分類基準	154
	第 2 節	第 2 項	表 2	武蔵国主要遺跡における鉄製紡錘車と再利用紡錘車の出土状況	158
		表 3	紡錘車主要遺跡の時期別出土状況	158	
		表 4	霞ヶ関遺跡群・関連遺跡（川越市）及び若葉台 遺跡（坂戸市・鶴ヶ島市）出土紡錘車一覧	163	

序

一片の土器にも器種、時期、法量など多様な属性がある。このなかで土器再利用の視点で、特に注目することは、土器と人との関わり合いという事柄である。即ち、土器が当時どのように使用されていたのか、そしてどのような来歴を経て、このモノが考古遺物となり、現代に存在するに至ったのか。この単純な問いに、現状の考古学が答えることは、難しいといえよう。この問いに答えるためには、モノと人との関係を分析する理論の構築が重要な切り口であるといえる。

古代においてモノがどのように使用され、どのような履歴を辿ったのか、再利用とはこうしたモノの動きを分類して、認識するための視点といえる。

再利用の視点と分類方法は、考古学からモノの動態的な分析にアプローチできる切り口の一つであり、新たな研究領域として位置づけることができる。

一般的に再利用は、単に貧困及び節約など経済的な側面のみに焦点が当てられる傾向がある。また、再利用は、定形あるいは専用器に対して、単純に足りないモノを補完するだけのものという、一面的な見方で考古学の事実報告が行われてきた経緯がある。しかし、今回再利用の研究事例として扱う灯火具、硯、紡錘車について検討すると、再利用が特別なことではなく、細い流れではあるが、社会の基本的なシステムとして組み込まれた、再生産活動の一つであることがわかる。資源の再利用とは、古代社会におけるモノの使用の仕方であり、再資源化といえる。研究事例の灯火具、硯、紡錘車は再資源化の様態であり、これらのほかにも多くの再利用が行われていたことは想像に難くない。この再資源化の条件として、再利用に適した素材が身近に存在することが必要となるが、さらに再利用として素材を価値あるモノであると考えerかどうか、あるいは、再利用するモノを選択する価値観が背景に存在していることが指摘できる。

本研究は、新たな研究領域として古代社会の土器再資源化の考察という基礎的研究を行うことを目的としている。8世紀、9世紀を中心に集落という、消費地の遺跡から出土した供膳具である土師器、須恵器の坏類や蓋を対象にして、古代における再利用の実態を捉えるため、考古学的分類手法として残存形状のタイプ分類及び、付着物などの観察に基づき、灯火具、硯、紡錘車の事例について定量分析を行い、土器再利用の実態を把握し、古代の東国において経済活動と再資源化のシステムが地域社会に組み込まれていたことを明らかにすることである。社会の上部構造である官衙の硯から、生産基盤の紡錘車に至るまで土器の再利用が行われ、再利用を行うことを前提とする社会であったことを考察する。

土器再利用の用途である灯火具、硯、紡錘車を分析することは、独自の道具の再生産活動として、文献史料では知ることのできない地方豪族の活発な経済活動、及び地方の律令制の実態を把握し、社会構造の変容を起こす要因の一つとして考察することに繋がる。

この再利用の考察には、モノのストック・管理という概念が導き出される。長期間のみならず、消費地における短期間のストックは、時間差を生じる場合があるため、考古学の土器型式編年においても考慮する必要があるといえる。

現代社会はモノが日常生活に溢れている大量消費社会であるが、環境問題に適応するため原子力発電の核燃料の再利用（リサイクル）をはじめとして、日常生活のなかではゴミ

を出さずに、また、どのように再利用し、資源の多様な循環を行うことが求められている時代といえる。

一方、古代の人々も、時代と社会の変化に対応し、適応するための一つの方法として、社会と文化的脈絡において、当時の価値観に基づき、土器の再利用を行っていたと考えられる。古代社会においては、世界的規模で環境変化への対応を迫られている現代社会とは異なる価値観に沿って、モノの使い分けを行っていたといえる。このように古代社会と現代社会は、一見すると対処する問題の内容や規模、そして質も異なる。しかし、古代においては、再利用の視点からみれば、地域などの狭い社会で新たな政治的環境や物質的環境への変化の適応の仕方が存在している。一方、現代社会はグローバリゼーションという世界的規模での自然環境の気候変動への対処という大きな違いがある。しかし、変化する環境への対応、対処の仕方のひとつという点、また、具体的にどのように地域社会で対応するか、さらに経済活動と深く関係しているという点では、モノの再利用は古代と現代に共通するテーマであり、共通する適応戦略の一つとして位置づけることができる。

このように環境の変化への対応として、資源の再利用は、日本の古代社会に留まらず、どの時代と社会および地域においても有効なアプローチであるといえる。

考古学で扱う遺物は、墳墓への副葬などの一部を除き、多くが廃棄・遺棄されたものである。その廃棄や遺棄が、どのような状況であったかを把握することは、考古学では困難な場合が多い。しかし、モノが使用された当時、どのように人々の間を往来し、どのような場面と局面間を移動し、人々との関係をもっていたのかという視点に基づき、遺物や遺構を観察し、分類・分析して比較検討することにより、モノ中心になりがちな考古学において、生産と消費の主体である人間を常に意識する新たな研究領域を形成することが可能となる。このような研究領域によって、時代と地域を越えて、人々の行動や動態と考古学を結ぶ、関係性の学の形成への一歩となると考えられる。

第1章 再利用に関する学説史の整理と問題点

日本の考古学における遺物の再利用についての体系的な研究は、未だ行われていない。特に古代の土器の再利用についての研究は、断片的な報告に留まり、主に祭祀や供献との関係からの説明が行なわれている。再利用は、消費地において、古代の人々とモノとの関係性を研究するという、考古学において重要な研究テーマである。また、再利用は、使用と廃棄という脈絡のなかで、どのようにモノが使用されていたのかに関する研究である。

わずかに近年、江戸時代などで遺物形成の研究において、ゴミや廃棄などに関する研究から出発し、再利用を概念的に整理した論考がみられる¹⁾。

縄文時代の土器片を円形に打ち欠いた土製円板や土錘の例、古墳時代、奈良・平安時代において、須恵器を再利用した紡錘車や硯あるいは、瓦や須恵器の甕の破片などについては竈の構築のための補強材として、各々個別に「転用」例として報告されている程度である。特に遺跡から出土する破損した状態の大部分の土器については、稀に例外的な再利用が認められるという認識であった。このため、再利用の可能性を念頭におく、きめ細かな資料の観察が行われることもほとんどなかった。現状では再利用という問題意識が、欠落しているといえる。

したがって、日本の考古学において、古代の「再利用」の概念に関しても、議論や整理されることはほとんどなかったといえる。再利用は今まで見過ごされていた新しい研究領域といえる。本章では、再利用に関する使用価値、廃棄物、及び遺物と遺跡の形成過程などに範囲を広げ、研究史を整理する。

第1節 再利用の理論的枠組み

第1項 研究目的と意義

本論の研究目的は3点である。①古代社会における土器の再利用の実態を把握し、古代社会における再利用の意義、②日本の考古学における再利用の意味、③この研究を通して現代社会における再利用研究の意義について考察する。

まず、古代において土器の再利用が広汎に行われていたという仮説を立てる。この仮説を検証するため、古墳時代後期を含めて、奈良時代・平安時代を中心に集落という、消費地の遺跡から出土した須恵器・土師器の坏類、蓋類などを対象にして、形状タイプ分類と付着物などの観察に基づき、古代社会において再利用が広く行われていたことを数量的に把握する。また、主たる再利用の用途が灯火具、硯、紡錘車などであることを提示する。

本章では再利用に関連する廃棄・遺棄という人間の行動を含めた、全体の理論的枠組みを提示する。

まず、再利用をめぐる研究課題を次の通り整理したい。

①再利用はモノの製作、使用、廃棄というライフヒストリー・来歴と関係している。

1) 横田龍介氏は、江戸時代の「リサイクル」を通して考古学的概念規定を整理している[横田 2004]。江戸時代に「廃棄」についての論考には、小川望氏[小川 2003]や「廃棄」について遺構を中心に研究史について包括的にまとめた小林謙一氏の論考[小林 2003]などがあり、また、中世は鈴木康之氏の論考[鈴木 2006]がある。

②再利用は使用価値という視点が重要である。廃棄物とその価値の違いを考える。

③再利用を通して、人とモノとの関係性を動態的に捉える。

④モノがある局面を出入することで、価値が変化するという動態的過程として把握する。

現代社会に比べモノの絶対量が少なく貴重であった古代社会では、様々な再利用が一般的に行われていたことが容易に推測できる。しかし、考古学では、再利用が一般的に行われていたという視点からの論考は、皆無である。むしろ、資源の再利用はごく一部の稀な例という、いわば現代社会の大量消費の考え方が無意識のうちに投影されてきたといえる。こうした研究状況を踏まえ、従来あまり関心が向けられていない、古代における資源の再利用に関して、土器の再利用を中心とする視点から、問題提起と実態の分析を行うものである。

第2項 遺跡・遺物の形成過程と再利用

1 再利用の視点

再利用の視点は、考古遺物として廃棄されるまでの間にどのように使用され、取り扱われたのか、モノと人との関係性を論じることである。すなわち、個別のモノからみると、どのように使用されたのか、どのような来歴をもち、どのように使用状況が変化したかという、動態的な視点をもつことが糸口の一つとなる。

再利用と類似する考え方としては、C. レヴィストロース [Levi-Strauss 1962] によるブリコラージュ（器用仕事）がある。「もちあわせ」の限られた道具と材料の集合を使い、当面の目的に合わせて、それらを用いることである。いろいろな機会に、もちあわせられた道具や材料のストックはまとまりがなく、更新され、増加するという現象がみられる。ブリコラージュを行う人（器用人）の用いる「資材集合は単に資材性（潜在的有効性）のみによって定義される。」と記されている。

ブリコラージュは単に「寄せ集め」ではなく、「素材がそこでの用途や機能とは無関係な来歴や感覚的な特異性を保持し、完全には溶け込まずに異物のままになっている」こと、素材を元の用途とは異なる用途に使用することから「流用」とも考えられている [小田亮 2005]。しかし、ブリコラージュは、「共時的、静態的な理論的枠組み」とも指摘されている [湖中 2007]。したがってブリコラージュという考え方は、一般化するための理論として優れた面をもつが、再利用の一側面のみを捉えた考え方であり、ここから発展することが難しい理論ともいえる。

何故、再利用を行うかという意味を考察する際に、各々の再利用の用途がもつ歴史的背景や、どのように再利用が行われているのか、その変遷過程を論じることが意味があると考えられる。モノの動態的過程という分析視点の導入によって、単純に経済的側面としての節約、貧困などではない再利用の価値を提示することが可能になる。

2 再利用と使用価値

再利用は使用価値という視点が重要である。仮に、経済的側面という尺度で考察するためには、再利用されたモノの市場における交換価値 [三浦 1990]、即ち、経済的価値の評価について考えなくてはならなくなる。経済的価値の評価を行うということは、再利用さ

れたモノが市場（市）において交換されることが前提となる。この点、日本の古代社会は、市場経済が未発達である。したがって、現時点の再利用の研究では、まずモノの動態的過程を考察し、交換価値ではなく、使用価値という視点から考察することが優先するといえる。

個別のモノの動態的視点は、Kopytoffにより「事物の文化的履歴」として論じられている。Kopytoffは、モノが人々の間を往来し、その文化的な意味を変えてゆくことをライフヒストリーとして辿るという、研究の視点を提示している〔Kopytoff 1986〕。

また、Appadurai〔Appadurai 1986〕は、Kopytoffの考え方を基にして、モノがある局面を出入することで、価値が変化するという動態的過程に注目している。ここで重要な視点は、モノの動態的過程である。

一定の用途としては使用できなくなった、あるいは価値を失ったと考えられるモノが、再び使用価値のある局面や交換のサイクルに入ることができるかどうか。交換のサイクルに入るとすれば、どのような“場面”であるのかという点に関しては、明確にはできないが、「価値」や「交換」については、湖中真哉氏が整理した資源と現代社会との関係が参考になる〔湖中 2007〕。

湖中氏はAppaduraiの「局面」の考え方を採用して、社会の資源を三つの局面、「本源（source）」「生存資源(subsistence resource)」「市場資源(market resource)」と大別する。局面は、ある資源が何にとって価値ある資源なのかということを問題にする。「本源」は自然にとって、「生存資源」は人間の生存に、「市場資源」は市場において価値あるものであるが、この三局面は現実には、極めて複雑に錯綜していると考えている。特に注目すべき点は「生存資源」局面である。「生存(subsistence)」の概念は、「生業経済(subsistence economy)」に対応し、「生存」とは「市場を前提としない人類のあり方一般」としている。

即ち、この局面では、市場資源における「商品」とは異なり、モノは市場によって価値付けられていない生産物であり、これは自然物に対して「加工物(artifact)」、「生計用具」であり、使用価値が重要となる。また、価値の様態は、市場資源における「市場交換価値」ではなく、「互酬交換価値」であり、生存資源は予め与えられた有限環境のもとで、その範囲内で生存を可能にする努力をしているとする。モノは「贈り物」として把握され、社会関係では互酬交換価値に基づく贈与経済であるとしている。

3 再利用の局面

日本の古代である奈良・平安時代の再利用がどの局面であるのか。湖中氏の説明でみれば、主に「生存資源」局面と考えられる。日本では古代の市の存在はごく一部で、都である平城京・平安京の東西市や地方の官衙周辺とされている。市場経済原理の形成という面では、日本の古代には、その兆しは認められるが不充分といえる。

湖中氏は、現代社会において資源を歴史的時間軸に沿った「直列的」発展段階の図式として描くのではなく、「本源」・「生存資源」・「市場資源」が重層的に、しかも下層となる「本源」が覆い隠された「並列的接合モデル」²⁾であると考えている。事物は、この

2) このモデルの概念図に関しては、「並列的」というより「重層的」側面が強調されているとい

資源の各三局面内や三局面間を高速で行き交うとしている。このフロー（流れ）をたどると、市場で交換価値を失った廃物が、その後再び生存資源局面に入り、使用価値などの観点から価値付けられて、非商品的生産物として利用されている現象をみることができるという。これが、民族誌事例にみる廃物資源利用である〔湖中 2006〕。

日本の古代においては、ごく薄い市場資源の層が形成されている地域と、まだ形成されていない地域があり、不均一な社会的状態であったと考えられる。日本における各局面の形成過程も歴史的時間軸に沿って本源から生存資源、そして市場資源へと移行するという単純な直列モデルを描くことはできない。筆者は湖中氏のモデルと近似すると考えられるが、「並列的」というより、三つの局面の形成過程は時間的に差をもちながらも、地域ごとに層としての厚さが均等ではなく、重層的に形成されていく動態的過程を描くと考えている。

再利用という点から概念的に局面間のモノの移動、流れをみた場合には、使用価値のある局面、使用価値のない局面、そして2つの局面に加え、使用価値のある局面のなかに、第3の局面としてストック・保管が認識できる。この3局面間の移動のなかで、再利用は使用価値のある局面から、使用価値のない局面へ移動する大きなモノの流れのなかで、価値のない局面へ移行する直前の使用・交換価値のあるモノの局面内における細い逆方向の流れであるといえる。モノの属性などにより異なるが、価値あるモノの局面内の移行に注目する。

例えば、須恵器の坏が供膳具として使用された後、破損しても、打ち欠き、穿孔という二次加工が施され、紡錘車として使用価値を付加され再利用されるという流れや、破損しそのままの状態、価値のある局面でストックされた後、灯火具として再利用され、最終的に使用価値のない局面へと廃棄されるという流れである。ストック・保管の局面への移動には、素材として、即ち資源としての使用価値があるかどうかという点で判断されている。また、ストック・保管の局面は、使用、再利用が保留状態である。

このように局面間の移動は多様であるが、これらのフローを追跡し、積み上げる作業が必要であり、これが再利用の数量的把握に繋がる。

4 廃棄物の基準

廃棄物（ゴミ）になるか否かの基準は一律ではない。「一体誰にとって廃棄物であるのか」〔Lynch 1990〕という基本的な問題点が重要となる。有用性があるか否かがゴミ（廃棄物）かどうかの基準と考えられる〔国立民族学博物館 2005〕。これは個人、家族、地域、国家などの集团的判断を行う場合があり、地域や社会、文化の脈絡によって大きく基準が異なる。即ち、廃棄物という対象物に対して、必ず主体となる人や集団が存在するということがわかる

例えば、ヨーロッパ絵画の印象派に大きな影響を与えたといわれる浮世絵は、ヨーロッパに日本の陶磁器を輸出する際の梱包材として使用されていた。即ち、近世の日本人には古新聞と同様のゴミ同然として扱っていたものが、ヨーロッパでは美術品として、その価値を高く評価されたという、歴史上広く知られている出来事がある。

える。

また、民俗学の試みのひとつとして農家で使用され、納屋に収納されていた物をすべて、可能な限り元位置のままで展示するということが実施されている³⁾。この展示では、今日使用されていない養蚕用具類や農具類のほかに、多数の刃部が欠損するもの、磨耗して使用できない鎌や鍬、様々な機械類の部品、大量の木の板など、通常では廃棄物として排除されているものが多数認められたが、担当者は、再利用の資源として可能性があるため、すべてを展示したと記している。即ち、収納、ストックされたものは、廃棄物ではなく使用価値があるもの、資源として位置づけられているといえる。

廃棄物の基準は主体者により異なる。したがって、モノが人々の間を往来し、その文化的な意味を変えてゆく過程を辿る「事物の文化的履歴」や、各局面間の移動という視点による考察が有効であるといえる。

第2節 再利用と廃棄の整理

第1項 再利用と廃棄の関係

日本の考古学で再利用について、体系的にまとめた論考は、いままでのところ皆無に等しい。土器の再利用に関しては、「転用」という用語が、「再利用」と同様な意味で慣用的に使用されている⁴⁾。研究の現状は、打ち欠きや削りなどの二次加工が明確に認識されるものと、形状変化による観察結果に基づき断片的な報告が行われ、主に祭祀や供献との関係に終始して説明されている。

再利用は、モノの製作、使用、廃棄というライフヒストリーと関係している。再利用の研究は、従来の考古学における生産地及び生産者中心の研究動向に対して、消費地としての集落で、どのように土器が使用されていたかという、古代の人々の消費活動が研究対象となる。

1 再利用の概念

アメリカの考古学では、1970年代に M.Schiffer が、再利用に関しては考古遺物の形成過程を体系化し、説明するためのフローモデルのサブシステム（第1図）として、概念的整理を行っている⁵⁾。しかし、あくまでも遺物がどのように形成されたかという点に重点がおかれ、遺物のライフヒストリー（ライフサイクルと同義）の一つとして捉えている。

遺物のライフヒストリー概念からのアプローチは日本では、旧石器時代などの石器関連の論考に一般的に認められる〔澤田敦 2003〕。また、木製品に関してもライフヒストリーからのアプローチが行われ始めている〔村上 2004・2009〕⁶⁾。現在、考古学において鉄製

3) 〔国立民族学博物館 2005〕で紹介されているが、展示の基礎となった資料としては、相模原市立博物館発行の『上九沢笹野家とその生活用具』（1997年）などがある。

4) 考古学で使用される「転用」は、現代の環境問題の再利用（リサイクル）に関する文献などには、概念を示す用語としては使用されていない。また、標準的な見方として『広辞苑』（岩波書店 1948年）では、「転用」の意味は「本来の用い方にしないで、ほかの用途に用いること」とある。

5) reuse に包括される2種類の概念として、recycling と lateral cycling に分け、lateral cycling は使用者が変化するという視点から定義している〔Schiffer 1972・1976〕。

6) 村上由美子氏は、「履歴」、あるいは「使い下ろし」として木器のライフヒストリーを捉えている〔村上 2009〕。

品ではライフヒストリー研究の論考は知られていないが、再利用が多く行われていたことは十分考えられる。

古代の土器についてのライフヒストリーに関する研究はわずかである。ライフヒストリーという用語は用いられていないが、川畑誠氏による論考で、土器の生産から廃棄及び考古遺物として発掘されるまでの流れが、経験的に示されている〔川畑 1999〕程度である。いづれにしても、石器、木器、鉄器をはじめ、土器を含む道具（モノ）と人との関係を考察する新たな方法の一つとしては、ライフヒストリーという視点からの分析が必要である。そのなかで再利用は、土器のライフヒストリー研究において重要な視点の一つと考えられる。

即ち、前述した Kopytoff の「事物の文化的履歴」という、モノが人々の間を往来し、その文化的な意味を変えてゆくことをライフヒストリーとして辿る視点が研究の基礎となる。また、Appadurai によるモノが局面を出入することで価値が変化するという、動態的過程を基礎とする視点から、モノと人との研究を行うことが重要である。

2 遺物の形成と廃棄

(1) 廃棄に関する研究

考古遺物がどのように形成されたのか。日本では廃棄についての研究は、各遺跡における出土状況の詳細な報告を基調とし、パターンとしての認識から始まっている⁷⁾。遺跡や遺物の形成過程について、包括的なモデルの提示は行われていない状況である。一部では Schiffer のライフヒストリー論を基礎に、アメリカでの演繹的な研究を取り入れた研究が認められる〔小林謙一 1991、2006〕。

遺跡形成過程に関する研究で人間の行動との関係に着目した Binford は、その方法論として「ミドルレンジセオリー」〔Binford 1962・1968、阿子島 1983〕を提示した。既述の通り、考古遺物の形成過程は、主に Schiffer によってある程度、概念的に整理されてきている〔Schiffer 1972・1976〕。しかし、考古遺物の形成過程は単純ではない。また、どのように遺跡や遺物から、廃棄行動を検証していくかという方法論についても確立しているとはいえない。さらに有効な方法論を模索している段階であるといえる〔西秋 1995〕。

こうした学問的状況ではあるが、廃棄行動によって遺跡、遺物が形成されることから、廃棄は、当時の社会やモノとの関係について検討する際には、重要な研究の視点である。古代における土器などの再利用は、考古遺物形成過程のプロセスの一つであるため、主に廃棄行動過程を整理したい。

廃棄行動については、Ascher [Ascher 1968] により、既に先鞭が付けられていたが、Schiffer は、考古遺物の形成過程を文化的形成プロセス（C 変換:cultural formation process）と、非文化的プロセス（N 変換:non cultural process）に大別した。C 変換は、道具の製作、使用、廃棄行動や、住居跡が後世の耕作で破壊されることも含む。また、遺

7) 小林達雄氏による住居への遺物の廃棄に関する「吹上パターン」〔小林達雄 1965〕や、桐生直彦氏による住居廃絶や廃棄行為に関する一連の著作がある〔桐生 2006〕。

物として発掘調査後に洗浄などで、付着物などが剥がれ落ちることも含まれるだろう。

N 変換は、遺物として土に埋もれていく過程で、雨水や昆虫などの影響により、遺物自体あるいは、廃棄された位置から移動することを含む、人為的ではないもの、主に自然の影響ともいえる。

この二つの遺物形成プロセスがどのように、そしてどの程度であるかを具体的に把握し、遺物、遺構に残された付着物や痕跡などと比較するため、実験考古学や民族考古学 (ethnoarchaeology) による廃棄・遺棄行動に関するアプローチが行われ、一定の成果をあげている。

文化的形成プロセス (C 変換) は、廃棄 (discard) あるいは遺棄 (abandonment) によって、機能的脈絡 (systemic context) から考古学的脈絡 (archaeological context) へとモノが移行することにより、脈絡が変化するとされている (第 1 図)。systemic context は社会、文化的システム⁸⁾のなかで、モノが機能し、人が行動している状態であり、「機能的脈絡」と訳す。即ち、土器や石器などのライフヒストリーとして、原材料の獲得、製作 (生産)、使用 (消費)、再利用、廃棄という流れを描いている。再利用はこのフローを廃棄直前で一時的に逆行するサブシステムと位置づけられている。

(2) 廃棄に伴う行動の分類

廃棄 (discard) という行動により廃棄物は一次廃棄 (primary refuse)、二次廃棄 (secondary refuse) に、そして、廃棄とは異なる、遺棄 (abandon) という行動により、事実上の廃棄 (de fact refuse)⁹⁾に区分され、考古学的脈絡へと移行する (第 2 図)。事実上の廃棄 (de fact refuse) は集落を離れ、廃絶する時に使用できるモノも含めて遺棄することであり、「放置」¹⁰⁾ともいえる。また、死者への副葬品や儀礼によるものも含むという。一次廃棄とは、使用している場所に廃棄することであり、二次廃棄は使用している場所以外に廃棄することである。この廃棄、遺棄、及び一次廃棄である放置と床面の遺物との関係が問題点になる。

以上、廃棄及び遺棄という行動によって、3 種類に廃棄物は区分されている。民族事例の調査では、廃棄及び遺棄という行動パターンと廃棄物に対応させることは、ある程度可能である。しかし、遺跡から発掘される遺物は、この 3 種類が遺構毎に混在し、中には重層的に重なった状態と考えられる。また、事実上の廃棄、あるいは放置 (de fact refuse) については、幾つかの遺物が持ち出される行動パターンを考慮した上での考察が必要であることが、Binford [Binford 1981] によって指摘され、Schiffer [Schiffer 1985] との間で

8) システムは、フォン・ベルタランフィによる「一般システム理論」と Binford に代表される考古学におけるシステムに大別できる [安斎 1995・2006]。一般システム理論の「システム」は全体、及び組織化に関する概念であり、各部分が相互作用をもつ統一体という考え方である。こうした一般システム理論を踏まえ、数学者のウィナーによるサイバネティックス (制御) 理論のフィードバックの考え方などを考古学に取り入れ、文化の動的な側面に注目したのが Binford である [Binford 1962]。既に Binford に先立ち、考古学のシステム論的研究方法は、1948 年に W.タイラーにより提唱されていた。考古学では社会や文化を構成する要素である人口、技術、生業などの相互作用や相互依存性を把握することで理解できると考えている [Renfrew 2001]。

9) Schiffer は明確には図示していないが、遺棄 (abandon) によると考えられる。

10) 西秋良宏氏の訳である。氏の指摘のように、日本では、廃棄行動に関する用語は研究者間で一致していない [西秋 1994]。

議論されている。

最初に放置された遺物が、一体どのような状況を表しているのかが問題になる。ポンペイの前提(Pompeii premise)は、床面の遺物が使用されていた状況でそのまま放置され、考古学的脈絡へと移行したとする廃棄物の一類型であり、イタリアのベスビオス火山の噴火という災害により、短時間に壊滅した都市遺跡ポンペイを例とする。即ち、住居内での行動を忠実に表した道具や家財の一覧(systemic inventory)といえる。しかし、こうした遺跡は限られたわずかな例であり、大部分の遺跡では主に二次廃棄を扱うこととなる。

Binford は、大部分の遺跡から発掘される床面に放置された遺物は、居住者による移動先へのモノの持ち出し(curation あるいは curate behavior)によって、ほかの遺跡へあるいは集落内の別な住居へと一部が持ち出され、元の状態を保ってはいないため、ポンペイの前提のような当時の使用状況をそのまま表すものではないことを指摘した。

Schiffer は行動的脈絡において、どのようなものが使用されていたか、当時の家財あるいは道具一覧ともいえる“systemic inventory”を「放置」の廃棄物から明らかにしようとした。その際に何がどのような行動によって、どの程度の数量的に減少したかということが問題になる。まず、curation が行われるためには、集落間の距離、集落への帰還の有無が重要になると考えている。

民族考古学の調査事例から認められる、放置された遺物の数や種類に影響する要因は、大きさ、重さ、置き換えのコスト、廃棄するまでの使用期間とみられる。次に考古学的には識別できないが、現代社会でもよくみられるように、ほかの居住者へ使用可能なモノを譲る行為である使用者変更のリサイクル(lateral cycling)により、放置遺物は減少する。また、既に移動することを知った段階で、持ち物を少なくするため、置き変えずに代替品で済ますなど(draw down)が行われているとする。

さらに、Binford が指摘する curation のほかに、近隣の別な居住者による廃棄物漁り(scavenging)、後代の全く別な地域や異なる時代の人々による収集(collecting)や略奪(looting)などにより、放置遺物が減少することも述べている。

重要なことは、Schiffer は明確に論述していないが、モノを移動先に持ち出す判断基準の一つは、運び出す価値(使用価値や交換価値)があるか否かという点を指摘できる。また、再利用のサイクルに移行できるかどうかという点でもこの価値がポイントとなる。さらに、Schiffer は獲得、製作(生産)、使用(消費)、再利用、廃棄へ移行する際に、移動あるいはストックの機会を想定している(第1・2図)が、それ以上、ストックについては注意を払っていない。全体からみればわずかな数量であるが、ストック・保管は再利用や廃棄において、重要な点であることを指摘したい。

また、機能的脈絡において、廃棄物の種類と数量に影響を与える幾つもの要因が存在するが、大まかに2点にまとめられる。

まず第1点としては、居住していた集落への帰還の予定の有無[Stevenson 1982]であり、次に住居あるいは、集落の廃絶計画が段階的に行われたのかあるいは、突発的なものであったのかという点である¹¹⁾。このように systemic inventory の復元や推定は、既述

11) Deal による中米マヤの集落事例を基にした土器の廃棄の研究では、帰還の予定よりむしろ、住居の廃絶のスピードが遺物の数量と種類に影響を与えるという[Michael Deal 1985]。

した多くの要因によって大きく影響を受けることが提示されている。

廃棄・遺棄に関する近年の研究では、Schiffer の遺棄プロセス (abandonment process) を基にした、①一定の地域の各集落間と②集落内における廃棄遺棄の二つに大別して、民族考古学の事例研究を含めて考察が行われている [Cameron 1993]。

床面の遺物を使用して、住居廃絶の時期を推定することや、民族事例の土器使用の年数データから systemic inventory の復元や推定も行われているが、前提となる部分が多く、いまだに方法論としては、試みの段階であると言わざるを得ない。すなわち、欧米において廃棄や遺棄の研究は、概念的には整理がある程度行われているが、具体的な考古資料である遺跡や遺物のデータによって検証するための方法論は、試行段階といえる。また、再利用についても、特に研究は進展していない。

日本でもポンペイの前提 (Pompeii premise) に該当する遺跡は、数少ない。わずかな例として、榛名ニッ岳の噴火によって、火山灰や軽石に埋もれた古墳時代後期を中心とする群馬県黒井峰遺跡、中筋遺跡などがある。

黒井峰遺跡 [井川 1991] では、堅穴住居とほかの遺跡ではほとんど認められない平地住居をはじめ、家畜小屋、柴垣、道などの遺構が面的に検出され、当時の生活の様相が明らかになっている。この遺跡で発見された須恵器の出土比率は、土師器が一般的である同時期のほかの遺跡よりも、須恵器が 23～24% と圧倒的に多く、特に破片が多いという。しかし、須恵器の広口甕については、大きな破片がほかの須恵器の器種より残り易いと考えられるにもかかわらず、小破片が多く、大きな破片が極めて少ないことから、逆に須恵器甕の大きな破片は、破片として再利用されていた可能性が報告されている。しかし、具体的に再利用の用途に関する観察は行われていない。

第2項 再利用と研究方法の模索

日本でも Schiffer の遺棄プロセスやライフヒストリーを踏まえた、近世の遺物研究が行われている [桜井 2002]。この方法では systemic inventory にあたる器種組成復元に関して、民族誌からの土器の使用期間のデータや文献史料を用いている。また、多くのものが捨てられずに蓄積されているという、生活財の研究成果 [中鉢 1986] から桜井氏は、生活財の使用期間が重要であること、ライフヒストリー論は単純ではないことも指摘している。近世の考古遺物を生活財として、新たな研究法を模索したものといえるが、新たな研究と方法論の紹介段階という印象を受ける。

モノに対する働きかけは、重層的に多様な痕跡や状況として残存している。これをプロセスとして、どの程度影響があったかを把握することが可能になれば、社会的、文化的脈絡のなかに遺跡を形成した当時の集団を位置づけ、分析することへ繋がる。

Schiffer の遺物形成過程のモデルは、基本的に人間の行動と廃棄物の関係についての大まかな説明には有効であるが、何故、放置とならずに運び出されるのか、あるいはモノが何故、遺棄され廃棄物となるのか、持ち出されるのかという行動の説明は、置き換えコストなどの経済的な側面からの説明が行われているに過ぎない。遺棄に関して、わずかに埋葬に関係する祭祀などの文化的社会的側面からの理由が述べられている。

しかし、基本的には何故あるモノは廃棄物となるのか、どうしてこれ (モノ) は廃棄に

ならないのかという点では、十分に説明ができていない状況ではない。この遺物形成過程の考え方を補完する方法論としては、Kopytoff の「事物の文化的履歴」の考え方を踏まえた、個別のモノに関するライフヒストリーを積み上げることと、その総合的な分析が有効といえる。

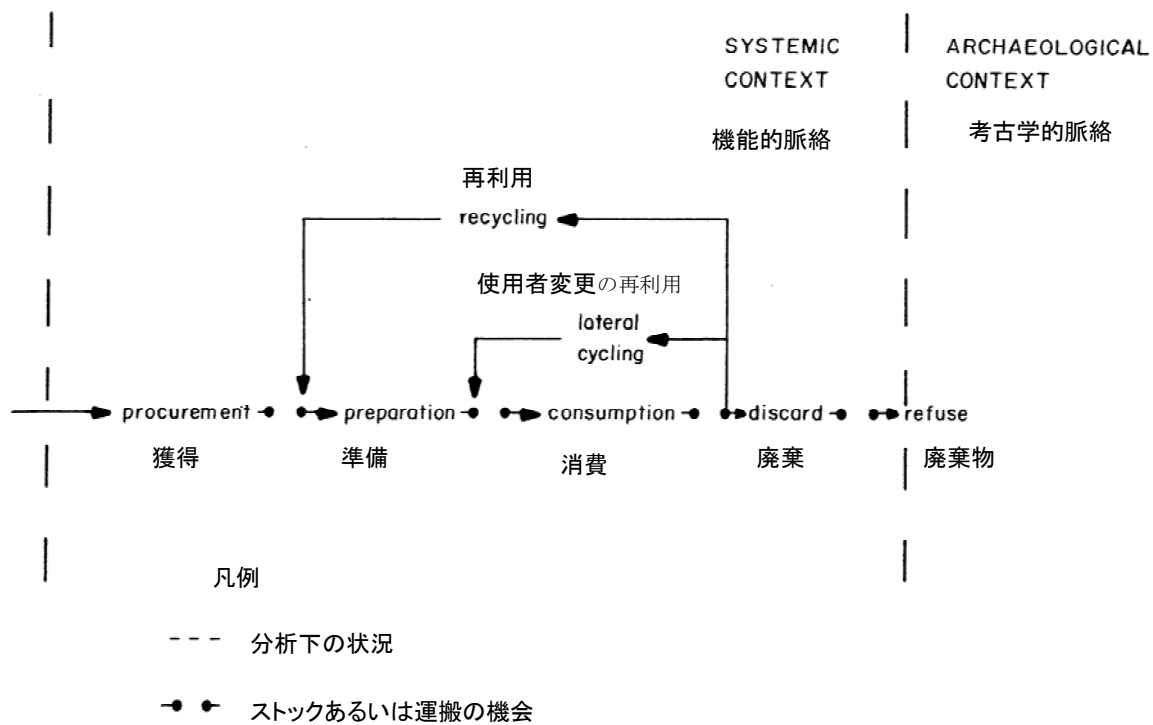
また、モノに対する価値と、これを背景としたストック・保管という行動が重要であることが指摘できる。

再利用はあくまでも議論の出発点の一つであり、モノが廃棄・遺棄に至る以前の複雑な人間行動の経緯の一つともいえる。このように再利用は、複雑に絡み合う様相を動的に描くための分析概念として位置づけることが可能であろう。

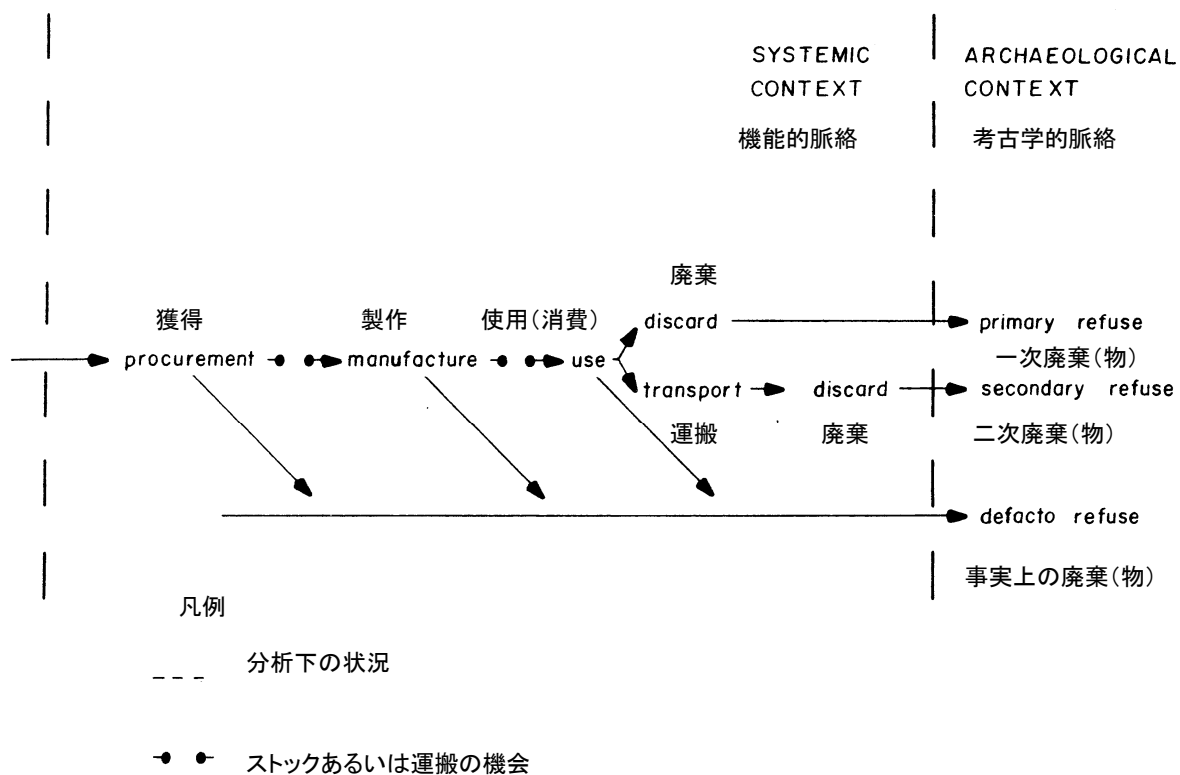
即ち、Schiffer の遺物形成過程及び、Kopytoff による「事物の文化的履歴」、Appadurai の動態的概念やモデルを踏まえ、日本考古学における個別の事例観察によるデータから、複雑な様相の各遺跡や地域の遺物に関するライフヒストリーを積み上げて、関係性の分析を行うことが重要である。

まず手始めとして、それらの様相を丹念に描き、人とモノとの関係について、新たな動態的概念やモデルを構築することが必要である。再利用は各地域の複雑な社会構造の変化を捉えるアプローチの一つとなることが可能である。

本論では、日本の古代社会における再利用の在り方について具体的にみてゆく。



第1図 Schifferによる消費財のライフヒストリーのモデル[Schiffer 1972]



第2図 Schifferによる一次廃棄・二次廃棄及び事実上の廃棄フローモデル[Schiffer 1972]

第2章 土器再利用の分析方法

古代社会の再利用の用途について、確認できるものはわずかにすぎない。しかし、新たに再利用という筆者の視点によって、土器という「モノ」から、新しい情報を読み取ることが可能になるだけでなく、資源を「再利用」する古代の人々の社会や物質文化との関係について、その一端を明らかにすることができる。専用器に比べて、再利用を研究するということは、わずかに散在する細い糸を手繰りによって、集めるような手法であり、わずかな証拠を積み重ねて、やっと再利用の存在自体が認識できる研究方法といえる。

第1節 再利用の分析と理論

第1項 再利用の分類手法と問題点

再利用の研究は、従来、陰に隠れていた部分に光を当てるような手法であるが、この手法によって全体を把握することが可能となる。再利用は従来、偶然に稀に行なわれたもので特別なものという認識から、なぜ再利用がその用途について行われたか、その具体的存在と実態の把握は、ほとんど行なわれていない。

再利用について用途を把握するための基礎的な分析方法として、①残存状況を把握し形状分類を行うこと、②再利用の使用痕跡として、付着物や磨耗痕の観察を行い、再利用の用途を特定すること、③どのような遺跡で、どの時期に再利用が行われたのか、及びどのような器種が再利用されているのかについて数量を把握し、再利用の実態を把握し分類することである。再利用の用途の事例を積み上げて、法則性を導くことが重要である。

個別の再利用の用途に関する事例研究においては、再利用のみを取り出してもその意義について理解は限られたものとなる。用途に関する専用器の研究史やその使用の仕方を把握して参考にすること、また、再利用を専用器も含めた各々の用途全体の脈絡に再利用を位置づける、あるいは対比させることが必要である。この方法により、専用器と再利用との関係性、及び専用器も含めた用途全体の内容について理解が深まる。

再利用の用途に関する事例研究を述べる各章では、研究が進展している各専用器についての研究史を参考にしたうえで、専用器を含めた実態の把握を行い、再利用の役割や意味を浮き彫りにして、考察するという手法をとる。

したがって、再利用の個別用途の研究事例では、一見、各々関係がない独立したものに見えるが、共通した再利用という糸で繋がっていることを明らかにする。

日本の古代社会は、律令制の導入により中央集権的国家体制が成立したという文献史学の構図がある。中央である畿内における文字に書かれた制度的変化と、地方の武蔵国などの遺跡及び遺物からみえる状況は、大きく異なる。再利用の研究は、文字で書かれた歴史像と異なる歴史的変化のプロセスを把握するための切り口の一つとなる。

古代の武蔵国を中心に地方における再利用の事例をみてゆくが、その際に官衙関連遺跡とそれ以外の地域の核となる大規模集落における状況の差異について、また、中央である都城の再利用の状況についても把握し、地方での再利用のあり方と比較検討することが必要となる。こうした中央と地方、地方の官衙関連遺跡と大規模集落における律令制の実態を把握するためにも、従来の専用器からの考察のみでは限界があり、再利用という視点か

らの分析が有効である。

第3章以降で供膳具を使用する土器再利用の事例として、灯火具、硯、紡錘車について実態を把握し、具体的に分析するため、第2章では基礎となる形状分類、及び再利用の用途に関する付着物の分類について説明する。次に、土器再利用の技術的背景と再利用に関係して重要な概念であるストック・保管についてふれる。

第2項 再利用に関する研究手法

土器の再利用は、現在、形状や付着物の観察から、灯火具、硯、漆のパレット及び竈の構築材などの用途があることがわかっている。器種ごとに再利用の用途の違いと傾向が認められ、その用途は一部重複している。

再利用の用途としての灯火具や硯などに関する研究は、基本的に少なくかつ各々個別に進められている。細い糸ではあるが、「蛸壺」化していた個別研究が、再利用という広い視点を導入することにより、糸で結ばれ有機的な関係をもつ研究として認識される。このように、古代における土器再利用の一つの在り方として、今後の研究の展開に繋ぐことができよう。

古代土器の再利用とは、いわば消費地において土器を素材とする新たな道具作りでもある。再利用については、遺跡から出土した遺物の脈絡において、どのような意味をもっていたのかということを認識し、多くの出土遺物を対象に、丁寧に観察を行い、再利用を考察することが重要である。

本研究の端緒になった埼玉県坂戸市と鶴ヶ島市にひろがる8世紀～9世紀代（奈良・平安時代）の大規模な集落である若葉台遺跡¹⁾から出土した須恵器、土師器の坏類を観察した結果、ある一定の形状を呈する破片が多く認められ、形状によるタイプ分類が可能であることに気づいた。

既に「再利用された土器群の考察」〔坂野千登勢 2005〕において、具体的に土器の再利用がどのように行われていたのか、全体の脈略を把握するために、坏類の残存形状の観察を行った。次に、観察が比較的容易である付着物に注目し、付着物の種類の特定と付着状況の分類との関係から、須恵器、土師器の坏類に関する再利用の用途が、主に灯火具であることをこの論文で提示している。

このように、今まで見過ごされていた土器の再利用という課題に、若葉台遺跡の土器のデータを基に破片を含めた坏類などが、19種類の形状にタイプ分類できることを出発点として、数量的分析を行う。また、消費地である集落遺跡で、古代の土器再利用が、どのように行われていたのかを考察する。

1 打ち欠きと再利用及び祭祀

打ち欠いたか否かは再利用において、第一義的なものとは考えていないが、「打ち欠く」

1) 若葉台遺跡の発掘調査報告書は、1983年より坂戸市域分として6冊、鶴ヶ島市域分で5冊が教育委員会などから刊行されている。鶴ヶ島市発掘分の若葉台遺跡の土器は、実見する機会を得た。8世紀中葉のB区6号竪穴住居跡から出土した260点以上の須恵器の坏には、一定の形をした破片が多く、形状タイプ分類が可能であることを気づく出発点になった。

ことは、再利用（リサイクル）の重要な切り口の一つとして捉えている。

基本的に欠損が人為的、意図的に行われたと推定される土器は、仮器化されて墳墓などへの供献あるいは、祭祀のための道具とする論考が多い。しかし、集落から出土する古代の須恵器坏・土師器坏類などへの打ち欠き行為については、あまり関心が払われてこなかった。

宮崎由利江氏は、埼玉県氷川神社東遺跡から出土した9世紀後半以降の須恵器や須恵器系土師器の多数の坏類に、打ち欠きが行われていることを報告している〔宮崎 1993〕。また、千葉県船尾白幡遺跡では、糸川道行氏が奈良・平安時代の須恵器・土師器の坏などに、多く打ち欠きが施されていることを確認している〔糸川 2004、糸川・香取 2005〕。しかし、両氏とも主に祭祀に結びつけて解釈していることが特徴である。

一方、少数例ではあるが、打ち欠きを土器に残る使用結果の痕跡として、須恵器の貯蔵具に関し使用実態の復元を意図した川畑誠氏の「須恵器貯蔵具の消費痕跡試論」がある〔川畑 1999〕。長頸壺などの生産から消費に至るまでの段階で、「消費痕跡」として再利用を位置づけている。

須恵器の坏類に関しても9世紀代を中心とした墨書土器の観察から、打ち欠きを祭祀のみのためではなく、墨書土器に残された痕跡の一つとする論考がある。荒木志伸氏は墨書土器に限って、その諸属性の観察から打ち欠きの他に、油煙や漆の付着物、また、磨耗から再利用の硯について言及している。底部のみ残存する須恵器の墨書土器に限っている点などは、土器再利用からは十分な分析とはいえないが、墨書のみられない土器においても、打ち欠きなどが観察されることにふれている〔荒木 1999〕。

祭祀と打ち欠き土器との関係は、筆者も皆無とは考えていない。しかし、今までの研究では、打ち欠かれた土器を、出土遺物全体の脈絡のなかで捉える視点はほとんどみられず、また、用途の特定に重要な付着物などの観察も注意深く行われていなかった。さらには詳しい根拠が提示されないまま、祭祀のためという理由付けが行われていたといえる。即ち、従来の祭祀という枠組みからではなく、改めて形状や付着物などの観察から出発して、考察することが必要かつ重要である。

2 再利用の分類概念

本論では、リサイクル（recycle）・「再利用」と、リユース（reuse）・「再使用」について次のように概念を区別して用いる。再利用は、Schiffer〔Schiffer 1972 A・B〕のように獲得、製作（生産）、使用、維持、廃棄というライフヒストリーのなかで、サブシステムとして位置づけられる。

さらに再利用（reuse process）については、4区分されている〔Schiffer, Downing, McCarthy 1981〕①リサイクル（recycle）：使用されたものが新しいものに再度作り変えられて使用される、②二次的使用（secondary use）：形状はそのまま異なる使用が行われる、③使用者変更のリサイクル（lateral cycling）：形状や使用方法を変えずにモノの使用者が変更になる、④保存プロセス（conservatory process）あるいは収集行為（collecting behavior）：形状は変化せず、使用方法が変化するというものである。

①リサイクル（recycle）及び、②二次的使用（secondary use）は、使用者の変更には関係がなく、④保存プロセス（conservatory process）あるいは収集行為（collecting behavior）

は、二次的使用の一種と考えられている。

考古遺物における再利用は、基本的には①リサイクル (recycle) 及び、②二次的使用 (secondary use) である。③使用者変更のリサイクル (lateral cycling) は、概念的には区分できるが、考古遺物から認識することは困難である。ただし、現代社会においてはかなり一般的である。

本稿では再利用に限定して、次のように定義した。

広義のリユース (reuse)	{	狭義の再利用 (リサイクル・recycle) 「転用」を含む
		狭義の再使用 (リユース・reuse) 同じ用途に使用すること

狭義のリユース (reuse) ・「再使用」は、再度同じ用途に使用することであり、使用者が変化する場合も考慮しなければならない。狭義のリサイクル (recycle) ・「再利用」は、「再生利用」²⁾ともいえるが、ここでは、リサイクルを語感の点からも、「再利用」に統一して使用する。また、狭義のリユース (再使用) と狭義のリサイクル (再利用) を含む概念として、広義のリユース (reuse) を考えている。本稿の「再利用」とは、狭義の資源のリサイクル (再利用) を意味し、考古学で慣用的に使用されている「転用」を含む概念として捉えている。

転用は、「本来の用い方をしないで、他の用途に用いること、流用」[岩波書店 1969] という意味であるが、人が日常生活のなかで様々なモノを本来の意味・文脈とは異なる他の用途にもちいるという「領有／流用 (appropriation)」の概念につながり、また、「人々がモノをいかに使ったのか」という人とモノとの関係性、「モノを実際に使う過程」がみえるという[朽木 2001]。流用 (appropriation) の概念は、Kopytoff の「事物の文化的履歴」とは個別のモノの使用される場面が強調されている点に差異があるともいえるが、基本的には、第1章第2項で述べた Kopytoff や Appadurai の考え方である動態的視点の枠内で納まると考えている。

「転用」について詳しくみると、概念的には2種類に区分できる。まず、生産地で須恵器の蓋や坏・埴などの一定の用途を想定し、目的をもって生産されたものが、消費地において別な用途、例えば、坏蓋硯等として、はじめから使用される場合である。もう一つは、破損などにより、別の用途に再利用される場合である。しかし、実態として遺物からは、これら2種類の区別は容易ではなく、大変困難である。

甕の破片に明瞭な加工の痕跡が認められるような硯については、再利用された硯として考えられる。その一方で、蓋を再利用した硯に関して、はじめに蓋として使用されていたかどうかについては、実際に不明瞭なものが多い。石山寺[古尾谷 2004]などの一部の畿内における官衙関係について残された文書により、はじめから硯として使用されたとわかる蓋類の存在は限られている。したがって、完形品に関しても付着物などの明瞭な痕跡が

2) 現代のリサイクルなどの用語に関しては、[(財)クリーンジャパンセンター2002]などを参考にしたが、著者によりリサイクルなどの概念規定に各々違いがあり、統一されていない状況である。

ある場合には、再利用された対象として扱う。坏類についても、まず供膳具として使用されたかどうかの痕跡をたどることは困難であり、蓋類と同様に完形も対象とする。

第3項 再利用観察と形状分類

再利用は用途を特定することが重要である。そのため、はじめに基本となる形状分類を行い、次に付着物による再利用の可能性、及び用途を推定するという方法を用いる。色調変化も一つの指標となるが、比較実験を行うなどの必要があるため、本稿では扱わない。付着物は、再利用のうち幾つかの用途を推定する際に、観察が容易であることから注目したものである。また、土器の残存形状と付着物から、灯火具、硯、紡錘車としての再利用の状況と特徴、及び傾向を数量的に把握、分析してその有機的関係を考察する。形状分類を基礎に、一定の形状の類型が、どの再利用の用途に多く用いられているかという傾向を把握することができれば、観察する際に重点的に同類型の残存形状に注意を払うことが可能となる。

形状分類に関して特に、須恵器の坏類など供膳具を主な対象とした理由は、生産地（窯場）で時期区分が整えられ、土器型式から時期的変遷が追跡し易いこと、また、出土点数が多いため、タイプ分類とその類型化による比較検討が行うことが可能となるからである。遺跡から出土する土器の多くは、完形ではない状態である。土器の割れ口を観察する際に、偶然に割れた結果の断面であるのか、人為的なのかの区別が難しい場合が多い。また、土器の再利用が行われていたかの有無に関して、従来は削り、打ち欠き等の二次加工を基準にして判断しているが、不明瞭なものも多い。

したがって、本論では、ある一定の形状を示す土器が遺跡から多く出土し、廃棄されている点に注目した。再利用には灯火具のみならず、多様な用途が推定されるが、その再利用の用途に適した形状にすることが、二次加工の主要な目的であり、合理的な共通する一定の形状を用途や機能の面から選択していたことが予想される。意図的な二次加工か意図しない破損かではなく、用途に適合した一定の形状であることが重要である。即ち、一定の形状、同じ形状であることがもつ共通の意味を重視して、各形状タイプの数量的な傾向を把握し、次に、その形状及び付着物から推測できる具体的な再利用の用途を推定した。

再利用の過程でも、破損や繰り返される再利用のため二次加工が施され、形状が変わる場合もあったことは否めない。また、形状分類の結果から推定される再利用の用途で確実なものは、現段階では、わずかに紡錘車のみである。しかし、形状の分類を行うことは、再利用に関して出発点といえる。後述の付着物による他の分析等の結果により、再利用された形状に一定の傾向が把握できるため、灯火具、再利用硯などの観察や考察に重要な情報を得るためのフィードバックが期待できる。

1 坏類の形状分類

若葉台遺跡から出土した須恵器坏、土師器坏類については、口縁部と底部の残り方の差異によって、合計 19 タイプの形状に分類することができる。この形状分類を出発点とする（第1図）。

底部及び口縁部(体部)が残るものは、A-1 から完形までの 12 タイプである。底部が破

損しているものは、各々のタイプの頭に、底部が一部欠損していることを意味する S(shard 破片)をつけた SA-1 から SM (shard mouth) の計 7 タイプに分類する。

形状分類の各タイプは、以下の通りである。形状のタイプ分類図(第 1 図)は、典型例の模式図である。底部が完全に残る形状については、意図的に残した傾向があり、打ち欠き等を含め、再利用するための二次加工が施されているものが多いといえる。

①A タイプ：坯の底部全体が残るタイプである。打ち欠きや削りが施される場合があり、次の 2 種類に分類できる。

A-1 (第 1 図 1)：口縁部(体部)を丁寧に打ち欠き、あるいは、削りを施すことにより、底部のみが残り、口縁部がほとんど無いもの。即ち、人為的に処理が行われた場合が多いといえる。

A-2 (第 1 図 2)：口縁部を打ち欠き、あるいは欠損した後に、口縁部が小さく数個所に残るもので、小さな摘み状に口縁部が残るものも含む。

ただし、摘みとして認識できる場合には、B-3 タイプとなる。B-3 タイプは、A-2 タイプに比べ、口縁部が多く残るものである。

②B タイプ：底部全体及び、口縁部の一部が摘み状として残るものである。この他に、小さく口縁部が数個所に残るものも含み、次の 3 種類に区分できる。

B-1 (第 1 図 3)：口縁部が端部まで、摘み状に 1 個所残るもの。明らかに摘み状とみえるものだけでなく、口縁部円周の約 $1/4$ くらいまで残るものも含む。

B-2 (第 1 図 4)：口縁部が摘み状に 2 個所残り、少なくとも 1 個所は口縁端部まで残るもの。

B-3 (第 1 図 5)：口縁部が摘み状に 1 個所残るが、口縁部中位以下である。摘み状に残る口縁部の 1 箇所以外にも、小さく口縁部の一部が残るものも含む。

③C タイプ：端部を欠損し、中位程度まで残る口縁部が、一定の高さで底部の周囲に広範囲で残るもの。口縁端部を中位まで打ち欠く、割れ口を削り整える等、手が加えられたものが多い。意図的に、口縁部を一定の高さまで残そうとする意図が認められるタイプである。偶然にこの形状になったとは考え難く、以下の 3 種類がある。

C-1 (第 1 図 6)：口縁部が一定の高さまで残り、ほぼ底部を全周するもの。

C-2 (第 1 図 7)：一定の高さで残る口縁部が、底部の周囲に全周しないが多く残るもの。

C-3 (第 1 図 8)：C-2 タイプに近似するが、一部口縁端部まで残り、摘み状を呈するもの。

④D タイプ：端部まで残存する口縁部(体部)が、口縁部円周の $1/3$ 以上残り、摘み状ではなく広範囲に残るもので、次の 2 種類に分けられる。

D-1 (第 1 図 9)：口縁端部の一部が 1 箇所のみ、底部付近まで失われているものである。

D-2 (第 1 図 10)：口縁端部が 2 箇所、底部付近まで失われているタイプである。残存する口縁端部の 1 箇所は少なくとも、全周の約 $1/3$ 以上であるもの。

⑤E タイプ(第 1 図 11)：完形に近いが、口縁端部をわずかに欠損しているもの。底部付近まで一部でも欠損していれば D-1 タイプとなる。

⑥完形：完形を対象に含めたのは、付着物が観察できるものが多く認められたためであ

る。また、坏類は供膳具であり、用途の変更という点から、再利用の形状タイプの1タイプとして設定しようと考えている。ただし、図は掲載していない。

⑦Sタイプ：既に述べた各タイプの底部が欠失しているものである。ただし、底部をわずかに欠いているものは、AからDのタイプに分類する。

SA-1(第1図12)：A-1の底部の一部が欠失しているタイプである。

SA-2(第1図13)：A-2の底部の一部が欠失しているタイプで、底部周囲にわずかに残る口縁部破片の底部から外面の高さは、目安として1.5cm未満であるもの。

SB-1(第1図14)：底部の一部が欠失しており、端部まで口縁部が残っているタイプである。B-1及び、Dタイプのタイプで、底部が破損しているものも含んでいる。

SB-2(第1図15)：底部の一部は欠失しているが、口縁部は2個所残り、うち1個所は口縁端部まで残るタイプで数は少ない。

SB-3タイプ(第1図16)：底部の一部が欠失しており、端部を欠損する口縁部が残るタイプである。残存する口縁部の外面の高さが、底部から約1.5cm以上、その範囲は残存する底部の周辺約1/2未満であるもの。

SC(第1図17)：底部一部が欠失しており、端部を欠損する口縁部が残るタイプである。SB-3やSA-2タイプと異なる点は、口縁部が残る外面の高さが約1.5cm以上でかつ、残存する底部周辺の範囲が約1/2以上である。

SM(第1図18)：基本的に口縁部の破片であるが、わずかに底部との屈曲部まで残すものも含まれる。ただし、明らかに底部の破片が残る場合には、SB-1タイプとなる。

なお、形状分類の際には以上の19タイプに加え、残存形状が左右対称かどうかにも注意を払う必要がある。打ち欠き等の二次加工が行われている可能性が高いためである。

2 蓋の形状分類

若葉台遺跡から出土した須恵器の坏や埴の蓋について、口縁端部と天井部の残存形状から、合計7タイプに大分類することができる(第2・3・4図)。坏・埴類と同様に若葉台遺跡出土の蓋の分類を基礎とする。

蓋の形状分類は基本的に第2章の須恵器坏、土師器坏・埴類の形状分類に準じている。坏類の場合は底部と口縁部の残存状況をもとに形状分類したが、蓋の場合は天井部と口縁部の残存状況から大別する。蓋は鈕(摘み)の形状に違いがあり、8世紀前葉に多くみられる環状鈕と、宝珠鈕の2系統に大別することができる。蓋の再利用に関しては安定性、即ち、再利用の際に据わりの良さに影響する鈕の残存状況も重要な要素となるため、鈕が残存するか否かも形状タイプ分類では重要な属性となる(第4図)。

①Aタイプ(第2図1)

鈕を中心として、天井部が残るタイプである。偶然の破損のみで形成されることが少ない形状の一つである。口縁端部を丁寧に打ち欠くことにより、天井部が円形状に残るものや、欠損した後に、天井部が鈕を中心に不整形に残存するもの。即ち、打ち欠き等の二次加工が行われた場合が多いといえる。

②Bタイプ(第2図2・3)

基本的に鈕の周辺に天井部が残り、かつ口縁端部が約1/3～1/2残存するものである。口縁部の残存が1個所あるいは2個所などの残存形状により、細分が可能である。

口縁端部が一個所、口縁部の円周がある程度残り、扇形を呈する形状であるもの、及び天井部全体が残らず、鈕との接合する部分まで残存するものも含む。

③C タイプ(第2図4)

天井部が残り、口縁端部を一部欠損するタイプで、残存する口縁端部は少なくとも、合わせて全周の約1/2以上のものである。Bタイプに比べてより残存部分が多いものともいえるが、注目すべきものは、残存形状が左右対称のタイプである。

④D タイプ(第2図5)

完形に近いが、口縁端部の折り返し等、ごくわずかに欠損しているもの。完形の折り返しの一部が欠損したのか、一部を意図的に打ち欠いたのかどうか不明のため完形と区分する。

⑤完形(第2図6)

蓋についても、欠損した土器を再利用の形状タイプ分類の対象としている。坏類同様、付着物が観察できるものが多く認められたため、蓋においても、再利用の形状タイプの一類型とする。

⑥S タイプ

SA タイプ(第3図1・2)

SAタイプは、既に述べた各タイプにおいて、天井部が一部のみ残る破片のタイプであり、口縁部の残り方が円周の1/3未満のものである。

SM タイプ(第3図3)

基本的に口縁端部の破片であり、口縁端部の小破片の場合も含まれる。

⑦K タイプ(第3図4・5)

鈕(knob)のみが残存するタイプであることから、Kタイプとする。

ただし、天井部残存はわずかであるもの。

次に、鈕の残存と再利用の用途が関係するため、特に鈕に関しては、蓋の残存状況とは別に3つのサブタイプに分類する。鈕の種類が、環状、擬宝珠等であるかは関係なく、残存状況を基準とする。

①a タイプ(第4図1)

鈕が全て(all)残存するタイプで、aタイプとする。

②p タイプ(第4図2)

鈕の一部分(part)が欠損しているタイプであり、pタイプとする。環状鈕の場合は、二次加工が施された結果による場合もある。

③n タイプ(第4図3)

鈕をほとんど欠損(打ち欠く)するタイプであり、nothingの一字目からnタイプとする。欠損の原因は二次加工による場合が多く、再利用の際に鈕を打ち欠いて、蓋を安定させる目的とみられ、注意深く付着物等の観察を行う必要がある。

第2節 付着物と再利用の技術的背景

第1項 付着物と再利用

土器の再利用を考える際には、既述したように、付着物が有効な手がかりとなる。しかし、

遺物は、発掘調査後に洗浄されているため、付着物はかなりの影響を受け、失われている場合も多い。したがって、残存した付着物を注意深く観察することが重要である。坏類や蓋にみられる黒色や褐色の付着物は、主に灯火具の油煙・煤、墨、漆などが考えられる。焼成時の付着や、廃棄後の埋没状態による付着物の可能性、及び火災³⁾等の影響も考慮しなくてはならないが、主な付着物としては、灯火具の油煙・煤、墨、漆⁴⁾であることが推定できる。まず、観察時の注意点と分類基準について述べる。

1 煤・油煙及び漆付着との区別

付着物が漆かどうかについて、確実な方法は、付着物断面の顕微鏡による観察である〔永嶋 1995A・2006〕。漆は紫外線による劣化以外は、あらゆる薬品に対して抜群の耐久性がある。現時点では多くの試料の断面観察することは不可能である。永嶋正春氏が報告した武蔵国府関連遺跡出土の黒色付着物の観察結果〔永嶋 1995B〕を参考にしながら、以下の基準で埼玉県所沢市東の上遺跡、日高市拾石遺跡、鶴ヶ島市一天狗遺跡について、漆付着土器の観察を試みた。その結果、肉眼とルーペによる観察でも漆と油煙の区別は、ある程度可能であることがわかった。肉眼観察のための漆の特徴は以下の通りである。

①漆は膜状、層状であり厚みがある。②漆は乾燥によりクラックが入り、層状の剥離があることが多い。その剥離した断片の形状は、直線的な割れ口が多い。③漆は独特の光沢がある。④茶褐色のものもある。⑤漆は粘性が強く、またパレットとして使用されることが多いため、外面に広範囲で付着することは少ない。

特に煤・油煙と区別しやすい基準は、①・②で述べたように層状であり、厚みがあること、剥離した断片の形状は直線的であるという点である。漆は古代では貴重品であり、接着剤として使用されたとしても、漆工房などの存在がなければ、油煙や煤が付着したとみられる土器の出土点数の方が、はるかに多いとみられる。前述した永嶋氏の黒色物分析結果でも、「灯明皿あるいはこれに関連すると思われる黒色付着物も数多く認められた」と報告されている。ただし、付着物が少量の場合、漆か油煙かの判別が難しいことはある。

以上を踏まえた観察の結果、若葉台遺跡では漆付着土器は発見できず、また、漆工房や関係遺物も出土していない。ただ、若葉台遺跡の周辺では漆紙等が検出された例がある⁵⁾。

2 煤・油煙と墨痕との区別

漆と同様に墨はごくわずかの付着である場合には難しいが、煤・油煙と墨も肉眼やルーペによる観察で区別可能である。現時点では両者の区別に、理化学的な分析は難しい点がある。墨は煤を材料として使用していること⁶⁾、灯火具の油を分析する方法として脂肪酸

3) 若葉台遺跡Ⅰ区42号住居跡は、多くの炭化材が検出され火災にあったことがわかる。付着物について火災に遭っていない住居跡出土のものと比較したが、特に火災の影響は認められず観察対象とした。

4) 漆は漆木から採取された生漆の状態でも乳白色から黒褐色、黒色へと変化する。また精製された漆は、古代宮都の工房では、植物油を燃やした油煙等を加えて黒色に着色した黒漆がつくられていたという〔玉田芳英 1995〕。

5) 若葉台遺跡から西約4kmに位置する若宮遺跡の竪穴住居からも、8世紀後半の坏に付着した漆紙が検出されている〔坂戸市教育委員会 2005〕。

6) 墨は松や油を燃焼させた煤を、膠でかためたものである〔山路 2004〕。前掲註4通り、黒漆、墨と

を使う場合には、周辺の土壌汚染による影響が大きい点などの議論があり、取り扱いに注意を要する⁷⁾。

墨については若葉台遺跡から出土した墨が付着物した須恵器坏⁸⁾、即ち再利用の硯を観察して比較を行った。この場合、全体に薄くわずかなムラのある光沢のない黒色物が観察できる。また、ルーペで観察すると須恵器の細かな胎土の凹凸に墨の染み込みが認められ、後述するが、明らかに灯火具としての使用から由来する煤や油煙、及び網状のシミ等の付着物とは異なっていることを指摘できる。

以上を踏まえて、具体的に若葉台遺跡出土の土器付着物を観察した結果、若葉台遺跡の須恵器及び、土師器坏に付着した黒色物の大部分は、灯火具として再利用のために、付着した煤・油煙等である可能性が高いことがわかった。

3 灯火具由来の付着物の分類基準

付着物についてよりきめ細かく観察するための目安として、LA (LはLamp 灯火具) 類から LC 類まで3種類に分類した(第5図)。これは、後述するように灯火具として利用のされ方などが異なる可能性が高いと考えられる。しかし、使用された油の種類による違いの可能性もあり、今後に課題を残す一面もある。なお、「灯明皿」や「灯明具」という表現もあるが、本稿では灯火具で統一する。

①付着物 LA 類(第5図1、第6図)

灯芯が燃える時や、油が不完全燃焼して発生する黒色微細の炭素粒、いわゆる油煙や煤等の黒色物が明瞭に付着するタイプ。

②付着物 LB 類(第5図2、第7図)

黒色微細の炭素粒とみられるものが、楕円形の網目状にシミのように付着するもので、一部茶褐色も呈する。楕円形の網目状シミは液体特有の表面張力により、油等と一緒に煤や油煙が付着した痕跡とみられる。また、付着物 LA 類と付着物 LB 類が同時に観察された場合は、LA 類として分類する。

③付着物 LC 類(第5図3、第8図)

薄く黒色や茶褐色等の不定形のシミが、比較的少ない範囲で付着物するものである。注意深く観察することが重要となる。筆者の灯火実験からすると、茶褐色等のシミは点灯中に熱で酸化して、茶褐色に変色した油が付着した痕跡である可能性が高い。土師器坏に関しては、平城京左京藤原麻呂邸からの廃棄物とみられる溝 SD100 からは、灯芯痕や油煙のほかに、灯火具として油を入れた結果、桃色に変色した例、及び油とみられる有機物の汚れが確認できる例が多数確認されている。また、須恵器についても、焼成不良のものは、土師器と同様に油の滲み込みは認められるが、硬質に焼成されたものは、発掘調査後の洗浄が過度に行われると痕跡をとどめず、灯火具としての使用が行われたか判別が困難であるという[奈良国立文化財研究所 1995]。したがって、限界はあるが、須恵器についても

もに含有物の一部に煤や油煙を含むため、わずかな量の付着物では区別が難しいことがある。

7) 脂肪酸の分析は、中野益男[中野 1989]氏、また、小野正敏[小野 1992]氏や、小林正史のグループによる論考[小林正史 2002]もあるが、やはり限定された条件の下で行われなければならない分析手法と報告されている。

8) 若葉台遺跡V区4号住第 285 図3の須恵器坏である[坂戸市遺跡調査団 1993]。

同様に、従来の灯芯痕のみならず、再利用の灯火具としての用途を推定する際、付着物を細かく観察することは重要であることが指摘できる。

従来は、明瞭に識別できる付着物 LA 類を中心に、灯火具として認識されてきた傾向がある。付着物の観察をしていく過程で、網目状の LB 類や茶褐色のシミ状の LC 類には、度々黒色物が一緒に観察されたため、灯火具として使用された結果と考え、これを灯火具由来の付着物と推定することは妥当であると判断した。

I 区 31 号住居跡から出土した須恵器坏⁹⁾には、口縁部の割れ口断面に、わずかながら黒色の付着物が観察された（第 5 図 4、第 9 図）。既に口縁部の一部を欠失した形状（形状タイプでは D・2）であり、灯火具として再利用されていたといえる。

第 10 図も破片の状態で、さらに付着物 LA 類、LB 類の付着状況から、灯火具として再利用された際には、底部は約半分の形状（SA・2 タイプ）であったと考えられる。したがって、第 2 項で示した形状分類及び、付着物の分類と灯火具としての再利用に関して、有機的関係が存在していたことを指摘することができる。

4 蓋の付着物等の分類

若葉台遺跡の蓋の観察と分類を行った結果、坏類と同様に黒色あるいは、褐色の付着物が観察された。再利用の用途の特定には付着物が有効であり、その際、第 2 章 2 節 1 項の須恵器、土師器の坏類の付着物と同じように、灯火具由来の付着物か、硯としての再利用による墨が付着しているのかを注意深い観察を行って、区別することが必要である。

灯火具として蓋の付着物に関する分類は基本的には、坏類の付着物分類に準じる。ただし、硯としての再利用された際に、まず、肉眼観察により朱墨であるか墨であるか、墨の種類同定を行う。2 種類が付着している場合もあり、その際は朱墨が一般的に後であるが、前後関係を確認することが必要になる。また、稀に朱墨の硯として使用した後に、灯火具としてさらに再利用される例がある。

墨は洗い流される場合があるため付着物のみではなく、磨耗の有無も硯としての用途の特定において重要な要素となる。ただし、墨は洗い流しても、胎土の砂粒のわずかな凹凸のピットに入り込む場合が多く、ルーペによる観察で確認は可能であるという〔小田和利 A2003〕。また、磨耗の程度は、基本的には肉眼で明瞭に観察できる磨耗と、注意深く触れて感じられる程度の磨耗とに区別する。

蓋の場合には、供膳具としての使用時による磨耗は少ないと考えられるが、坏類の場合は、供膳具としての使用及び、硯としての再利用も少数ではあるが行われているため、磨耗の確認は、坏類に比べて一層の注意が必要である。若葉台遺跡等の坏類は、硯としての再利用されていないなくても、底部内面がわずかに磨耗しているものがみられる。供膳具としての使用による磨耗と推定されるが、その際には、底部のみならず口縁部付近においても磨耗している場合が多い。いずれにしても、硯としての再利用の確認には、ルーペによる注意深い観察を併用する必要がある。

器面の磨耗は、砥石としての再利用によっても痕跡として残るが、蓋や坏類は小破片でなければ内面の磨耗については、砥石としての再利用は考えにくい。また、砥石の場合、

9) 第 105 図 9 〔坂戸市遺跡調査団 1993〕

磨耗の度合いは著しいものが多い。甕の破片については、今後、墨の付着が観察できない場合には、砥石としての再利用による磨耗か、硯によるものかを検討する必要がある、課題といえる。今までの硯としての再利用の観察結果からは、甕の破片で硯に再利用されているものの大多数は、大きさが一辺最低約 10 cm以上の破片であり、内面を上にして置いたとき比較的安定して据わりが良いことが指摘できる。破片として形状が整えられ、二次加工が行われていることも多い。

再利用の用途として、灯火具・硯・砥石かを特定するために、まず、蓋・坏類に関しては、前述の形状タイプ分類の後に、付着等の観察が重要であり次のように整理してまとめる。

形状について

左右対称の残存形状が多い

- ・付着物の種類の同定

- ①灯火具由来の付着物の場合

- 坏類での付着物分類に準じる・・・LA 類・LB 類・LC 類

- ②墨の場合

- 墨の種類と順序・・・墨・朱墨

- ③硯としての再利用の後に灯火具としての再利用

- ・器面の磨耗の有無についてルーペ等を使って観察

- ①磨耗の程度を区別

- 肉眼で明瞭に観察できる程度・注意深く触覚で感じられる程度に区別

- ②磨耗が観察される部分・破片の大きさ

- 蓋・・・内面・外面、

- 坏・・・底部、内面・外面

第 2 項 再利用の歴史的・技術的背景

本項では再利用の手法や技術の特徴を、8 世紀を中心にして、それ以前の古墳時代後期、及び 9 世紀を含めて歴史的変遷過程を説明したい。

1 破損・打ち欠きのプロセスとストック（第 11 図）

住吉中学校遺跡から出土した 9 世紀代の須恵器坏を観察した結果、形状タイプ分類の完形から紡錘車に至るまでの破損・打ち欠きに二つのプロセスが認められる。住吉中学校遺跡の概要については第 3 章 2 節において述べる。両者の違いは、プロセス 1（11 図）は B タイプを経て A タイプに移行するが、プロセス 2（11 図）は、D タイプから A タイプへと移り、最終的に紡錘車となりうる。このプロセスの各段階では、図示しなかったが、口縁部破片の SM タイプが結果として、多数発生することになる。また、こうした破損・打ち欠きのプロセスの他に、同遺跡から出土した須恵器坏（第 13 図）のように、口縁部に穿孔する打ち欠き技術も存在したことが指摘できる。

このようなプロセスが提示できても、遺跡出土の形状タイプがすべて人為的な打ち欠きによるものではないことは言うまでもない。偶然の破損を利用したもの、また、それに手

を加えた可能性もあることからである。例えば、わずかに口縁部を欠損する E タイプ等は、破損と人為的な加工との両者の可能性がある。また、現段階では再利用の用途として形状から紡錘車、あるいは付着物から幾つかの段階の形状タイプを組み合わせた、灯火具や硯等を推定しているが、再利用の多彩な用途のわずかなものを確認しているにすぎない。

しかし、破損の状態も含め、このような形状タイプの差異から変遷過程のモデルを提示することができる。実際に遺跡から出土する個々の多様な残存形状の土器が、このプロセスの各段階の資料として出土している可能性が高いと思われる。

従来の認識では、消費地である集落における土器の使われ方に対して、破損した後は、単純に廃棄されるという図式が一般的であった。しかし、破損・打ち欠きプロセスが、ほぼ 1 軒の住居跡から出土した坏によって呈示できることから、土器という資源を再利用するために各段階において、偶然の破損のみならず人為的に打ち欠きを行った土器が、一定期間保管された可能性を指摘できる。灯火具や硯、紡錘車等として再利用の準備のための保管と考えられる。これは、再利用の脈絡における位置づけが個々の土器によって異なり、複雑な状況であるといえる。

再利用の素材として、何らかの使用目的のために、未整理の状態でまとめて保管されていると考えられる。現代の日常生活でも一般的に行われている行為である。第 1 章 1 節 2 項において既述したように、農家で使用され、納屋に収納されていた物は、廃棄物同然のものが多数認められている。こうしたものは、使用価値があるものとして、再利用の資源として位置づけられ、収納、ストックされている。

遺跡から出土した遺物がどの位の期間保管されていたか、具体的に把握する方法は今のところ筆者にはない。しかし、資源としての土器の再利用という視点から、このプロセスと破片としてストックされている可能性を導き出すことができた点が重要であると考ええる。この土器の再利用のために打ち欠きを可能にした技術は、遅くとも次項で述べる 6 世紀後半の上谷遺跡まで遡らせて考えることができる。また、こうした技術系譜が、9 世紀に至るまで土器の再利用として、日常的に受け継がれてきた可能性を指摘できる。

2 土器再利用の歴史的変遷

土器の再利用について、埼玉県西部では古墳時代後期（6 世紀中葉～7 世紀後半）には、特徴的な打ち欠きや剥離が認められる。既述の通り、打ち欠きと破損の区別は困難な場合が多いが、今までほとんど報告されていない土器の剥離という、二次加工が明確に確認できた例を提示する。

（1）上谷遺跡の概要（第 12 図 5）

上谷遺跡は、坂戸市の東部、川越市と隣接する台地上に位置し、主に古墳時代後期 6 世紀中葉から 7 世紀後半の約 1 世紀にわたって形成された大規模集落遺跡の一つであり、約 2 万 m²が調査されている。39 軒の堅穴住居跡によって構成され、多数の土師器が出土した〔田中 1976、坂野千登勢 1992〕。この遺跡の特徴は、土師器の坏、鉢、甕類の大部分が、ベンガラ（酸化第二鉄）で赤色塗彩され、赤色に対する指向性が顕著であること、また、関東地方西部の比企・入間郡地域を中心とする「比企型坏」と称される地域色の強い丸底

の坏が、多数出土したことである。比企型坏は口縁部が小さく屈曲する半球形の坏で、上谷遺跡出土のものは法量分化をうかがわせ、特に6世紀代のものは作り方も赤色の塗彩も丁寧で、他の遺跡から出土した同種の坏より、硬質で焼成が優れている点が特筆される。

(2) 古墳時代の剥離された土器群

上谷遺跡では、硬質の土師器坏に剥離が行われている。6世紀後葉の26号住居跡からは、底部や口縁部周辺を剥離された痕跡の認められる比企型坏が、6点まとまって出土している。第14図は底部外面に対する剥離の状況が最も明瞭な坏で、剥離を行った際の打点がかかる剥片の一片が接合されている（第14図1・3）。底部の周辺から中心部に向かって、底部周辺に沿うように剥離が行われている。内面は二次加熱を受けたとみられる（第14図2）。また、第14図4は、口縁端部直下に4回の剥離が行われた痕跡が明瞭に残る。このように一部であるが、剥離痕跡の認められる坏が26号住居跡から出土している。

比企型坏の剥離の目的は、対象となった坏の内面に二次加熱等がみられること、及び後述するように上谷遺跡では、灯火具由来の黒色付着物が比較的多く観察できることから、再利用の用途の一つとして灯火具を指摘しておきたい。ただ、灯火具以外の用途は現段階では明らかではなく、むしろ他に未知の用途の再利用を行うための二次加工である可能性も高い。しかし、古墳時代後期の土師器に対して、再利用という視点から、剥離が行われていることが報告された例は皆無である。

上谷遺跡の比企型坏が堅緻であることが、剥離を可能にしたと推測される。何より、このような石器と類似する剥離技術が古墳時代後期の集落で、二次加工を行う技術として、存在していたことが大きな意味をもつと考えられる。この技術の系譜が、石製模造品や玉作り等の石製品製作技術とどのように関係しているかは不詳である。

(3) 形状タイプ分類と再利用の用途

若葉台遺跡と同様に上谷遺跡では、再利用されたと考えられる形状で残存する土器が、6世紀中葉以降の住居跡から出土している。古墳時代後期でも、形状タイプ分類が可能であり、その再利用の用途は土師器坏の黒色付着物を観察した結果、基本的には灯火具由来の付着物の可能性が高いと考えられる。

従来、灯火具に関しては、寺院及び官衙関係の遺跡に限定されて使用されたと考えられている。そのため、古墳時代中期以降に、炉から竈へと竪穴住居内で火処が変化したことに伴い、屋内の灯火具の存在が予測されるとはいえ、具体的に灯火具として土器が再利用されたという認識はなかった。

上谷遺跡では竪穴住居跡8軒の土器に関して形状タイプ分類を行った（表1）。上谷遺跡では確認された形状タイプは8タイプで、底部を一部欠失するタイプであるSタイプの種類が少なく、確認できる形状タイプに偏りもある。若葉台遺跡の土師器に比べ、Eタイプと完形が多い傾向であるが、SBタイプは両遺跡で多く認められた。

赤色塗彩された坏は、黒色物の観察が比較的容易である。観察対象の点数は少ないが、付着物LA類（21点）・LB類（9点）・LC類（13点）が確認できた。

形状タイプに対する黒色付着物の付着率（表1）をみると、6世紀中葉ではわずかに7%

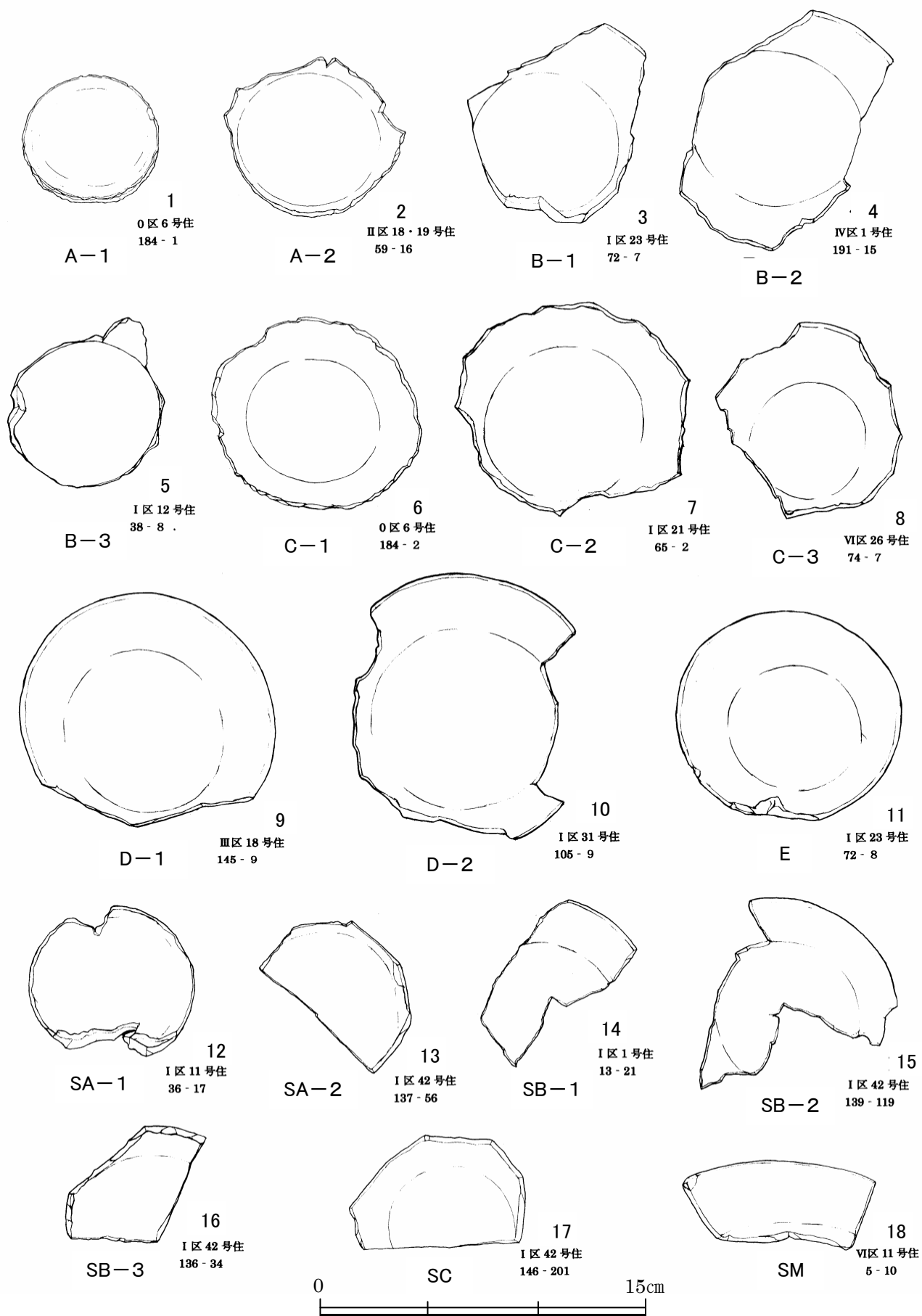
と少ない。しかし、6世紀後葉以降に付着率が高くなり、形状タイプの合計に対しする付着率は45%となる。6世紀中頃を境界に6世紀後葉以降、灯火具としての再利用が行われていたことが指摘できる。住居跡8軒分の集計値で偏りはあるが、灯火具再利用について一定の傾向を示すと考えられる。

上谷遺跡で黒色付着物が比較的多く認められるものは、E、完形、SB-1、D-1タイプである。若葉台遺跡では土師器の灯火具としての再利用でも、SB-1タイプや完形が多い傾向にある（第3章表4）。

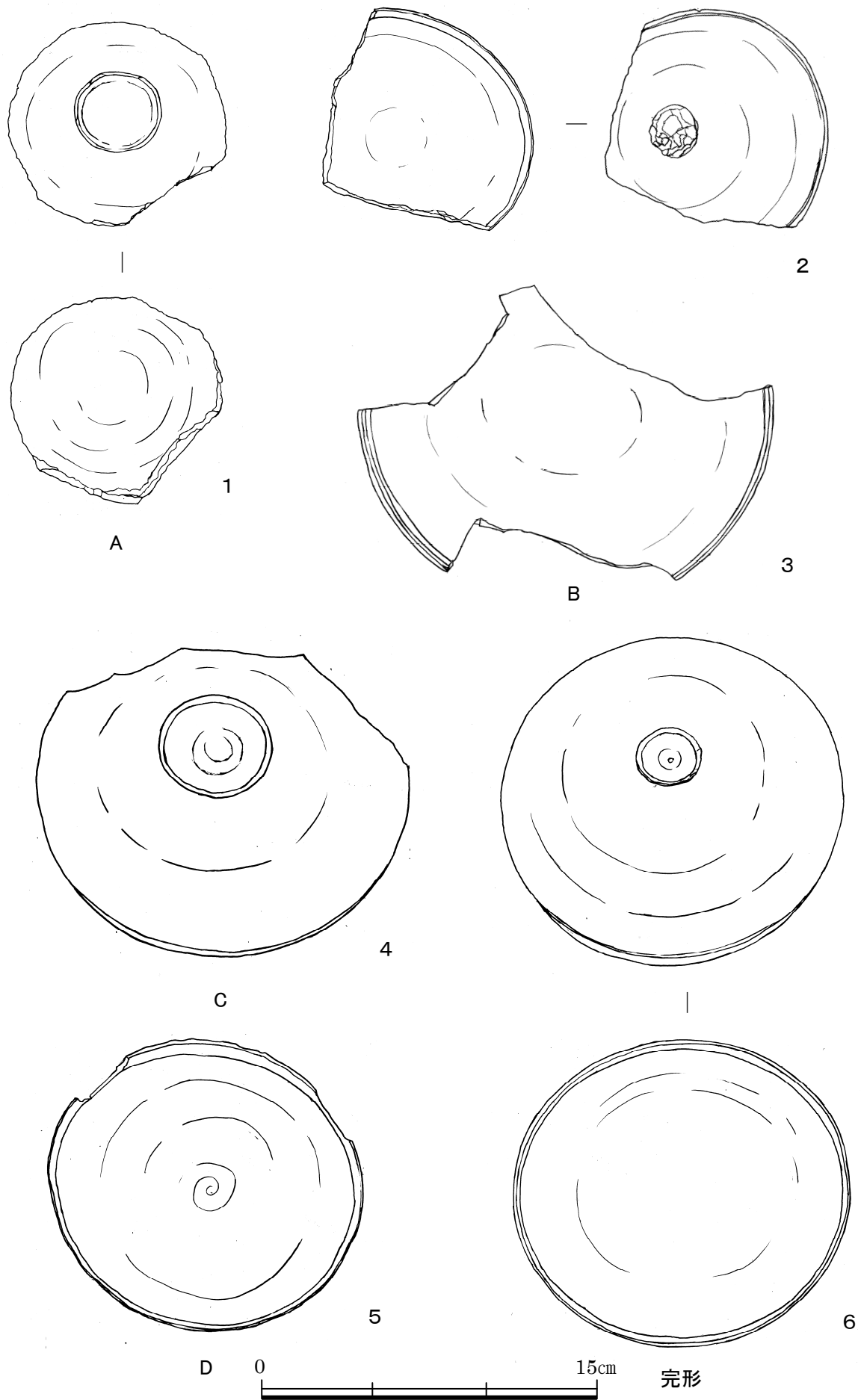
上谷遺跡でも、Eタイプや完形の割れ口の断面や外面にわずかに黒色物の付着が確認できる。また、坏底部を再利用したA-2タイプに、付着物LA類が認められた。次項で述べるような灯火具と同様に灯芯押さえとして同じ住居跡出土の坏Eタイプ、あるいは完形を組み合わせる可能性がある。

上谷遺跡は基本的に赤色塗彩の坏であるが、無彩で口縁部が強く外反する皿状タイプの坏がある。この坏は、内外面に油煙のLA類、及び楕円形の網目状黒色付着物であるLB類が観察できるものがあり、6世紀後葉以降に、少数であるが一定数比企型坏と共伴する。

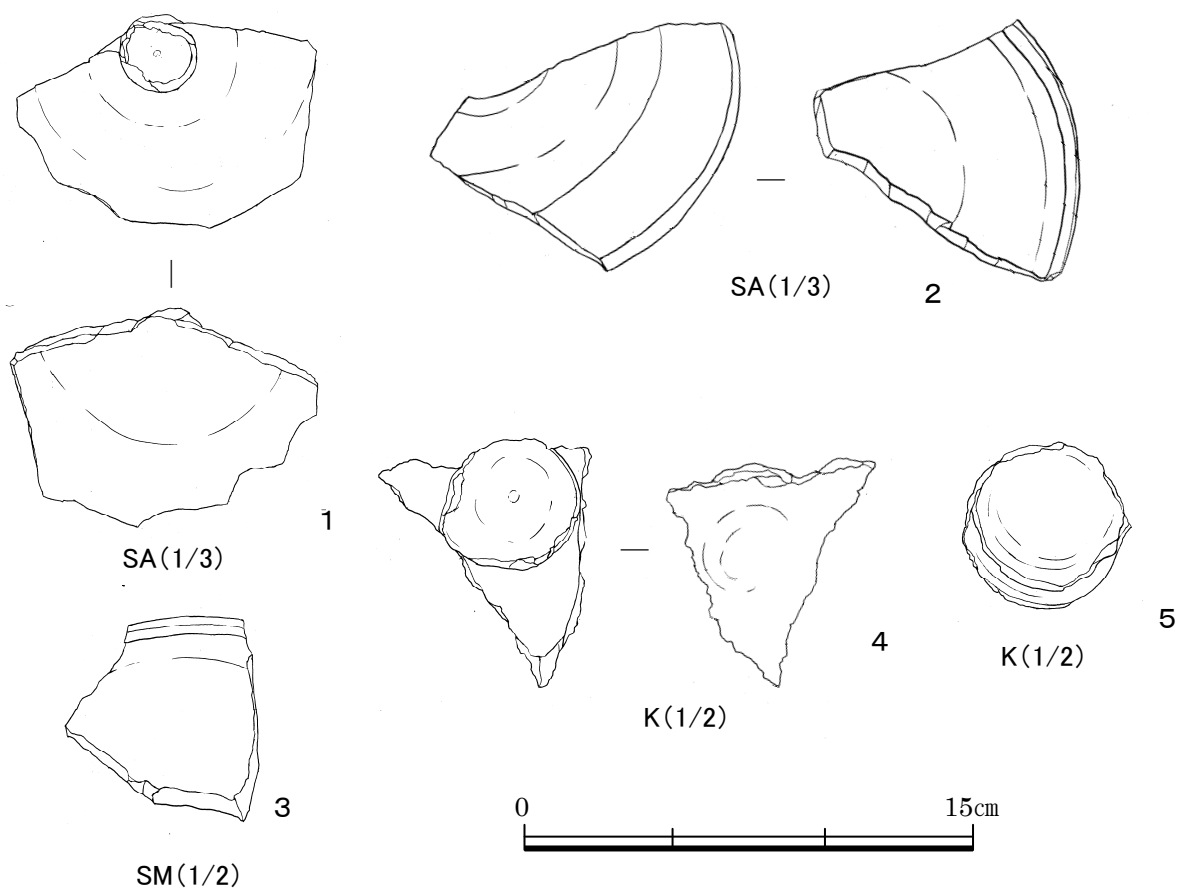
上谷遺跡の観察結果では、古墳時代後期6世紀後半に、今まで報告されていなかった土器の剥離という二次加工が、土器再利用のために行われていたこと、付着物から土師器坏における再利用の用途の一つは、灯火具であることが導き出された点が重要と考えられる。



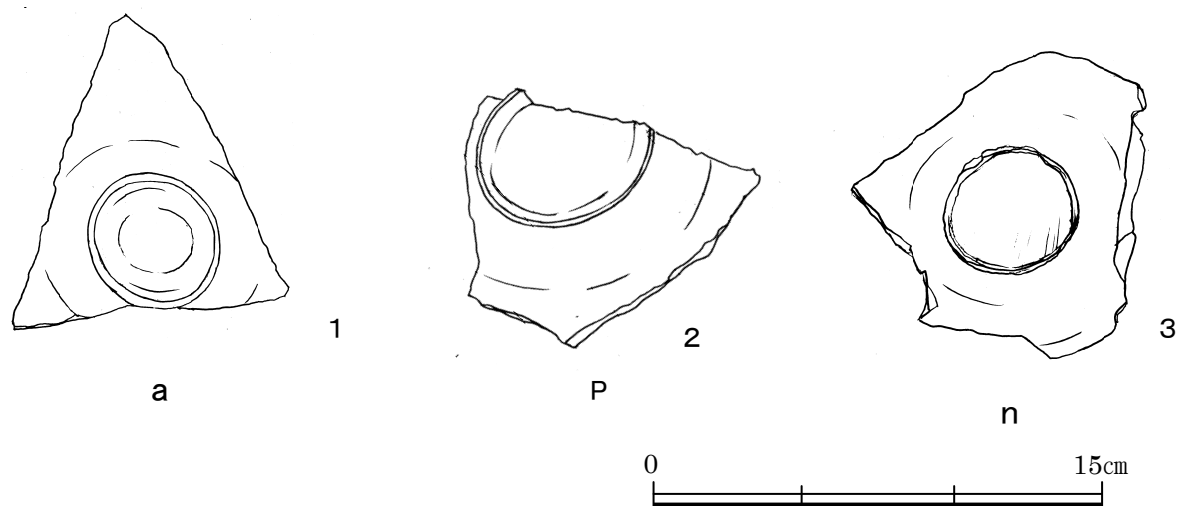
第1図 坏類の再利用形状タイプ(模式図) 図示していないが、この他に完形タイプがある



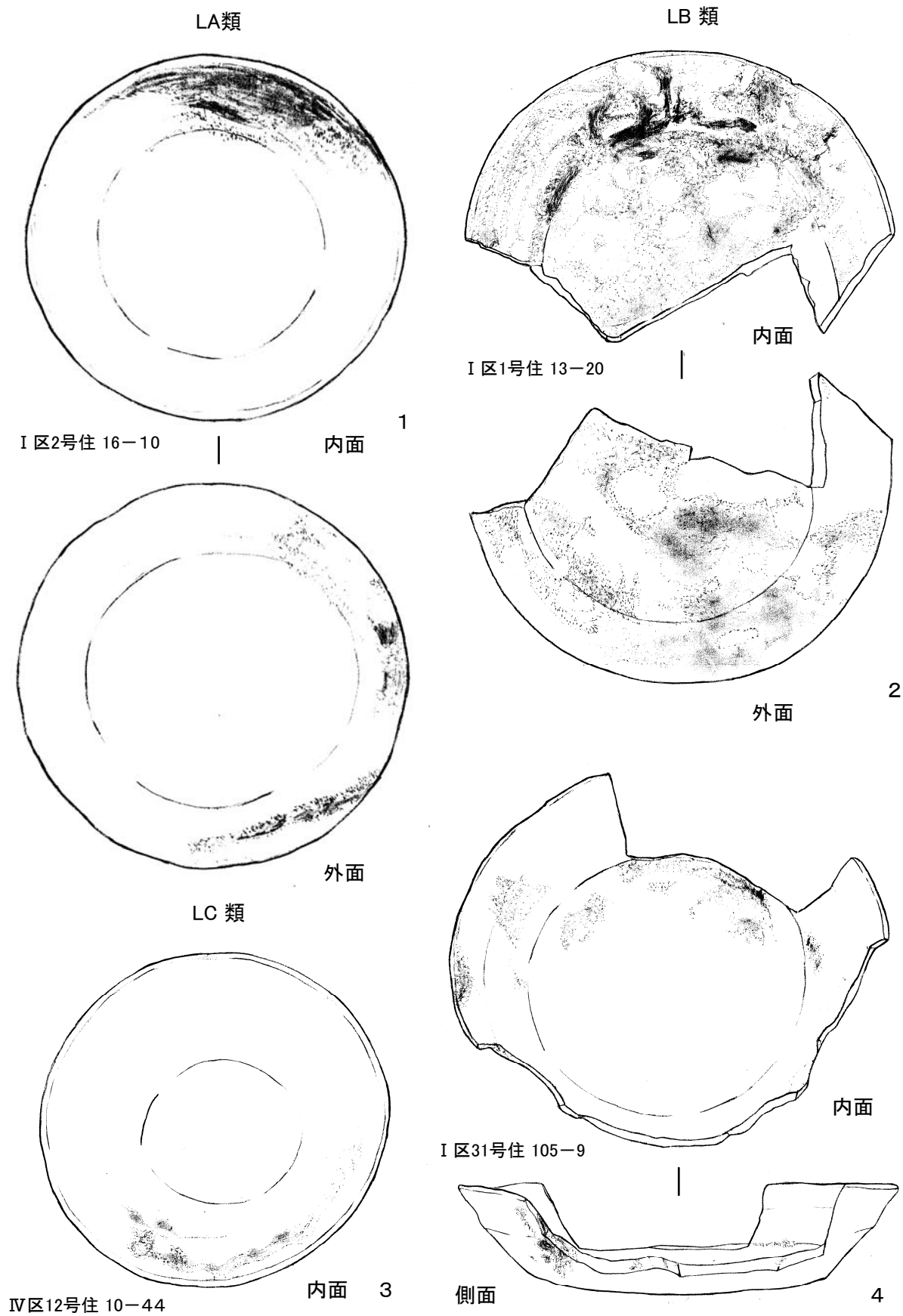
第2図 蓋の再利用形状タイプ(模式図)ー1



第3図 蓋の再利用形状タイプ(模式図)－2



第4図 蓋の鈕残存タイプ(模式図)－3



第5図 付着物の分類模式図(1:LA・2:LB・3:LC類、4:割れ口断面の付着物)



第6図 若葉台遺跡 付着物LA類



第7図 若葉台遺跡 付着物LB類



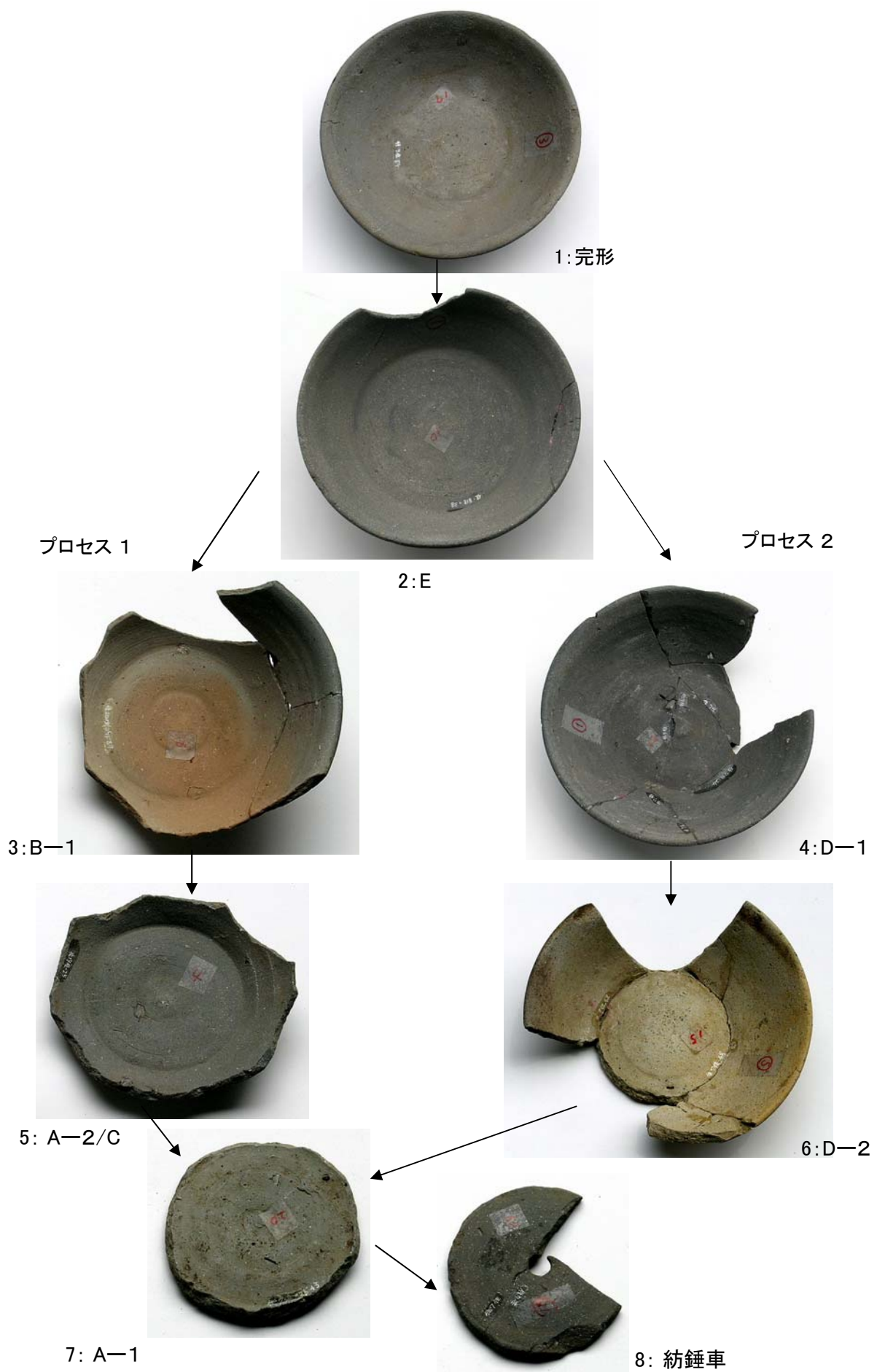
第8図 若葉台遺跡 付着物LC類



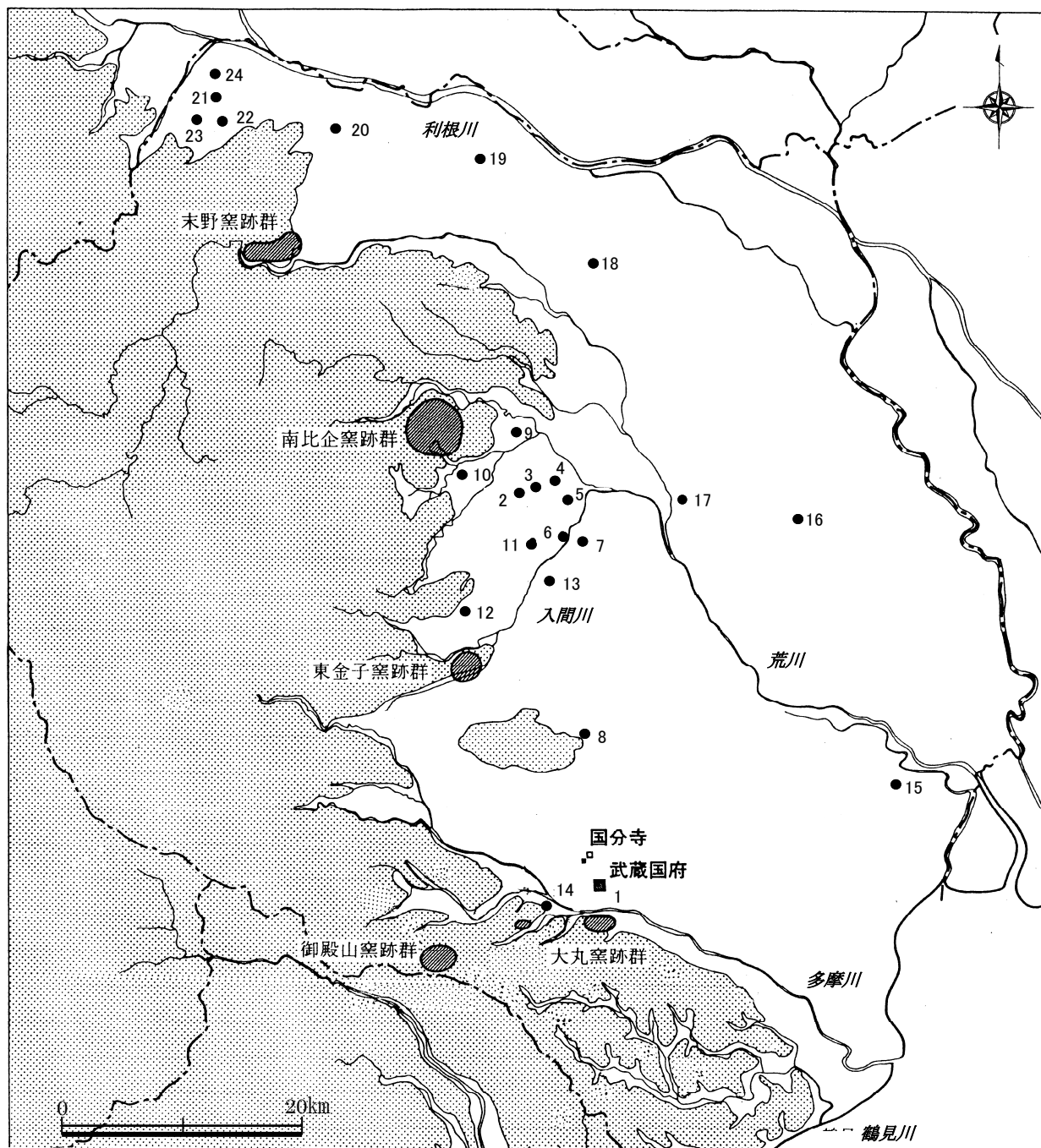
第9図 若葉台遺跡 断面に認められる付着物LC類



第10図 若葉台遺跡 破片再利用による付着物の違い



第11図 坏の打ち欠きプロセス

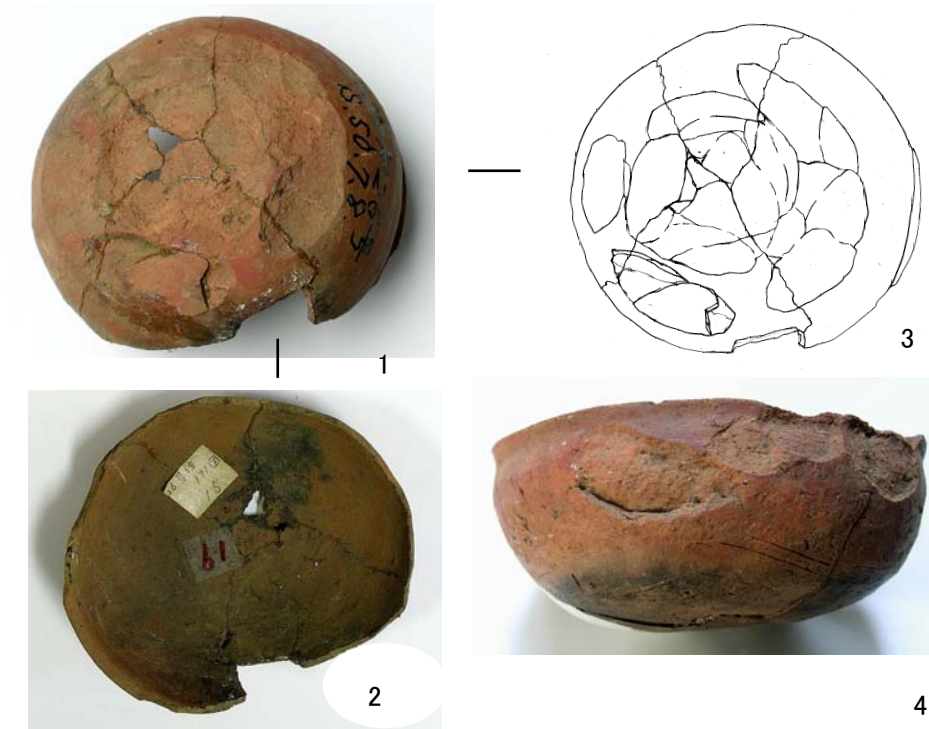


第12図 古代武蔵国の土器再利用に関する主要遺跡[山口辰一1985を一部改変]

1:武蔵国府関連遺跡 2:若葉台遺跡 3:富士見一丁目遺跡 4:住吉中学校遺跡 5:上谷遺跡 6:霞ヶ関遺跡群 7:霞ヶ関関連遺跡 8:東の上遺跡 9:山王裏・西浦遺跡群 10:稲荷前遺跡 11:光山遺跡 12:張摩久保遺跡 13:揚楯木遺跡 14:落川遺跡 15:御殿前遺跡 16:氷川神社東遺跡 17:新屋敷遺跡 18:築道下遺跡 19:北島遺跡 20:熊野遺跡 21:将監塚・古井戸遺跡 22:八幡太神南遺跡 23:臼樹原・檜下遺跡 24:中堀遺跡



第13図 打ち欠き痕(住吉中学校遺跡)



第14図 上谷遺跡 1・2・4:剥離された坏 3:剥離の模式図

表 1 土師器杯 形状タイプと灯火具(黒色付着物) 点数(上谷遺跡)

時期	6 C中葉		6 C後葉		7 C前葉		7 C中葉		合計		
形状タイプ	タイプ	黒色物	タイプ	黒色物	タイプ	黒色物	タイプ	黒色物	タイプ	黒色物	付着率%
A-1											
A-2			1	1					1	1	100
B-1			2	1					2	1	50
B-2											
B-3											
C-1											
C-2											
C-3											
D-1	1	1	11	5	1		1		14	6	50
D-2			1	1					1	1	100
E	4		15	11	5	4	3	1	27	16	70
完形	5		6	4	2	1	5	3	18	8	50
SA-1											
SA-2											
SB-1	11		7	4	1	1	4	3	23	8	35
SB-2											
SB-3											
SC											
SM	6	1			2	1	1		9	2	22
計	27	2	43	27	11	7	14	7	95	43	45

第3章 灯火具としての土器の再利用

供膳具である坏類に黒色の付着物が伴う再利用の多くの場合は、灯火具が妥当であると考えている（第2章）。簡単に現在までの灯火具に関する研究史にふれて、発掘された近世の灯火具や民俗資料、及び文献資料から再利用のモデルを構築し、灯火具としての使用方法の復元に援用したい。

第1節 灯火具に関する研究史と問題点の整理

灯火具のうち屋内において油を使用した灯火具の研究には、大きく二つの流れがある。一つは、近代・近世の民具としての灯火具の収集から始まる主に民俗資料によるものである。二つめは考古資料からの研究であるが、古代の遺跡出土の資料は少なく¹⁾、主に江戸時代の遺跡から出土した灯火具に関するものである。

一般的に古代における仏教伝来や寺院、官衙などとの関係から灯火具が出現し、極めて限られて使用されたものとされている〔深津 1983〕。古代の灯火具に関する研究は進展していない状況である。全体の傾向としては、9世紀以降から油を使った灯火具の出土数が増加し、中世では土師器系土器の「かわらけ」が灯火具として利用され、近世になると灯火用の受け付皿、ヒョウソクなど専用器がつくられるという、灯火具の変遷が認められる。蠟燭は上層階級に使用されることが多くなる一方、江戸時代には庶民まで安い油である魚油などを使った灯火具が、日常的に普及するようになる〔国立歴史民俗博物館 1989、江戸東京博物館 1995、（財）日本のあかり博物館 1997〕。

第1項 灯火具の変遷

1 古代の灯火具

民俗資料や古代の絵画資料から復元される灯火具は、平安時代の『年中行事絵巻』などにおいて饗饌の場で描かれたように、浅い皿形の容器を二枚重ねた「灯盞」と呼ばれるものである。3本束ねた棒を三脚状にした（結灯台）上に灯盞をのせて使用したと考えられている（第1図1）〔国立歴史民俗博物館 1989、江戸東京博物館 1995、（財）日本のあかり博物館 1997〕。

考古資料から古代の灯火具に関する先駆的な論考の一つとしては、津野仁氏が栃木県内の8世紀前半から9世紀代の須恵器、土師器坏類について、油煙の付着状態をタイプ分類し、集成したものがある〔津野 1991〕。基本的に灯火具は「転用」であること、また、使われ方は灯火実験から、上皿・下皿の二枚式と一枚式の二種類を推定し、古代の灯火具について具体的に言及している。一方、灯火具の大半は一枚式で使われたこと、灯火用の油は値段が高い胡麻油のため、灯火具は主に官衙や寺院及び富豪層の仏教関係施設での使用を考えている点は、従来の学説の通りである。

灯火具専用器については、巽淳一郎氏が報告している〔巽 2004〕。専用器の文献資料で

1) 埼玉県内の灯火具に関しての特別展「あかり」〔笹森ほか 1986〕では、8世紀前葉の灯火具として、煤が付着した土師器、須恵器の坏を紹介している。

は、8世紀前葉の長屋王家木簡記載「油坏」と、『正倉院文書』「造仏所作物帳」（8世紀後半頃）の三彩の「瓷油坏」を指摘している。さらに興福寺旧境内などから出土した小型の口径11.5cm、器高2.5cmの二彩、三彩小皿が文献資料と同様の寸法（法量）であること、また、同等かそれ以下の法量の須恵器、土師器に灯芯痕が観察できる専用器としている。

埼玉県坂戸市所在の若葉台遺跡では、V区2号住出土の8世紀前葉の口径約10cm、器高2.5～2.7cmの小型で完形品の土師器坏2点には、灯火具由来の黒色付着物が観察できるが、その後、灯火用の専用器種として、こうした小型の土師器は、若葉台遺跡周辺では継続して認められない。他の遺跡では、土師器の小型坏に油煙や煤が多量に付着し、一定期間使用されたことが推定できるものも何例か認められる²⁾。しかし、各々の遺跡で単発的であり、今までのところ、継続して生産されている例を知らない。また、南比企窯の8世紀前葉の須恵器坏は、口径14cm以上と法量が大きいものが多いため、須恵器で灯火具専用器が作られた可能性は低いと考えている。

また、平城京では二彩、三彩の坏が灯火具として生産、使用されていたことは事実であろう。しかし、地方の主要な遺跡での二彩、三彩の出土は極めて稀であり、現在、千葉県井戸向遺跡〔千葉県文化財センター1994〕において、一部を打ち欠いた托を灯火具として再利用されている例が認められる程度である。したがって重要なことは、どのような用途として、消費地で使用されていたのかである。生産段階で灯火具専用器とされていたか否かとは別の問題点といえる。灯火具専用器の問題は、平城京などの都城での様相と地方の様相や階層の違いによることも考えられ、今後の課題と考えている。現在のところ、都城における灯火具の使用状況について、具体的に考古資料から判明している点は次に述べる通りである。

平城京では左京域の長屋王邸、藤原麻呂に比定されている区域である左京三条二坊一・二・八坪内、及び周辺から多くの灯火具として使用された坏塀類が出土している〔奈良国立文化財研究所1995〕。特に溝SD5100からは、土師器657点、須恵器323点、総数980点という多数の灯火具が出土している。また、多数の木簡が出土し判読された結果、左京三条二坊が天平十二年（729年）の長屋王の変³⁾までは、左大臣長屋王と妻吉備内親王の居宅であったことが判明している。その後は分割され、光明皇后の皇后宮や太政官厨として使用されている。

二条二坊は従三位兵部卿である藤原4兄弟の藤原麻呂の居宅が構えられ、南門が面する二条大路に掘られた溝SD5100、溝SD5300から出土する多数の土師器坏A・B・C(第2図1・3・4)、坏B蓋(第2図2)、塀C(第2図7)、皿A1(第2図5)、高坏(第2図12)、壺A、壺A蓋(第2図11)、把手付双孔蓋(13)及び甕X(第2図14)の破片、及び須

2) 飯能市張摩久保遺跡30次4号住居跡などからは、油煙、煤の付着した口径9cmの8世紀前葉から中葉とみられる、てづくね風小型土師器坏1点が出土している〔飯能市教育委員会2009〕。この他に、埼玉県ふじみ野市神明後遺跡第28地点H2号住居跡からは、9世紀前半のタール状の煤が明瞭に付着した口径9～10cmの土師器坏8点が、逆位の重なった状態で出土している。8点の作りは類似し、灯火具として使用されている〔ふじみ野市教育委員会2008〕。

3) 長屋王は父に高市皇子、母に持統・元明天皇の姉妹にあたる皇女をもち、妻は草壁皇子と元明天皇の間の吉備内親王という、極めて皇位に近い位置にあった。神亀六年（729年）に謀反の誣告により、長屋王、吉備内親王と子供たちが自尽した事件が長屋王の変である。藤原氏の光明皇后立后にあたっての陰謀による事件とするのが通説である。

恵器坏 A・B・C(第2図 15・17・18)、坏 B 蓋(第2図 16)、小型の坏 E(第2図 23)、皿 A・B(第2図 20・21)、埴 A(第2図 19)、壺 A 蓋(第2図 24)、高坏などが灯火具として使用されている。溝 SD5100 からは、天平十二年(740)の紀年木簡や「衛士」に關係する木簡が出土していることから、三条二坊の施設である皇后宮、及び藤原麻呂の家政機關に關するものとみられている。

これらの溝出土の灯火具は、次の4つの特徴があるとされる。①官衙で使用されていた小型灯火専用器とみられる土師器、須恵器の皿 C・E(第2図 8・23)は、ほとんど認められず、一般の大型食器の土師器、須恵器を使用している。器高が高く、灯火具としては不向きな器種である須恵器埴 A(第2図 15)なども使用している。また、②多様な器種を使用している。土師器では坏蓋、高坏、盤や甕の破片、把手付双孔大型蓋破片であり、須恵器では坏蓋、及び壺蓋をはじめ、小型の坏、皿などである。次に③食器だけでなく、奴婢用あるいは名前が記された個人用の食器を使用していることから、既に使用していたものを再利用していることがわかる。④完形品が多くを占め、長期間使用とみられるものと、短期間使用のものが区別されており、後者が圧倒的に多いことが指摘されている。

また、『正倉院文書』や木簡などの文献史料から1日当たりの油の消費量を把握し、燃灯実験との結果を検討すると、天皇の部屋でも常灯の灯火具は2個と推定できるという。したがって、通常では使用されていない器種の使用と、再利用の土器、さらに短期使用の痕跡から、これらの多数の灯火具は常灯や宴会用ではなく、緊急、臨時的対応のもの、即ち文献には認められないが、仏教の行事としての万灯会、燃灯供養に使用した後、廃棄処分したと記述されている。その燃灯供養の背景として、長屋王の死が光明立後の前提となっていたことに加え、光明皇后の皇后宮として長屋王邸が使用されていること、相次ぐ藤原氏四兄弟の死、天然痘流行などの理由を挙げている。

しかし、SD5100 の遺物は藤原麻呂邸からの廃棄物、また、木簡資料から衛士關係の廃棄物であることが認められている。このため、藤原麻呂邸の使用人により日常的に使用された灯火具、及び衛士による警備のための灯火具として使用されたものなどが含まれていると推定できる。

平城京関連の報告書で、このほかに灯火具についてまとめているものは、『平城京発掘調査報告書Ⅶ』〔奈良国立文化財研究所 1976〕に記載されている灯火具一覧表(表1)である。この調査報告書は、内裏北外郭地域の発掘調査結果であり、土壌 SK820 は兵衛關係の木簡と贄の荷札木簡が46点出土することから、左兵衛の詰所、宮内省内膳司の存在が近隣に推定されている。灯火具として使用された土師器、須恵器の法量を加えた表1をみると、前述した油坏の口径 11.5cm、器高 2.5cm に該当するものは少数であることがわかる。

表1に示す通り、灯火具の個体数でみると、土器編年で平城Ⅲ(750年頃)の土壌 SK820 では、須恵器坏 AⅢ(第2図 15、口径 14.1~15.8cm) 11点、次に土師器坏 C I(2図 4、口径 17.8cm) 8点である。一方、口径が 11cm 代の小型のものでは、土師器皿 C(第2図 8)が1点、須恵器坏 AⅣ(第2図 15) 4点、坏 BⅣ 1点(第2図 18)である。平城Ⅴ(780年頃)に比定される SK2113 では、土師器埴 A I(第2図 6)が27点、同皿 AⅡ(第2図 5)の10点が灯火具として使用されている。その法量は、図面が掲載されているわずか4~5点の平均であるが、土師器埴 A I(第2図 6、口径 13.1cm、器高 4.2cm)、同皿 AⅡ(第2図 5、口径 7.0cm、器高 3.0cm)と中型で、器高が比較的高いといえる。

このように中型の土師器、須恵器の坏、埴、皿が灯火具として多い点が指摘できる。一般的に、器高が高いものは灯火具として使用するためには、多くの灯火油が必要であり、適していないといえる。土器の実見をしていない段階で推定の域を出ないが、口径が大きく、器高の高い器種に関しては、完形での使用のみならず、大型破片を再利用していた可能性も指摘したい。

灯火具が比較的多く出土する SK2113 と前述の溝 SD5100 は、ほぼ同じ時期であり、出土木簡は衛士関係が多いこと、また、近隣に内膳所や太政官厨が存在する共通点がある。灯火具の使用器種でも、両遺構で小型のものが少ないという共通点が認められる。

仮説ではあるが、京左京二条二坊溝 SD5100 出土の多数の灯火具は、衛士、兵衛の関係、及び内膳所、厨において、他の文書関係の官衙とは異なる灯火具の使用方法であり、土器の大型破片を再利用していた可能性を指摘しておきたい。

溝 SD5100 出土の灯火具は、完形品が多いと報告されているが、これらが新品のものを灯火具として使用したか、供膳具として使用した後の再利用であったかは、遺物から判別することは難しいといえる。したがって、一般的には「転用灯火具」となるが、第2章1節2項での再利用の分類概念についての定義の通り、ここでは再利用の灯火具として扱う。これは再利用硯における「坏蓋硯」の議論〔山中 1983〕と同様の議論である。即ち、はじめから灯火具としての目的で作られた可能性があるものと、供膳具として再利用されたものを含むが、遺物としての判別は困難という考え方である。

鳥羽英継氏は、長野県屋代遺跡群〔長野県埋蔵文化財センター1999〕から出土した坏類が灯火具に再利用されたことを基にして、長野県内の9世紀代を中心に須恵器の坏を使った古代灯火具の報告を行っている〔鳥羽 1999〕。屋代遺跡群は、7世紀後半から11世紀まで継続する大規模遺跡群で、埴科郡衙関係の遺跡とされる。鳥羽氏によれば、付着物から9世紀前半以降に、実際に土器を二枚組み合わせ使用していたこと、また、口縁部に小さな割れ口をつくり、灯芯を置いた例が多いという⁴⁾。この他に、底部が穿孔され灯芯の痕跡をもつ灯火具や、朱墨硯に再利用後、さらに灯火具として再利用された例も示している。付着物の観察から出発して、灯火具の使われ方に関し具体的に報告している点は評価できる。しかし、祭祀や呪術との関係に終始して、灯火具の性格を考えている点は、従来の学説と同様である。

屋代遺跡群は、栴などの紡織関係の木製品をはじめ、男性が織布作業に携わっていたことが木簡の判読から判明〔平川 2003〕し、単に郡衙であるか否かの性格ばかりではなく、仮に郡衙であったとしても、製糸から織物までの大規模な紡織工房をもっていたことが判っている。そして、紡織という生産活動と灯火具との有機的関係が認められる点が重要であるといえる。

2 中世・近世の灯火具

中世・近世における土器の再利用に関しては、陶磁器の埴底部などの破片を二次加工した、「小型円板」の報告がある。兼康保明氏〔兼康 1993〕によれば、江戸時代前期の元興

4) 鳥羽氏が集成した須恵器の坏再利用の「二枚組式」の灯火具に関して、10 図 (p28) 〔鳥羽 1999〕は、若葉台遺跡にみられる形状タイプの E タイプと D・2 の組み合わせとして確認できる。

寺極楽坊土坑出土の小型円板は、近世の灯火具の灯芯を押さえ、短くなった灯芯の先を押し出す役割の「かきたて」（第1図2）別名、「芯押さえ」〔小川 2001〕としている。近世の灯火具は、上皿、下皿に加え、金属製あるいは陶製の「灯芯押さえ（かきたて）」〔江戸東京博物館 1995〕の3点がセットで使用されている。

山口格氏は「小型円板」について、兼康氏の考察を補強する報告をしている。近世の三重県四ッ野 C 遺跡から出土した、染付磁器高台碗の底部を二次加工してつくられた小型円板に、油脂状の付着物や油脂が焦げて付着した痕跡があることから、灯火具の「かきたて」としている。こうした円盤状の「かきたて」には、中世の絵画資料に描かれた「かきたてぎ」という棒状のものが、セットとなって使用されたことも推定されている〔山口 1999〕。

一方、灯火具としての用途に対して、飛鳥藤原地域から出土した多数の円板（直径2～9 cm）には、灯火具として再利用された付着物がみられないとする石橋茂登氏の報告もある〔石橋 2004〕。

第2項 古代の灯火具復元モデル

上述した資料から灯火具を復元すると、二枚重ねの灯蓋であり、植物性の油を入れた上皿に、「灯芯押さえ」で灯芯を固定し、口縁端部で灯芯を点火するというものである。近世の灯火具にみられたように灯芯押さえは、「かきたて」とも呼ばれ、実際に灯芯を押さえる役割と、残存する口縁部の直立した部分を摘むことで油に触れることなく、燃えて油の中に沈みそうになった灯芯を掻き出す役割を持つための道具（第1図2）である。油は貴重であるだけでなく、近世でも手や衣類に付着した場合は、洗浄を行うことが容易ではないことから、「灯芯押さえ」によって、油に触れずに使用するための工夫であると推測される。古代においても灯火具使用時に同様のことが考えられる。

以下、近世の資料から復元できる古代に使用された可能性の高い、灯火具について組み合わせの基本モデルを提示する。

- ①油を入れる上皿と、灯芯を伝わった油を受けるための下皿という2点の組み合わせ。
- ②上皿、カキタテ（灯芯押さえ）の2点の組み合わせ。
- ③上皿、下皿に加え、カキタテ（灯芯押さえ）という3点を組み合わせたもの（第1図2）。
- ④近世の灯火具で、下皿に上皿を支える円環状受け付きのタイプが存在（第1図3）することから、受けと同様の機能を持たせた組み合わせである〔小林 1994〕。

筆者の灯火実験でも、灯芯を口縁部に沿わせて点火すると、数十分で油が上皿外面に回ったことから、古代において下皿使用の可能性は高いと考えられる。また、④のように受け付きのものは、灯芯を伝わった貴重な油を下皿で受けて再利用ができる、合理的な灯火具と考えられる。しかし、円周状の受けが無くても上皿と下皿の間に、口縁部の小破片である SM タイプ（第2章1図18）を挟んで上皿を安定させ、受けと同様の機能を得ることも充分可能と思われる。基本的には、①・②の2点のセットに加え、③の3点のセットで構成される灯火具も古代において、須恵器・土師器の坏類を再利用して用いられた可能性があると考えられる。

1 土器再利用の灯火具復元モデル

第2節第1項で詳述する埼玉県坂戸市に位置する若葉台遺跡では、形状分類した須恵器や土師器の供膳具である坏・埴類を組み合わせ、灯火具として再利用していたと考えられる。ここでは、若葉台遺跡の灯火具由来の黒色物が付着した形状タイプのうち、明瞭に組み合わせたタイプがわかるもの、及び前述の近世の資料からの復元モデルなどを通して、より具体的な坏の再利用による灯火具の復元モデルを提示し、土器再利用に関して検討する際の指針にすることが目的である。

(1) 付着物の観察結果と灯火具復元モデル（第3図1～6）

①上皿：土師器坏の完形、下皿：須恵器形状 D-1 タイプ、灯芯押さえ：A タイプ（第3図1・2）

土師器坏の完形（Ⅰ区36号住居跡）の内面には、灯火具として LA 類の付着物が円形の輪郭状に観察できることから、上皿として使用されたと考えられる。この住居跡では A タイプが検出されていないため、他の遺構から出土した A-2 タイプを参考資料とする。外皿については、付着物 LC 類が観察された須恵器の D-1 タイプが推定される。D-1 タイプは、底部を斜めにして組み合わせれば下皿の役目を果たすと考えられる。

須恵器坏の完形も8世紀中葉以降、表2の通り、合計21点に灯火具由来の付着物が認められることから、土師器に換わり上皿として使用されていたと推定される。

②上皿：須恵器坏 D-1、灯芯押さえ：SA-2（第3図3・4）

須恵器坏 D-1 タイプ（Ⅱ区15号住居跡）の底部内面には、付着物 LB 類が観察され、SA-2 の割れ口と一致する形状が認められた。15号住居跡出土の SA-2 タイプは、加熱痕のみだが、灯芯押さえとして組み合わせられ、また、下皿などを伴っていたと推定される。下皿には、完形や同住居出土の底部残存部分が多い SB-1 タイプなども考えられる。

③上皿：須恵器坏の完形、灯芯押さえ：SC（第3図5・6）

須恵器坏完形（Ⅵ区12号住居跡）は、内面に付着物 LC 類が観察された。この須恵器坏に残された付着物の輪郭と SC タイプが一致することは、同住居出土の SC タイプが、灯芯押さえとして使用された可能性が高い。下皿は同住居出土の完形品などが推定されるが、付着物が少量であるため、使用していないことも考えられる。

(2) 付着物の数量と灯火具復元モデル

第3項で、付着物の数量的な傾向を提示している。結論から先に述べると土師器の坏類に付着率が高いこと、また、須恵器坏の付着物の点数に関しては、SB-1 が最も多く、D-1、口縁部破片の SM、A-2、完形、E タイプが一定数認められる。基本的には、上述の①から③までの灯火具復元モデルとして組み合わせられた形状タイプと、付着物にみられる形状タイプの出土傾向の多くが一致することが指摘できる。こうした復元モデルは、再利用の灯火具としては一部の例であり、この他、既述した近世の灯火具に類似した、SM タイプを上皿と下皿の間に置いて受けと同じ機能とする復元モデルなども推定できる。

これらは、若葉台遺跡では一般的であったと考えられる。また、口縁部破片の SM タイプに付着物が多い理由としては、完形や E、D タイプでは、灯芯を口縁部に接して使用し

たとえ推定されるため、付着物 LA 類が多く付着した口縁部が破損、あるいは二次加工された場合も考えられる。

以上の通り、灯火具復元モデルを提示することができる。若葉台遺跡における土器の再利用という視点からの検討により、古代の灯火具は中・近世と同様に上皿、下皿、灯芯押さえの組み合わせで、土器を再利用していたことが明らかになった。また、若葉台遺跡では、床面や竈及び竈周辺などの安定する場所に置かれた場合も多かったと考えられる。

灯火具への再利用については、形状分類、付着物の種類の観察を行い、特にどの形状が組み合せてセットとして使用されていたかを復元することが重要である。形状分類及び、付着物の分析結果からすると土師器の坏類及び、須恵器の坏では D・1、A・1・2、完形、E、SB・2 タイプを重点的に観察して分析することが必要であると指摘できる。

2 灯火に使われた油

深津正氏によれば、灯火に使用された油は、動物油と植物油の 2 種類に大別でき、動物油としては魚や牛馬などの油、また、植物の場合は胡麻油、麻子油(アサの実の油)、荏油(エゴマの油)などが使用されていたという[深津 1983]。菜種油は、千葉縣市原市国分尼寺跡から出土した 8 世紀後半の坏に墨書で「油菜所」[宮本 1999]と記されており、古代でも使用されていた可能性が充分ある。しかし、多くはエゴマの油や麻子(アサの実)油であったと考えられる。

文献史料をみると、大宝令(701 年)の武役令において地方からの貢献物として、エゴマの油と同様に麻子油が記されている[深津 1983]。『万葉集』にも麻の種子を蒔き、糸に績む歌がある⁵⁾。10 世紀ではあるが、『延喜式』には、武蔵・下総・常陸などから「年料」として麻子を徴収した記事などがみえる[永原 2004]。麻の栽培は奈良時代には関東地域で既に広く行われ、麻子油は比較的手に入りやすい油であったといえる。何れにしても植物油は当時貴重品で、特に胡麻油は値段が高いものであったことから、近世と同様に使用者の階層の差異や地域によって、使用する油の種類が異なることは充分考えられる。

第 2 節 坏類の形状分類と付着物の数量分析結果

第 1 項 若葉台遺跡の土器再利用

第 2 章第 1 節の残存形状の分類基準にしたがい、若葉台遺跡から出土した約 1,200 点の須恵器、及び土師器の坏類に関して形状分類と観察を行った。その結果をまとめて述べる。

1 若葉台遺跡の概要(第 2 章第 12 図 2)

埼玉県坂戸市と鶴ヶ島市の両市に広がる奈良・平安時代前半(8 世紀から 9 世紀)を中心とする大規模集落である⁶⁾。坂戸市の発掘区域(約 4.5 万 m²)で、竪穴住居 156 軒、掘立

5) 『万葉集』1195 番などがある。

6) 若葉台遺跡の南側には、谷を挟んで富士見一丁目遺跡[埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998A]が位置する。報告者の黒坂貞二氏は、この 2 つの遺跡は直接的関係のもとに成立したと考えているが、今回は区別する。また、奈良・平安時代の須恵器坏 11 点について「意図的打割」が報告されてい

柱建物 108 棟を数える。鶴ヶ島市域を合わせると、竪穴住居 279 軒、掘立柱建物 234 棟と掘立柱建物が多いことが特徴である。掘立柱建物は小規模な一般的規模の 2 間×3 間であり、全体では 102 棟と最も多い。北東部に存する 1 棟の四面廂建物は、居宅あるいは、村落内寺院などが想定されている。

若葉台遺跡では、多数の須恵器が出土していることが特筆される。鶴ヶ島市の出土点数と合わせると 3,000 点以上とみられる。土器以外では刀子、鎌、鉄製紡錘車などの鉄製品をはじめ、和銅開弥 1 点、鶴ヶ島市域では三彩小壺の陶器破片 2 点、銅製鈴 1 点、帯金具などが検出されている。また、「時山」の朱墨書 15 点、同墨書 4 点、「高山」の墨書 2 点をはじめ、多数の墨書土器が出土している。

遺跡の性格は、官衙的性格の強い遺跡と考えられているが、明確ではない。須恵器の大量出土からも、北西約 6 km に存在する南比企窯跡群との関係が若葉台遺跡の性格を考えるうえでは、特に重要である。南比企窯跡群は 8 世紀代において、末野窯、東金子窯と並ぶ武蔵国の三大古窯（第 2 章第 12 図）の一つであり、武蔵国府への須恵器供膳具などの継続的供給や武蔵国分寺の各郡銘瓦の焼成が行われていることが認められる。

また、若葉台遺跡の北東約 1.5km には、7 世紀第 4 四半期に創建された勝呂廃寺〔坂野和信 1982〕が存在し、この創建瓦が南比企窯跡群で焼成されていたこと、霊亀二年（716 年）には、若葉台遺跡に属していた入間郡の一部が割譲され、高麗郡として建郡されたことは注目すべき事柄である。西大寺榛原庄〔山下 1983〕、豪族居宅などの推測も行われている。また、遺跡の周辺には宝亀二年（771）に東山道から東海道に所管替えが行われた、通称東山道武蔵路が通ることが推定されている。いずれにしても、若葉台遺跡は、当時の有力者が関係する地域の核となる遺跡であり、須恵器窯の生産や管理との関連が推定できる地域間交易の核となる遺跡であると考えられる。

2 須恵器・土師器の形状分類の結果（表 2・3）

若葉台遺跡から出土した須恵器や土師器の多くは、破損した状態で出土している。まず、出土した坏類に関して、小破片を含めて形状分類を行い全体の傾向を把握する。集計をする際に底部のみで 30% 未満、全体の 20% 未満の小破片は除外している。

坂戸市発掘調査分を観察した結果、約 1,200 点について形状の分類を行った。8 世紀前葉の盤状坏が 1 点出土している他に、酸化焰焼成による坏類が数点認められるが、分類の便宜上、土師器に含める。

時期区分は、基本的に 1 世紀を 3 期に区分する。8 世紀後葉から 9 世紀初頭については、土器型式からみて一つの時期として把握するため、他の時期に較べてやや時期幅が長くなる。この時期区分の影響で、9 世紀前葉は他の時期よりやや短めとなることは否めない。また、本文中の「8 世紀代」には、9 世紀初頭が含まれている。

土器分類の基本となる須恵器の坏類の型式分類は、大枠として南比企窯跡群に含まれる鳩山窯跡群〔渡辺 1988・1990〕を参考にしているが、細かな時期区分などに関しては、土器型式の認識の違いであり、鳩山窯の須恵器分類と型式認識が異なる部分もある。

形状タイプ分類の状況を時期別に概観すると、基本的には須恵器、土師器の坏類とも出る。

土点数と形状タイプ分類で確認された点数の推移は、同じ傾向を示している(表2・3)。

須恵器の坏類形状タイプの出土点数からみると、8世紀後葉から9世紀初頭に画期が認められる。この画期は底部破片のSタイプが多いためであり、特にSA-2、SB-1が多い。9世紀中葉・後葉は、須恵器の完形が比較的多く認められる。

全体として確認点数の多い形状タイプは、SB-1、SA-2、D-1、A-2、SM、E、SC、SA-1、及び完形である(表2)。

土師器の坏類は、出土点数から8世紀前葉が画期で、完形が多い時期でもある(表3)。

須恵器は偏りもあるが、多くの形状タイプがほぼ全時期に確認される傾向であるのに対し、土師器は須恵器に比べ出土点数が少ないが、8世紀前葉に多くみられる。土師器の形状のタイプは、口縁部破片のSM、SB-1、及び完形に偏っている。この時期は土師器が須恵器を補完していた状況であったことが推定できる。

3 若葉台遺跡の灯火具

若葉台遺跡では灯火具に関係する道具として、火打金が1点、8世紀後葉とみられるⅡ区19号住居跡上層から出土している。8世紀中葉のほかの住居跡からも1点、火打金の可能性がある鉄製品が出土していることから、若葉台遺跡で灯火具が使われていたことは確実といえよう。

ここでは、形状タイプに分類した若葉台遺跡出土の須恵器、及び土師器の坏類について、灯火具として付着物の観察結果を述べる。内面が黒色処理されたとみられる土師器も数点であるが認められるため、外面などで明らかに灯火具由来の付着物が観察されたものは対象とした。また、グラフを含めて図面として取り扱う。

(1) 須恵器坏再利用の灯火具

i 時期別・付着物分類結果(第4図①～③)

基本的には、灯火具としての再利用が多い8世紀代にLA・LB・LC類が一定数確認できるが、特に8世紀後葉から9世紀初頭では、LC類が最も多い(第4図③)。タイプ別では、付着物3種類を通して、一部欠失した底部の端部まで口縁部が残るSB-1が最も多く、底部が破片で周囲にわずかな口縁部破片が残るSA-2、口縁部の一部が底部まで欠損するD-1、口縁部破片のSM、A-2、完形、口縁端部をわずかに欠損するEタイプが一定数認められる。

①LA類(第4図①)

油煙・煤が明瞭な付着物LA類は、全時期を通して、3種類の付着物のなかで最も点数が少ない。8世紀中葉及び8世紀後葉から9世紀初頭に一定数が認められる。9世紀代では、わずかに完形を含めて3タイプに確認できる。

②LB類(第4図②)

網目状のシミのような付着物のLB類は、全時期で116点とLA類と比べると点数が多い。8世紀代ではSB-1、D-1、SA-2、口縁部破片のSMタイプが顕著である。LB類は9世紀中葉で完形に5点が確認できる。

③LC類(第4図③)

わずかに黒色や茶褐色などのシミが少範囲で付着する LC 類は、251 点と最も多く認められる。8 世紀後葉から 9 世紀初頭が最も多い。8 世紀代では SB-1、SA-2 タイプが特に顕著で、D-1、SM、A-2、E タイプも多い。また、9 世紀前葉では SB-1、9 世紀中葉では A-2、完形、E、D-1、SA-2 タイプに比較的多く認められる。即ち、8 世紀代は S タイプ、9 世紀代は底部が残るタイプに多く認められる傾向がある。

ii 形状タイプ分類と付着物との関係（表 2）

表 2 から須恵器の坏類形状タイプと灯火具由来の付着物について、時期毎に付着物の割合をみる。8 世紀前葉では 43%、中葉 43%、8 世紀後葉から 9 世紀初頭 35%、9 世紀前葉 31%、中葉 44%、後葉 31%である。須恵器の形状タイプのうち、全体では 38%が灯火具として使用されていたとみられる。形状タイプの点数は、8 世紀後葉から 9 世紀初頭が最も多く、灯火具としての再利用の割合では、8 世紀前葉、中葉、9 世紀中葉が 4 割以上と再利用率の高い時期であったことがわかる。

次に、形状のタイプ毎の灯火具としての再利用率では、口縁部破片の SM タイプ、完形、C-1、B-1、C-2 及び、D-1 タイプが特に高い割合を示す。また、平均再利用率が 38%以上である形状タイプは、C-3、B-2、SB-1、E タイプである。

第 2 章 1 節 3 項で述べたが、C タイプは意図的に口縁端部を打ち欠き、手を加えた形状とみられることから、再利用される可能性が高いことは当然と考えられる。なお、若葉台遺跡では硯としての再利用は 3 点認められ、そのうち C タイプが 2 点である。C の形状タイプ点数は 28 点と少ないが、灯火具への再利用率では 50%と高いタイプでもある。

灯火具として再利用の点数が多い形状タイプは、SB-1、SA-2、D-1、口縁部破片の SM タイプ、A-2 タイプである。また、形状タイプで出土点数も多く、かつ再利用された割合が高いものは、SB-1、D-1 タイプである。

須恵器の灯火具としての再利用で特徴的なことは、底部全体が残るタイプでは、D-1 が他の形状タイプに比べて点数が多く A-2、完形、E タイプも比較的多い点である。また、底部を一部欠失する S タイプの中では、SB-1 が最も多く、SA-2、口縁部破片の SM タイプに多く認められる。

(2) 土師器坏類再利用の灯火具

i 時期別・付着物の分類結果（表 4）

①付着物 LA 類（表 4）

全体で 42 点を数え、8 世紀前葉に最も多く確認できる。内訳をみると 8 世紀前葉は、口縁部破片の SM、SB-1 タイプと完形に多く認められる。

②付着物 LB 類（表 4）

27 点と付着物 3 種類では最も点数が少ない。8 世紀前葉では口縁部破片の SM タイプに最も多く認められ、次いで SB-1 タイプである。

③付着物 LC 類（表 4）

全体では 43 点が認められ、基本的には LA と同様に 8 世紀前葉に多く認められる。

ii 形状タイプ分類と付着物との関係（表3・4）

土師器では、付着物 LA 類から LC 類に SM が最も多く認められ、次いで SB・1 タイプ、完形の順となる。特に、8 世紀代では完形に付着物の確認された点数が多いことも、特徴といえる。

表3で形状タイプに対して付着物の割合（灯火具再利用率）をみると、8 世紀中葉までは 80%以上である。全時期の合計についても、80%と高い割合で灯火具に再利用されている。形状別にみると、点数の多い SM や SB・1 タイプ、完形は 9 割近くに付着物が認められる。また、土師器は 8 世紀前半には、須恵器と比較して灯火具としての再利用が多く、付着物 LA 類が多いことが指摘できる。

(3) 須恵器と土師器坏類の灯火具の時期別分類

灯火具として再利用された須恵器坏と土師器坏類を併せてみてゆく（第5図①～⑦）。8 世紀前葉で、灯火具由来の付着物が確認された完形は、すべて土師器の 12 点である（第5図①）。また他の時期に比べ、土師器の灯火具としての再利用が多いことが特徴である（表3）。

8 世紀中葉以降は、完形の再利用はほとんどが須恵器であり、特に 9 世紀中・後葉に多くなる（第5図②～⑥）。土師器坏類はその生産が止揚され、若葉台遺跡においては 9 世紀には出土が認められないためと考えられる。

8 世紀代（第5図①～③）で、須恵器、土師器を併せて灯火具として再利用された点数が多い形状タイプは、SB・1、SM、SA・2、D・1 であり、A・2 タイプも一定数が認められる。このうち、SB・1、SM タイプは、9 世紀になると減少する。D・1 タイプは、8 世紀前葉、中葉、8 世紀後葉から 9 世紀初頭の各時期で、10 点以上が再利用されている（第5図①～③）。

次に、灯火具としての再利用から、特に注目される形状タイプは、完形と E タイプである。油という液体を保つという点から、この二つの形状タイプの灯火具としての使用頻度が高いことが推測できる。灯火具としての再利用は、8 世紀前葉（第5図①）では土師器の完形が、9 世紀中葉（第5図⑤）では、須恵器の完形が多いことが特徴である。

即ち、土師器と須恵器では、灯火具としての再利用に違いが認められる。土師器の出土点数が多い 8 世紀前葉では、灯火具としての再利用において、明らかに須恵器より土師器指向であることが指摘できる。特に 8 世紀前葉は、灯火具として土師器の再利用が最も多く認められる画期である。9 世紀前葉以降には、須恵器のみが出土するため、土師器の灯火具としての再利用は、8 世紀代に比べると急激に少なくなったといえる。また、須恵器坏の法量が 8 世紀代に比べ、9 世紀には小型化したことも、結果的に灯火具としての再利用に適すようになったといえる。

若葉台遺跡では、灯火具として再利用された坏の出土地点を検討したが、竈周辺から出土する傾向が比較的高いことがわかった⁷⁾。一方、床面直上のものは多くないということ

7) 渡辺正人氏は、竈周辺で「油付土器」が多く出土する傾向はあるが、火の一括管理という点から竈周辺に灯火具が置かれた可能性が高いのではないかと推測している。また、「打ち欠き」土器も転用支脚としての再利用されている例があるという〔大宮市遺跡調査会 1993〕。竈周辺には棚状

も認められている。竈周辺に置かれた灯火具に関しては、竈の廃棄や竈神に対する祭祀などと説明されている場合が多い。しかし、竈内から出土する坏類と、竈周辺から出土する坏類の性格は異なると考えられ、祭祀として一括はできないと考えられる。また、灯火具の使用場所と管理する場所が同じであるかどうかを含めて、今後の検討課題である。

竪穴住居軒数と形状タイプ、及び灯火具の再利用との関係（第6図）では、形状タイプ分類の第一の画期が、8世紀後葉から9世紀初頭であるのに対し、灯火具としての再利用の画期は8世紀前葉であり、竪穴住居軒数の変遷とも一致していないことが指摘できる。

遺跡の概要で述べた通り、竪穴住居のほかに掘立柱建物が多いことは若葉台遺跡の特徴の一つである。しかし、掘立柱建物は時期決定が難しいため、時期別の変遷から除外した。灯火具として再利用された土器の出土位置は、周辺の竪穴住居や掘立柱建物からの投棄の可能性など、今後、廃棄の問題を含めて検討を必要とするが、ここでは古代の灯火具としての再利用と、掘立柱建物との有機的関係を指摘しておきたい。

4 土師器と須恵器坏類再利用

若葉台遺跡では坏類の灯火具の再利用が、8世紀代と9世紀代で大きく異なっていることが指摘できる。土師器の坏類の生産と供給は、8世紀前葉をピークに激減し、後葉にはほとんどなくなる（表3）。このような土師器坏類の出土状況は、若葉台遺跡にみられる大きな特徴である。灯火具としての再利用（第5図）でも、土師器坏類は8世紀前葉が最も多い時期であり、灯火具としての再利用では、須恵器より土師器指向の時期といえる。

一方、9世紀代は、須恵器の坏のみで土師器坏は認められない。また、9世紀中葉の須恵器では、完形が多く85%が灯火具として再利用されていたことが指摘できる（表2）。時代が下れば、灯火具の利用が多くなる傾向がある一方で、若葉台遺跡では、8世紀前葉に灯火具としての再利用が最も多いことが、この遺跡の大きな特徴であると同時に、問題点といえる（第6図）。

灯火具としての再利用が行われている須恵器、土師器坏類の分布をみると、特に集中する様相ではないが、第4章で論じる硯としての再利用、及び第5章で扱う再利用、定形の紡錘車との出土状況は、再利用が多数認められた坂戸市発掘調査分では、一定の相関関係があることが指摘できる。灯火具は煤・油煙の明瞭なLA類（第2章2節1項）が1点でも出土している場合、あるいは付着物LB、LC類を含めて4点以上出土している竪穴住居跡計53軒を抽出した。再利用硯は15点のうち9点、円面硯は10点のうち3点、定形及び再利用紡錘車は計22点のうち13点が再利用の灯火具と供伴している。また、灯火具の時期と硯や紡錘車の時期は、ほぼ一致している。再利用硯と紡錘車の各々約60%が再利用の灯火具と供伴して出土している。鶴ヶ島市調査分の竪穴住居については、円面硯（第5章表1）が多数出土している大型住居のうち3軒に関して、土器実見の結果では、再利用の灯火具が伴出している。即ち、実務用の硯である再利用硯、及び手工業生産の道具である紡錘車と灯火具には、有機的関係が存在する。灯火具は、文字・数字の使用や紡錘車で糸を紡ぐなどの生産のためにも使用されていたと考えられる。

の施設に収納されていた土器などが、竪穴住居が遺棄された後に転落した可能性を指摘している論考もある〔荒井健治 2006〕。

第2項 住吉中学校遺跡の土器再利用

第3項では、若葉台遺跡の須恵器、及び土師器坏類の分析を研究事例として、8世紀、9世紀に、土器の再利用が主に灯火具として広く認められることを示した。この分類手法に基づき、地域研究として、第2項以降で形状タイプと付着物の観察について、坂戸市内の住吉中学校遺跡、川越市霞ヶ関遺跡、及び旧大宮市氷川神社東遺跡において、その数量を把握して、再利用の特徴と傾向を考察する。

1 住吉中学校遺跡の概要（第2章第12図4）

埼玉県西部坂戸市若葉台遺跡の北東約1.5kmに位置する住吉中学校遺跡〔坂戸市教育委員会1992〕は、8世紀中葉から9世紀代の遺跡である。竪穴住居跡23軒、掘立柱建物5棟、中世の竪穴状遺構7基が検出されている。1軒の竪穴住居跡から人名と推定される8世紀中葉の「忍人」の墨書土器が、4点まとまって出土している。この遺跡の周辺には、宮町遺跡〔(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1991〕が隣接し、同じ集落の一部と推定される。宮町遺跡からは、8世紀中葉から9世紀代の竪穴住居跡24軒、掘立柱建物5棟、及び「路家」をはじめとする墨書土器13点と、8世紀中葉の石製錘（おもり）及び鉄製留金具が出土している。両遺跡の南側に位置する精進場遺跡でも、9世紀代の鉄製錘が出土している。このように遺跡周辺には、竿秤での計量に使用されたとみられる錘が複数出土している。

また、南東に直線距離で4kmには、入間郡衙と推定される霞ヶ関遺跡が所在するほか、古代の東山道枝道の存在が推定〔酒井1993、川越市教育委員会2005A〕され、当遺跡は古代の「市」である可能性も指摘されている〔井上2004〕。若葉台遺跡と並び、入間郡の奈良・平安時代における核となる遺跡の一つと考えられる。

2 須恵器・土師器の形状分類の結果（表5・6）

住吉中学校遺跡では、8世紀中葉以降の須恵器、土師器の坏類が出土している。若葉台遺跡とは異なり、9世紀代を主体とする遺跡である。形状タイプの分類対象となる土師器の坏類は9点、須恵器坏は371点（表5・6）と若葉台遺跡に比べて、発掘調査面積が狭いこともあり数量が少ない。したがって、土師器と須恵器を併せて記述する。

形状タイプ別の須恵器の数量は、表4から9世紀前葉に多く、次に8世紀後葉から9世紀初頭、9世紀後葉、9世紀中葉の順となり、9世紀代が8世紀代に比べて多い。若葉台遺跡と同様に、底部を一部欠失するSタイプが半数以上を占める。8世紀後葉から9世紀代では、SB-1、SA-2、A-2、及び口縁部破片SMタイプが一定数確認できる（表5）。

若葉台遺跡の須恵器形状タイプ（表2）の出土傾向と比較すると、住吉中学校遺跡ではSMタイプが多く、D-1やBタイプの出土が少ない。SB-1、SA-2、A-2、SCタイプは各期を通じて比較的多い傾向がある。前述したように、土師器の坏類は合計9点と少数であるため、須恵器と併せても確認された点数の多少には影響が少ない。

3 付着物と再利用の用途

付着物の分類基準（第2章第5図）にしたがって、住吉中学校遺跡の須恵器坏、土師器坏類を観察した。その結果、硯として再利用された8世紀中葉の須恵器坏 SC タイプ2点を除いて、黒色付着物は灯火具由来のものであることが観察できる。また、8世紀後葉に位置づけられる火打金が1点出土しており、灯火具としての再利用が行われていた傍証となる。

① 須恵器坏（表5）

住吉中学校遺跡の須恵器坏の灯火具再利用率は、全体で18%と若葉台遺跡の38%に比べると低い。また、観察された付着物は、LA類（27点）とLC類（39点）のみで、網目状のLB類は認められないことも若葉台遺跡と異なる。その理由については、油の種類の違いという可能性もあるが、現段階では不明である。

灯火具として再利用された須恵器の形状タイプ点数は、若葉台遺跡と同様に SA・2、SB・1、SM、A・2、完形及び E タイプで一定数が確認できる。

② 須恵器坏と土師器坏類（第7図①・②、表5・6）

住吉中学校遺跡の土師器は、8世紀中葉、8世紀後葉から9世紀初頭において、9点のうち4点が灯火具として再利用されている（表6）。土師器の灯火具としての再利用率は、須恵器に比べれば高い傾向が認められるが、出土点数がわずかであるため、土師器・須恵器を合わせても、須恵器の形状タイプの付着傾向は変わらず、同様である（第7図①）。表5・6から時期毎の灯火具再利用率（灯火具点数／形状タイプ点数）を計算すると、9世紀中葉の12.7%が最低で、9世紀前葉は15%、8世紀後葉から9世紀初頭では20%、8世紀中葉23%、9世紀後葉25%となる。若葉台遺跡（第1項）と比べると、住吉中学校遺跡で灯火具としての再利用率はかなり低い。

第7図②から、時期別の形状タイプは、9世紀前葉が最も点数が多く、次に8世紀後葉から9世紀初頭であることがわかる。灯火具としての再利用の点数は、形状タイプの確認点数の変化とは異なり、8世紀後葉から9世紀初頭でも増加せず、一定の幅で推移している。これは若葉台遺跡と対照的であり、遺跡の性格における違いとしてみることができよう。当遺跡は若葉台遺跡に比べ、掘立柱建物が少なく、これが灯火具としての再利用と関係した可能性もある。即ち、灯火具としての土器の再利用からは、若葉台遺跡とは異なる性格の遺跡であることを改めて指摘できる。

第3項 霞ヶ関遺跡群の土器再利用

1 霞ヶ関遺跡群と霞が関関連遺跡の概要（第2章第12図6・7）

古代入間郡の霞ヶ関遺跡⁸⁾（埼玉県川越市）は、入間川と小畔川に開析された台地上に位置し、弥生時代後期から奈良・平安時代、中世まで継続した大規模集落である。湖西系須恵器、畿内系土師器、円面硯、須恵器盤類、「入厨」などの墨書土器が出土していることが特徴である〔埼玉県1984、平野2002〕。

遺跡の西約1kmには「東山道武蔵路」が通過していたと推定され、河川交通と陸上交

8) 霞ヶ関遺跡を含めて、周辺の遺跡出土の土器を実見することができた。

通の結節点に位置している。正倉などは発見されていないが、規則的な配置の掘立柱建物跡が検出され、入間郡衙の可能性が高い遺跡である。また、隣接する天王遺跡をはじめ、周辺に位置する山王久保遺跡、新田屋敷遺跡、川越館跡などを含めて中世まで続く。霞ヶ関遺跡とこれらの遺跡を合わせて、霞ヶ関遺跡群と呼称されている⁹⁾。また、南西約2 kmに位置する駅家関係と推定される八幡前・若宮遺跡〔川越市教育委員会 2005A〕からは、8世紀前葉の墨書「驛長」や、帳簿木簡などが出土している。

入間川と新河岸川との間の台地上には、古墳時代後期を中心に9世紀代まで継続する弁天西遺跡〔川越市教育委員会 2000〕や、8世紀中葉以降を中心とする仲町遺跡〔川越市教育委員会 2003〕が所在する。弁天西遺跡からは、稀な計量用の銅製錘や8世紀後葉の墨書「片牧家」などが検出されている。また、仲町遺跡では8世紀中葉以降の一辺約6 mの大型竪穴住居などが検出され、相模型坏、猿投窯製品の陰刻花文が施された緑釉稜塊などが出土している。一般集落とは異なる交易と流通に関わる遺跡で、官衙関連の集落と推定されている。

2 坏の形状分類と再利用の用途（表7）

霞ヶ関・天王遺跡は16点と観察資料が少ないため、弁天西遺跡・仲町遺跡などの須恵器坏(39点)を併せて、霞ヶ関遺跡群、及び霞ヶ関関連遺跡として一括して形状タイプ分類、付着物をみてゆきたい。須恵器の坏・塊類では、D・1、完形、SB・1、SMタイプなどが確認できる（表7）。これらの形状タイプは、若葉台遺跡、住吉中学校遺跡でも多数確認されている。D・1タイプの大半は、仲町遺跡の1軒からの出土である。

灯火具としての再利用による付着物が多く認められる形状はSB・1、完形、SMタイプであり、他の遺跡と同様である。一方、形状タイプで多く認められるD・1タイプには、わずか1点のみ付着物が認められ、この点は若葉台遺跡と異なっている。

霞ヶ関関連遺跡の灯火具としての再利用率は、形状タイプの点数に対して35%である。ただし、資料観察の際には、付着物が認められるものを対象とした傾向があったことは否めないため、参考値ではあるが、霞ヶ関関連遺跡の灯火具としての再利用は比較的多いといえよう。

霞ヶ関遺跡・天王遺跡では、7世紀末葉から8世紀代においては、土師器の坏が比較的多く出土する傾向がある。ここでは具体的に数値を提示していないが、土師器の形状タイプ分類ではE、SMタイプ、完形も認められる。また、土師器の灯火具としての付着物も多く認められることから、再利用率も高い傾向にある。8世紀代には霞ヶ関関連遺跡でも、土師器の坏類が須恵器の坏を補完していたとみられる。

灯火具由来の黒色付着物などの種類は、LA・LC類のみで、網目状のシミのLB類は確認できず、住吉中学校遺跡と同様である。霞ヶ関関連遺跡の付着物は、煤が薄いながらも平均的に付着する特徴があり、一方、若葉台遺跡は粘性のある煤や油煙である印象を受けた。現段階では推測の域を出ないが、住吉中学校遺跡と霞ヶ関関連遺跡は、若葉台遺跡とは異なる種類の油を使用していた可能性がある。

9) 本稿では霞ヶ関遺跡群以外の周辺の遺跡を一括して、霞ヶ関関連遺跡と呼称する。

第4項 氷川神社東遺跡の土器再利用

1 氷川神社東遺跡の概要（第2章12図16）

氷川神社東遺跡¹⁰⁾は、荒川中流域の大宮台地の東縁部に位置し、9世紀後半から11世紀初頭までを中心とする大規模複合遺跡である。注目すべきことは、第2章1節2項で既述した通り、住居跡出土の坏類に「打ち欠き」が報告されていることである。

また、本遺跡からは平安時代の小鍛冶・鑄造関連遺構が検出されたほか、ほとんど類例をみない北方系統の「口琴」が出土している。さらに、小金銅製仏像、銅製鈴などの遺物、墨書土器・再利用の硯から平安時代の足立郡衙関連の遺跡とも考えられているが、郡家に伴う遺構は検出されていない。その付属施設との関連が推定できる。また、9世紀後半以降、酸化焰焼成の須恵器坏類を中心に、灯火具の出土も報告されている。

以上から、氷川神社東遺跡は、官衙の付属施設あるいは、氷川神社などに関連する小鍛冶・鑄造関連遺跡である可能性が高い。

2 坏類の形状分類と再利用の用途（表8、第8図）

9世紀後葉から11世紀前半の坏類について、形状タイプの出土状況を見る。表8では明らかに土師器と認められるものは除き、ロクロ酸化焰焼成の坏と還元焰焼成の坏を集計した。

氷川神社東遺跡では、特に9世紀後葉から10世紀前半に、様々な形状タイプで再利用が多く認められる。D・1、SB・1、Eタイプは、若葉台遺跡、住吉中学校遺跡及び、霞ヶ関関連遺跡同様、出土点数が多い傾向である。

次に付着物の種類では、灯火具再利用による黒色付着物のLA、LB、LC類が認められる。なお、報告書で打ち欠かれたとされた坏類、及び付着物が観察される坏類を中心に実見した結果、報告書では墨と記載されていた中に、灯火具由来のものが認められる。このため、灯火具としての再利用率が高い傾向となっている（表8）。灯火具として再利用が多い形状タイプは、SB・1、D・1、Eタイプで、若葉台遺跡、住吉中学校遺跡などと同様といえる。

氷川神社東遺跡でも、第8図（1～3）で示したように、A・2と完形の組み合わせ、及び図示していないが、EとSCタイプの2種類の土器組み合わせによる、上皿と灯芯押さえの灯火具復元モデルが認められる。

さらに硯としての再利用の後に、灯火具に再利用するケースが4点認められ、坏類の最終的な再利用の用途として灯火具が考えられる。即ち、第6章で述べる通り、供膳具→一部破損→打ち欠きが施されて硯→灯火具→廃棄というモデルが復元できる。あくまで、古代の再利用、廃棄の一端を捉えたにすぎないが、一つのモデルが提示できることを指摘しておきたい。

このように、9世紀代から11世紀代における氷川神社東遺跡の資料によって、古代から中世へ移り変わる時期にも、具体的に坏類の灯火具としての再利用を把握することができる。古代の土器再利用について、その様相の一端を示すことができたといえる。

10) 氷川神社東遺跡〔大宮市遺跡調査会1993〕出土の土器は、一部実見することができた。

第3節 須恵器蓋の形状分類と付着物の数量分析結果

須恵器の蓋は、坏・埴類に比べれば出土点数及び、灯火具として再利用されている点数も少数であり、限定的であるといえる。しかし、硯として再利用されている割合は、坏・埴類より高い割合という特徴がある。

坏蓋、埴蓋の区別は、蓋全体の出土点数が坏類に比べ少ないこと、また、Sタイプの破片の場合には分類が困難な場合があるため、蓋として一括する。

第1項 若葉台遺跡

若葉台遺跡においては、須恵器の坏・埴類の蓋に関しても再利用が行われている。蓋は土師器には伴わず須恵器のみである。土師器、須恵器の坏類と同様に、須恵器の蓋228点について残存形状タイプ分類を行い、さらに付着物を観察した結果、再利用として主な用途は灯火具で、硯としての再利用は少数の9点であることがわかった（表9）。蓋を砥石として再利用しているものは、ごくわずかである。時期区分は、須恵器の坏、土師器の坏・埴類と同様で「8世紀代」には9世紀初頭が含まれている。また、時期区分の大枠としては、鳩山窯跡群〔渡辺1988・1990〕を参考にしている。

蓋の形状分類を時期別に概観する。蓋は坏、埴、高台坏、佐波理模倣坏などに伴うが、ここでは区別せず、蓋として一括して扱う。表9から、形状タイプに分類された蓋の点数は、8世紀前葉が最も多く79点で、8世紀中葉に29点と減少した後、次に、8世紀後葉から9世紀初頭は73点と多くなるが、9世紀代を通じて各時期は15点前後で、ほぼ同数という状況である。内訳をみると確認点数の多い8世紀前葉、8世紀後葉から9世紀初頭は、天井部の残存が少ないSタイプの点数が多い。いずれにしても、8世紀代では蓋の確認点数は多いが、9世紀代には急激に少なくなる傾向がみられる（第9図）。

若葉台遺跡では、出土する大半の須恵器は南比窯産である。南比窯の蓋生産の状況が若葉台遺跡出土点数に反映されているものとみられる。8世紀前葉では、南比窯の坏の大半は有蓋であることに加え、埴も有蓋である。この時期には、特殊かえり蓋や環状鈕（摘み）を有する蓋など、多種類の蓋の生産が行われていたことから、若葉台遺跡の蓋の確認点数に反映されたと考えられる。8世紀中葉以降は、坏が無蓋化していくため確認点数が減少したとみられる。8世紀後葉の埴蓋には擬宝珠、ボタン状の鈕に加えて、高台状鈕も加わるが、坏は無蓋化してゆく。一方、若葉台遺跡では8世紀後葉から9世紀初頭は、多くの蓋が確認される。これは若葉台遺跡では、坏類の無蓋化が進むとはいえ、該期が坏類の出土点数では画期であることから、蓋の確認点数も同様に推移したと考えられる。9世紀は基本的に8世紀に比べ蓋を伴う坏、埴は限られるため、若葉台遺跡においても蓋の確認点数が少なくなると考えられる。

形状タイプ別にみると表10より、口縁部破片のSMタイプは、8世紀中葉を除くと最も点数が多く、次はSAタイプである。鈕のみのKタイプが多く認められることは、若葉台遺跡にみられる特徴といえる。

若葉台遺跡では8世紀代において、9世紀代に比べ多数の蓋が出土し、再利用もより多く行われている。

再利用の主な用途は、付着物から灯火具と硯に大別できるが、基本的に蓋の灯火具としての再利用率は低い。天井部が残るタイプは、破片の S タイプや K タイプに比べ比較的多く、灯火具として再利用されている傾向が認められる。

付着物の種類別では LA 類が 4 点と最も少ないが、LB 類は 13 点、LC 類は 15 点で同様の点数である。須恵器坏では LB 類より、LC 類が点数では倍以上認められることから、付着率でみると坏類に比べ、蓋はシミ状の付着物 LB 類が高い。

①灯火具の再利用には、出土点数の多い坏類が指向され、蓋の灯火具としての再利用は限られていたこと、蓋は②付着物 LB 類や茶褐色の付着物が坏類より目立ち、坏類と付着の状況が異なっている。灯火用の油の量や使用方法が、坏類とは異なっている可能性がある。

第 2 項 入間郡内の遺跡

若葉台遺跡以外の入間郡内の遺跡として、住吉中学校遺跡、及び霞ヶ関遺跡群及び霞ヶ関関連遺跡について、須恵器の蓋再利用、特に灯火具の再利用に関してふれる。

住吉中学校遺跡では付着物が観察されている蓋は、わずか 5 点である。その内訳は、3 点が灯火具由来の付着物であり、2 点は硯としての再利用が行われ、うち 1 点には朱墨が観察される。硯としての再利用は 3 点であるが、9 世紀後葉の C タイプ 1 点は付着物が認められず、内面に触れてわかる程度であるが磨耗している。また、形状タイプの 9 世紀前葉にみられる小破片 SA タイプ 1 点は、内外面の磨耗が顕著であることから、砥石として再利用されたとみられる。

灯火具としての再利用から出土状況をみると、8 世紀代には認められないが、9 世紀前葉で B、SM 各 1 点合計 2 点、中葉に D タイプが 1 点認められる（表 10）。住吉中学校遺跡にみられる灯火具としての蓋再利用率は 5 % で、15 % である若葉台遺跡と比較すると、灯火具としての再利用率は低い。むしろ、硯としての再利用が顕著な遺跡である。

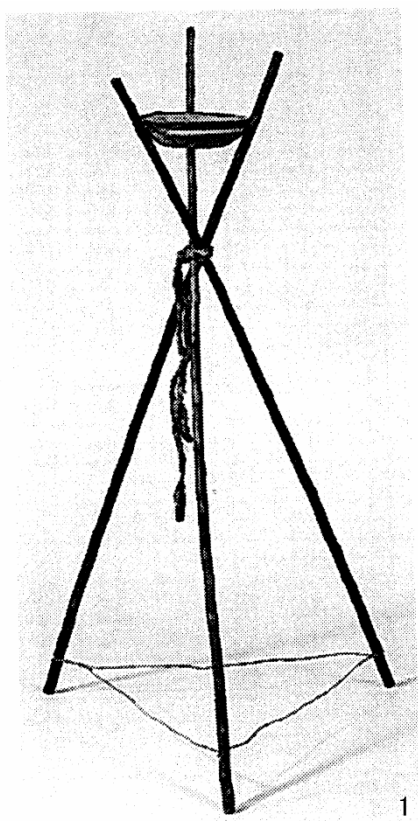
霞ヶ関遺跡、天王遺跡、山王久保遺跡及び新田屋敷遺跡を含む霞ヶ関遺跡群においては、表 11 に観察結果を示した通りである。7 世紀末葉から 8 世紀前葉までの蓋合計 16 点のうち、6 点が灯火具として、2 点が硯として再利用されている。完形は灯火具としての再利用である。霞ヶ関関連遺跡では弁天西遺跡、仲町遺跡の実見の結果、全て B タイプ 4 点のうち、灯火具としての再利用は、8 世紀前葉、9 世紀前葉の各 1 点、合計 2 点に認められる。また、硯としての再利用は、9 世紀中葉に 1 点が認められる。

蓋の灯火具としての再利用は、若葉台遺跡と同様に、坏類に比べ低く、硯としての再利用が指向されていたことが指摘できる。

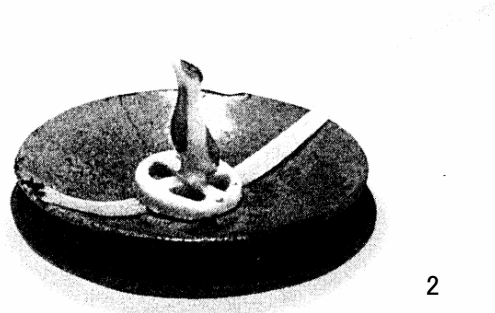
以上、土器の再利用という切り口から、従来の土器研究では、認識することができなかった遺跡の性格や成立の背景に関する新たな知見を得ることができた。

従来、灯火具は特別な道具であり、特に地方では灯火具が寺院や官衙での使用、あるいは集落内においては、仏教関連遺跡、及び祭祀に関係すると考えられ、地方豪族の生産関連活動のために使用された可能性については、言及されることはなかった。しかし、紡錘車と硯との有機的関係が認められることから、文字使用即ち、交易などに関係する事務処理、紡織に関連する地方豪族層の経済活動に、間接的ではあるが、再利用の灯火具を使用した可能性を指摘できる。

モノの再利用を中心にしてみると、集落という消費地において、新たに土器を素材として必要な道具の生産を行い、再資源化する古代の人々の積極的な適応戦略が読み取れる。再利用という新たなライフヒストリーのサブシステムの中に組み込まれ、供膳具から新たな道具としての価値によって、灯火具という用途で利用される局面へ移行していることがわかる。再利用はモノと人との関係について、重要な情報を導く糸口となることが指摘できる。

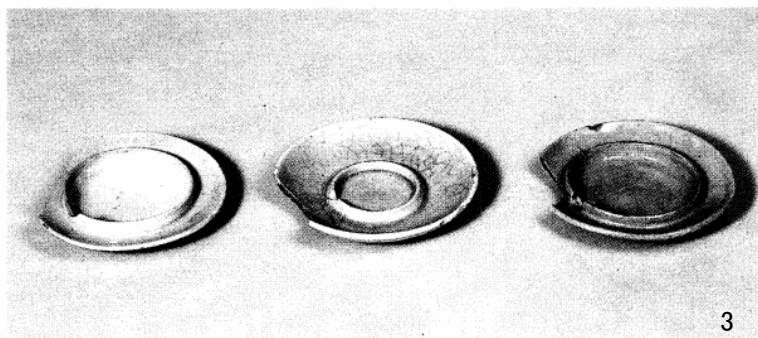


1: 結灯台



2: かきたての使い方

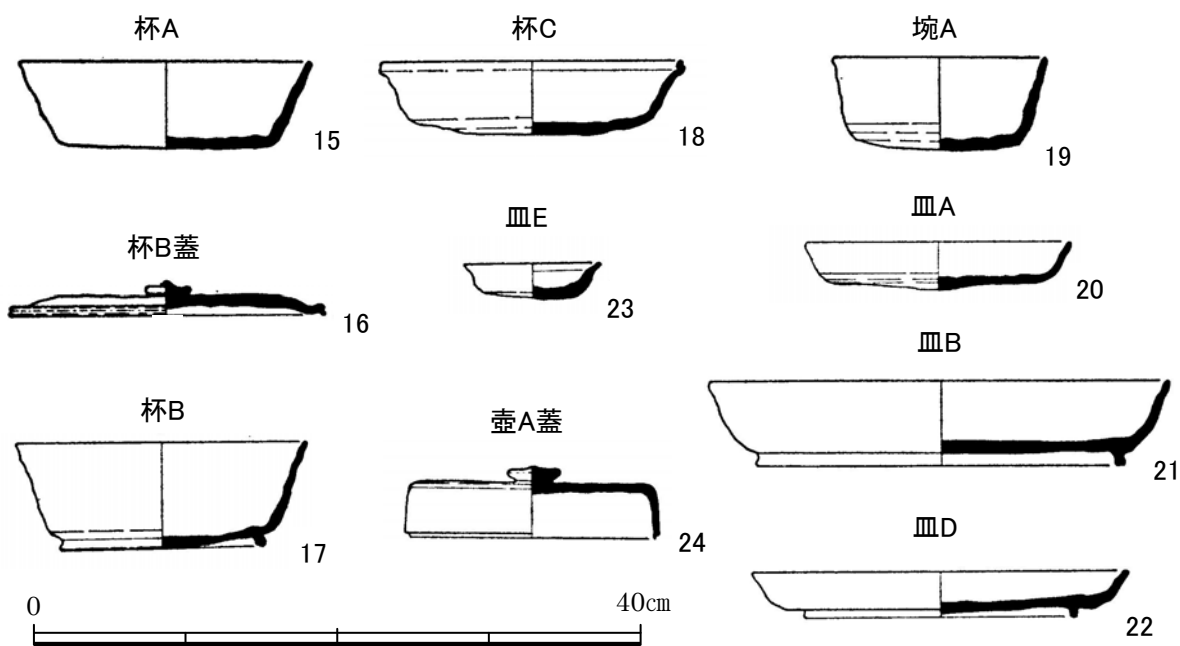
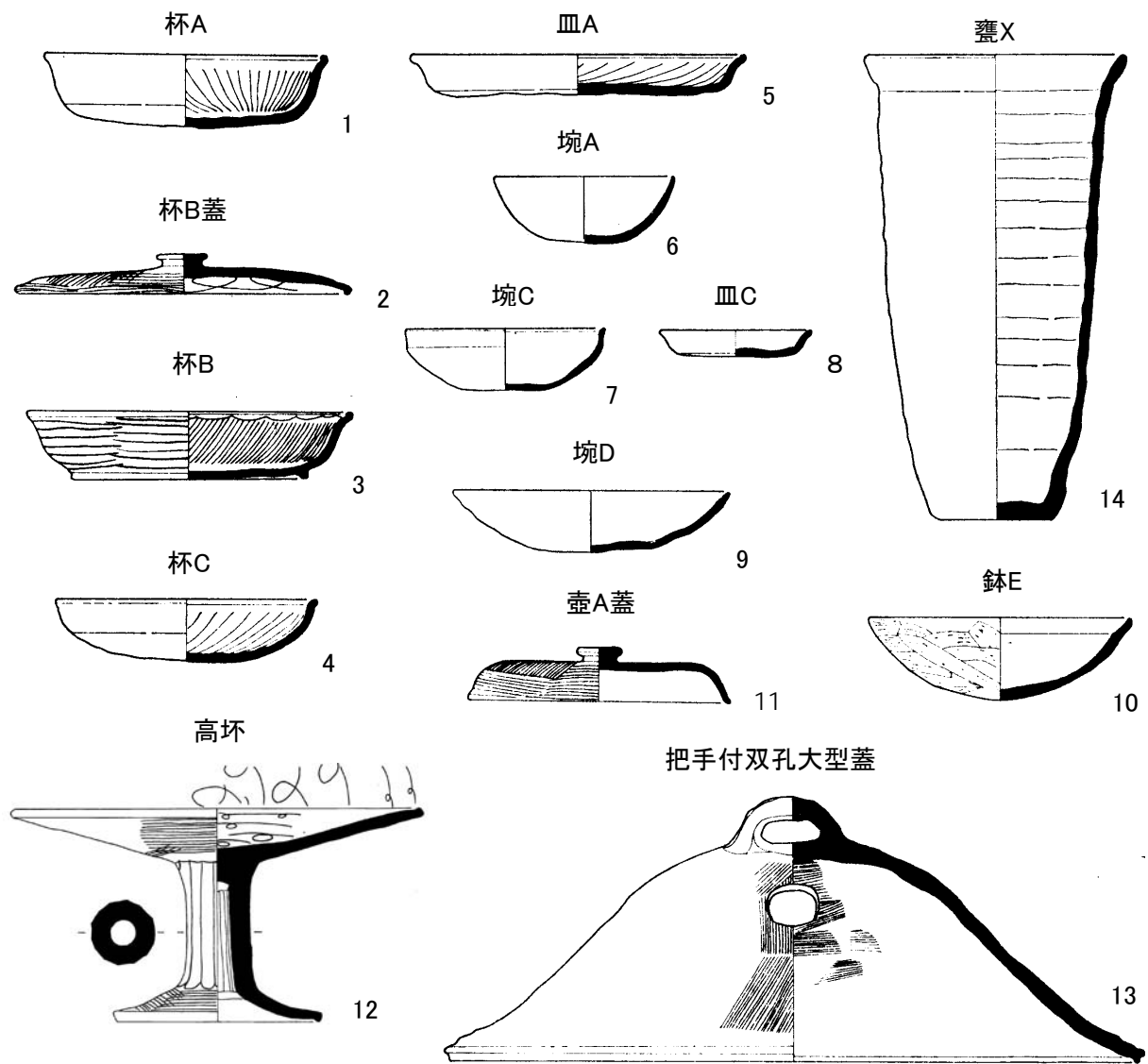
灯芯押さえとして、また、炎の大きさを調節する時(灯芯をかきたてる時)に使用する



3: 近世灯火具下皿「受け」がある

第1図 灯火具とその使い方

1・3:[江戸東京博物館1995] 2:[(財)日本のあかり博物館1997]



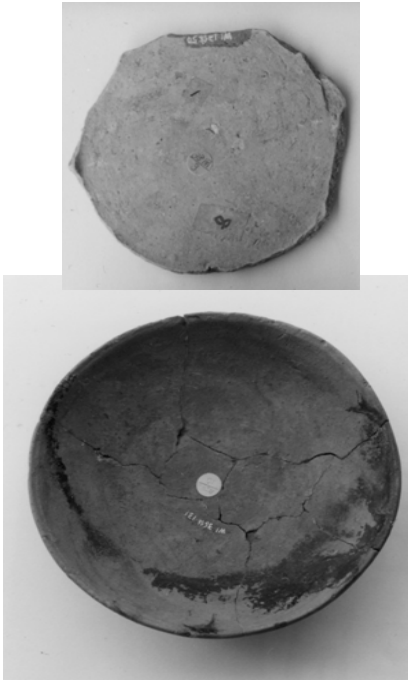
第2図 平城宮の灯火具或いは硯に再利用された土器の器種構成(上段土師器・下段須恵器)

表1 平城京の灯火具

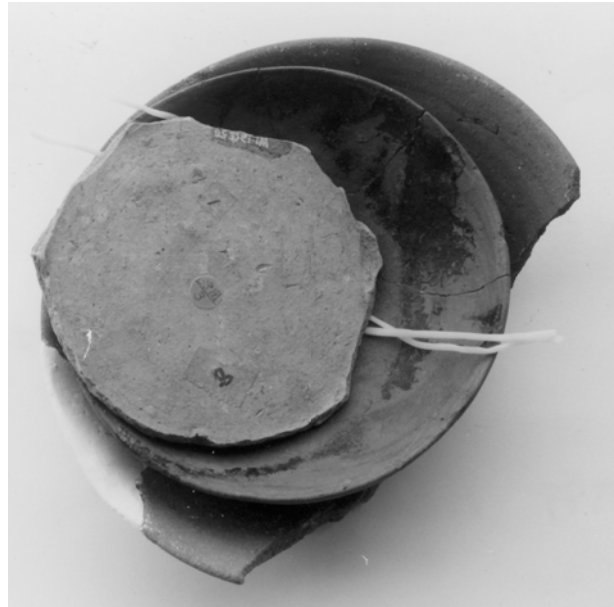
遺構	土器	器種	灯火具	出土点数	口径	器高
SK820 (平城Ⅲ)	土師器	坏AⅡ	3	27	19.9	4
		坏AⅢ	4	32	17.2	3.4
		坏CⅠ	8	75	17.8	3.3
		皿AⅠ	1	133	22.5	3
		皿AⅡ	1	21	18.3	2.8
		皿C	1	2	11.1	2.5
		碗C	4	20	13.2	4
	須恵器	坏AⅠ	1	-	19.1~19.5	3.9~5.3
		坏AⅡ	2	-	17.0~17.2	3.4~4.7
		坏AⅢ	11	-	14.1~15.8	3.6~4.3
		坏AⅣ	4	-	11.5	3.4
		坏BⅠ	1	18	19.9	6
		坏BⅣ	1	-	11.7	4
		坏C	2	2	-	-
		合計	44	-	-	-
SK2101 (平城Ⅱ)	土師器	坏AⅠ	1	-	-	-
		坏AⅡ	1	-	-	-
		坏CⅠ	1	-	-	-
		皿AⅡ	1	-	-	-
		碗AⅡ	1	-	-	-
	須恵器	不明	1	-	-	-
		坏AⅢ	1	-	-	-
		坏A	3	-	-	-
		合計	10	-	-	-
SK2113 (平城Ⅴ)	土師器	坏AⅠ	1	31	-	-
		皿AⅠ	2	30	21.8	3.0 (4点平均値)
		皿AⅡ	10	95	17.0	3.0 (5点平均値)
		碗AⅠ	27	83	13.1	4.2 (2点平均値)
		碗C	5	13	13.0	4.4 (2点平均値)
		合計	45	252	-	-
SK870 (平城Ⅴ)	土師器	坏AⅠ	1	-	-	-
		皿AⅡ	1	-	-	-
		碗AⅠ	4	-	-	-
		不明	4	-	-	-
	須恵器	坏BⅡ	1	-	-	-
		坏C	1	-	-	-
		合計	12	-	-	-
SE2128 (平城Ⅴ)	土師器	坏AⅠ	1	-	-	-
		合計	1	-	-	-

*口径と器高は遺物の記述による

『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(1973年)表10の一部を加筆修正



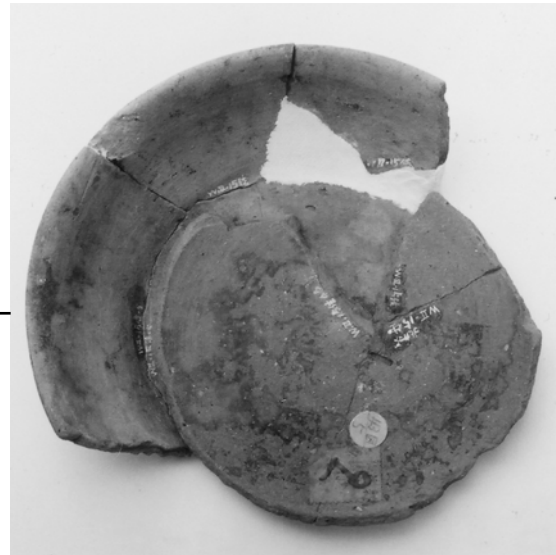
1: Aタイプ・完形(土師器)



2: 完形、Aタイプ、D-1タイプの組合せ



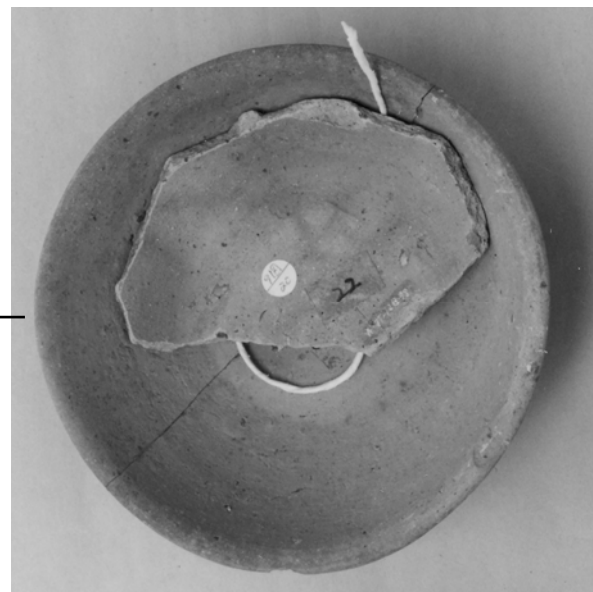
3: D-1・SA-2タイプ



4: D-1、SA-2タイプの組合せ



5: SCタイプ・完形



6: 完形、SCタイプの組合せ

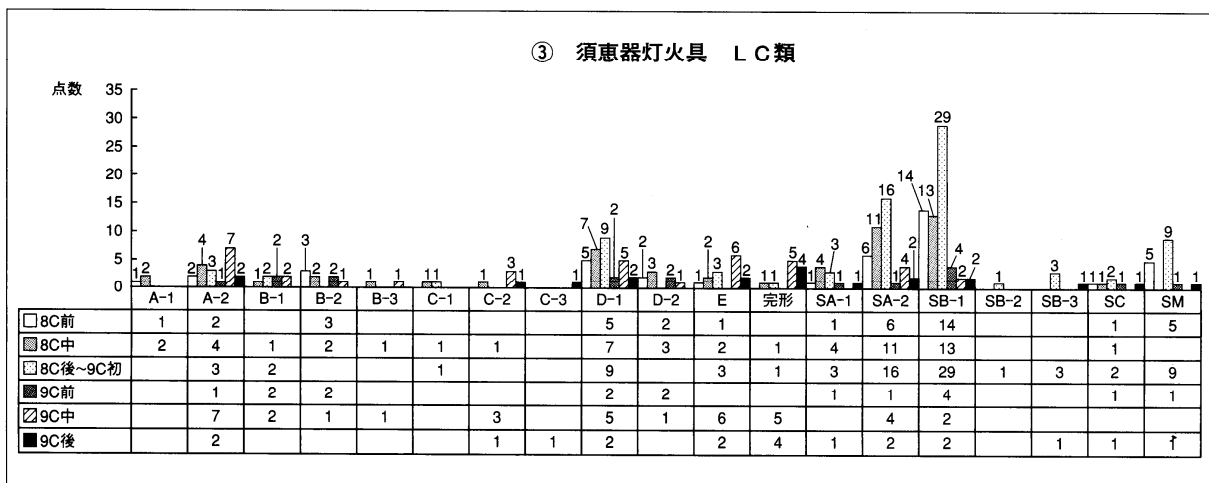
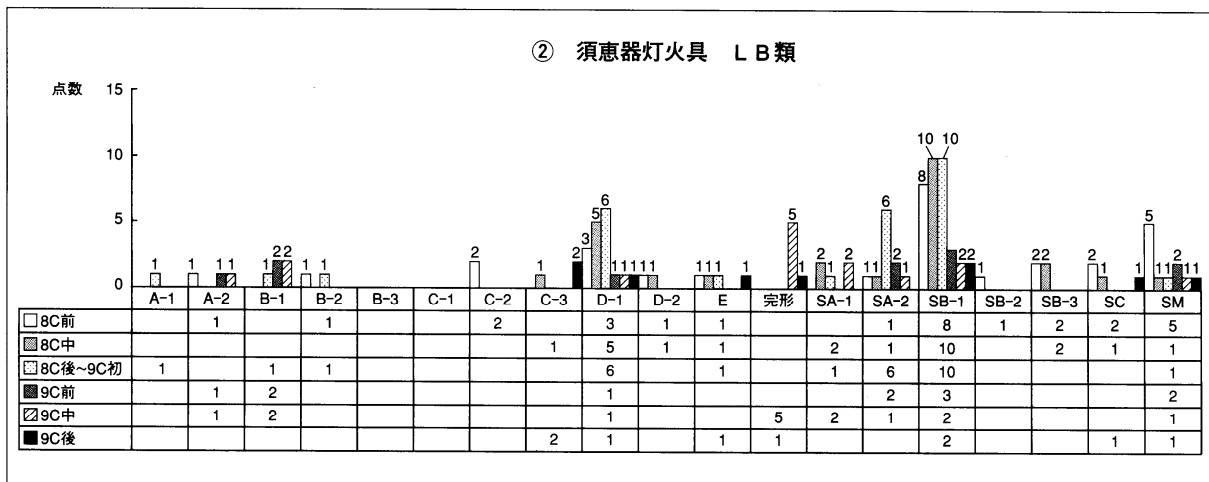
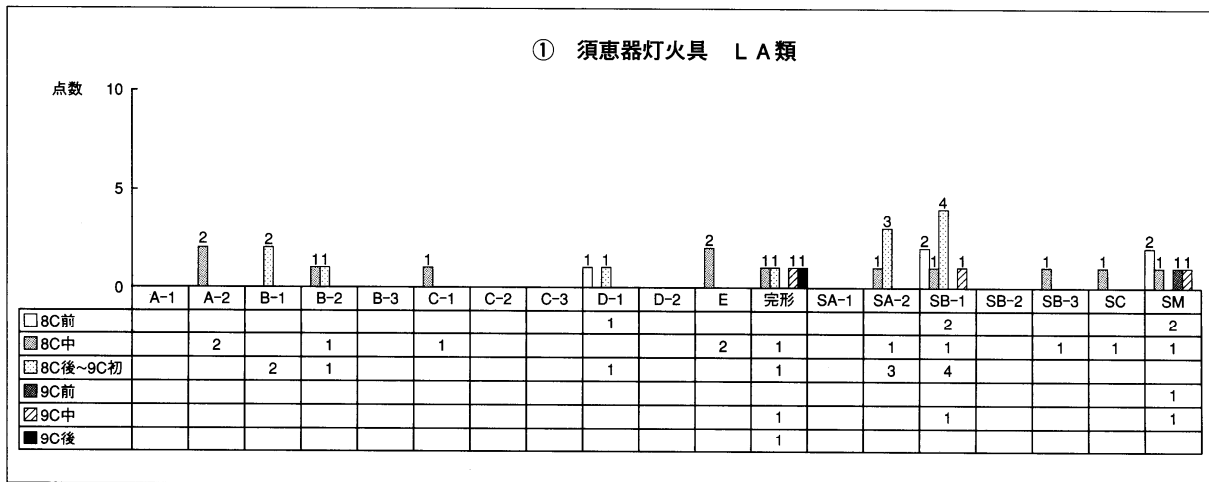
第3図 灯火具の各種組合せモデル

表 2 若葉台遺跡 須恵器の形状タイプと灯火具点数

時期	8 C 前葉		8 C 中葉		8 C 後葉～9 C 初頭		9 C 前葉		9 C 中葉		9 C 後葉		計		灯火具 再利用 率%
形状タイプ	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	
A-1	2	1	4	2	3	1	2						11	4	36
A-2	12	3	13	6	26	3	11	2	17	8	13	2	92	24	26
B-1			5	1	8	5	5	4	7	4			25	14	56
B-2	5	4	7	3	7	2	5	2	3	1	2		29	12	41
B-3			1	1	9		1		4	1	2		17	2	12
C-1			3	2	1	1			1				5	3	60
C-2	2	2	4	1	2		2		3	3	1	1	14	7	50
C-3			1	1	4				1		3	3	9	4	44
D-1	21	9	33	12	28	16	6	3	10	6	8	3	106	49	46
D-2	9	3	8	4	9		4	2	1	1	3		34	10	29
E	10	2	14	5	11	4	3		11	6	4	3	53	20	38
完形	2		3	2	6	2			13	11	11	6	35	21	60
SA-1	4	1	13	6	16	4	3	1	3	2	3	1	42	15	36
SA-2	19	7	27	13	89	25	21	3	17	5	16	2	189	55	29
SB-1	61	24	63	24	80	43	16	7	25	5	15	4	260	107	41
SB-2	1	1			4	1	1						6	2	33
SB-3	5	2	3	3	13	3	1		1		2	1	25	9	36
SC	4	3	5	3	15	2	7	1	4		9	2	44	11	25
SM	14	12	4	2	21	10	5	4	3	2	4	2	51	32	63
計	171	74	211	91	352	122	93	29	124	55	96	30	1047	401	38

表 3 若葉台遺跡 土師器の形状タイプと灯火具点数

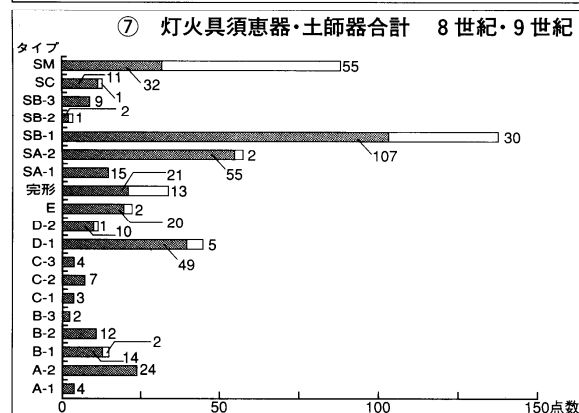
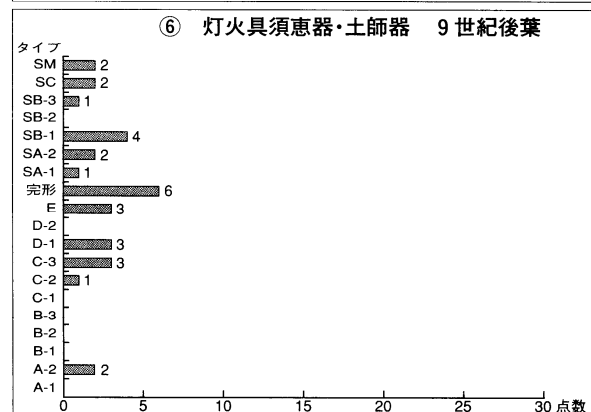
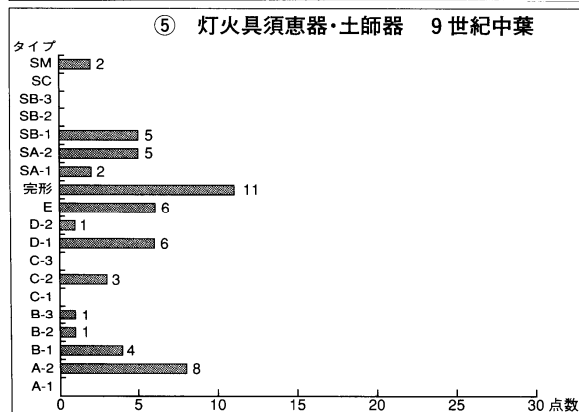
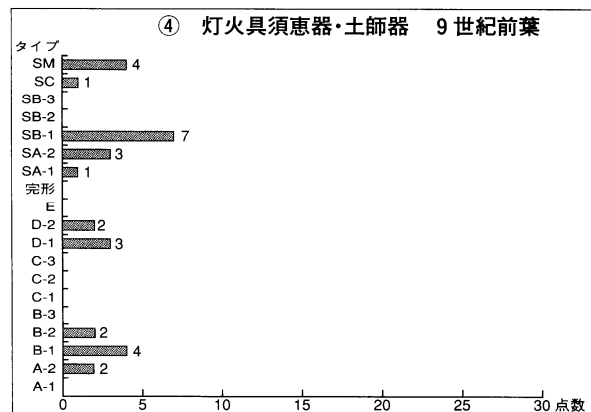
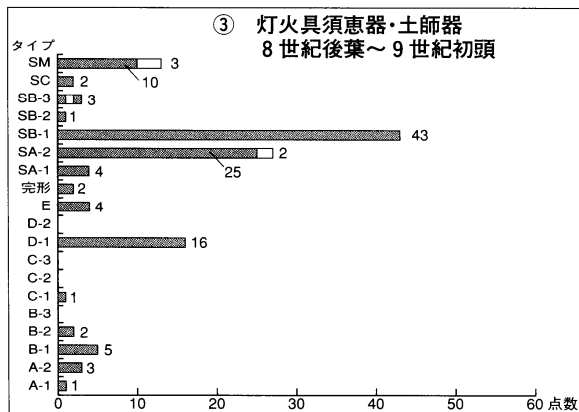
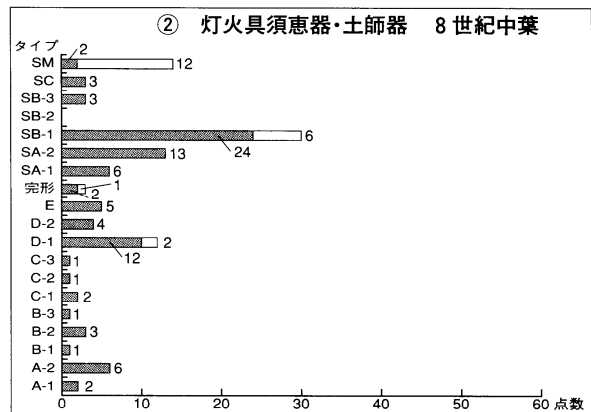
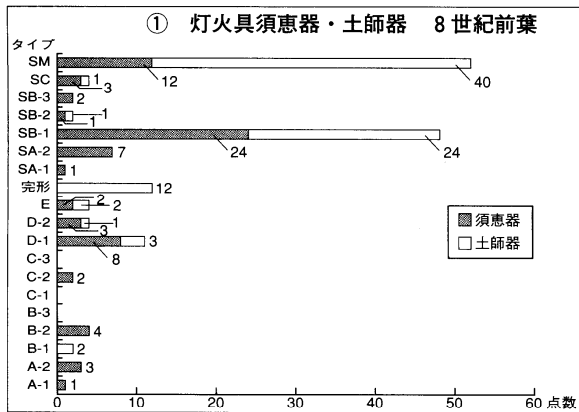
時期	8 C 前葉		8 C 中葉		8 C 後葉～9 C 初頭		9 C 前葉		9 C 中葉		9 C 後葉		計		灯火具 再利用 率%
形状タイプ	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	
A-1															
A-2															
B-1	3	2											3	2	67
B-2															
B-3															
C-1															
C-2															
C-3															
D-1	5	3	3	2									8	5	63
D-2	1	1											1	1	100
E	2	2											2	2	100
完形	14	12	1	1									15	13	87
SA-1															
SA-2	1				3	2							4	2	50
SB-1	26	24	5	6	3								34	30	88
SB-2	1	1											1	1	100
SB-3															
SC	2	1											2	1	50
SM	52	40	15	12	3	3							70	55	79
計	107	86	24	21	9	5							140	112	80



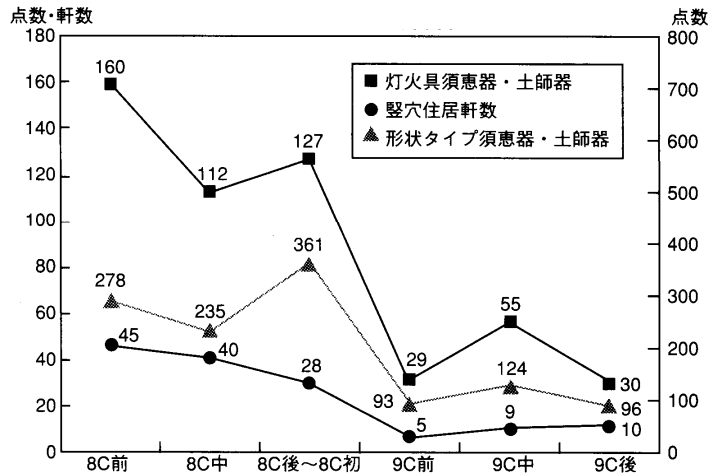
第4図 若葉台遺跡 須恵器の形状タイプと灯火具の点数

表 4 若葉台遺跡 土師器灯火具付着物(LA・LB・LC類)

種類	時期	A-1	A-2	B-1	B-2	B-3	C-1	C-2	C-3	D-1	D-2	E	完形	SA-1	SA-2	SB-1	SB-2	SB-3	SC	SM	合計
LA	8C 前									2			8			9	1			12	32
	8C 中												1			3				2	6
	8C 後~9C 初														1					3	4
	計									2			9		1	12	1			17	42
LB	8C 前										1	1	1			6				12	21
	8C 中									1						1				4	6
	8C 後~9C 初																				0
	計									1	1	1	1			7				16	27
LC	8C 前			2						1		1	3			9			1	16	33
	8C 中									1						2				6	9
	8C 後~9C 初														1						1
	計			2						2		1	3		1	11			1	22	43
	合計			2						5	1	2	13		2	30	1		1	55	112



第5図 若葉台遺跡 須恵器・土師器杯の灯火具時期別点数



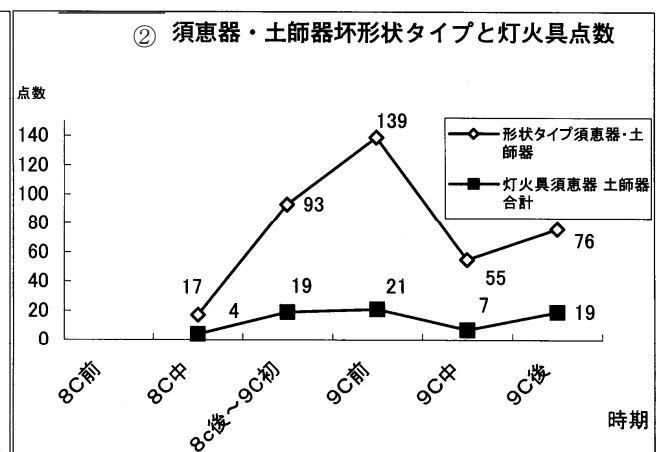
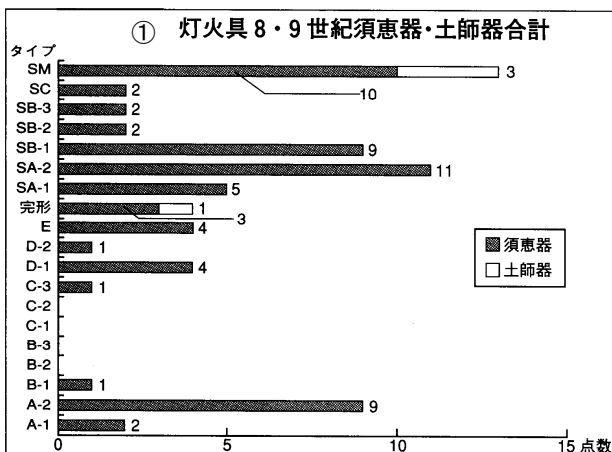
第6図 若葉台遺跡 灯火具、形状タイプ杯類点数と竪穴住居軒数

表 5 住吉中学校遺跡 須恵器 形状タイプと灯火具点数

時期	8 C 中葉		8 C 後葉～9 C 初葉		9 C 前葉		9 C 中葉		9 C 後葉		計		灯火具 再利用 率%
形状タイプ	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	
A-1	1		3	2	4		4				12	2	17
A-2	1	1	11	3	16	1	6	1	8	3	42	9	21
B-1			2		6	1			3		11	1	10
B-2									2		2		0
B-3			1						1		2		0
C-1					1						1		0
C-2			2						1		3		0
C-3	1				1		3	1			5	1	20
D-1	2	1	2		6	2	2	1	2		14	4	29
D-2			2		5	1			4		11	1	1
E	2	1	2	1	6		2	1	1	1	13	4	31
完形					5	2	1		1	1	7	3	29
SA-1			8	4	6	1	1				15	5	33
SA-2			20	2	22	2	5	1	10	6	57	11	19
SB-1	3		16	1	31	6	8	1	13	1	71	9	13
SB-2			4		3		2		4	2	13	2	15
SB-3			3	1	4	1	2				9	2	22
SC	3		6		10		2		6	2	27	2	10
SM	1		6	2	12	4	17	1	20	3	56	10	18
計	14	3	88	16	138	21	55	7	76	19	371	66	18

表 6 住吉中学校遺跡 土師器 形状タイプと灯火具点数

時期	8 C 中葉		8 C 後葉～9 C 初頭		計		灯火具 再利用 率%
形状タイプ	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	
A-1							
A-2							
B-1							
B-2							
B-3							
C-1							
C-2							
C-3							
D-1							
D-2							
E							
完形			1	1	1	1	100
SA-1							
SA-2			2		2		0
SB-1							
SB-2							
SB-3							
SC							
SM	3	1	3	2	6	3	50
計	3	1	6	3	9	4	44



第7図 住吉中学校遺跡 須恵器・土師器杯類の形状タイプ・灯火具時期別点数

表 7 霞ヶ関遺跡群及び関連遺跡※須恵器 形状タイプと灯火具点数

時期	7C末葉~8C初頭		8C前葉		8C中葉		8C末葉~9C初頭		9C前葉		9C中葉		合計	
形状タイプ	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具
A-1					1	1							1	1
A-2					2	1			2				4	1
B-1			1	1	1		1						3	1
B-2			1	1									1	1
B-3														
C-1														
C-2							1						1	
C-3														
D-1					10	1	3						13	1
D-2			1		1	1							2	1
E					2	1			1	1			3	2
完形			1	1					2	2	1	1	4	4
SA-1					1								1	
SA-2	1	1					2						3	1
SB-1	1	1	2	2	4	2	4	1	3	1			14	7
SB-2														
SB-3							1						1	
SC									1				1	
SM			3	2									3	2
計	2	2	9	7	22	7	12	1	9	4	1	1	55	22

※天王遺跡15次、山王久保遺跡5次、霞ヶ関遺跡7~9次・17次、東下河原遺跡2次、古海道遺跡2次、会下遺跡5次、弁天西遺跡12次、仲町遺跡1次を含む

表 8 氷川神社東遺跡 ロクロ酸化焰焼成・還元焰焼成 形状タイプと灯火具点数

時期	9C後葉		10C前半		10C後半		11C前半		合計	
形状タイプ	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具	タイプ	灯火具
A-1										
A-2	2	2							2	2
B-1	2	2							2	2
B-2	1	1							1	1
C-2			1	1					1	1
D-1	2	2	6	5	1	1	2	1	11	9
D-2			2	2	1	1	1	1	4	4
E	5	5					1	1	6	6
完形	3	3	1	1					4	4
SA-1										
SA-2	2	2							2	2
SB-1	9	9	1	1					10	10
SB-2			1	1					1	1
SB-3	1								1	
SC	1								1	
SM	2	2			2	2			4	4
計	30	28	12	11	4	4	4	3	50	46

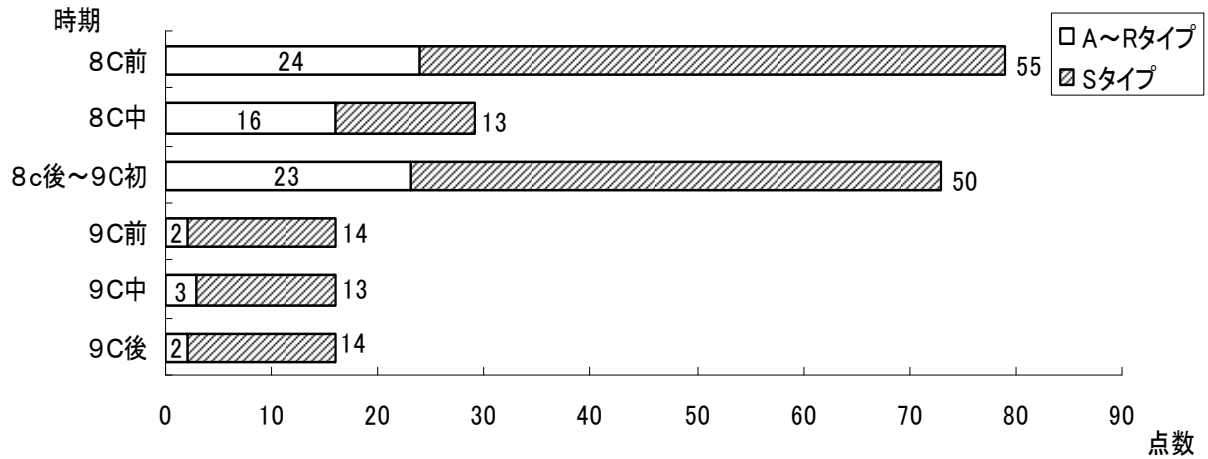
※9世紀後葉のSB-1タイプ2点、Eタイプ1点は、朱墨が付着し、灯火具としても再利用されている。10世紀前半の完形1点も、朱墨が付着し、さらに灯火具として再利用されている。



+



第8図 氷川神社東遺跡 灯火具としての再利用の組合せ
(A-2タイプ+完形・10号住居跡)



第9図 若葉台遺跡 須恵器蓋の形状と時期別点数

表9 若葉台遺跡 須恵器の蓋タイプと灯火具・硯点数

時期	8C前葉			8C中葉			8C後~9C初			計		
形態タイプ	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯
A	6		* 1	5	1	1	5	2		16	3	2
B	9		1	4	2		11		1	24	2	2
C	6	2		6	2		3		1	15	4	1
D	2	# 1					2	2		4	3	
完形	1			1	1		2			4	1	
SA	19	4	2	4			15	2		38	6	2
K	12	3	1	3			11			26	3	1
SM	24	1	1	6			24	2		54	3	1
計	79	11	6	29	6	1	73	8	2	181	25	9

時期	9C前葉			9C中葉			9C後葉			計			合計		
形態タイプ	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯
A													16	3	2
B	1	1		1	1					2	2		26	4	2
C				1			1			2	1		17	4	1
D				1						1			5	3	
完形							1			1			5	1	
SA	2	1		4	2		2			8	3		46	9	2
K	1			2			1			4			30	3	1
SM	11	1		7	1		11			29	2		83	5	1
計	15	3		16	4		16			47	8		228	32	9

*1は硯として再利用後、更に環状鈕の中央が穿孔されている

1は短頸壺の蓋

表10 住吉中学校遺跡の蓋タイプと灯火具・硯点数

・灯火具及び硯は、タイプ別に含まれている

時期	8C中葉			8C後～9C初			9C前葉			9C中葉			9C後葉			計		
形態タイプ	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯
A	2									1						3		
B				4			3	1		1						8	1	
C				4		1	2						4		1	10		2
D							1			1	1					2	1	
完形																		
SA				4			4		1	1			1			10		1
K				9						1			1			11		
SM	1			4			6	1		3			3			17	1	
計	3			25		1	16	2	1	8	1		9		1	61	3	3

表11 霞ヶ関遺跡群の蓋タイプと灯火具・硯点数

時期	7C末～8C初			8C前葉			計		
形態タイプ	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯	タイプ	灯火具	硯
A									
B	5	2		2		1	7	2	1
C	2	1		3			5	1	
D				1		1			1
完形	4	2		1	1		5	3	
SA									
K									
SM									
計	11	5		7	1	2	17	6	2

・灯火具及び硯はタイプ別に含まれている

・霞ヶ関遺跡群には霞ヶ関遺跡、天王遺跡、山王久保遺跡、
新田屋敷遺跡が含まれている

第4章 硯としての土器の再利用

古代の硯は、律令制の形成過程において、「刀筆の吏」ともいわれる官人と文書行政を象徴する遺物の一つとして研究が行われている。この時期の硯は、実用的な文房具としての役割に加え、国産品か三彩、白磁を含む輸入品かという、品質と種類や形状とその大きさによって、官人の階層差を表すものとしての役割もあることが、多くの研究によって既に指摘されている。

しかし、硯の研究は円面硯や風字硯などの定形硯が主たるものであり、実際に文書行政を行う大多数の下級官人層が使用したと考えられる土器再利用の硯（転用硯）を含む研究は、一部を除きほとんど行われていない。従来の定形硯のみの研究では、硯の使用状況の実態、及び律令制文書行政の全体像を考察することは困難といえる。

本章は、関心がほとんど向けられていない、供膳具や甕などを硯として再利用していた再利用硯の実態に関する分析を試みる。古代における資源の再利用に関して、土器の再利用からライフヒストリーという視点をもとに、主な用途の一つである硯に着目する。

地方における律令制の整備状況と文書行政の実態を把握するため、本項では古代武蔵国において定形硯だけでなく、再利用の硯を含めた硯の数量的な動態傾向と特徴を把握し、硯としての再利用に関して考察することを第1の目的としている。

まず、古代武蔵国の消費地として、武蔵国府関連遺跡をはじめとする各遺跡の陶硯及び再利用の硯に関して出土状況を把握してゆく。これらの遺跡の硯と武蔵国各遺跡の硯の動態過程を比較することにより、第2の目的として、硯からみた地方官衙の性格が浮かび上がると考えている。第3に古代の武蔵国においては、定形硯のみではなく、再利用の硯の意義を提示し、二つのタイプの硯に関する考察を通して、律令制社会形成過程に関する研究の一助としたい。

第1節 硯の研究史と問題点の整理

再利用の硯が、日本の陶硯のなかでどのような位置づけであるのかを把握して理解するために、日本の陶硯の研究史を概観する。

第1項 硯の学説

日本の硯の研究は、基本的に定形硯の研究史である。内藤政恒氏による研究〔内藤 1944〕を基礎にして、檜崎彰一氏〔檜崎 1981〕をはじめ、石井則孝氏〔石井 1980〕、山中敏史氏〔山中 1983〕などの研究がある。檜崎氏は機能面を重視する分類、山中氏は平面形態に基づく分類を行った。

大まかな分類としては、墨を磨る陸部と墨を溜める海部をあわせて硯面（部）の形状により、硯面が円形の円面硯、「風」という文字の形状から風字硯（第1図1）及び、鳥などの動物を現した形象硯、須恵器の坏身や蓋及び、甕の胴部破片を再利用した「再利用硯」がある。従来は転用硯と呼称されていたが、本稿では再利用硯と呼び変える。

円面硯は、脚部の形状や透かしの形状によって細分される。獣の脚部を現した獣脚硯、羊の蹄の形状を現した蹄脚硯（第5図1）、脚部に長方形の透かしが施された圈足硯（第

7 図 1) などである。こうした形状タイプの差異は、官人層の身分表徴と考えることができる。つまり、7 世紀に輸入された三彩や緑釉の獣脚硯及び白磁の蹄脚硯、また、国内でも生産が開始された蹄脚硯を最高ランクとする。そして、長方形の透かしをもつ圈足硯、さらに下級官人用の再利用硯という序列があったとみられる〔西口 2003〕。即ち、硯は単に文房具としての実用的な側面だけではなく、律令制において官人層の身分表徴としての役割があったといえる。

日本で出土する硯は、中国や韓半島からの輸入品である三彩・緑釉獣脚硯などと国内で生産された円面硯に大別できる。7 世紀初頭から生産が始まる日本の硯の製作技法は、基本的には中国から韓半島に伝わり、韓半島で変化して日本に伝えられたと考えられている〔西口 2003〕。中国及び韓半島と日本の陶硯については、系譜を含めて研究されている〔吉田恵二 1985〕。韓半島と日本との関係では、特に 7 世紀代においては百済の影響が強いという〔巽 2004〕。日本の 7 世紀末から 8 世紀前半代に多くみることができる初期圈足円面硯の脚部の透かしと、三国時代の陶質土器が類似するという指摘もある〔吉田恵二 1985〕。

中国の漢代には、文書行政は用語や書式に至るまでシステムとして確立し、日本には韓半島経由で確実に 7 世紀にはもたらされ、その導入には渡来人の果たした役割が大きいものであったと考えられている〔平川 2005〕。

日本の陶硯と関係の深い韓半島において硯の研究は、近年、山本孝文氏〔山本 2003〕や洪濬植氏〔洪 2006〕により進展している。しかし、定形硯が主な対象であり、再利用硯については、わずかに存在の可能性について触れられている程度である¹⁾。まず、韓半島における硯の研究について、簡単に整理したい。百済に関しては主に山本氏、新羅については洪濬植氏の研究を参考にする。

韓半島において最古の筆は、紀元前 1 世紀の昌原茶戸里 1 号墳から発見されている〔李健茂 1992〕。この頃、楽浪地域においては、中国後漢代とみられる円形板硯が石巖里 9 号墳（第 2 図 1）と、長方形板硯が石巖里 6 号墳、同 205 号墳、養洞里 3・5 号墳から出土している。南井里 116 号墳（彩篋塚）からは、漆塗りの硯台と長方形板硯（第 2 図 2）が発見されている。また、貞柏里 127 号墳（王光墓）からは、筆の一部も検出されている〔（株）出版科学総合研究所 1985、高久 1995、山本 2006〕。

百済地域の漢城期にあたるソウル夢村土城からは、中国南朝晋の輸入品とみられる円形硯（第 2 図 3）が出土している。また、6 世紀前葉の中国南朝系譜の無蓋三足硯（第 2 図 4）が公山城で検出され、泗沘期（538～660 年）では硯の出土点数が増加し、本格的に文書行政が導入されたことがうかがえる。硯は扶餘官北里推定王宮址、扶蘇山城（第 2 図 5・9）、錦城山朝王寺（第 2 図 6）〔山本 2003〕、陵寺（第 2 図 7）〔扶餘国立博物館 2000〕、泗沘軍守里地点（第 2 図 8）〔忠南大学校百済研究所他 2003〕、益山弥勒寺など、王宮関係の政治的に重要な施設から出土している。石製の硯〔洪思俊 1961〕もあるが、ごくわずかで、基本的には陶製の円面硯であり、脚部の形状による分類が行われ、水滴硯（第 2 図 5）、蹄脚硯（陽刻蓮弁文も含む・第 2 図 6）、環脚硯（第 2 図 7）、日本に多い圈足硯

1) 再利用硯は百済漢城期には既に多く使用されたと考えられているが、具体的に報告されていない〔山本 2003〕。

（第2図8）、脚のない無脚硯（第2図9）である。通常、複数の種類の硯が一緒に検出されていることから、時期的変遷のみではなく、官位の区別による使用も推定されている。また、わずかであるが中国からの搬入品や、百済で製作された緑釉の硯も認められている〔山本 2006〕。

新羅地域では6世紀以降に木簡は出土しているが、硯は確認されず、7世紀に入ってから検出されるようになる。7世紀後葉の統一新羅以降に、硯の出土点数が増加する。しかし、慶州の新羅王京遺跡（第2図10・14・15）、皇吾洞遺跡（第2図11）、王宮関係施設である雁鴨池（第2図12・13・16）、咸南二聖山城、利川雪峰山城など一部の山城や寺址からの出土であり、特に新羅の都であった慶州に集中している。基本的には陶製の円面硯と石製が大部分を占める長方形系の風字硯である。長方形系の風字硯は、統一新羅以降で、円面硯より出現時期は遅いと推定されている。円面硯は環脚硯（第2図12・13）、多足硯（獣脚、鬼面文を含む・第2図11・14・15）、無脚硯、輪脚硯（鬼面文の脚下方に補強のため帯状の粘土をまわす・第2図16）で、新羅では、わずかに中空硯が認められる。このほかに慶州雁鴨池からは、緑釉の多足硯が出土している²⁾。硯には階層性が認められ、輪脚硯と多足硯の一部が慶州新羅王京に集中していることから、こうした硯は高級官吏用とみられている〔洪漣植 2006〕。

中国では漢代から隋唐代にまで、硯が墳墓の副葬品として出土している〔吉田恵二 1992〕が、済や統一新羅の硯は墳墓に副葬されていない。韓半島での硯の受容の特徴であり、百済及び新羅の硯の年代については、同一層で供伴する遺物を基準に年代を決定しているが、同型、同類の硯が中国あるいは日本で出土していることから、中国と日本との比較検討を通して、年代を推定している。また、日本と同様に百済・新羅でも完形の硯の出土はわずかであり、大部分は破片での出土であること、百済及び新羅土器の体系的な編年が確立していないことから、硯の相対的な序列を決めることをさらに難しくしている。

しかし、百済や新羅の硯が日本の硯の生産に与えた影響は大きいことは事実といえ、中国のみならず、韓半島における硯の研究の進展に注目する必要がある。

大阪府堺市陶邑窯址群や京都府宇治市隼上り窯跡〔杉本 1987〕においては、既に韓半島で完成された技法で、初期円面硯が製作されており、韓半島からの渡来系工人によるものと推定されている。日本の硯の初現に関しては、陶邑窯址群 TK 43 号窯出土の蹄脚硯の製作年代が問題になっている。TK43 号窯の須恵器は、588 年造営の飛鳥寺下層出土土器と類似することから、6 世紀後半の年代とされている。しかし、中国において蹄脚硯出現以前の年代であり、また、この蹄脚硯自体が7世紀後半から末葉の飛鳥地域出土のものと類似することから、土器との時期差がある。西口壽生氏はこれらを一括遺物とすること自体が問題であり、検討に値しないとし、国産最古であるかどうかは保留するとしている〔西口 2003〕。

2) 雁鴨池〔文化広報部文化財管理局 1978〕からは、緑釉の硯のほかに、方形系の漆器製の硯が報告されているが、山本氏は百済や日本の同時期の硯に類例がないことから硯としての機能に疑問を呈している〔山本 2006〕。筆者も墨を磨ること、水を使用するという点からみて、硯面が漆器製の硯の可能性は低いと考えている。

古代日本における陶硯の生産を概観すると、确实なところでは、7世紀前半に大陸系統の円面硯などの生産が、畿内の宇治市隼上窯、大阪陶邑古窯址群で生産されたことをはじめ、7世紀後半には東海地域の猿投窯、美濃窯、湖西窯などの古窯で生産されたといえる。東国では7世紀後葉に円面硯の生産が始まり、その後、8世紀後葉から9世紀前葉には風字硯の生産が行われ、中世には陶硯から石製の硯が主流となっていく。その一方、古代では始めから硯として生産されたものではない、須恵器の坏や蓋などが硯としての用途に使用された再利用硯の研究は、わずかである。本稿で取り扱う再利用の硯の重要性が指摘された研究は、端緒についたばかりといえる。

第2項 定形硯と再利用硯研究の問題点

1 定形硯の問題点

本稿では、特に断りのない限り、「硯」は陶硯のことを示している。「定形硯」として円面硯、風字硯を一括して呼称する。

定形硯の編年上における困難な問題点について、予め3点を指摘しておきたい。まず、硯の出土状況に関して、後述する旧武蔵国の各遺跡から出土する各定形硯の残存状況を見ると、生産地である窯跡を除き、完形の硯はほとんど皆無である。わずかな脚部の小破片をもとに復元しているものが多い。硯面とわずかに残る堤の破片というものも多くみられる。また、出土状況は、溝、包含層、あるいはグリッドなど、遺構が特定できないものも比較的多い。堅穴住居跡出土の硯は、その大多数が覆土中の出土である。こうした出土状況は、硯に限らず多くの土器についても同様であるが、特に定形硯においては顕著である。

次に、定形硯は脚の一部が破損した場合でも、硯面を活かすために敢えて残った脚部を打ち欠き、硯として再使用（reuse）した可能性のあるものも認められる。このように円面硯などの定形硯は、そのまま廃棄されず、使用者が変わったうえで再使用された可能性がある。定形硯は古代の人々にとっても、特別で貴重な品であった可能性が高い。こうしたことから、定形硯の編年に関しては、生産年代、使用年代及び耐用年代、特に廃棄年代などに配慮する必要があるといえる。定形硯の再利用を含めた、ライフヒストリーからの分析が必要である。

関東地域の定形硯は、従来の手法により集成され時期案が示されている〔田中 2007〕。本稿でもその提示した時期を参考にした部分もあるが、異なる部分もある。定形硯の編年は、上述した多様な困難さがあり、今後資料の増加によって個々の硯について、時期的な位置づけが揺れる可能性は、大いにある状況である。

2 再利用硯の問題点と整理

はじめに「転用硯」は、「再利用の硯」あるいは、同義の「再利用硯」に含めるものとする³⁾。また、一部の墨を取り分けたパレットと考えられるものも含んでいる。再利用の硯で問題になることは、再利用硯を認識するための基準である。従来、観察のポイントと

3) 再利用（recycle）、再使用（reuse）の概念規定に関しては、既に第2章1節2項において行っ

しては、①使用痕として墨が付着すること、②墨を磨った痕跡としての磨耗痕が認められること。次に③再利用硯の割れ口に、削りなどの二次加工が施されているかどうかの3点であった。

また、土器再利用の硯については、須恵器の坏身及び蓋を再利用したものと、甕の破片を再利用したものに大別できる。

須恵器の坏身及び蓋を再利用したものは、裏返した蓋の内面を硯面とするため、平底の坏 A（第3章第2図15）を組み合わせて使用方法を石井則孝氏が推定している（第1図2）〔石井1980〕。蓋を硯として再利用するためには、いかに安定させるかが鍵となる。その一つの機能的な手法といえる。また、蓋の内面を硯面とする（第1図3）だけでなく、坏や埴の口縁部を打ち欠いて坏身内面を硯面とするもの、高台付きの坏の底部内面や外面、あるいは反転させて外面を硯面とするタイプ（第1図4）などがある。

以上に加え、筆者が再利用という視点から実見した坂戸市若葉台遺跡出土の土器群〔坂野千登勢2005〕などから、多くの再利用硯を観察、認識するための指標を得ることができた。

若葉台遺跡は、8世紀前葉から9世紀末の埼玉県坂戸市と鶴ヶ島市の両市に広がる大規模な遺跡である（第3章2節）。坂戸市の発掘調査による土師器・須恵器坏類、須恵器蓋、須恵器甕について、再利用という視点から観察した。この観察結果から硯としての再利用に関する項目を大略まとめる。

まず、硯としての再利用の器種として、供膳具である須恵器坏・埴の蓋、須恵器の坏・埴類、高台坏、須恵器甕が認められること。また、再利用硯の観察において、従来の墨の付着、磨耗などに加え、次の通り一定の共通する傾向が指摘できる。

①打ち欠きや削りなど、二次加工が土器の一部に行われた場合が多く認められ、左右対称の残存形状となる場合が多い。

②胎土が緻密で、硬質のものを選別する傾向が認められる。

器種毎に硯としての再利用に関しては、以下の特徴が認められる。まず、坏類は若葉台遺跡での再利用硯観察の結果から、底部及び体部の一部が残存する残存形状の A-2 タイプ、口縁部が一定の高さで残る C-2 タイプに多くみられる（第2章第1図）。C タイプの系統で、底部が欠損する SC タイプも、住吉中学校遺跡、霞ヶ関関連遺跡では硯として再利用されているため、注意が必要である。また、高台が付く器種は、外面、及び内面を再利用硯とする傾向が認められる。

次に蓋は、内面を硯面として使用するため、天井部が一定の大きさで残る形状タイプ（A～D タイプ）は注意して観察する必要がある。また、返りのあるもの、鈕を欠損しているもの（n タイプ・第1図6）は再利用される傾向が高い。また、特に蓋の場合は、既述したように、左右対称の残存形状の破片を再利用する傾向が多く認められる（第5図3）。

3番目として、甕の破片で硯に再利用されているものの大多数は、一辺（あるいは最長・幅）が最低約10 cm以上の破片であり、内面を上にして据えたとき比較的安定して、据わりが良いことが指摘できる。大きさや形状は、砥石としての再利用との区別においては、重要な属性となる。しかし、再利用硯としての使用後、さらに欠損して小さな破片となり、

ている。

磨耗の痕跡しか認められない場合には、硯か砥石としての再利用であるか判別が難しい場合がある。

再利用硯の認定は、基本的に使用痕跡の墨の付着と磨耗痕であるが、形状や大きさ、そのほかの多くの指標を用いて、注意深く観察することが重要である。

付着物である墨に関して注意すべき点は、まず、第一に墨かどうかの識別が必要である。土器の黒色付着物は、大別3種類あり、一般的に最も多いものは、灯火具由来の煤や油煙で、次に墨である。そして漆による付着物である。少量の場合は区別が難しいこともあるが、基本的には肉眼あるいはルーペによる観察で識別することは可能である。灯火具由来の煤、油煙は明瞭な黒色物が一部に付着することが多い。一方、墨の場合は全体に薄く、わずかにムラのある黒色物で、ルーペを使用すると、須恵器の細かな胎土の凹凸に墨の染みこんでいる状況が観察できる。

しかし、定形硯の硯面に墨の付着が認められないことは多い。通常一度墨を擦った後は、次回のために墨を洗い流すことが必要⁴⁾のためと考えられる。再利用硯は、比較的墨の痕跡が明瞭に残るものが多い傾向にあり、一次的にパレットとして使用したものが多いことが推定できる。また、再利用の硯は、陸部として墨を擦ることに使用したとしても、今回が最後のため水洗いをせず墨が付着したまま、廃棄されたものも存在していたことが推定できる。

硯面の磨耗の弱い硯については観察が難しいため、形状の特徴も活用して観察することに意義がある。再利用硯の器種のうち、蓋の内面の磨耗痕は供膳具としての使用で残ることは稀であり、墨の付着が認められなくても硯としての再利用による可能性が高い。蓋は鈕の欠損状況や、残存形状の観察を加えることで、より明瞭に再利用硯の可能性が判断できる。

一方、須恵器の坏・埴類及び高台坏・埴類に関して、内面の弱い磨耗痕は硯としての再利用に由来するか注意が必要であり、わずかでも墨の痕跡及び、形状の特徴を組み合わせることで判断することが求められる。さらに甕の破片は、砥石としての再利用も想定できるため、区別することが必要になるが、磨耗痕に加え、破片の大きさで分類することが多くの場合で可能である。例えば、内面が著しい磨耗で一辺が10 cm未満の掌に納めることができる小破片の場合は、砥石としての再利用の可能性を考えるのが妥当であろう。

硯と研磨との密接な関係は、もともと硯の系譜をたどれば、起源の中国において既に明白である。中国において確実な硯としての出土は、埋葬年代がわかる前漢の湖北省江陵県鳳凰山168号漢墓一括遺物(B. C. 167)〔吉田恵二1983〕であり、硯は円形の扁平な石で自然礫の一端を平坦に加工した研石が伴っている。即ち、広い意味では硯とは、元来研ぐ行為のための道具であり、平滑面が必要な道具といえる。

硯の硯面の磨耗痕と使用頻度との関係に関しては、実験考古学を基礎にした論考がある〔北野2004、同2005、同2006〕。後述する多賀城遺跡出土の8世紀後葉、9世紀代の円面硯及び、再利用硯の器面に残る磨耗痕や線条痕が墨を擦った際のものではなく、予め砥石で器面を擦ったために残された可能性が指摘されている。円面硯は、磨耗痕のみが観察

4) 墨を擦るには、「鋒鋸（ほうぼう）」というわずかなざらつきが硯面に必要である。墨が付着したままの状態では墨に含まれる膠のため、鋒鋸に付着し、良く墨をすることができなくなるため、石硯においても洗い流すことが必要であるという〔榊1998〕。

されるものが多いため、実際に使用されたか否かの検討において、この実験結果は十分考慮すべきである。再利用の硯では、砥石による二次加工が確認できれば、硯などの再利用の準備として可能性がより高まると考えられる。しかし、後述する若葉台遺跡の再利用硯の器面観察においては、ほとんど線条痕が確認できなかった。

3 文献史料と再利用硯

供膳具である坏や碗、それらの蓋を再利用した「転用硯」に関しては、『正倉院文書』造東大寺司の写経所関係文書のなかに関係する記事が認められる。そこでは多数の蓋が硯として、また、坏や碗が「筆漬坏」として筆洗いに使用されていたことがわかる。「後一切経検受雑物」⁵⁾〔東京大学史料編纂所編〕天平十八年(746)では「研六十口 筆漬坏六十口」、「奉寫一切経所告朔解」のなかには、宝龜三年(772)「陶碗廿合 二月廿四日 用蓋 硯並筆漬料」〔東京大学史料編纂所編〕⁶⁾、同年「陶水碗十四合 用蓋 硯並筆漬料」、宝龜四年(773)「冊文硯料陶碗十合直 合別四文」〔東京大学史料編纂所編〕⁷⁾などである。そのなかでも「筥陶司充器注文」⁸⁾天平宝字六年(762)において「坏蓋硯貳拾口」と記されている硯が重要である。

上記した史料は、土師器、須恵器について保管を行い、木器の生産と保管を行う役所である筥陶司から、石山寺宛てに須恵器と一緒に添えられた送り状である。古尾谷知浩氏によれば、「坏蓋硯」は須恵器の坏蓋として生産されたにもかかわらず、保管・管理の役所から硯として、当初とは異なる目的で出荷されていると指摘している〔古尾谷 2004〕。

今までに「坏蓋硯」の研究に関しては、多くの議論が行われている。内藤政恒氏〔内藤 1964〕は、当初から硯として生産された無脚の円面硯であるとする。檜崎彰一氏は、内藤氏のいう円面硯の坏蓋硯と単に坏の蓋を一時的に利用したものとの区別は不可能であり、文献上の意義しかないとしている〔檜崎 1981〕。考古学では「坏蓋硯」について、当初から硯として生産された無脚の円面硯とする考え方や、無脚円面硯をはじめ、坏の蓋を一時的に使用したとする二つの見解がある。

一般的には山中敏史氏の本来硯としての使用目的で作られた可能性があるものを含むが、遺物としての判別は困難とする考え方である。また、中央の官衙では蓋を硯として、坏や碗を筆洗い用として使用していたとするが、地方においては、こうした明確な分化は認められず、坏や甕の破片も硯として使用している。

古尾谷氏は、「坏蓋硯」が単純に再利用された硯ではなく、檜崎氏が文献を誤解したとする〔古尾谷 2004〕が、重要なことは、文献史料からみた場合に、製作主体、保管・利用主体によって「もの」の取り扱いの意図が異なり、従来「転用」とされたものでも、製作、運搬、保管、使用(消費)、廃棄の来歴をたどれば、同一に扱うことができなくなると指摘している点である。即ち、古代において、土器の用途が固定した一つの用途ではなく、場面と状況に応じて多様な目的と用途に使用されていたことが、文献上において指摘できる重要なケースであるといえる。

5) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書』巻9、2頁

6) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書』巻6、303頁

7) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書』巻6、499頁

8) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書』巻5、104頁

モノが人々の間を往来し、その文化的な意味を変えてゆくことをライフヒストリーとして辿るという、研究の視点「事物の文化的履歴」〔Kopytoff 1986〕を古代の文献史料から認めることができる希な事例といえよう。

再利用硯の問題は、単純に再利用されたかどうかという点に焦点があるのではない。土器の用途が幾つかの局面において多様に変化し、使用されその文化的な意味を変えてゆくライフヒストリーの視点からのアプローチが可能であり、モノと人との関係をみてゆく際に、重要な事例であるという点である。

再利用硯のなかでも同様に、神社などに伝世する「猿面硯」（第1図7）と呼ばれる硯について、当初から硯として作られたものか、甕の破片を再利用した硯かの議論がある。現存する「猿面硯」と呼ばれる硯には、内面に同心円当て具痕、外面に平行叩きが認められ、甕と同様な作り方のものが多い。

文献史料においては、「猿頭硯」として記されているものがあるが、古尾谷氏は伊勢神宮の式年造営にあたり、「陶猿頭形硯」が奉納された資料を根拠にして、この硯は製作当初から硯であり、甕の破片を再利用したものではないとする〔古尾谷 2004〕。しかし、窯場という生産地において、研磨作業が行われていたとすれば、硬質な甕の破片を再利用のため研磨し、「猿面硯」という製品に変えて出荷することも可能である。即ち、窯場で甕の破片を再利用し、一部を硯として出荷することは可能であるといえる。

遺跡から出土している硯にも「猿面硯」と報告されているものもあるが、甕の破片の再利用かどうかという点より、こうしたタイプの硯を生産地である窯場及び集積地などにおいても、製作することが可能である点に注目したい。

9世紀代において風字硯が増加する背景には、従来の円面硯の製作技術の難しさ⁹⁾に加えて、地方官衙などや豪族層の増加による需要の拡大が挙げられる。つまり、硯の需要に応じるため、製作が容易でローコストの硯の生産に向けた、窯場という生産地にみられる経営戦略の一端としての形式変化が推定できる。

4 硯の研磨と使用痕

硯の研磨は、使用痕としての磨耗との関係で重要であるが、硯は基本的に焼成後、研磨されたとする報告がある。乾哲也氏により、大阪府の陶邑窯で焼成された円面硯が、近くの万町北遺跡において硯面の研磨という二次加工が施されたうえで、製品として消費地に運ばれたとする可能性が指摘されている〔乾 1996〕。

詳細は不明であるが、50点以上の円面硯は大部分が小破片で、墨痕が認められないとされている。また、万町北遺跡においては、須恵器坏蓋に研磨痕が残るものも多数発見されているが、墨痕は皆無であり、固有の「坏蓋硯」を製作していたとする。

この「坏蓋硯」には2つの問題点が指摘できる。まず、研磨痕がいつ蓋使用の再利用硯に残されるのかという点と、次に墨痕についてである。研磨痕については具体的に3つのケースが推定できる。

9) 硯は形が複雑で完成品を生産することが難しいため、出土点数が窯跡において圧倒的に多いことが、石井則孝氏によって指摘されている〔石井 1980〕。窯跡出土の硯は、基本的には出荷できない失敗作である。

①定形硯と同様に予め研磨される場合、②消費地で、再利用する段階で研磨を行う場合、③実際に墨を磨ったために残される場合である。乾氏は①の可能性について報告しているが、②・③の可能性をこの報告によって否定することはできない。

墨痕は、他の遺跡では使い込んだとみられる硯面には、胎土のピットに染み込むように残存するものが認められるからである。既述の通り、大半の円面硯には墨痕は残存していない。また、再利用硯にも墨痕が全く認められないとするが、研磨後に使用して洗浄された場合は、円面硯と同様に墨痕はごくわずかであるとみられるため、ルーペなどの観察の結果かどうかは不明であること、さらに、公的な機関による硯の研磨工程の場と想定しているが、仮にその性格であるならば、集落遺跡より頻繁に事務処理が行われていた可能性は高く、再利用硯の使用がより一層頻繁に行われたと考えられる。

出土した「坏蓋硯」のなかには、実際にこの遺跡で使用されていたものが含まれていた可能性が推定できる。出荷するための「杯蓋硯」を製作した可能性も否定できないが、この遺跡で実際に使用された「杯蓋硯」を区別し整理した後に、改めて議論する必要があることを指摘する。

北野博司氏は、先にふれた通り、多賀城政庁跡出土の8世紀後葉、9世紀代の硯を観察し、円面硯の硯面に残された墨や磨耗痕と墨磨りの使用痕との関係を経験的方法ではなく、実験考古学の手法を用いて比較検討を試みている。高温焼成した粘土板を砥石で磨き、市販の固形墨を磨り、磨った回数による墨の付着率の違いを顕微鏡観察して、多賀城政庁跡出土の陶硯との比較を行った。その結果、一部の円面硯、風字硯には硯面を砥石などで磨いた際に残る条線が少なからず観察できたという。

実験結果では、固形墨を磨る回数と硯面の磨耗との間に相関関係はあるが、考古資料では、磨耗度と墨の付着度には相関関係が認められていない。即ち、使用頻度と硯面の磨耗度は一致しないことから、円面硯などの定形硯では実際に墨を磨る行為は行われていないという点を指摘している。

また、再利用硯と考えられている小型の蓋・坏類と甕、壺・瓶類の使用痕跡として、磨耗度と顔料などの付着の相関関係について調べている。そのなかで甕、壺・瓶類については、付着物の認められないものが約6割あり、また、茶褐色の煤状の付着物も観察できることや、付着物が認められないにもかかわらず、顕著な磨耗痕が認められる例が多数あることから、硯としての再利用に疑問を示している。

定形硯の利用状況及び再利用硯において、付着物、使用頻度及び、硯面磨耗痕の関係についての問題提起は重要であり、実験結果と考古資料の比較を行ったことは新たな試みとして評価できる。一方、実験考古学においては実験条件を限りなく当時に近づけるという点では限界があることは否めない。硯に見立て使用した粘土板と古代の硯面の状態が同一であるか、及びほとんど残されていない古代の固形墨と現代の墨を使用した磨耗の比較がどの程度有効であるのか、細部の慎重な検討が必要である。

再利用硯としては、甕類より坏蓋類が多く使用され、甕類の大半は、別用途であるとしているが、坏類を含め、甕類も別の用途の灯火具としての再利用を検討する必要があることを指摘しておきたい。また、甕類の再利用硯については、付着物が無く、顕著な磨耗痕が観察される例が多数認められることが報告されている点から、一部は硯としての再利用のための研磨を行い、実際に使用されずに廃棄された可能性も指摘できる。甕類の再利用

については、今後の問題ではあるが、再利用硯としてのストック、保管が行われていた可能性も推定できる。

板谷桃代氏は、研磨と硯の使用痕について、滋賀県信楽町の紫香楽宮関連遺跡出土資料からの報告を行っている。紫香楽宮は、聖武天皇が天平十七年（745）に最終的に平城宮に遷都するまで、恭仁、難波宮とともに行幸や宮の造営を行ったうちの一つである。定形硯は、研磨されているものの、実際に墨は磨られていないこと、坏や蓋が再利用された硯に、北野氏が指摘するような硯面の研磨による線条痕や胎土の微細なピットがほとんど認められないことから、砥石による磨き工程は行われていないとしている。また、実際に墨が磨られたものは、再利用の硯であると述べている[板谷 2005]。

若葉台遺跡にみられる坏や蓋を再利用した硯のうち、線条痕が認められるものは皆無に等しい。著しい磨耗及び墨痕があり、硯として再利用されたことが明らかな蓋の内面の写真を拡大したが、線条痕は認められない。また、定形硯は墨痕があるにも関わらず線条痕が認められていない。

硯には使用場面の違いから、墨を磨るという役割と墨を溜めるという大きく二つの役割がある。これに加え、筆先を整えるという役目がある。墨を磨る・溜めるという二つの役割を各々異なる硯に分けていた可能性もある。今後、硯がどのように使用されたのか、硯の役割を念頭において考察することが必要である。

さらに、第3章3節で述べたように、須恵器の坏類や蓋の硯としての再利用では、一定の形状が求められ使用された傾向がある。即ち、特に硯として再利用の用途を特定するためには、痕跡や付着物に加え、残存する形状がどのようなものであるかをもう一つの要素として検討することが必要である。

5 若葉台遺跡における硯の研磨

若葉台遺跡からは、須恵器の蓋や坏類を再利用した硯の他に、定形硯である円面硯が多数検出されている（第3・4図、表1）。円面硯は坂戸市調査分で10点、鶴ヶ島市調査分20点¹⁰⁾で合計30点と、武蔵国府などの官衙遺跡や南比企窯を除くと武蔵国では円面硯の出土点数が極めて多い遺跡である。若葉台遺跡では円面硯が、8世紀代を中心にして前葉から比較的多く出土し、後葉に最も多く認められるが、9世紀になるとほとんど検出されない点の特徴である。坂戸市の調査分は南比企窯の製品であり、鶴ヶ島市の円面硯も同窯の製品であるとみられる¹¹⁾。また、その出土状況は特定の区域あるいは、特定の住居跡からまとまって出土していることがわかる（表1）。

円面硯の残存状況は、両市調査分とも小破片が多く、硯面が残存するものが少ない一般的な硯の残存傾向と同じである。ほぼ硯面全体が残る第3図1・12は、脚部を欠損した後に硯面を安定させて使用するためと考えられる打ち欠きなどの二次加工が観察できる。特に第3図1は脚部を完全に欠損し、高台坏底部と見誤る程、形状が高台坏に近似している。

10) 鶴ヶ島市で実見した際に、未報告の円面硯の脚部破片が1点新たに発見されている。B地点出土で遺構は不明であるが、今回の集計には含まれていない。

11) 鶴ヶ島市分の若葉台遺跡出土の円面硯を実見した結果、20点中5点は胎土に南比企窯の特徴である白色針状物質が認められない。しかし、そのほかの胎土の含有物、形状や脚部の外面のヘラ描き沈線文などからみると、南比企窯の製品と考えられる。

若葉台遺跡の出土の円面硯が実際に使用されていたかどうかを確認するため、鶴ヶ島市を含めて硯面が残る 10 点に関して観察を行っている。その結果、第 3 図 7、第 4 図 17、29 はわずかに残る硯面に降灰が付着したままで、実際に使用されたとは考えられない硯である。第 3 図 14 は、硯面の約 1/6 の残存であるが、硯面には磨耗の痕跡がなく、調整痕のロクロ撫でが残り、ほとんど使用されていないとみられる。

一方、第 3 図 12 は明らかに他の硯面とは異なり、緻密な平滑面で研磨された可能性が高い。したがって 10 点の硯面が残る硯のなかで、4 点は使用されていないこと、そのうち 3 点については、他の遺跡においては認められない降灰が硯面に付着している点に注目することができる。降灰付着は坏類などにおいても多く観察されることから、窯場でどのように焼成していたのかの検討は必要であるが、前述の通り、乾氏や北野氏が指摘するように、硯の出荷供給時に硯面を研磨していた可能性は高いと考えられる。したがって、若葉台遺跡では降灰が付着したままの硯面の硯が複数認められることから、使用されていた可能性のある硯は少数であり、むしろ、若葉台遺跡と南比企窯は、先述した万町北遺跡と陶邑遺跡と同様、生産地と管理・経営という関係であった可能性が高いと考えられる。

定形硯の出土状況から若葉台遺跡は、8 世紀前半に面期が認められる遺跡であり、官衙とは限定できないが、南比企窯の須恵器生産の経営と深く関わる性格の遺跡といえる。

第 2 節 国直轄官衙における硯の出土状況

第 1 項 平城京の硯

国直轄の官衙における硯出土状況を把握するには、本来ならば天武朝以降、律令国家に向けて造られた都城である飛鳥地域の藤原京（694～710 年）、平城京（710～784 年）が最も適した事例である。しかし、西口寿生氏によれば、飛鳥地域の藤原京では奈良文化財研究所の資料のみで約 350 点の定形硯と 410 点以上の再利用硯が出土し、大半は未報告であるという〔西口 2003〕。

神野 恵、川越俊一両氏の報告〔神野・川越 2003〕では、平城京においても再利用硯は出土した場所の性格を考える際には重要であり、点数は膨大で出土地区に偏りがあることが指摘されている。しかし、全体像は把握されていないため詳細は不明である。このように都城における再利用硯の研究は進展していない状況にあるが、ここではまず、両氏の報告と、多数の陶硯が集中的に検出された長屋王邸周辺を概観、整理して、平城京における陶硯、特に円面硯の出土状況に関して、地方との差異と共通点をまとめておきたい。

平城宮は約 25 万 m²が発掘調査され、再利用硯を除き、461 点の陶硯が出土している。約半数が包含層出土であり、半数の遺構から出土した硯のうちの 9 割が溝、残りの 1 割は土坑や柱穴である。また、馬寮地区などは広範囲の調査にもかかわらず、陶硯がほとんど出土せず、出土状況に著しい偏りがみられる。

平城京では左京域において、約 12 万 m²の発掘調査面積から約 300 点の陶硯が出土し、右京域において 3 万 1 千 m²の調査面積から 70 点が出土している。発掘面積の違いもあるが、出土点数は調査地点によって偏りがある。

左京域においては、特に長屋王邸に比定されている区域である左京三条二坊一・二・八坪内及び周辺から、多くの定形硯や再利用硯が検出されている。少なくとも 80 点の個体識

別ができるという。この区域は天平十二年（729 年）の長屋王の変¹²⁾までは、左大臣長屋王と妻吉備内親王の居宅であることは、多数の出土木簡から判明している〔奈良国立文化財研究所 1995〕。変の後には光明皇后の皇后宮や太政官厨として使用されている。形象硯など多様な陶硯がみられるが、蹄脚硯より圈足硯が多い傾向である。

また、二条二坊は従三位兵部卿で藤原氏四兄弟の一人である、藤原麻呂の居宅が構えられている。藤原麻呂邸の南門に位置する二条大路に掘られた溝 SD5100 や溝 SD5300 からは、主に須恵器坏 B 蓋（第 3 章第 2 図 16）の内面、須恵器皿 A（同 2 図 20）、壺 A 蓋（同図 24）の内面を硯として使用した再利用硯が多数出土している。また、壺 A 蓋（同 2 図 24）をはじめ、皿 D（同 2 図 22）も再利用硯として使用されている。

溝 SD5100 からは、天平十二年（740）の紀年木簡や衛士に関係する木簡が出土していることから、三条二坊の施設である皇后宮、及び藤原麻呂の家政機関に関する遺物とみられている。溝 SD5300 は、藤原麻呂邸から廃棄された遺物とされている。溝 SD5100、溝 SD5300 からは、第 3 章で述べた通り、再利用硯として使用された須恵器の蓋や灯火具として使用された坏などが多数出土している。そして溝 SD5300、5310 の遺物に関する記述では、坏 B I 蓋（第 3 章第 2 図）は 84 個体認められ、20 個体が「転用硯」として使用されたが、坏身 B I は 23 個体で、坏 A I の 12 個体を加えても 35 個体であることから、「蓋の方がかなり多いというこれまで通りの結果を得た」と記されている〔奈良国立文化財研究所 1995〕。このように明らかに、須恵器坏蓋の出土点数は、組み合う坏身に比べ格段に多いことが指摘されている。蓋は供膳具としての使用のみではないことが推定できる。他の遺構でも、同様に蓋が坏身より多数検出される傾向が推定できる。その理由の一つとして、再利用の用途として硯などに使用するため、ストックとしていた可能性を指摘しておきたい。

左京域ではこのほかに、八条九坪の市に物資を運ぶための運河と考えられる溝 SD1300 から、圈足硯が多く出土している。また、埴塼や轆羽口を含む工房関係の遺物を含む溝 SD6400 からも、陶硯が多く検出されている。

以上から神野、川越両氏によれば陶硯出土の多い地区は、①家政機関をもつ豪族の邸宅、②官外官衙などの公的施設、③工房関係施設であることが報告されている。このほか、溝 SD1300 の例より、④市などの流通関係施設も陶硯の出土が多い傾向にあることがうかがえる。また、寺院から出土する陶硯も蹄脚硯より圈足硯が多いという。

次に、大きさから陶硯を概観すると、①奈良時代前半では、中央朝堂院東南地区や平城宮には、硯面 15 cm 以上の大型品の蹄脚硯が多く、また、圈足硯も大型品の傾向にあるが、小型の硯面径 10 cm 前後の圈足硯がみられる。②奈良時代後半には、平城宮においても硯面 10 cm 前後の小型圈足硯が増加する傾向が認められる。

硯の年代については平城宮、平城京においても円面硯のほとんどが、部分的にしか残存しないこと、また、廃棄年代から硯の生産年代を考えるには、耐用年代を逆算する必要がある、消費地からは年代を推定することが、特に難しいことが指摘されている。

平城京においては、今後の課題とされた再利用硯についての報告が増加した時点で、硯全体の状況が明らかになると考えられる。

12) 第 3 章註 3 参照

第2項 多賀城跡の硯

律令国家の対蝦夷政策のための拠点として鎮守府がおかれた東の多賀城跡、また、外交使節接待の場であり西の軍事的最前線としての大宰府においても、諸国の国府とは異なり、国直轄機関として多数の官人層による文書行政が行われ、発掘調査の結果、多くの定形硯と再利用硯が出土している。まず、定形硯と再利用硯について、まとまった報告が行われている多賀城跡についてみてゆく。

多賀城跡の硯は、伊治公弼麻呂の乱で焼失した780年以降を中心とする時期ではあるが、硯の出土状況の概要を紹介する〔生田 2003〕。

多賀城跡は、奈良時代の鎮守府以前から陸奥国の国府、出羽・陸奥国の行政を監督する按察使が併置されていた。政庁地域は養老・神亀年間に造営された掘立柱建物柱建物のⅠ期（724～762年）、8世紀中頃に大改修された礎石立建物が伊治公弼麻呂の乱で焼失するまでのⅡ期（762～780年）、乱の後に再建された政庁が869年の大地震で被害を受けるまでのⅢ期（780～869年）、地震直後に復興した政庁が廃絶するまでのⅣ期（869～10世紀中頃）の4期に大別されている。政庁の周辺には、厨や工房を含めた曹司と推定される政庁隣接地区が広がる。

円面硯と風字硯が出土し、円面硯はすべて圈足硯である。硯面径は11 cmから20 cmの間の規模で、政庁跡では17 cm以上の大型硯から、11 cm～12 cmの小型硯まで出土しているが、曹司地区では13 cmから16.5 cmまでの中型硯が多い。Ⅳ期以降では大型のものがみられない。硯の年代は、共伴関係の遺物によって、使用期間が推定できるものは3割の170点で、残りの7割については、時期がわかる硯の点数によって比例配分されている。

地区毎の硯の出土量では政庁地区が最多であり、曹司地区は地区により多寡がある。政庁地区では再利用硯が最多で地区全体の7割を占め、曹司地区は地区毎で種類に違いがある。政庁北方隣接地区でも、再利用硯が7割を占めるが、政庁の南側に位置する城前地区では定形の円面硯が6割を占める。

Ⅰ期、Ⅱ期とも硯の出土量は少なく、Ⅰ期に曹司地区で再利用硯が2点確認されている。Ⅲ期には硯の出土する地域と量も多くなり、文書行政が活発になったと推定されている。この時期は政庁地区が最も多く、曹司地区では政庁北方隣接地区が比較的多くなる。Ⅳ期はさらに硯の出土量は増加するが、再利用硯は、Ⅲ期同様に出土点数の顕著な政庁地区や、曹司地区の政庁北方隣接地区が多い。また、風字硯の出土が多くなり、全体的に再利用硯の出土割合も高くなる。出土状況からみると政庁での文書作成が多くなったことが、硯の出土量に反映されたと考えられている。

再利用硯の素材の種類として、全て須恵器で甕類と坏、蓋が認められている。挿図では、生田氏の分類した再利用硯に使用される器種の坏・埴類の坏には、高台をもつものが含まれている。再利用硯については、墨痕の付着と磨耗痕を観察の基準としているが、平滑のみで墨痕が認められないものも含んでいる。

再利用硯の出土量は、全体としては政庁地区が最も多く、甕の再利用硯が多い。時期別ではⅢ期以降に政庁地区で、曹司地区では政庁北方隣接地区において多くなり、再利用硯の器種は坏・蓋類が7割から8割を占める。

一方、曹司地区で政庁の東北部に位置する兵士の宿舍や工房跡を含む大畑地区では、甕の再利用硯が最も多く5割以上を占める。Ⅳ期にはさらに出土量、出土地区が増加し、甕

類の再利用硯の割合が高くなる。この理由として、坏、蓋の供膳具の供給が減少したため、甕の再利用硯が増加したと推定している。

多賀城跡では、政庁地区の少数の円面硯にも朱墨痕の付着例が認められているが、基本的に再利用硯の坏・蓋類が使用され、朱墨に使われているという。また、多賀城跡においても、硯の編年作業は困難であることが報告されている。今後の課題としながら、あえて硯全体を捉えるため、再利用硯も含めて考察を加えた点は先駆的である。

一方、生田氏によれば甕は廃棄物の再利用による硯で「再利用硯」とし、また、坏・蓋類を利用した硯については、定形硯の一種とする「坏蓋硯」と廃棄物の再利用硯が含まれ、この違いと実務内容の違いを確認しようとしている。この点からすると「坏蓋硯」は、供膳具として使用していない新品の「坏・蓋類」を硯としての使用を考えていることが推定できる。

しかし、定形硯の一種とする「坏蓋硯」と廃棄物の坏・蓋の再利用硯の区別について、具体的に提示されていない。また、既述の通り、遺物からこの２種類を識別することは困難である。したがって、この「坏蓋硯」と「再利用硯」の違いと、実務内容に反映されているかどうか検討を試みているが、現時点では困難な点が多いと考えている。

多賀城跡の再利用硯については、次の点に注意しなくてはならない。①硯に使用された坏・蓋がどのような残存状況であるのか、②割れ口断面の墨の付着など、観察が必要である。また、③坏・蓋類と一括しているため、蓋及び高台坏について、器種毎に使用された割合は報告されていない。④甕の破片では若葉台遺跡などの観察結果によって、緻密な胎土のものを選ぶ傾向にあるが、多賀城跡では素材の質に関しては報告されていない。また、⑤墨痕としている黒色付着物に関しては、一部墨痕ではない可能性も指摘されており〔佐藤浩司 1993、北野 2004〕、今後の検討が必要である。第２項（２）において、既述した付着物の識別の際、灯火具として煤・油煙との区別が重要である。

第３項 大宰府の硯

大宰府は白村江の戦い（663 年）以降も、軍事的には国防の最前線であり、また、外国使節を接待する役割をもち、さらに西海道の国々の行政面を統括するという国直轄の地方官衙である。

大宰府を含めた、豊前地域の定形硯と再利用硯についても、出現時期と点数がまとめられ、大宰府の硯の合計点数及び、再利用硯の点数の多さが顕著であることが報告されている。また、再利用硯も含め、硯の配備について「律令体制下の重層的支配構造の一側面」として階層化されていたとしている〔佐藤浩司 1993〕。

大宰府の中心となる政庁跡は発掘調査が行われ、大きく３期に分けられている。白村江の戦い前後のⅠ期、８世紀前半にみられる律令体制の礎石建式の建物であるⅡ期、藤原純友の乱（941）による再建期のⅢ期にわたる建物の変遷が確認されている。大宰府政庁跡からは、約 30 点の定形硯（第５図 1・2）と、土器再利用硯（第５図 3～8）が 174 点出土している。再利用硯は蓋（第５図 3・4）132 点で 76%を占め、坏（第５図 5）13 点、皿（第５図 6）14 点、盤（第５図 7）1 点と甕（第５図 8）14 点で須恵器蓋が大半を占める。このほかわずかに平安時代の灰釉陶器の坏蓋、在地の土師器坏蓋を再利用したものがある。大宰府では８世紀代を中心に限定された時期に、再利用の硯、特に須恵器の蓋が使

用されたことが指摘されている。また、定形硯は一部署に数個が配置され、官位の高い役人用として、実際の文書執務は下級官人の書生が担当して、個人に再利用硯が配備されたと考えている〔小田和利 2003A、B〕。

前項で指摘した通り、大宰府から出土している再利用硯には、断面に墨が付着し、明らかに欠損あるいは打ち欠いて形状を整え、再利用しているもの（第5図3～5・7）が報告されている〔九州歴史資料館 2002〕。

以上、多賀城と大宰府を中心に硯及び、再利用の硯について概観した。基本的には、円面硯などの定形硯が一定量出土する。一方、多数の再利用硯が多数使用されていること、また、大まかに8世紀代には須恵器の坏蓋が多く使用されていることから、再利用される器種では須恵器蓋が多いが、時期的な変化が存在する可能性を指摘できる。

大宰府、多賀城では黒色付着物の識別において、灯火具に関する説明がほとんどみられないため、検討が必要である。その理由は、平城京においても、須恵器蓋は再利用硯としてのほかに、灯火具としての再利用が認められていること、また、第3章2節1・2項の若葉台遺跡や住吉中学校遺跡の坏類や蓋の再利用に関する付着物の検討結果から、再利用の用途として、灯火具が硯より多いという結果が導き出されているためである。

平城京、国直轄官衙の多賀城跡や大宰府における硯の出土状況から、次のように傾向と特徴をまとめることができる。不確実な要素もあり暫定的であるが、古代の武蔵国各遺跡における硯の出土状況を考察する際の一助とすることができよう。

硯出土の多い遺跡は、①官衙などの公的施設、豪族の居宅、工房関係施設、市などの交易・流通関係施設、及びこれらの付帯施設の性格が考えられる。

②硯の出土点数は各遺跡において地区に偏りがあり、文書作成の具体的状況を反映している可能性が高い。

③再利用硯は限られた数の定形硯を補完、あるいは再利用硯を使用することが一般的であること。

④8世紀前葉は大型の円面硯が多く、8世紀後葉には小型の円面硯が増加すること。

⑤8世紀後葉には、定形硯及び再利用硯の出土点数が増加する傾向があること。

⑥再利用硯に使用される器種は、高台坏を含む坏類、蓋と甕が多い傾向にある。

⑦再利用硯は全体として官衙中心域において坏・蓋を指向する特徴がある。

⑧定形硯は全体として残存率が低く、出土遺構は溝や包含層などであり、陶硯の年代を決めることは特に消費地では、困難な点が多いことが指摘できる。

最後の陶硯の年代比定は、使用する再利用硯の土器型式が時期を推定する手掛かりとなるであろう。

従来は、円面硯や風字硯という定形硯のみに終始した研究及び、各地域では単に定形硯の資料集成となっていたものが大半であった。このような研究は、当時の文書行政の実態について、そのごく一部を反映しているだけに過ぎない。また、定形硯が完形で出土することが極めて稀であることや、定形硯が破損した後に、硯面が再利用されている可能性にも、ほとんど注意が払われていない。資源の再利用という新たな視点と認識から硯を研究することにより、従来の研究では明らかにできなかった律令制や官衙の文書行政などの具体的な状況、多くの分野と領域に対して、新たにアプローチすることが可能になるといえる。

第 3 節 定形硯と再利用硯の出土状況

第 1 項 武蔵国の主要遺跡の定形硯と再利用硯

定形硯と再利用硯に関する具体的な事例研究として、武蔵国の主要な集落の 16 遺跡と生産地 1 遺跡を取り上げる。はじめに検討対象となる遺跡は、武蔵国府関連遺跡であり、官衙関連遺跡として郡衙関連遺跡と推定される熊野遺跡、山王裏・西浦遺跡、御殿前遺跡である。次に東の上遺跡をはじめ、入間郡内の主要遺跡における硯の出土状況などを概観する。

次に、入間郡以外の周辺及び大規模遺跡として、4 遺跡についても順次述べてゆく。その際に、出土点数が多い主要遺跡の硯については、第 6 図の出土状況動態図で示している。

定形硯の出土量が少ない 2 点以下の張摩久保遺跡（第 2 章 12 図 12）、将監塚・古井戸遺跡（第 2 章 12 図 21）、揚櫃木遺跡（第 2 章 12 図 13）については、硯の点数を集計表には反映させているが、出土状況などの説明は省略する。

消費地の遺跡に加えて第 6 図の硯出土状況動態図には、生産地の遺跡として硯の出土点数が多い南比企窯跡群の出土状況を加えている。若葉台遺跡の坂戸市調査分の再利用硯については実見した結果であるが、それ以外の遺跡に関しては、各報告書において「転用硯」あるいは「転用硯か」と表記されたものを再利用硯とする。

また、第 1 節第 2 項で既述したように、若葉台遺跡の実見から得た観察ポイントの一つである蓋内面に認められる磨耗痕は、報告者が再利用硯と認識していない場合でも一部再利用硯としたものがある。

発掘調査面積の広さにより硯の出土点数が左右される可能性があるため、該当調査面積 1,000 m² 当たりに対する出土点数を試算する。基本的に奈良・平安時代の遺構、遺物が発見された発掘調査区に関して、該当調査面積とする（文中では該当面積に省略）。また、わかりやすくするため、該当調査面積当たりの出土点数に 100 を掛け算した数値を用いて、硯の出土指数とする。この出土指数は、暫定的な数値でその傾向は大まかなものである。今後の発掘調査の進展によって変動する数値であるが、硯と遺跡との関係をみるために必要な指数である。また、再利用硯に使用された器種で、特に記載がない場合は須恵器である。

定形硯の出土指数によって 16 遺跡の 1 遺跡当たりの平均値は 33、再利用硯では 26、2 種類の合計の平均値は 57 である。一方、平城宮内では再利用硯を含まない定形硯の出土指数は 184、平城京の左京域では 250、右京域は 226 と群を抜いて極めて高いことが大きな特徴である。

1 武蔵国府の硯（第 2 章 12 図 1、第 6 図・表 2）

東京都府中市武蔵国府関連遺跡（第 2 章 12 図 1）では、竪穴住居約 4,500 軒、掘立柱建物約 1,000 棟（2005 年現在）が検出されている。武蔵国府の中核域である国衙は、大国魂神社の境内から東側の地域に広がる。この他に推定「国司館」跡や、方形区画で画された 8 世紀末葉から 9 世紀前半の神社遺構と考えられる「戌亥社」などが検出されている（武蔵国府関係報告書を参照）。また、8 世紀前葉から 10 世紀末とされる墨書土器は 521 点

を数え、「国（國）」や、施設名である「大目館」、「厨」、役職名の「守」、人名、地名の「多麻」、祭祀関係である「神」などが認められている〔江口 2002〕。

武蔵国府関連遺跡において、確認できた硯は定形硯が 69 点、再利用硯 42 点と、点数では今回の武蔵国における硯の集計で最も多い。該当面積は約 15 万 m²であり、1,000 m²当たり定形硯の出土指数は 46、再利用硯では 28、2 種類の硯の合計では 74 と、定形硯の出土は比較的多い傾向にある。硯の種類は、円面硯が大多数の 52 点¹³⁾であり、風字硯 16 点、形象硯が 1 点である。円面硯はすべて圈足硯である。形象硯は亀形の一部で、時期は 8 世紀代とみられるが不明とした¹⁴⁾。また、7 世紀後葉とした円面硯は東海産とみられ、外堤側面に櫛描き波状文が施されている（N51 表土出土）。

時期別にみると第 6 図、表 2 から武蔵国府関連遺跡で定形硯の出土点数が最も多い時期は、8 世紀後葉と 9 世紀前葉の二つの時期である。定形硯の出土点数からみると、この遺跡では二つの時期に画期があったといえる。また、9 世紀前葉は風字硯の数が多いことが指摘できる。

再利用硯については、8 世紀前葉が最も多いことが特徴である。また、8 世紀中葉及び 9 世紀前葉、後葉も比較的多くみられる。8 世紀前葉の 12 点のうち 5 点は、後述する通り湖西窯産とみられる。即ち、武蔵国府関連遺跡において再利用硯は、8 世紀前葉に顕著であり、定形硯を再利用硯が補完している状況が認められる（第 6 図）。朱墨の付着は、再利用硯に 8 点が確認できる。

硯の出土地域は、国庁・京所地域及び隣接地域に多く、偏りがある。硯・刀子出土分布図〔荒井健治 2006〕、及び硯と畿内系土師器などを含めた分布図〔江口 2008〕からも、同様の傾向が認められる。今回の集計では、この国府中心域の硯は 8 世紀後葉では 11 点、9 世紀前葉に 13 点と、この二つの時期に多く、両時期ともに定形硯は各々 10 点前後が数えられる。この地域は 8 世紀前葉では円面硯が 1 点のほか、6 点の再利用硯が認められ、その器種は蓋、高台坏、坏・埴類が各 2 点である。

既述の通り、硯の出土状況からすると武蔵国府関連遺跡の画期は、8 世紀後葉及び 9 世紀前葉であることが指摘できる。この背景には 7 世紀前半以降、東国社会は東北の蝦夷対策において、後方支援の役割を担ってきた経緯が推定できる。

特に 8 世紀後葉に伊治公岩麻呂の乱をはじめとする、蝦夷の反乱を鎮圧する律令国家の梃子入れ政策として、国府機能の充実に伴う文書作成事務などの増加を挙げることができる。また、国司として武蔵国出身の高麗（高倉）福信が 756 年には在任し¹⁵⁾、その後も 770 年 783 年と計 3 回にわたり武蔵国司に任命されている。このことも、硯の出土量との関係が考えられる。

武蔵国府関連遺跡では、ほかの遺跡に比べて長期にわたり硯が出土し、出土点数が多いことを指摘できる。また、再利用硯は、8 世紀前葉の出土点数が顕著といえる。大多数の

13) 江口桂氏によれば、円面硯は 64 点確認されている〔江口 2008〕。再利用硯に関しては、国衙跡に多く認められているとするが、主な分析対象からはずされている。

14) 形象硯としては、武蔵国府関連遺跡以外で高麗郡に属する奈良・平安時代の王神遺跡（日高市）の堅穴住居から、東海地域の窯の搬入品とみられる鳥形硯の蓋の一部が出土している〔日高市教育委員会 1997〕。

15) 東大寺献物帳に天平勝宝 8 年 7 月（756 年）「従四位上紫微少弼武蔵守巨萬朝臣福臣」と記されている

遺跡と同様、円面硯の残存状況をみると完形品は皆無であり、多くは脚部を再加工して、硯面を再利用していることが報告されている〔荒井健治 2006、江口 2008〕。定形硯の希少性や脚部欠損により別の使用者に譲られた可能性、あるいは廃棄後に収得された可能性なども推定できる。7世紀末から8世紀初頭の硯がほとんど認められないことは、国庁中心域が発掘されていないためとも考えられるが、今後は各地の地方官衙成立期の硯出土状況を比較することが必要である。

2 郡衙関連遺跡の硯（第2章12図、第6・7・8図、表2・4・5）

①霞ヶ関遺跡群（第6～8図、表4・5）

入間郡衙と推定されている埼玉県川越市霞ヶ関遺跡群（霞ヶ関遺跡、天王遺跡、山王久保遺跡、新田屋敷遺跡、第2章12図6）から定形硯10点、再利用硯7点及び、霞ヶ関関連遺跡（八幡前・若宮遺跡、弁天西遺跡など、第2章12図7）では、定形硯8点、再利用硯4点が出土している（第7・8図、表4・5）。今後も、これらの遺跡から硯の出土点数は増加する可能性は高い。霞ヶ関遺跡群からは9世紀前葉の「入厨」などの墨書土器、及び霞ヶ関関連遺跡の八幡前・若宮遺跡〔川越市教育委員会 2005A〕からは、8世紀前葉の墨書「驛長」や、帳簿木簡などが出土している。なお、表には示すが一部図面を提示していない土器がある（川越市教育委員会の霞ヶ関遺跡群、霞ヶ関関連遺跡関係の報告書及び年報を参照）。

霞ヶ関遺跡群の定形硯は、第7図6の無脚の円面硯を除き、圈足円面硯である。7世紀末から8世紀初頭及び、8世紀前葉の時期に集中している。無脚の円面硯1点を含む7点（第7図3～9、表4－3～9）が、7世紀末から8世紀初頭とみられ、うち5点は末野窯産、2点が南比企窯産である。円面硯の脚部はまばらな縦長透孔で、低く幅の広い外堤をもち器高が低い。第8図7には墨溜めが認められる。

8世紀前葉の硯は3点（第7図1・2、10）である。末野窯産が2点、南比企窯産は第1図10の円面硯1点である。第1図1は8世紀前葉としたが、細縦透孔の数が多くなるタイプで、ほかの2点より形式的にやや新しい傾向といえる。一方、第7図2は共伴する土器から8世紀前葉としたが、縦長透孔の数が少なく、8世紀初頭の可能性もある。

霞ヶ関遺跡群（第2章12図1）の再利用硯は7点（第8図1～5、表2－1～7）である。7世紀末から8世紀初頭の末野窯産坏底部を再利用した1点（第8図2）を除き、6点（表5－1・3～7）が8世紀前葉とみられる。

返りをもつ蓋の内面を使用したものが2点で、坏1点、高台坏1点、甕を再利用したものが3点である。産地別にみると末野窯産が3点、南比企窯産と東海産各々2点である（表5）。東海産の2点は、ともに胎土が緻密で硬質な甕の破片を再利用した硯である。第8図3は割れ口を丁寧に削り、二次加工した比較的大きな破片を再利用したもので、安定性はやや損なわれるが、内面に磨耗痕や墨の付着が認められる。霞ヶ関遺跡第4次調査出土の甕破片の再利用硯（表5－6）は図示していないが、墨痕のほかに朱墨痕も認められる。

このように霞ヶ関遺跡群においても、若葉台遺跡で指摘したように、甕の再利用硯では素材の質に注意が払われ、選別が行われていることがわかる。

天王遺跡第15次調査出土（第8図5）の蓋再利用の硯は、朱墨痕が天井部内外面に認められる。口縁部の一部をわずかに欠損するが、左右対称の形状である。外面の朱墨は、

天井中心部付近のわずかな弧状のひび割れに沿って外面に染み出たものである（第8図5）。即ち、硯として使用した際に、既にひび割れがあり、鈕をもつことから共伴する坏と組み合わせ、逆位にして使用したことが推定できる。

次に、霞ヶ関関連遺跡（第2章12図7、第7図11～17、表4－11～19）では、8点の定形硯のうち6点は八幡前・若宮遺跡第1次調査〔川越市教育委員会2005A〕出土であり、第7図17の9世紀中葉を除き、8世紀前葉とみられる。第7図11と12は同一個体で、第7図13から第7図15は、南比企窯産の可能性が高い。第7図11から第7図15は、鳩山町南比企窯跡群の虫草山窯粘土溜め遺構出土の硯（上面17.5cm）と脚部の形状、外径の大きさも類似している。虫草山窯の硯は、渡辺一氏によりⅢ期（8世紀中葉）と報告されている〔渡辺1990〕。しかし、八幡前・若宮遺跡出土例は、脚部の透孔がやや多く、より古い傾向が認められる。また、渡辺氏が提示するほかのⅢ期の円面硯に比べ、虫草山窯の硯は形状からみても、やや遡る可能性があるため、本稿では、8世紀前葉とする。

9世紀中葉とみられる円面硯は、八幡前・若宮第1次調査遺跡及び、弁天西遺跡第12次調査から各1点、山城上遺跡第3次調査からは、9世紀中葉以降の完形の風字硯が1点発見されている（表4）。

霞ヶ関関連遺跡の再利用硯（表5－8～11）は図示していないが、弁天西遺跡第12次調査において4点認められる。湖西窯とみられる甕の胴部破片の再利用硯（表5－9）1点が、8世紀前葉と推定される。残りの3点は9世紀代で東金子窯とみられる。9世紀前葉の2点（表5－10・11）は坏を再利用し、9世紀中葉では蓋（表5－8）1点を再利用している。

定形硯と再利用硯の出土状況をみると、霞ヶ関遺跡群では霞ヶ関遺跡第12～16次調査と天王遺跡第15次調査から多く出土している。霞ヶ関関連遺跡の八幡前・若宮遺跡第1次調査では、円面硯が6号土坑に集中している。このように、霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡においては、硯の出土状況に偏りがあることがわかる。

②熊野遺跡

深谷市熊野遺跡（第2章第12図20、表2）は、榛沢郡衙関連遺跡と推定されている〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002B〕。出土した硯は圈足円面硯が13点、再利用硯が6点である。なお、集計表にはカウントしていないが、熊野遺跡からは、東海産の7世紀後葉とみられる蹄脚硯の破片が出土している〔栃木県立しもつけ風土記の丘資料館2003、深谷市教育委員会2008〕。詳しい出土状況などは不明であるが、武蔵国において現在のところ、唯一の蹄脚硯である。墨書で土師器坏に「神之内」、須恵器坏に「内」などが記されている。

該当面積は、旧岡部町と埼玉県の調査を合わせると約18,100㎡で、1,000㎡当たり円面硯の出土指数は72、再利用硯では33、2種類の硯の合計は105と円面硯の指数がかなり高いことが特徴である。円面硯10点は7世紀末から8世紀初頭であり、再利用硯の3点と合わせて、熊野遺跡では最も出土点数が多い時期である。円面硯は、竪穴住居からの出土も多いが、ほとんど覆土からの出土である。

7世紀末から8世紀初頭の上野産か末野窯産か不明の円面硯1点、及び8世紀中葉の南比企窯産の円面硯が1点認められる。これ以外の硯はすべて末野窯産であることが特徴で

ある。大多数の硯が末野窯から供給された熊野遺跡は、末野窯との関係が強いことが指摘できる。また、7世紀後葉には、須恵器高台盤の内面を使用した再利用硯がみられ、7世紀末から8世紀初頭に蓋2点、甕1点の3点の再利用硯が認められる（表2）。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査（A・C・D区）では、円面硯の出土がA区とC区に限られ、D区は再利用硯のみである。C区は再利用硯が認められず、硯の出土には偏りがある。

末野窯が近くに存在するとはいえ、7世紀末から8世紀初頭の円面硯が多数出土したことは、東国においても律令制が整備される時期と照応しており、官衙としての遺跡の性格が改めて裏付けられたといえよう。

③山王裏・西浦遺跡群

東松山市山王裏・西浦遺跡群（第2章第12図9）は、比企郡衙関連遺跡の一部と考えられている〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997A〕。円面硯は8世紀後葉5点、9世紀前葉5点であり、9世紀代と考えられる風字硯は1点みられるが、時期不明とした。この他に出土点数のみが報告された、時期不明の円面硯が12点出土している。円面硯の合計は24点とほかの遺跡に比べかなり多いことが特徴である。再利用の硯は2点のみである（表2）。該当面積は、山王裏遺跡の一部の山川入遺跡も含むと42,000 m²であり、1,000 m²当たり定形硯の出土指数は60、再利用硯では5であり、2種類の硯の合計では64と定形硯の出土指数が比較的高い。

定形硯はすべて南比企窯産の硯とみられることから、山王裏・西浦遺跡群と南比企窯の関係が強いことが推定できる。円面硯4点は、谷状の地形の包含層下に、溝として確認された遺構に流れ込んだものと報告されている。残りはグリッドで、基本的に伴う遺構は不明といえる。また、須恵器壺に朱墨書「企」、墨書「厨」、「比」などが認められる。

再利用硯は8世紀前葉、中葉の各時期とも須恵器の坏を使用した合計2点である。8世紀前葉のものは、口縁部をすべて打ち欠いていると報告されている。

山王裏・西浦遺跡群では、円面硯の出土点数が武蔵国府関連遺跡、若葉台遺跡に次いで多いことが特色である。また、8世紀後葉、9世紀前葉の武蔵国府関連遺跡の硯出土状況（第6図）と比較すると、定形硯の出土点数が増加し、再利用硯が少ない点は同様といえる。こうした硯の出土状況から、山王裏・西浦遺跡群が官衙的な性格をもつことが指摘できる。

④御殿前遺跡

東京都北区御殿前遺跡（第2章第12図15）〔東京都北区教育委員会 1988〕は、豊島郡衙の郡庁として推定されている。しかし、円面硯は2点のみで、各々8世紀前葉、9世紀前葉とみられる。小型円面硯の脚部は、検出された掘立柱建物の年代である9世紀前葉とした。発掘調査面積は13,371 m²で、1,000 m²当たり定形硯の出土指数は15と平均値をかなり下回る。

御殿前遺跡からは7世紀後葉の畿内系土師器が出土している。郡庁の創建年代は天武朝であり、9世紀第3四半期まで建て替えが行われて継続すると考えられている。政庁域の建物遺構の配置から、豊島郡の郡庁中枢部と考えられるが、硯の出土状況からみると出土

点数は極端に少ない点が大きな特徴である。

7世紀後葉では第6図・表2に示す武蔵国府関連遺跡、熊野遺跡からみても硯の出土点数は少ない。郡庁の建物は文書作成という実務より、儀礼などの政務を中心に行うためとも推定できる。したがって、陶硯のみでは遺跡の性格を判断するには限界がある。即ち、7世紀後葉においては、畿内系土師器などのほかの指標と組み合わせて、遺跡の性格を検討することが必要である。

3 入間郡内主要遺跡の硯（第2章第12図、第3・4・6図、表1・2）

①東の上遺跡

所沢市東の上遺跡（第2章第12図8）は、駅家としての可能性が高い遺跡と考えられている。円面硯は9世紀前葉の1点のみで、再利用硯は8世紀中葉と後葉に各々1点と硯の合計は3点である（所沢市教育委員会東の上遺跡関係報告書を参照）。該当面積は約60,000㎡で、1,000㎡当たり定形硯の出土指数は2、再利用硯では3であり、2種類の硯の合計は5と極めて低い。円面硯は東金子窯産である。再利用硯は2点とも須恵器坏が使われ、8世紀後葉のものは朱墨痕が認められる。

東の上遺跡からは、側溝をもつ「東山道武蔵路」に比定される道路遺構をはじめ、馬の戯画の残る漆紙文書、焼き印、轡などの馬具、馬歯などの馬に関する遺物は多く出土しているが、墨書土器は少ない。平城京においても馬寮地区は広範囲の調査にもかかわらず、陶硯がほとんど出土していないことも含め、今後、駅家として比定された遺跡の硯の出土状況を再検討する必要がある。

②若葉台遺跡

若葉台遺跡（第2章第12図2）は、入間地域における核となる集落である。遺跡の性格は第3章第2節第1項で既述している。坂戸市と鶴ヶ島市に広がり、両市で発掘調査が行われてきた。第3章で既述した通り、「時山」の朱墨書15点、同墨書4点、「高山」の墨書2点など、多数の墨書土器が出土している。

硯はすべて南比企窯産の圈足円面硯で、坂戸市発掘調査分で10点、鶴ヶ島市分で20点を数え（第3・4図、表1）、合計30点である¹⁶⁾（第6図、表2）。硯の点数では、武蔵国府関連遺跡に次いで円面硯の出土点数が多い遺跡である。再利用硯は坂戸市分について、筆者が実見してカウントしたもので17点を数える（坂戸市分は坂戸市遺跡調査団、及び教育委員会の若葉台遺跡関係報告書、鶴ヶ島市分は鶴ヶ島市遺跡調査会、及び教育委員会の若葉台遺跡関係報告書を参照）。今後、鶴ヶ島分を再実見すれば、さらに増加する可能性が高い。

該当面積は坂戸市45,710㎡、鶴ヶ島市107,482㎡であり、1,000㎡当たりの円面硯の出土指数は坂戸市で22、鶴ヶ島市は19、両市を併せると指数20である。再利用硯の指数では坂戸市は37で、定形硯と再利用硯の2種類の硯についての合計指数は、坂戸市が59となる。円面硯の出土指数は、平均値より低く、また、官衙遺跡である武蔵国府関連遺跡、

16) 鶴ヶ島市分の若葉台遺跡ではB区から新たに出土遺構、時期不明の圈足硯の脚部破片1点が発見されたが、今回の集計には含まれていない。

熊野遺跡、山王裏・西浦遺跡などに比べても低い。

既に検討したように、若葉台遺跡出土の円面硯のうち、10 点の硯面が残る硯のなかで、4 点は使用されていないこと、そのうち 3 点については、他の遺跡においては認められない降灰が硯面に付着している点は注目される。したがって、若葉台遺跡出土の円面硯で実際に使用されていた可能性のあるものは、6 点とみられる。

定形硯の出土状況からみても若葉台遺跡は、8 世紀前葉に画期が認められる遺跡であり、官衙とは限定できない。

一方、再利用硯の出土指数は比較的高く、再利用硯と定形硯を合計した坂戸市分の出土指数はほぼ平均値である。

円面硯は 8 世紀中葉に 9 点、8 世紀後葉に 11 点と、この二つの時期のものが多く検出されている。また、その出土状況は、鶴ヶ島市発掘調査区域である B 地点の 3 軒の大型竪穴住居跡、C 地点の複合住居と呼称されている重複した住居跡から 8 世紀中葉～後葉とみられる 12 点が、坂戸市域では B、C 地点と近接する 0 区の 2 軒の竪穴住居跡から 2 点が集中して出土している。B 地点の円面硯出土の竪穴住居跡からは、三彩小型壺、帯金具をはじめ、1 軒で 200 点以上の須恵器¹⁷⁾が検出され、さらに、北側にはこれらの竪穴住居跡よりやや先行する時期の可能性のある掘立柱建物が 2 棟認められる〔鶴ヶ島市教育委員会 1993〕。第 3 章 2 節 1 項で分析した通り、8 世紀中葉～後葉は若葉台遺跡では須恵器の出土点数が最も多い時期であり、多数の円面硯が出土した区域は、該期の中心域と考えられる。

坂戸市分の再利用硯は、8 世紀前葉の 8 点が最多で、蓋が 6 点、湖西窯産 1 点を含む甕が 2 点であり、蓋が多く使われている（表 2）。武蔵国府関連遺跡などと同様に、再利用硯が円面硯を補完している。円面硯の出土には偏りがあり、坂戸市 VI 区で 8 世紀前葉が 4 点、鶴ヶ島市 B 地点では 8 世紀中葉・後葉を合わせて 7 点が出土している（第 6 図）。

若葉台遺跡における円面硯出土状況の特徴は、後述する南比企窯跡群における 8 世紀代の円面硯の生産状況と近似する傾向を示す点である。南比企窯は若葉台遺跡の北西約 6 km に位置し、硯からみても両遺跡間の動態の有機的関係を指摘することができる。南比企窯の須恵器生産と関わる性格の遺跡であり、先述した万町北遺跡と陶邑遺跡との関係に類似する可能性が高いと考えられる。

③稲荷前遺跡

坂戸市稲荷前遺跡（A・B・C 区）（第 2 章第 12 図 10）は、古代武蔵国の 3 大古窯跡の一つである南比企窯と越辺川を挟んだ低台地上に位置する古墳時代後期からの遺跡である〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992、1994C〕。8 世紀後半には限定された地域に大型掘立柱建物と竪穴住居が規則的に配置されることから、豪族の居宅、郡衙の出先機関とも推定されている。8 世紀前葉の井戸からは武蔵国の郡名・郷名が習書された蓋などが検出されている。なお、土器の年代観は基本的には報告書を参考にしたが、9 世紀末葉から 10 世紀初頭とされたものは、9 世紀後葉に時期区分する。

17) 土器の出土状況は、遺物出土状況の写真から判断すると、床面ではなく、覆土中のものが大多数である〔鶴ヶ島市教育委員会 1984〕。したがって、出土した竪穴住居に伴う須恵器ではなく、掘立柱建物などからの投棄の可能性が高い遺物とみられるが、詳細は不明である。

出土した7点の硯はすべて南比企窯産の圈足円面硯で、再利用硯は10点である(表2)。該当面積は42,200 m²、1,000 m²当たりの出土指数では円面硯が17であり、再利用硯は24、2種類の硯の合計は40である。円面硯の出土指数は平均値より低く、若葉台遺跡鶴ヶ島市分、築道下遺跡と近似する値である。再利用硯の出土指数も平均値よりやや低く、出土指数からは官衙遺跡の可能性は低い。

円面硯は7世紀末から8世紀初頭及び、8世紀前葉が各1点、8世紀中葉3点、後葉2点で、8世紀代に多い。一方、再利用硯は8世紀前葉2点、同後葉2点、9世紀中葉1点、同後葉4点、10世紀1点と9世紀代に比較的多く、特に9世紀後葉の4点は武蔵国府関連遺跡の7点に次いで多い(表2)。

再利用硯はB区の竪穴住居跡から5点と比較的多く出土し、9世紀後葉では4点で、10世紀前葉の1点は灰釉陶器皿である。8世紀前葉の蓋、9世紀後葉の高台坏、10世紀前葉の灰釉皿各1点、合計3点(表2)は口縁部の打ち欠きが報告されている。

前述のように稲荷前遺跡と南比企窯跡群は至近距離に位置していることから、両者の有機的関係が予想された。しかし、円面硯の出土点数の変遷をみると、若葉台遺跡ほど多くなく、稲荷前遺跡は再利用硯の出土が9世紀代に目立つ遺跡である。

4 入間郡以外の主要遺跡の硯(第2章第12図、第6図、表2)

①光山遺跡

日高市光山遺跡は(第2章第12図11)古墳時代後期に始まり、8世紀代ではほぼ廃絶する遺跡で、轡、海老錠、及び17点の墨書土器などが検出されている[埼玉県埋蔵文化財調査事業団1994A]。光山遺跡は古代入間郡に所属していた可能性もあるが、報告書の記載にしたがい、高麗郡の遺跡として扱う。

出土した硯の10点はすべて再利用硯(第2章第12図、表2)であり、3点に朱墨が認められる。該当面積は18,000 m²、1,000 m²当たりの出土指数は56であり、再利用硯の指数は、次に述べる築道下遺跡に次いで高い。再利用硯として使用された器種は、8世紀前葉では蓋1点、坏・埴類2点、甕1点の4点である。8世紀中葉では坏・埴類、甕の各々1点の使用され合計2点を数える。8世紀後葉は薬壺蓋1点、長頸壺底部1点、及び蓋1点の3点と時期不明の甕1点である。

光山遺跡は下小畦川と小畦川の合流付近に位置しているため、古代の河川交通による交易拠点の可能性もある。また、光山遺跡は墨書土器が多数出土しているが、再利用硯のみであることから、官衙関連遺跡の可能性は低いとみられる。

②築道下遺跡

行田市築道下遺跡(第2章第12図18)では円面硯6点が出土し、うち南比企窯産が4点を占める。一方、再利用硯は19点と出土点数が多い(表2)[埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997B・1998D・2000A・B]。該当面積は32,550 m²で、1,000 m²当たりの出土指数は定形硯が18で、再利用硯58、硯の合計では77と、再利用硯の出土指数が16遺跡において最も高い。

円面硯は7世紀末から8世紀初頭及び、8世紀前葉、8世紀後葉が各1点、9世紀前葉が3点である。再利用硯としては7世紀末から8世紀初頭に坏を再利用した1点、8世紀

前葉5点（蓋、坏・埴類、高台坏・埴、長頸壺、盤が各1点）、8世紀中葉5点（坏・埴類4点、長頸壺1点）、8世紀後葉7点（蓋1点、坏・埴類5点、高台坏・埴1点）、9世紀前葉は蓋1点である（第6図）。即ち、8世紀代を中心に再利用硯が多く使用され、その器種としては坏・埴類が多い遺跡であることが特徴である。

築道下遺跡は元荒川と忍川の合流点付近に位置し、7世紀後葉から8世紀前葉には湖西窯・上野窯産の須恵器が多く出土している。9世紀前葉とみられる坏に墨書「寺」、埴に墨書「大」などが認められる。

また、桁行き11間以上、梁行3間の「長舎」といわれる大規模掘立柱建物が検出されている。9世紀前葉に定形硯の出土点数は3点を数えるが、8世紀代には再利用硯が多く使用されている点から、官衙関連遺跡というより、河川交易の拠点としての性格が浮き彫りになる。

③北島遺跡

熊谷市北島遺跡（第2章第12図19）からは円面硯が14点、風字硯3点、再利用硯3点が出土している（第6図、表2）〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団1989・1998C・2002A・2004A・B・2005A・B〕。該当面積は47,000 m²、1,000 m²当たりの出土指数は、定形硯が36、再利用硯6、硯の合計43である。定形硯の出土指数は平均値に近似する。硯の出土指数からみると、官衙関連遺跡の可能性は低くなる。円面硯は7世紀末から8世紀初頭1点、8世紀後葉では7点に増加し、9世紀前葉は円面硯4点と風字硯3点の7点である（表2）。定形硯のうち13点は、南比企窯産である。

再利用硯には7世紀末から8世紀初頭の脚付盤、8世紀前葉の坏・埴類、9世紀前葉の壺が各々1点使われている。622点の墨書土器をはじめ、習書木簡が出土し豪族の居宅や地域開発の拠点として「庄」の可能性が報告されている。その反面、実務用の再利用硯の報告例は異常な程、極めて少ないと指摘できる。

④落川遺跡

東京都日野市落川遺跡は武蔵国府と多摩川を挟んで対岸に位置し、11世紀末まで存続する遺跡である〔日野市落川遺跡調査会1997〕。墨書土器も300点以上出土し、焼き印と同一の「土」の文字が約150点を占める。また、伝世品とみられる火熨斗や「土」の焼き印が発見されており、小野の牧と関連する遺跡といわれているが、交通の要衝であり、交易拠点も兼ねていたと考えられる。落川遺跡も、再利用硯が極めて少ない遺跡である。

落川遺跡（第2章第12図14）の定形硯は、円面硯と風字硯の各7点の合計14点（表2）で、円面硯のうち2点は南比企窯産とみられる。再利用硯は4点が数えられる。該当面積27,000 m²、1,000 m²当たりの出土指数は、定形硯が52、再利用硯では15、硯の合計は67となる。定形硯の出土指数は、風字硯の出土点数が7点と、ほかの遺跡に比べ比較的多いため、高い値となっている。硯の合計は、平均値の出土指数である。

時期別に硯の出土状況をみると、定形硯は7世紀末から8世紀初頭の1点、8世紀前葉の円面硯2点のほか、甕と長頸壺を再利用した硯2点の計4点、8世紀中葉は円面硯と高台坏の再利用硯各1点で2点、8世紀後葉では円面硯1点、9世紀前葉では風字硯1点である。また、9世紀後葉で円面硯2点、風字硯1点及び緑釉陶器皿を再利用硯とする1点

の計4点、10世紀前葉の風字硯1点が認められる。

風字硯の4点は、9世紀代及び10世紀代とみられるが、時期不明とした。9世紀以降の硯は合計18点のうち10点を数える(表2)。また、カウントしなかったが、長方形硯とみられる11世紀以降の陶硯が1点ある。9世紀以降の新しい時期に硯の出土点数が多く偏りも認められる。また、再利用硯の2点には朱墨がみられる。

5 生産地と消費地の硯の状況(第2章第12図、第6図)

上述した各遺跡における出土状況をみると、武蔵国の官衙関連遺跡や大規模集落に定形硯の供給を行った主な窯は、7世紀後葉では、出土量は少ないが湖西窯をはじめとする東海地域の古窯である。7世紀末から8世紀前葉では、末野窯と南比企窯跡群であり、8世紀中葉以降は南比企窯跡群で硯の生産が多くなる傾向が認められる。東金子窯は、8世紀中葉以降から硯を生産するとみられる。このことは、各遺跡における須恵器供膳具、及び硯の供給関係と共通する傾向があるといえよう。

生産地である窯場における硯の出土状況をみると、末野窯では7世紀末とみられる獣脚硯1点、7世紀末から8世紀初頭の円面硯2点、及び風字硯の一種類とみられる2点で、合計5点とわずかである。

一方、南比企窯跡群(第2章第12図)では、7世紀末から8世紀初頭の石田窯、赤沼古代瓦窯、8世紀代を中心とする鳩山窯から合計30点の円面硯が出土している(第6図)。鳩山窯では、工人集落からも8世紀代の円面硯12点、宝珠硯1点、坏再利用の硯が1点出土している。窯跡出土の硯と工人集落出土の硯を区別して第4図に出土状況を示す。宝珠硯の年代については、猿投窯黒笹3号窯、同7号窯で出土した宝珠硯が8世紀後葉から9世紀初葉であることを踏まえ、その上限として8世紀後葉とする。

前述した比企郡衙関連遺跡とみられる山王裏・西浦遺跡の8世紀後葉、9世紀前葉の円面硯10点(表2)は、胎土からすべて南比企窯産である。報告書で既に指摘されているように、硯の形状からみると鳩山窯以外の南比企窯産である。また、北島遺跡においても、8世紀後葉から9世紀前葉の定形硯は、13点が南比企窯産である。

第4図の通り、鳩山窯では9世紀前葉の硯は確認されていない。しかし、遺跡から検出される円面硯によって、南比企窯跡群の別区域の窯で硯が生産されていたことが推定できる。南比企窯においては8世紀中葉以降に円面硯の生産が増加し、8世紀後葉、9世紀前葉においても継続して多くの硯が生産されたとみられる。

第14図の南比企窯跡群における8世紀代の定形硯生産状況と近似する出土動態のパターンは、既述した通り若葉台遺跡である。また、稲荷前遺跡の硯出土状況も、若葉台遺跡ほど顕著ではないが同じ傾向である。即ち、南比企窯跡群と若葉台遺跡は、両者が連動する動態過程を示しているといえる。

第2項 武蔵国の定形硯の動態

1 定形硯の時期別動態(表3・第9図)

対象とした16遺跡について定形硯の時期別変遷過程を、表3と第9図にまとめた。

はじめに定形硯の時期別の動態を中心にみてゆく。古代武蔵国の硯は、7世紀後葉には武蔵国府関連遺跡でわずかに1点であった円面硯が、7世紀末から8世紀初頭では、霞ヶ

関遺跡群、熊野遺跡において急増している点が特徴である（表3）。この二つの遺跡には、末野窯産の硯が多数供給されている。また、7世紀末から8世紀初頭の律令制整備期にあたる時期に定形硯が出土する遺跡数は8遺跡となり、将監塚・古井戸遺跡の中空硯を含めると24点に増加することが特徴である。

8世紀前葉の硯の合計数は19点であるが、出土遺跡数が霞ヶ関関連遺跡をはじめ、9遺跡に増える。8世紀中葉は7遺跡から、8世紀前葉と同数の定形硯が出土している。8世紀後葉の硯は、出土遺跡数では8世紀前葉と同数の9遺跡であるが、出土点数は武蔵国府関連遺跡において急増し、若葉台遺跡、北島遺跡、山王裏・西浦遺跡群でも増加した結果、52点と最も円面硯の出土点数が多い時期となる。また、8世紀後葉以降は、南比企窯産の硯の出土点数が急増する時期である（表3）。

9世紀前葉になると武蔵国府関連遺跡や北島遺跡において、風字硯が出土する。武蔵国府関連遺跡の定形硯の出土点数は、8世紀後葉から引き続いてほかの遺跡よりも多いが、山王裏・西浦遺跡群、築道下遺跡、北島遺跡においても一定数が認められる。9世紀中葉以降は、霞ヶ関関連遺跡、武蔵国府関連遺跡、落川遺跡において円面硯、風字硯がわずかに出土する（表3）。

定形硯全体の出土点数の変遷をみると、7世紀末から8世紀初頭において急増した後、8世紀前葉、中葉では一定数となったが、8世紀後葉には出土点数が8世紀中葉の2倍以上に増加し、9世紀前葉も多くなる。定形硯は9世紀中葉以降、急激に減少することが特徴である（第9図）。

2 定形硯の社会的性格の変化

消費地における定形硯の出土数の変化は、南比企窯跡群（第2章第12図）や末野窯の硯の生産量との関係が問題点となる。7世紀末から8世紀初頭に定形硯の出土が急増する特徴は、特に末野窯での硯の生産が増加したことが要因と考えられる。即ち、この時期は律令制が整備される時期に当たり、生産地周辺の官衙関連遺跡に対して、硯の供給が開始されはじめたと推定できる。一方、8世紀中葉から後葉では末野窯と入れ替わり、南比企窯跡群で硯の生産が増加することが特徴である。

このように硯の供給源の入れ替えと変遷が認められる背景としては、窯場における硯の生産量や窯場から供給に伴う、須恵器全体の効率的運搬などの地理的な要因も考慮することが必要である。7世紀末から8世紀初頭の官衙関連の熊野遺跡で円面硯が急増することは、末野窯に硯の注文生産が行われたと推定される。

武蔵国において7世紀末から8世紀初頭の定形硯は、主に官衙などの需要が前提として生産されていたと考えられる。即ち、7世紀末から8世紀初頭において、定形硯が多く供給されている遺跡は、郡衙などの官衙関連遺跡と考えることが妥当であろう。

一方、円面硯の出土点数が最も多い8世紀後葉は、7世紀末から8世紀初頭の円面硯の需要層とは、社会的性格が異なると考えられる。南比企窯跡群では8世紀中葉以降、多数の円面硯が生産されたが、その生産増加の背景には、官衙関連遺跡のみではない硯の需要層の増加が認められる。即ち、硯が文字を書く実務的な文房具として、交易拠点・豪族住宅など、地域の核となる遺跡からも出土する傾向が指摘できる。また、官衙関連遺跡でも、武蔵国府関連遺跡や山王裏・西浦遺跡群のように、円面硯の出土点数がかなり多くなる傾

向が認められる。

このように定形硯は、8世紀後葉には官衙などの限定された供給先からの特注品という姿を変えて、同時期に窯場から須恵器供膳具が大量に生産されたことと同様に、定形硯が交易品として生産され、官衙関連遺跡のみならず、交易拠点・豪族層の居宅などにも広く供給されたと考えられる。

具体的には7世紀末から8世紀初頭と8世紀後葉では、文字や計算に関わる識字層、使用層が拡大し、その社会的底辺が拡大して増加したことが推測できる。即ち、定形硯のうち特に円面硯は、7世紀末から8世紀初頭と8世紀後葉では、社会構造の変化に対応して、硯のもつ身分表徴の意味そのものが変化したと考えられる。

第3項 武蔵国の再利用硯の動態（第6・10～15図、表6～8）

1 再利用硯の時期別動態

再利用の硯に関して遺跡ごとに時期別の変遷過程を概観する（表6、第10図）。

7世紀後葉は、熊野遺跡では高台付盤1点が再利用硯として使われている。7世紀末から8世紀初頭の再利用硯は、熊野遺跡3点、霞ヶ関遺跡群、築道下遺跡、北島遺跡が各1点、合計6点である。8世紀前葉は再利用硯が最も増加して45点、11遺跡となる。

8世紀前葉の武蔵国府関連遺跡では12点（蓋3点、坏・埴類3点、高台坏・埴類5点、高台盤1点）と多く、そのうち、湖西窯産は高台坏・埴類4点、蓋1点の5点を占める。また、同時期の若葉台遺跡では8点（蓋6点、甕2点）、霞ヶ関遺跡群は6点（蓋2点、高台坏・埴類1点、甕3点）、築道下遺跡で5点（蓋、坏・埴類、高台坏・埴類、高台盤、及び長頸壺の各1点）を数える（表6）。特徴としては、国府関連遺跡と郡衙、及び地域の交易拠点・豪族居宅などに再利用硯が多く認められる（第6図）¹⁸⁾。

8世紀中葉は再利用硯24点、9遺跡で、武蔵国府関連遺跡では7点（蓋2点、坏・埴類4点、高台坏・埴類1点）、次に、築道下遺跡において5点（坏・埴類4点、長頸壺底部1点）、若葉台遺跡は4点（蓋1点、坏・埴類2点、高台坏・埴類1点）となる。8世紀後葉においても再利用硯は多い傾向が認められ、8遺跡で計25点である。築道下遺跡では7点（蓋1点、坏・埴類5点、高台坏・埴類1点）、若葉台遺跡で5点（蓋2点、坏・埴類2点、高台坏・埴類1点）と、この二つの遺跡で再利用硯の出土点数の半数近くを占め、特定の遺跡に集中することが特徴である（表6）。

一方、9世紀前葉では再利用硯の出土点数が12点、6遺跡と減少し、武蔵国府関連遺跡では5点（蓋2点、坏・埴類3点）である。また、9世紀中葉は6点、4遺跡で最低となるが、9世紀後葉には12点、3遺跡で武蔵国府関連遺跡は7点（坏・埴類1点、高台坏・埴類3点、甕1点、灰施陶器2点）、稻荷前遺跡では4点（坏・埴類1点、高台坏・埴類2点、皿1点）が認められる。

10世紀前葉も5点、3遺跡（表6）であり、武蔵国府関連遺跡では灰釉陶器の3点が再利用硯として使用されている。

第10図は16遺跡から出土した再利用硯の出土点数を時期別にまとめたものである。再利用硯が最も多く出土する時期は8世紀前葉であり、8世紀後葉、8世紀中葉においても

18) 動態表に関しては、高久健二先生から教示いただき、また〔高久2007〕を参考にしている。

比較的多く、9世紀代になるとかなり減少していることがわかる。

2 再利用硯の器種別動態

再利用硯に使われた素材である器種の傾向をみてゆく。遺跡ごとに使用された器種を表6にまとめる。再利用硯の出土点数が多い遺跡は、武蔵国府関連遺跡 42 点、築道下遺跡 19 点、若葉台遺跡 17 点である。武蔵国府関連遺跡では坏・埴類が最も多く 13 点、次に高台坏・埴 10 点、蓋 8 点、甕 4 点、灰釉陶器 5 点、その他の 2 点は高台付盤である。

再利用硯の高台坏・埴は、完形だけでなく口縁部を欠損あるいは打ち欠き、内面を硯面として使用する、あるいは、逆位にして高台を堤としその外面を硯面とすることが多い。その場合、高台付盤と再利用時の形状が近似することが多く、高台付盤も高台坏・埴と同類と考えることは可能である。したがって、武蔵国府関連遺跡で高台付盤を高台付きの坏・埴類と合計すれば、坏・埴類に近似する 12 点となる。

築道下遺跡では、坏・埴類 11 点が最も多く、高台をもつ底部を使用した長頸壺 2 点を高台坏・埴類と合計すると 4 点となり、この他に蓋 3 点である。若葉台遺跡では、蓋が 9 点と最多で、坏・埴類 4 点、高台坏・埴及び甕各 2 点である（表 7）。第 30 図において再利用硯に使用された器種構成全体をみると、坏・埴類が最も多く 34%、次いで蓋 25%、高台坏・埴 16%、甕 11%、灰釉陶器 4 %、その他 10%となる。

既述したように、そのほかに含まれる器種を確認すると（表 7）、14 点のなかで長頸壺など高台をもつ器種が 12 点みられることから、再利用硯として使用される際、高台坏・埴類と同種類として考えるならば、蓋とほぼ同じ割合で使用されたといえよう（第 11 図）。

また、灰釉陶器の埴も基本的に高台が付くため、再利用硯には、坏・埴類に次いで、底部に高台が付く器種や蓋という機能に対する指向性があったといえる。即ち、高台や蓋の返りは、円面硯と同様に液体の墨を溜める堤の代わりとして使用していたと推定できる。

再利用硯の使用器種の点数（表 8）と、その割合（第 12 図 G 4～11）から時期別に分類してみてゆく。7 世紀後葉は高台付盤の 1 点である。坏・埴類は点数では、8 世紀中葉が最も多く 16 点で、7 世紀末・8 世紀初頭（2 点）から、9 世紀後葉（2 点）である。したがって、坏・埴類は約 200 年間を通して、再利用硯として使われていたことが指摘できる（第 12 図 G 4～G11）。

坏・埴類の蓋を再利用する硯は、点数をみると 7 世紀末から 8 世紀初頭 2 点、8 世紀前葉 16 点、8 世紀後葉 9 点である。その再利用硯としての割合は、7 世紀末から 8 世紀初頭（第 12 図 G 4）、8 世紀前葉（第 12 図 G 5）、8 世紀後葉（第 12 図 G 7）において、30%以上であることが特徴である。

高台坏・埴類は、点数では 8 世紀前葉 7 点、中葉 3 点、後葉 4 点、9 世紀前葉 2 点、9 世紀中葉 1 点、9 世紀後葉 5 点である。一方、割合でみると 8 世紀前葉（第 12 図 G 5）から後葉（第 12 図 G 7）においては 10%以上、9 世紀前葉（第 12 図 G 8）で 17%、9 世紀後葉（第 12 図 G10）では 41%と、高台坏・埴類の使用の割合は次第に高くなる傾向がみられる。

甕の再利用硯は点数をみると、8 世紀前葉で 8 点であり、7 世紀末から 8 世紀初頭、8 世紀中葉、9 世紀後葉では各 1 点である（表 8）。8 世紀前葉に比較的多く再利用されている傾向といえる。

多賀城跡では、須恵器坏・埴類から甕へと須恵器の再利用硯の使用器種が各器種の供給の状況と同じ傾向を示し、時期別に変化していることが指摘されている。

一方、武蔵国においては坏・埴類、蓋、高台坏・埴類などの器種が比較的多く使われている。また、甕は7世紀末から8世紀初頭、8世紀前葉に一定の割合で使われ、9世紀後葉以降には、再び再利用硯の素材となる。7世紀末から8世紀初頭、8世紀前葉における甕の再利用硯は、硯に適した硬質で緻密な胎土である湖西窯産の甕が多く搬入されたことを反映していると考えられる。

武蔵国の再利用硯の器種で特徴的なことは、①坏・埴類の再利用硯が点数では最多であり、8世紀代に多いこと、②蓋が7世紀末から8世紀前葉に多く再利用硯として使用されていたこと、③高台をもつ各器種の再利用硯への指向性が認められるといえる。

現在のところ16遺跡において、7世紀後葉の定形硯は武蔵国府関連遺跡のみであり、定形硯が極めて稀な時期といえる。したがって、この時期から武蔵国では蓋と高台をもつ器種が、再利用硯に使用された可能性が極めて高いといえる。

3 供膳具の画期と再利用硯

東国の7世紀後葉は、古墳時代後期の組み合わせの食器である須恵器丸底坏 H（蓋坏）（第14図）から、高台をもたない坏 G と返りをもつ蓋の組み合わせ、さらに高台付坏 B と返り蓋を組み合わせる供膳具が出現する画期である。土師器坏においても、内外面に金属器の光沢を模したと考えられる暗文が施された坏 A、C が出現する（第14図）。これらの供膳具は、基本的に大陸系食器である金属器模倣食器の影響とされている〔西1986〕。

7世紀後葉の坏 G と返りをもつ蓋の組み合わせ、また、高台付の坏 B と蓋の組をみ合わせた食器（第14図）は、律令制官人層の食器と説明されてきた。同時に先述した通り、坏 B は坏身に高台をもつことから、蓋も坏身のどちらも再利用硯への指向性が高い器種といえる。これらの蓋と坏類の東国における出現と地方への導入は、供膳具としての役割をもつことは当然である。

しかし、律令制整備に必要な硯の入手が困難で、かつ実務が中軸となる地方官衙成立期では、即座に硯としての使用、再利用が可能であるという器形がもつ特徴が重要である。即ち、東国への金属器系食器導入は、官人層への給食を主な目的とするのではなく、文書行政や識字層の需要拡大を背景として、硯への再利用が可能な供膳具であり、文房具としての役割も兼ね備えている属性が主な契機であることが指摘できる。つまり、金属器系食器の導入は、硯への再利用可能な属性が大きな要因の一つになったと考えることができる。

7世紀後葉の埼玉県上里町八幡太神南遺跡（第2章第12図17）1号住居跡では、土師器坏類及び、多数の畿内系土師器のほか、須恵器坏 H の蓋（4点）・坏 H（1点）、坏 G（6点）、及び多数の返りをもつ蓋（40点）や羽口が検出されている（第13図）。加美郡評衙など、官衙関連遺跡と考えられている。須恵器の返り蓋は坏 G とセットとなるが、蓋の出土点数は40点と多く、須恵器全体では70%を占める。床面ではなく覆土からの出土であり、周辺の掘立柱建物からの投棄と考えられる。

しかし、蓋の点数の多さは、通常の供膳具としての使用のみで考えることは困難である。須恵器返り蓋の高い出土率と集中は、7世紀後葉における定形硯の供給不足の反映としてみることができる。さらに、鈕を欠損する硯としての再利用の可能性が高い残存形状が6

点報告されていることも見逃すことができない。すべて再利用硯に使用されたものとは断定できないが、円面硯の出土が認められていないことから、円面硯の入手困難な状況において、必要な実務を果たすために、硯として使用可能な器種としてストックしていたことも考えられる。

第2項1の平城京で既述したように、蓋を硯として使用している平城京でも、蓋の確認点数が対応する坏身より多い。時期は異なるが、武蔵国八幡太神南遺跡と同様であり、上記した仮説の補強材料の一つとして指摘しておきたい。

第4項 東国の定形硯と再利用硯の動態（第6・15図、表2）

各遺跡において定形硯と再利用硯の2種類の硯を組み合わせ、硯の出土状況動態図（第6図）により、武蔵国の主要な遺跡における硯の動態を概観する。第6図は8世紀代を中心に、定形硯あるいは再利用硯が多数出土した8遺跡を選び、表2を基にその出土状況を具体的に表したものである。同図には生産地として、南比企窯跡群における硯の出土点数も表す。

1 武蔵国の硯の動態と遺跡の性格

古代の武蔵国において、硯出土状況の動態と遺跡の性格を資料で①～⑥にパターン化することを試みる。

①7世紀末から8世紀初頭の円面硯の出土点数が多い遺跡は、官衙関連遺跡の蓋然性が高い。②8世紀前葉は、再利用硯の出土数が増加する遺跡が多くなり、再利用硯が定形硯の補完をしている状況がある。③8世紀後葉以降、官衙関連遺跡では多数の円面硯が出土しているが、地域の豪族層に関する遺跡でも、定形硯が一定量出土する。④8世紀代には交易、流通関係などの施設とみられる遺跡では、定形硯よりも再利用硯が多く出土する傾向がある。⑤8世紀後葉、9世紀前葉では官衙関連遺跡において、硯の出土点数が急増する。⑥円面硯に関する出土動態では、南比企窯跡群の硯の生産パターンとほぼ同様の遺跡が認められる。

既に指摘した点もあるが、①から⑥について補足する。①により7世紀末葉から8世紀初頭の初期官衙は、霞ヶ関遺跡群、熊野遺跡において、この時期に整備されたことが推定できる（第6図）。②とも関連して武蔵国府関連遺跡では、8世紀前葉から文書作成の頻度が高くなった可能性が高い。③は、南比企古窯跡などの硯生産の増加と動態が連動する。

④の再利用硯の出土状況では、築道下遺跡や光山遺跡のように、再利用硯が一定数継続して存在する一方、定形硯はごくわずか、あるいは皆無の遺跡がある。こうした遺跡においては、再利用硯が一定数出土することから、文字・数字を書くための道具としての需要は存在するが、必要な数量の円面硯を入手できなかったとみられる。⑤は、武蔵国府関連遺跡（第6図）や山王裏・西浦遺跡群（表2）で、硯の出土点数が急増する時期であり、その出土状況による。

また、⑥について若葉台遺跡は既述した通り、硯の出土動態パターンが南比企窯跡群と類似していることから、この二つの遺跡の関係は深いことが推定できる。また、円面硯は出荷の際に、硯面を研磨していた可能性が指摘されていることからみれば、若葉台遺跡では硯面に降灰が付着するものが出土しているため、この点からも既述の通り、若葉台遺跡

が単に消費遺跡ではなく、鳩山窯などの南比企窯との関係が深い遺跡であったといえる。さらに、若葉台遺跡の定形硯出土指数は、平均出土指数と近似していることから、官衙関連遺跡としての可能性は低い。一方、8世紀前葉に限定すると再利用硯の出土点数が多いことから、文書作成を伴う交易拠点であることは確実視される。

霞ヶ関遺跡群、熊野遺跡では、7世紀末から8世紀初頭に末野窯から硯を入手していたとみられる。南比企窯跡群の硯の生産は、7世紀末から8世紀初頭に開始されている。しかし、8世紀前葉までは生産量が少ないため、国府や郡衙官衙関連遺跡、交易拠点や豪族居宅の遺跡などでは、定形硯の供給を補完する再利用硯を使用し、実態として文書作成あるいは、交易に必要な事務処理を行っていた可能性が高い。

2 再利用硯の認識と実態

8世紀前葉における再利用硯の需要増加は、霞ヶ関遺跡群や武蔵国府関連遺跡において、本格的に文書作成が行われるようになったことが推定できる。

9世紀中葉以降の硯についてみると、時代が下るにつれて、文字の識字率は徐々に高くなったと推定される。一方、硯の出土量は減少する傾向が指摘できる。これは遺跡の存続期間が関係することは当然であるが、それ以外の要因として、平安時代に文書作成が少なくなっただけではなく、むしろ再利用硯の使用対象の器種として、灰釉陶器の出土が多くなったにも関わらず、その硬質で緻密である特性を活かす再利用硯が、現状では認識されていないことを指摘しておきたい。

灰釉陶器は交易品であるが、東国では9世紀中葉以降に増加する傾向が明らかである[坂野和信 2003]。灰釉陶器の埴・皿・壺類は高台をもつ器形であり、胎土も堅緻で再利用硯に適す素材である。武蔵国府関連遺跡などでは、灰釉陶器の再利用硯が認められている。他にも9世紀後半から10世紀代を中心とし、さいたま市氷川神社関連の鑄造関連工房とも推定される氷川神社東遺跡[大宮市遺跡調査会 1993]では、須恵器の蓋、埴をはじめ、多数の灰釉陶器、須恵器大甕の破片が再利用硯として多数使用され、朱墨の付着も認められることが報告されている。特に再利用硯に使用された須恵器大甕の破片の大部分が接合するため、短期間に使用され、まとまって廃棄された可能性が指摘されている。

一方、9世紀前半からの豪族居宅あるいは、「庄」と考えられている上里町中堀遺跡(第2章 12 図 18)では硯に関して、10世紀前半の陶硯1点のみで、灰釉陶器などに関して再利用硯の記載は公式報告書には一切認められない。

しかし、約100点という多数の墨書土器が出土していることも含めて、別の記述では、灰釉陶器、須恵器の埴などを使った多数の再利用硯の存在¹⁹⁾が記され、明らかに資料に対する認識矛盾が存在することを指摘できる。

東国では、9世紀以降、硬質で高台付の灰釉陶器が再利用硯の素材となったことが明らかであり、高台付であっても堅緻ではない、在地製の土器は硯に適するかどうか。東国では9世紀後葉から10世紀に灰釉陶器の出土量増加が著しい。即ち、多数の墨書土器と灰釉陶器が伴出している遺跡では、土器の再利用という視点から、再利用硯を認識することが重要である。今後、考古学の手法によって解決すべき問題点である。

19) 「中堀遺跡では、多数の転用硯が出土」と記されている[田中広明 2006]。

3 上総国と下総国の硯

武蔵国では比較的多くの定形硯、再利用硯が認められることが把握できた。比較検討のため、東国の中でも特に再利用硯が多く、武蔵国の状況とは異なる様相である上総国と下総国について簡単に触れる。

① 上総国

稲荷台遺跡

はじめに上総国の国司館と推定されている、千葉縣市原市稲荷台遺跡の硯出土状況についてみてゆく。稲荷台遺跡は、古墳時代中期後半の「王賜」鉄剣銘出土の稲荷台1号墳をはじめ、11基の稲荷台古墳群と同じ遺跡の範囲である。8世紀中葉から11世紀初頭までの遺跡で、竪穴住居跡79軒、掘立柱建物跡45棟が検出され、中心となる時期は9世紀である。

特徴のある遺物として、「丸」、「山万」、「国厨」、「道士」、「貞観十七(875)年十一月廿四日」などの墨書が204点、また、多数の灰釉・緑釉陶器が住居跡、掘立柱建物跡をはじめ、祭祀遺構とみられる土器廃棄遺構、土器埋納遺構から出土している。

定形硯は8世紀後葉とみられる湖西窯産の圈足硯(第15図1)が1点、再利用硯は8世紀中葉1点、8世紀後葉4点、9世紀前葉3点、中葉2点(第15図3)、9世紀末葉から10世紀前葉2点、10世紀前葉7点、10世紀中葉2点の計21点と、再利用硯が多数認められている。報告書ではもう1点小破片の再利用硯を報告しているが、砥石の可能性があるので除いている。

硯の大部分は住居跡から出土しているが、圈足硯1点は、8世紀後葉の住居跡からの硯面と、稲荷台1号墳の9世紀代の遺物と一緒に検出された脚部の破片が接合している。

再利用硯の器種は19点が須恵器の甕の破片で、大半は長辺の長さが10cm以上で、四角形や五角形などに打ち欠き調整し、内面に磨耗痕が認められる(第15図2・3)。8世紀中葉と、8世紀後葉(第15図4)である2点の再利用硯は、須恵器の高台坏底部で、各々内面あるいは外面に朱墨が付着し、うち8世紀中葉のものは、稲荷台1号墳の9世紀代の遺物と一緒に検出されている。再利用硯は検出された硯の95%を占めている。特徴的なことは、8世紀代の硯を古墳の墳丘上で行われた9世紀代の祭祀で、使用している可能性が高い点である。

上総国分僧寺跡

稲荷台遺跡から南西1.2kmに上総国分僧寺跡が位置している。南北480m、北辺東西236m、南辺東西299mと変則的な寺域外郭溝で区画されている。伽藍は中軸方位の異なるA・B期の2時期が確認され、A期(741年から740年代後半)は瓦葺きではなく仮設的で、B期(740年代後半から)に本格的に伽藍の造営が行われたと推定されている。講堂はA期の中軸方位のままであるが、760年前後には中門、回廊、塔、金堂に加え、北側に官衙的政所院も造営されている。9世紀代中葉には主要伽藍は火災を受け、9世紀末から10世紀第1四半期には政所院は消滅する。その後も火災と復興を経て規模が縮小し、現代に至っている。施釉陶器をはじめ、風鐸、釘などの鉄製品や、羽口をはじめ特徴のある遺物が多数認められる。

定形硯は9世紀中葉と時期不明の圈足硯の脚部破片が2点のみである。再利用硯は、8世紀中葉4点、9世紀中葉1点、後葉1点、10世紀前葉1点、併せて8点が認められている。8世紀中葉のうち1点は蓋、もう1点は茨城県新治窯産高台坏で朱墨が認められている。9世紀中葉の1点、10世紀前葉の1点は、灰釉高台碗の再利用で、それ以外の4点は甕の破片を硯としている。再利用硯の時期不明の1点は隅丸台形状を呈し、報告書では木杵の付帯を推定している。硯は堅穴建物、廃棄土坑、溝から検出されている。

上総国の2遺跡について硯の出土状況を概観すると、共通している点は、再利用硯の優位性と甕の破片を再利用した硯が多数認められ、逆に定形硯が少ない状況である。国司館、国分寺では基本的に定形硯を入手し易い立場や状況であるにもかかわらず、再利用硯が多用されている。上総国では、武蔵国と異なり、7世紀後葉からの須恵器窯がないためと考える研究者もいるが、両遺跡とも、施釉陶器が多いことから硯も同様に、東海地方の諸窯から搬入することは十分可能であったと推定できる。また、上総国では8世紀第2四半期からの短期間の操業であるが、永田・不入窯があり、円面硯もわずかに生産されている〔田所2006〕。したがって須恵器窯の有無のみが定形硯の少ない理由とはいえない。周辺遺跡の状況を把握していないため、今後定形硯の数が増加する可能性はある。しかし、再利用硯の点数が多いことが上総国の特色であるといえる。

② 下総国

下総国の硯の出土状況は、各遺跡の時期の詳細は不明であるが、「房総における郡衙遺跡の諸問題―下総国を中心として―」〔(財)千葉県教育振興財団 2006〕により、総数が集計されているためこれに基づいて、様相を把握する。

定形硯は円面硯と風字硯であり、円面硯は全て圈足硯で、30遺跡から51点出土し、8世紀から9世紀のものである。出土点数では、武蔵、常陸、上野、下野と比較すると少ない。一方、銚子の出土点数は遺跡数、及び数量とも全国でも多いという傾向があるという。

円面硯の出土点数は下総国府推定地の千葉縣市川市国府台遺跡では、周辺遺跡をあわせると5点である。埴生郡衙跡とみられる千葉県埴生郡大畑Ⅰ遺跡では、周辺遺跡との集計で9点である。圈足硯は官衙遺跡で多い傾向がある。また、印旛郡の官衙関連遺跡とみられる成田市大袋小谷津遺跡の9点出土を除くと、1点あるいは2点という出土状況である。風字硯の出土は、8遺跡から9点と少ない状況だが、官衙関係遺跡のみでなく、拠点的な集落からも出土する。

再利用硯の点数の多い遺跡は、下総国府推定地の国府台遺跡と周辺遺跡が多く12点を数え、そのうち甕再利用の硯は3点である。市川市下総国分僧寺跡では再利用硯は20点で、甕の再利用硯は3点と多いが、大畑Ⅰ遺跡では確認されていない。一方、船橋市印内台遺跡では再利用硯は12点、千葉市鷺谷津遺跡は甕3点の再利用硯を含み8点、同市観音塚遺跡は7点、印西市鳴神遺跡は甕3点の再利用硯を含み8点、八千代市井戸向遺跡では11点、同市白幡前遺跡は甕再利用硯7点を合わせて16点、成田市大袋腰巻遺跡は甕再利用硯の16点を合わせて21点、匝瑳郡城山遺跡では甕再利用硯13点を含む14点、同郡神山谷遺跡は、全て甕再利用硯で29点を数える。

下総国府推定地の国府台遺跡と下総国分僧寺跡を除き、再利用硯の多い遺跡では定形硯は、ほとんど出土していない。また、甕が再利用硯として、比較的多く使われる傾向が認

められる。即ち、再利用硯の出土点数の多い遺跡は、一部官衙関連遺跡の可能性が高く、あるいは周辺地域の拠点となる集落であることは間違いない。

下総国においても、上総国と同様に再利用硯が多い傾向が指摘できる。上総国同様に、東海諸窯などから硯の搬入が十分可能であったにも関わらず、再利用硯が多い点は武蔵国とは異なる特徴である。この両国の相違とその理由は何であるのか、説明が必要である。既述したように、7世紀後葉に須恵器窯が国内に存在しているか否かという違いばかりではないと推定できる。即ち、硯による官人層の身分や権威を象徴、表徴するという間接的なシステムではなく、直接的な鈿帯・服装などによる各個人の身分象徴システムを採用していた可能性が高い。上総・下総国は、武蔵国より都城の身分表徴のシステムを導入して、中央の制度に近い様相であったと考えられる。

4 地方官衙の整備と硯の動態

武蔵国における硯の性格の変化、また、硯が出土した遺跡成立の背景は、7世紀代と8世紀代、9世紀代の各時期において異なっていると考えられる。7世紀末から8世紀初頭の円面硯などは、律令制整備の象徴として一連のものである。しかし、8世紀後葉から9世紀前葉における定形硯の急増は、窯場での生産が多くなり、官衙のみならず硯を必要とする豪族層においても、入手可能となったことが推測できる。須恵器供膳具の流通と同様に、陶硯も官需用から民需用へと社会的需要層が拡大したと考えられる。なお、定形硯と再利用硯の合計では、8世紀後葉が最も多い（第9図）。硯が多数認められるこの時期は、交易・流通のネットワークの緊密化、及び物流量そのものが拡大するという社会構造の変容と照応すると考えられる。

定形硯には既述の通り、実用的な側面と律令制官人層の象徴という二つの性格が考えられる。この二つの性格が時代と共に社会状況を反映し、変化しながら現象化しているといえる。硯のほかに上総国・下総国のように、律令制官人層は、鈿帯などより個人に帰属する個別の身分表徴のシステムを重要視した国もある。しかし、武蔵国は官人として重要な実務面である文書作成の道具の一つである硯を選択したといえる。

硯の出土状況からみると7世紀後葉は、律令制整備の前段階ともいえるが、具体的に官衙としての体裁はほとんど整っていない時期である。第3項1再利用硯の時期別、2器種別動態で指摘した通り、定形硯はごくわずかに出土するのみで、坏Bと返りをもつ蓋を実用的な硯（再利用硯）として、使用した時期である可能性が高い。

上記の通り、7世紀末葉から8世紀初頭は、律令制の整備時期ともいえる。官衙として必要不可欠なハードウェアである正倉は、非常の備えとして粳をつけたまま穀稲を蓄える不動倉が国家支配の「正当性」を示す公共的施設〔山中 1994〕として、官衙の象徴の一つあり、整然とした掘立柱建物が建てられ始めた時期として位置づけることができる。硯は律令制における文書行政の象徴としての性格に重点がおかれた時期であり、官衙としての形式を整えるため、主要な窯場に対して円面硯を発注したと考えられる。

しかし、武蔵国では実態として、窯場で硯の生産は需要に応えられるほど生産が行われていなかったと考えられる。即ち、この時期の円面硯は、地方の武蔵国において律令制の基盤であるソフトウェア（文書行政）の象徴である硯は、いわば地方官衙としての体裁を整えるために必要なものであったと考えられる。

実務面を担う再利用硯が増加する時期は、8世紀前葉であるため、官衙として本格的に機能する時期は、8世紀前葉であることを、再利用硯の出土状況から推し量ることができる。

8世紀中葉、後葉には国府などで官人の需要や豪族層の需要も増え、窯場での硯生産が増加したと推定される。したがって官衙関連遺跡に限らず、交易拠点や豪族居宅などの遺跡にも定形硯が供給され、7世紀末葉から8世紀初頭の硯がもつ律令制の象徴という性格は、8世紀中葉には大きく変化したと考えられる。

一方、上層官人の文房具としての定形硯はステータスシンボルとして認知され、それ故に、地域の豪族層が定形硯を求めている可能性もある。また、再利用硯を主体とする遺跡、交易拠点と考えられる遺跡や官衙関連遺跡においても、再利用硯は実務面では継続的かつ多数使用されている。再利用硯の出土状況は、豪族層の経済活動が反映されていると考えられる。また、再利用硯は定形硯を補完するというより、実務面で再利用硯の使用は不可欠の状況であったと推定できる。再利用硯は、使用「せざるを得ない」という消極的な選択ではなく、むしろ、再利用硯を使用することが「前提」であったと考えられる。

硯の出土状況からみると、東国の官衙や律令制整備は整然と行われたということより、はじめに暫定的に目立つ象徴的なハードウェアの部分の整備を行い、徐々にソフトウェア（文書行政）を整理していったという、地方官衙の実情がうかがえる。

今回は、主に7世紀後半から8世紀代を中心とする武蔵国における生産地（窯場）1遺跡と消費地16遺跡を主な対象として、最利用硯も含め硯から得られる情報を中心に考察した。

硯から遺跡の性格や武蔵国の社会変化の一端を把握する試みを行ったが、再利用硯の実見は一部であり、基本的に各報告書からの集計である。再利用硯は担当者の認識の差によって、確認数が異なるのは事実であり、今後確認資料の増加を期待している。

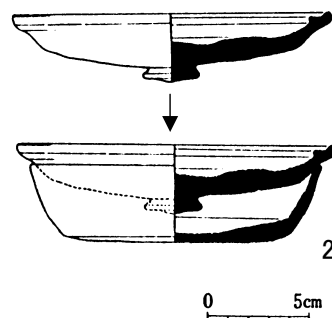
硯を機能的脈絡のなかで、ライフヒストリーの視点から、その文化的社会的意味の変化に関してアプローチをする研究について概念的に整理をした。今後人々の間を往来し、その文化的な意味を変えてゆくことをライフヒストリーとして辿るという、研究の視点「事物の文化的履歴」の研究事例として多くの情報が得られると考えられる。そのなかでも、特に再利用硯の研究はまだ黎明期ともいえる。今回の限られた資料で把握した硯の出土動態から導き出した結果は、今後の資料の増加などで異なる可能性もあるが、再利用硯という律令制における実務面の硯がもつ意義の一端を呈示することができたといえよう。



風字硯

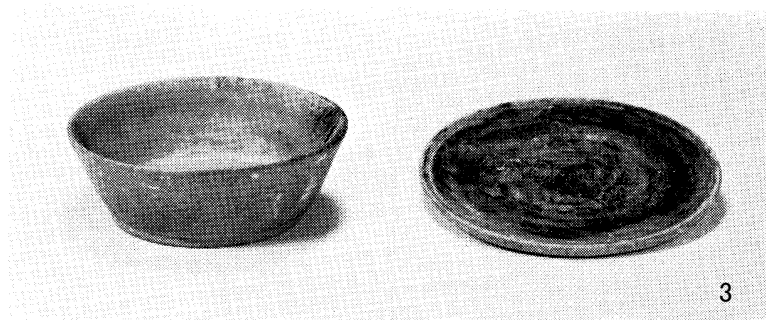
1

再利用硯

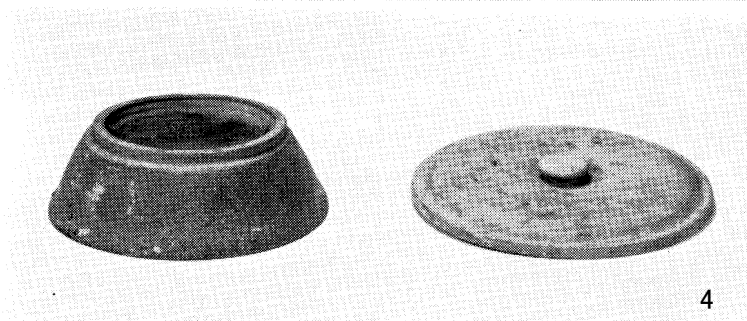


2

0 5cm



3



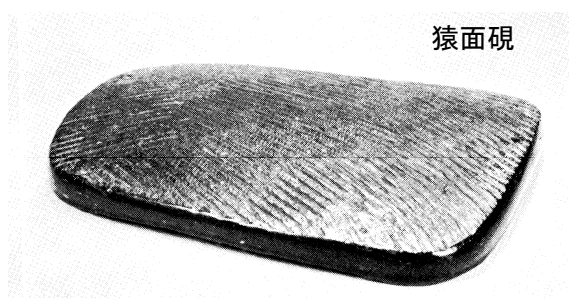
4



5: 再利用硯、形状D-1内面摩耗痕



6: 外面、鈕n

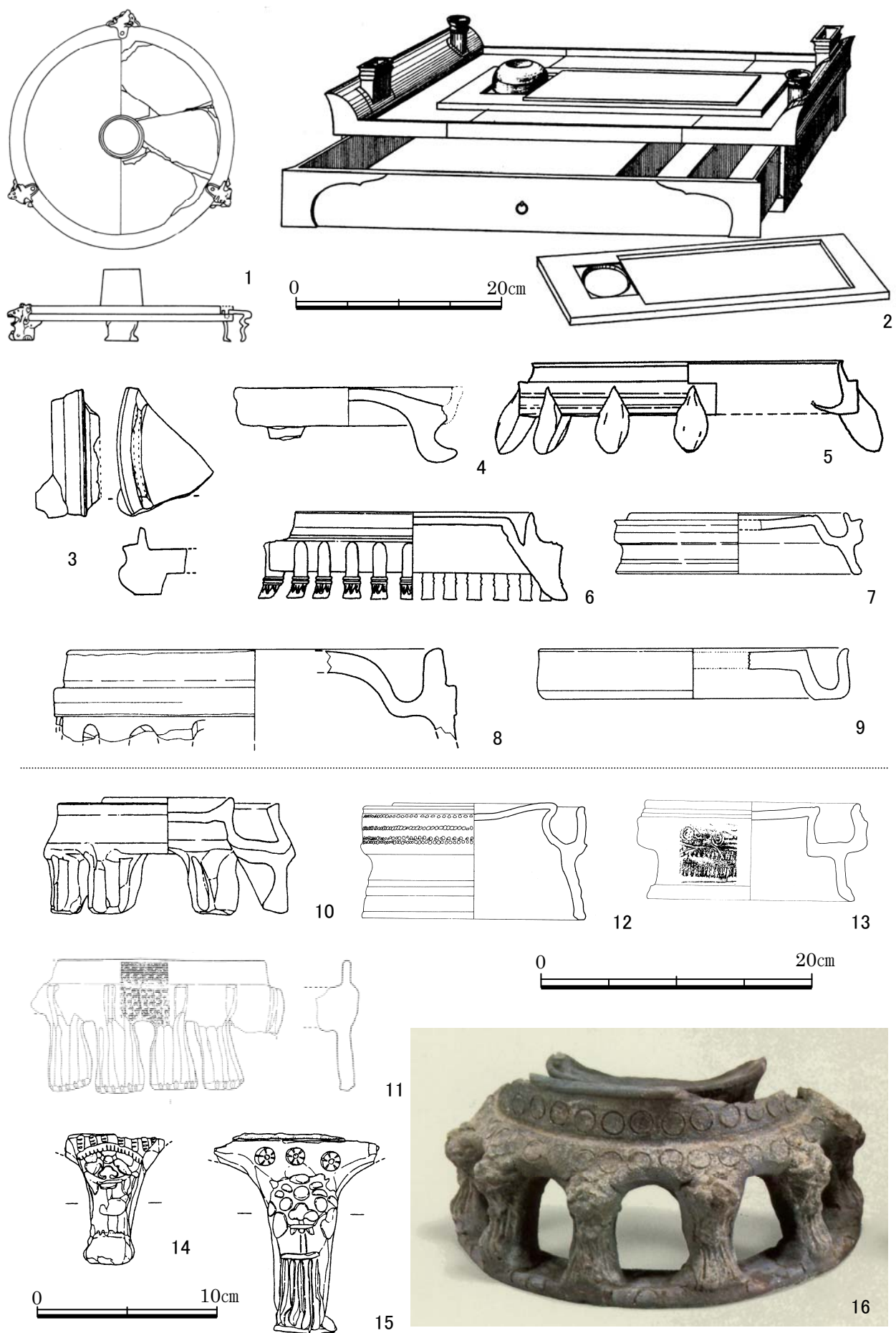


猿面硯

7

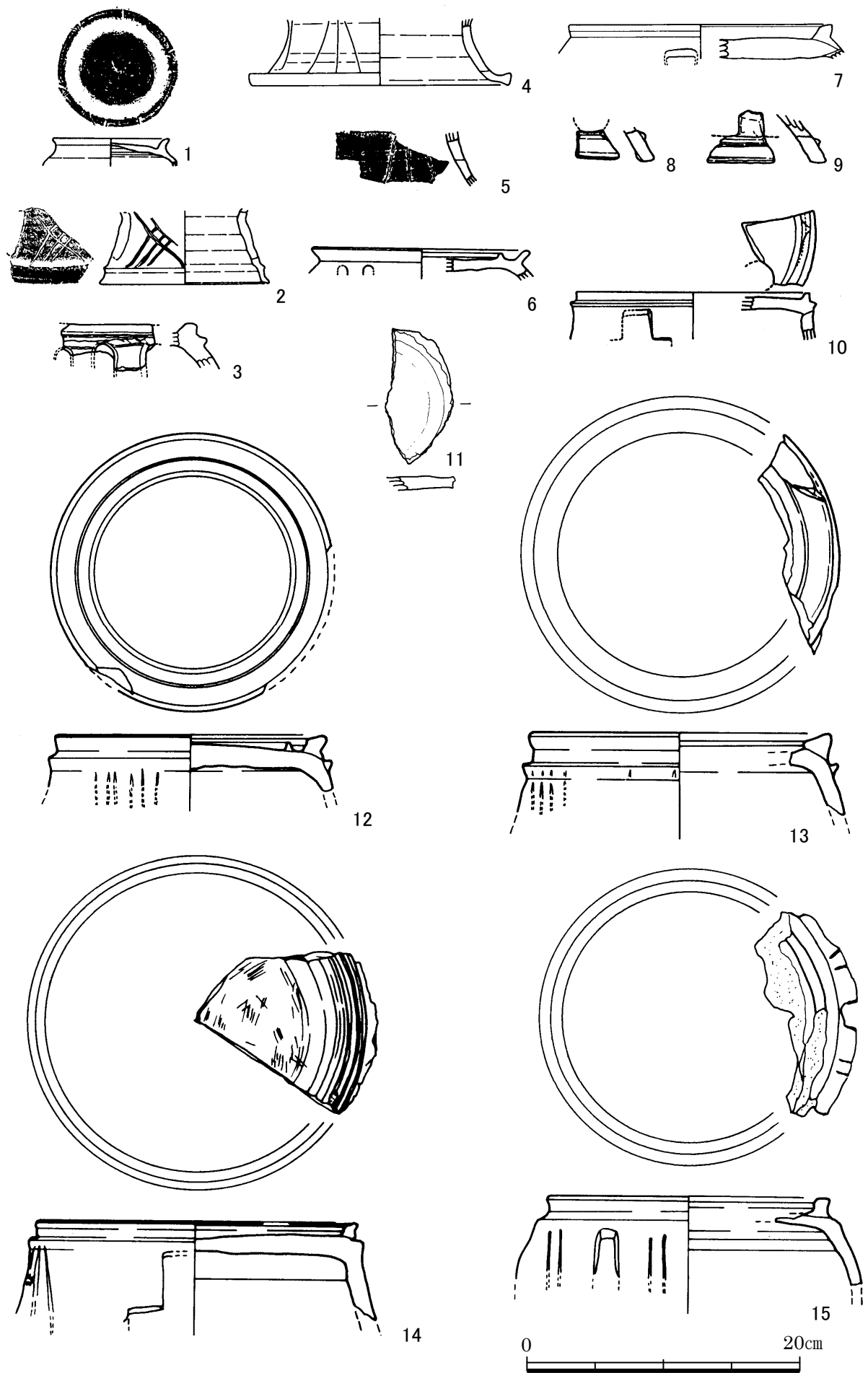
第1図 風字硯・再利用硯・猿面硯

1: 猿投窯黒笹7号窯 2: 再利用硯模式図[石井1985転載] 3・4: 平城京 5・6: 住吉中学校遺跡 7: 出土地不詳[五島美術館1978]

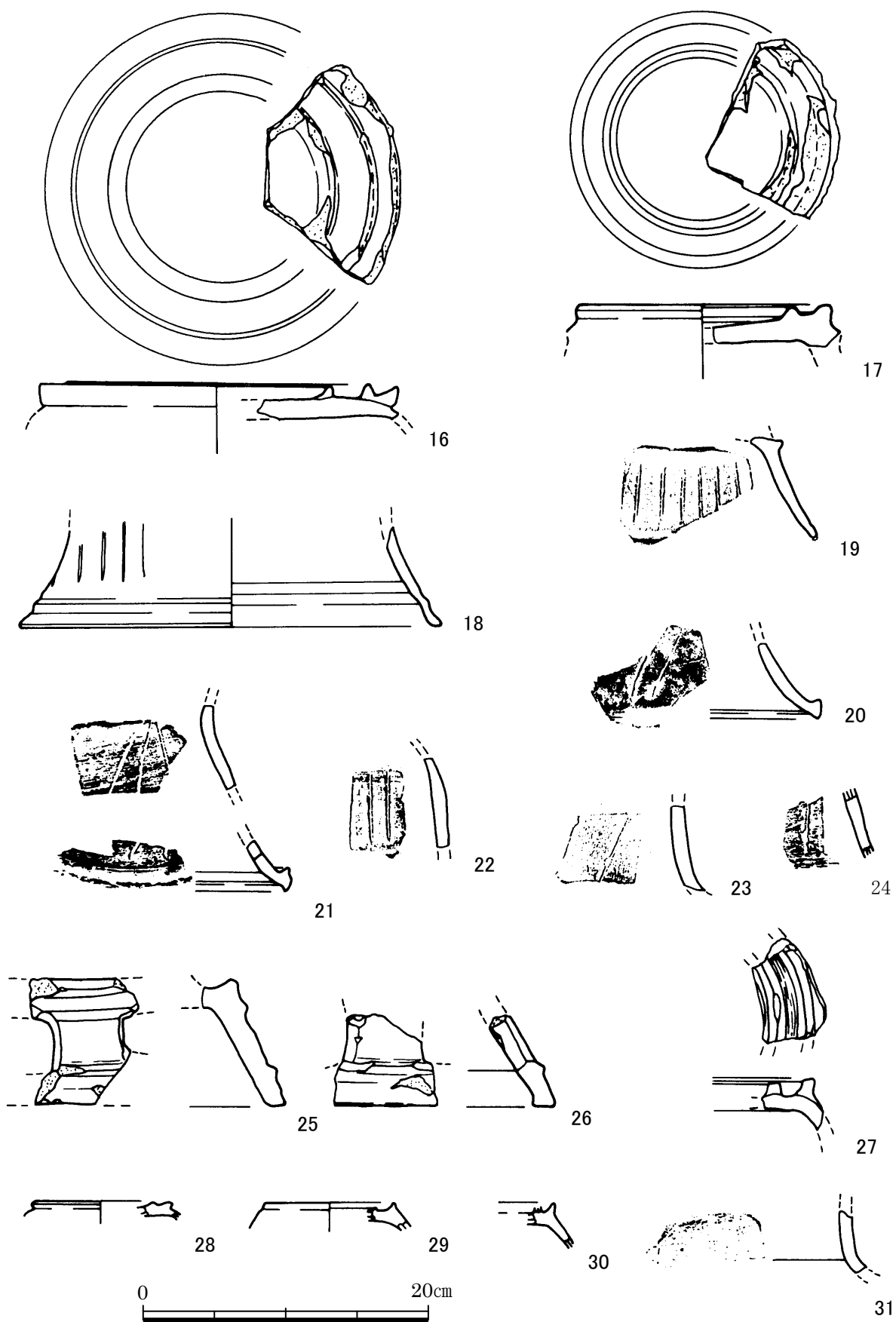


第2図 百濟(上段)と新羅(下段)の硯

1:平壤石巖里9号墳 2:平壤南井里116号墳(復元図) 3:夢村土城 4:扶餘公山城 5:扶餘扶蘇山城
6:扶餘錦城山朝王寺 7:扶餘陵寺 8:扶餘軍守里 9:扶餘扶蘇山城 10:慶州皇龍寺 11:慶州皇吾洞
12・13:慶州雁鴨池 14~15:慶州新羅王京 16:慶州雁鴨池



第3図 若葉台遺跡出土の円面硯-1

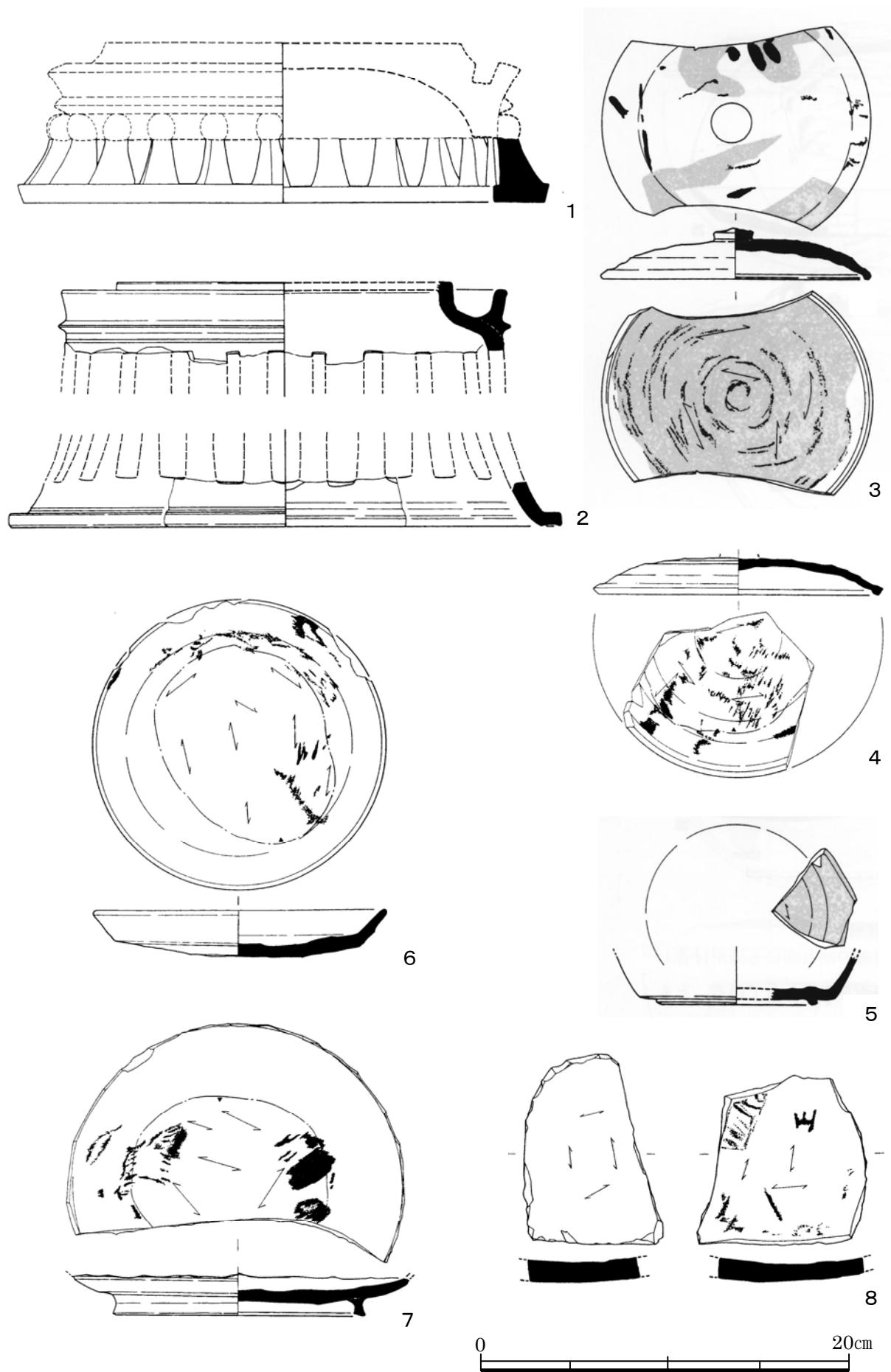


第4図 若葉台遺跡出土の円面硯-2

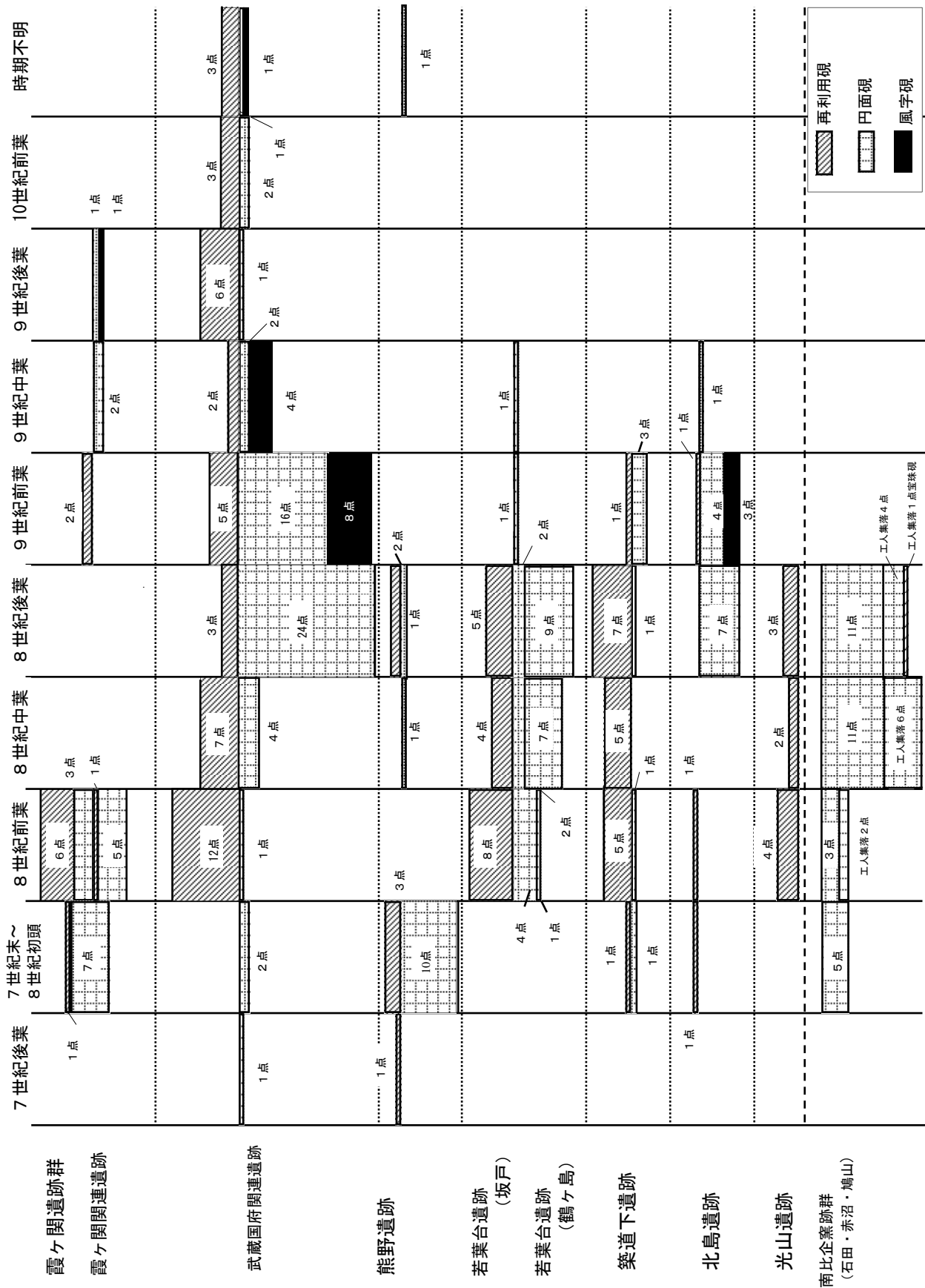
表1 若葉台遺跡 定形硯出土状況

* 全て円面硯である

	遺跡名	遺構名	報告書図版番号	残存部位・状況	時期	産地	備考
1	I 区	42号住居 覆土	II 141-139	硯面1/1(8.4)	9世紀中葉	南比企窯	墨付着し、磨耗している。高台坏の底部と近似
2	I 区	5号井戸	VI3-4	脚部破片(12.3)	8世紀後葉	南比企窯	
3	III 区	3号掘立柱建物ピット	III 166-9	脚部小破片	9世紀前葉	南比企窯	
4	O 区	1号住	III 182-9	脚部破片(18.6)	8世紀後葉	南比企窯	5と同一個体
5	O 区	2号住	III 186-21	脚部小破片	8世紀後葉	南比企窯	十字透孔、4と同一個体
6	O 区	出土遺構不明	III 186-11	硯面1/6(15.7)	8世紀中葉	南比企窯	わずかに残る硯面は磨耗
7	VI 区	1号住下層	I 7-9	硯面小破片(14.2)	8世紀前葉	南比企窯	硯面に降灰付着し、使用されていない
8	VI 区	14号住覆土	VI21-26	脚端部小破片	8世紀前葉	南比企窯	
9	VI 区	17号住竈上層	VI41-27	脚端部小破片	8世紀前葉	南比企窯	
10	VI 区	出土遺構不明	VI86-17	硯面小破片	8世紀中葉	南比企窯	陸部は磨耗、穿孔は墨溜めか、十字の透孔
11	VI 区	30号住床面	V 5-8	硯面小破片	8世紀前葉	南比企窯	
12	O 地点	C地点複合住居跡	4-1	硯面 12.8	8世紀中葉か	南比企窯か	硯面は磨耗、脚は欠損後に意図的磨耗
13	O 地点	C地点複合住居跡	4-2	外堤1/4(14.2)	8世紀中葉か	南比企窯か	
14	B 地点	6号住	4-3	硯面1/6・脚部破片(14.5)	8世紀中葉	南比企窯	
15	B 地点	6号住	4-4	外堤1/4・脚部破片(13.2)	8世紀中葉	南比企窯か	
16	B 地点	7号住	4-5	硯面1/6(15.4)	8世紀中葉	南比企窯か	
17	D 地点	遺構外	4-6	硯面1/4(11.8)	8世紀後葉か		
18	B 地点	6号住	4-7	脚部破片脚(19.0)	8世紀後葉	南比企窯	
19	B 地点	6号住	4-8	脚部破片	8世紀後葉	南比企窯	
20	B 地点	7号住	4-9	脚端部小破片	8世紀後葉	南比企窯か	
21	B 地点	8号住	4-10	脚端部小破片	8世紀後葉	南比企窯か	4-12と接合
22	B 地点	6号住	4-11	脚部小破片	8世紀後葉	南比企窯か	
23	B 地点	6号住	4-13	脚部小破片	8世紀中葉	南比企窯か	
24	S 地点	2号住	4-14	脚部小破片	8世紀中葉か	南比企窯	
25	D 地点	遺構外	4-15	脚部小破片	8世紀前葉		
26	C 地点	C地点複合住居跡	4-16	脚部小破片	8世紀後葉か	南比企窯	
27	B 地点	6号住	4-17	外堤小破片	8世紀後葉か	南比企窯	
28	O 地点	V-7グリット	4-18	外堤小破片(9.6)	9世紀代		
29	O 地点	U-7グリット	4-19	外堤小破片(9.2)	9世紀代		
30	O 地点	Wグリット	4-20	外堤小破片	9世紀代		
31	B 地点	8号住	4-21	脚部小破片	8世紀後葉	南比企窯	



第5図 大宰府の定形硯と再利用硯



第6図 武蔵国硯の出土状況動態図

表2 武蔵国の主要遺跡における硯の出土状況

時期	7C後葉		7C末～8C初		8C前葉		8C中葉		8C後葉		9C前葉			9C中葉			9C後葉			10C前葉		時期不明				計		
遺跡名	円面	再利用	円面	再利用	円面	再利用	円面	再利用	円面	再利用	円面	風字	再利用	円面	風字	再利用	円面	風字	再利用	風字	再利用	円面	風字・他	再利用	円面	風字・他	再利用	
霞ヶ関遺跡群			7	1	3	6																			10		7	
霞ヶ関関連遺跡					5	1							2	2				1	1						7	1	4	
若葉台遺跡・坂戸					4	8	2	4	2	5	1			1											10		17	
若葉台遺跡・鶴ヶ島					1		7		9												3				20			
武蔵国府関連遺	1		2		1	12	4	7	24	3	16	8	5	2	4	3	1		6	2	3	1	*3	3	52	17	42	
熊野遺跡		1	10	3			1		1	2											1				13		6	
御殿前遺跡					1						1														2			
将監塚・古井戸遺跡			1(中空)			3		2			1		1												2		6	
東の上遺跡							1		1	1															1		2	
山王裏・西浦遺跡						1		1	5		5											*14	1		24	1	2	
築道下遺跡			1	1	1	5		5	1	7	3		1												6		19	
北島遺跡			1	1		1			7		4	3	1									2			14	3	3	
稲荷前遺跡			1		1	2	3		2	2						1			4		1				7		10	
光山遺跡						4		2		3													1		0		10	
張摩久保遺跡							2	1		2															2		3	
揚櫃木遺跡													2			2					1			1	0		6	
落川遺跡			1		2	2	1	1	1			1					2	1	1	1			4		7	7	4	
計	1	1	*24	6	19	45	20	24	52	25	32	12	12	5	4	6	3	2	12	3	5	21	8	5	177	29	141	

* 1武蔵国府関連遺跡 時期不明の風字硯のうち1点は形象硯

* 2山王裏・西浦遺跡群 時期不明14のうち12点は点数のみ

* 3将監塚・古井戸遺跡群の中空硯は円面硯に含める

表3 定形硯の出土状況

時期	7C後葉	7C末～8C初	8C前葉	8C中葉	8C後葉	9C前葉		9C中葉		9C後葉		10C前葉	時期不明		計	
遺跡名	円面	円面	円面	円面	円面	円面	風字	円面	風字	円面	風字	風字	円面	風字他	円面	風字・他
霞ヶ関遺跡群		7	3												10	
霞ヶ関関連遺跡			5					2			1				7	1
武蔵国府関連遺跡	1	2	1	4	24	16	8	2	4	1		2	1	*3	52	17
熊野遺跡		10		1	1								1		13	
山王裏・西浦遺跡群					5	5							14	1	24	1
御殿前遺跡			1				1								2	
東の上遺跡							1								1	
若葉台遺跡(坂戸)			4	2	2	1		1							10	
若葉台遺跡(鶴ヶ島)			1	7	9								3		20	
稲荷前遺跡		1	1	3	2										7	
光山遺跡															0	
築道下遺跡		1	1		1	3									6	
北島遺跡		1			7	4	3						2		14	3
落川遺跡		1	2	1	1		1			2	1	1		4	7	7
将監塚・古井戸遺跡		1(中空)					1								2	
張摩久保遺跡					2										2	
揚櫃木遺跡															0	
計	1	*24	19	20	52	32	12	5	4	3	2	3	21	8	177	29

* 1武蔵国府関連遺跡 時期不明の風字硯のうち1点は形象硯

表4 霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡 定形硯出土状況

* 特に断りの無いものは円面硯

	遺跡名	遺構名	残存部位・状況	時期	産地	硯面磨耗	墨付着	大きさ	備考
1	霞ヶ関第10次調査	1号住居跡	硯面ごくわずか	8世紀前葉	末野窯	◎	○	外径(17.8)	
2	霞ヶ関第12次調査	12号住居跡	硯面わずか	8世紀前葉	末野窯	○	○	外径(18.4)	
3	霞ヶ関第12次調査	16号住居跡・17号住居跡	硯面1/5・脚部破片	7世紀末～8世紀初頭	末野窯	◎	○	外径(12.6)	
4	霞ヶ関第12次調査	1号井戸	脚部破片	7世紀末～8世紀初頭	末野窯	—	—	外径(18.6)	
5	霞ヶ関第3次調査	77号住居跡	硯面ごくわずか・脚部破片	7世紀末～8世紀初頭	南比企窯	◎	○	外径(16.6)	
6	天王第6遺跡	1号堀	硯面1/4	7世紀末～8世紀初頭	南比企窯	◎	—	硯面(18.0)	無脚円面硯
7	天王第15次調査	8号住居跡	硯面ごくわずか	7世紀末～8世紀初頭	末野窯	○	×	外径(18.6)	
8	天王第15次調査	8号住居跡	脚部破片	7世紀末～8世紀初頭	末野窯	—	—	脚径(23.8)	
9	天王第15次調査	2号柱列	脚部破片	7世紀末～8世紀初頭	末野窯	—	—	脚径(23.8)	
10	天王第15次調査	3号井戸	脚端部破片ごくわずか	8世紀前葉	南比企窯	—	—	脚径(16.6)	
11・12	八幡前・若宮第1次調査	6号土坑	硯面1/4・脚部破片	8世紀前葉	湖西か南比企窯か	◎	○	外径(17.4)	接合しないが同一個体
13	八幡前・若宮第1次調査	6号土坑	硯面1/3・脚部破片	8世紀前葉	南比企窯か	◎	○	外径(18.8)	
14	八幡前・若宮第1次調査	6号土坑	脚端部破片ごくわずか	8世紀前葉	南比企窯か	—	—		13と同一個体か
15	八幡前・若宮第1次調査	6号土坑	脚部破片ごくわずか	8世紀前葉	南比企窯	—	—		
16	八幡前・若宮第1次調査	15号土坑	脚部破片	8世紀前葉	南比企窯	—	—	脚径(22.0)	
17	八幡前・若宮第1次調査	9世紀包含層	脚部破片1/4	9世紀中葉	東金子窯の可能性	—	—	脚径(17.0)	
18	弁天西第12次調査	23号住居跡	脚部破片	9世紀中葉	東金子窯	—	—		図面掲載なし
19	山城上第3次調査	4号住居跡	完形	9世紀中葉以降	東金子窯	◎	×		風字硯・図面掲載なし

磨耗痕 ◎明瞭に認められる

* 霞ヶ関遺跡群は霞ヶ関遺跡、天王遺跡、新田屋敷遺跡を含む

○注意深い観察による

表5 霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡 再利用硯出土状況

* 全て須恵器である

	遺跡名	遺構名	種類	硯使用状況	時期	産地	磨耗痕	墨付着	安定度	備考
1	霞ヶ関第12次調査	7号住居跡	甕胴部	内面	8世紀前葉	末野窯	○	○	△	内面同心円当て具痕あり
2	霞ヶ関第12次調査	21号住居跡	坏底部	内面	7世紀末～8世紀初頭	末野窯	×	○	△	底部のみ
3	天王第3次調査	3号住居跡	甕肩部	内面	8世紀前葉	東海産	○	◎	△	硬質 断面削り2次加工
4	霞ヶ関第3次調査	77号住居跡	高台坏	内面及び外面	8世紀前葉	南比企窯	○	○	△	底部1/4
5	天王第15次調査	7号住居跡	蓋	内面及び外面	8世紀前葉	南比企窯	×	朱墨	鈕残る	天井部ひびから外面に朱墨、一部欠損、かえり
6	霞ヶ関第4次調査	2号掘立柱建物ピット	甕胴部	内面	8世紀前葉か	東海産か	○	墨・朱墨	△	図面掲載なし
7	新田屋敷第8次調査	B-27	蓋	内面	8世紀前葉	末野窯	×	○	鈕残る	図面掲載なし
8	弁天西第12次調査	11号住居跡	蓋	内面	9世紀中葉	東金子窯	△	×	鈕残る	図面掲載なし
9	弁天西第12次調査	17号住居跡	甕胴部	内面	8世紀前葉か	湖西窯か	○	墨・朱墨	◎	硯から砥石へ再利用か・図面掲載なし
10	弁天西第12次調査	15号住居跡	坏	内面	9世紀前葉	東金子窯	◎	×	◎	硯から灯火具へ再利用・図面掲載なし
11	弁天西第12次調査	20号住居跡	坏	内面	9世紀前葉	東金子窯か	×	墨・朱墨	◎	図面掲載なし

磨耗痕 ◎明瞭に認められる

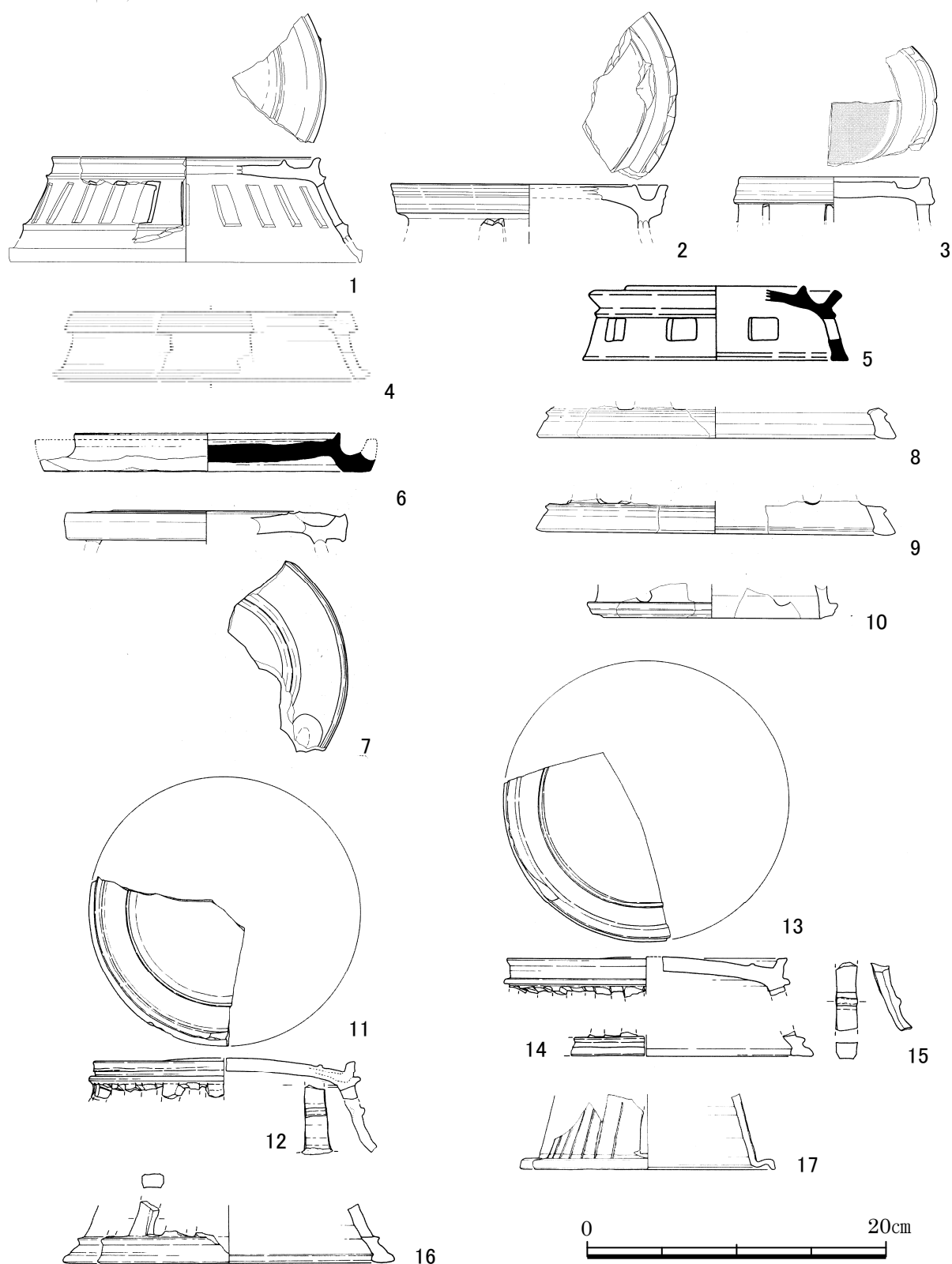
安定度 ◎安定している

* 霞ヶ関遺跡群は霞ヶ関遺跡、天王遺跡、新田屋敷遺跡を含む

○注意深い観察による

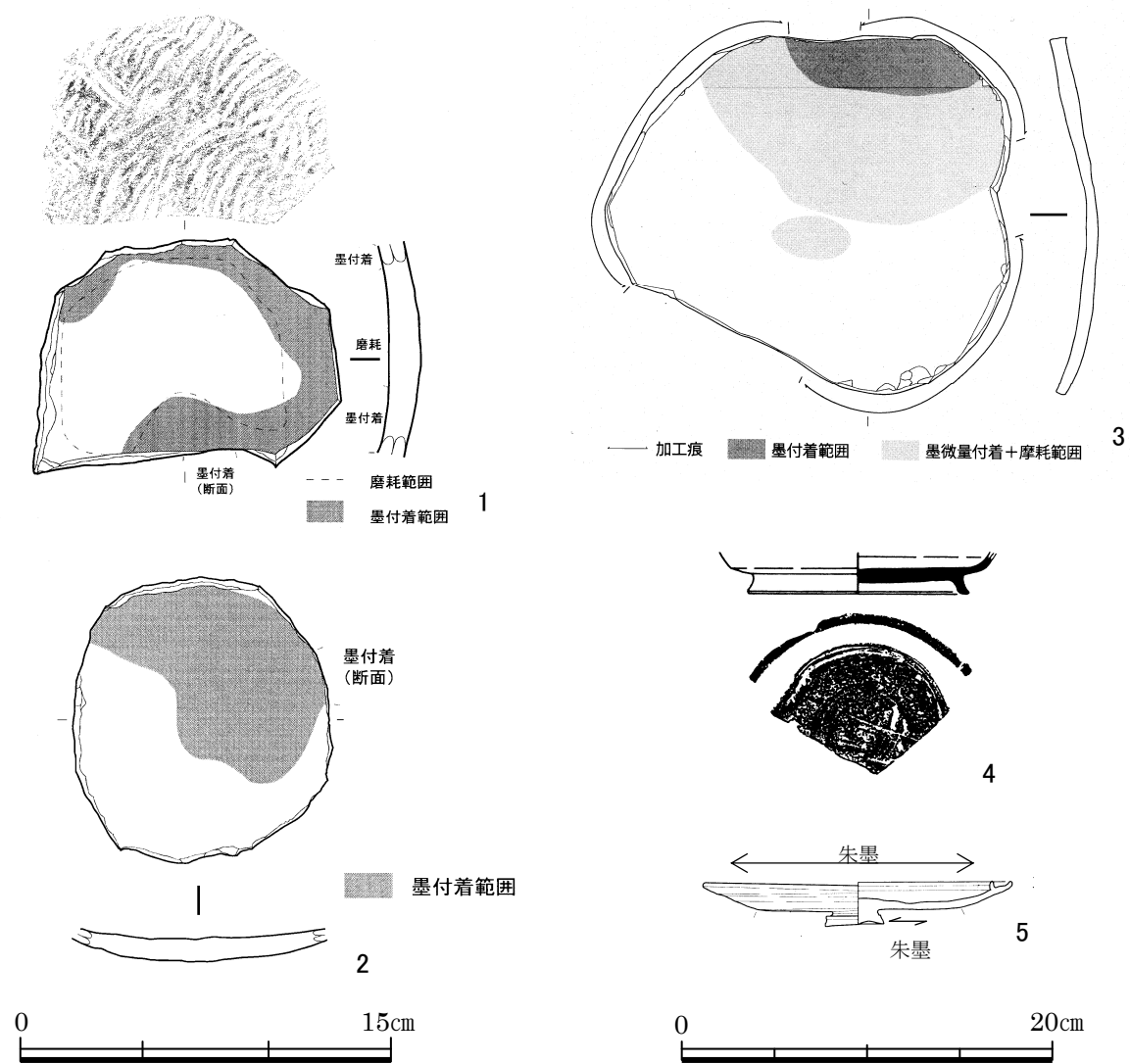
△安定性にやや欠ける

△触れてわかる



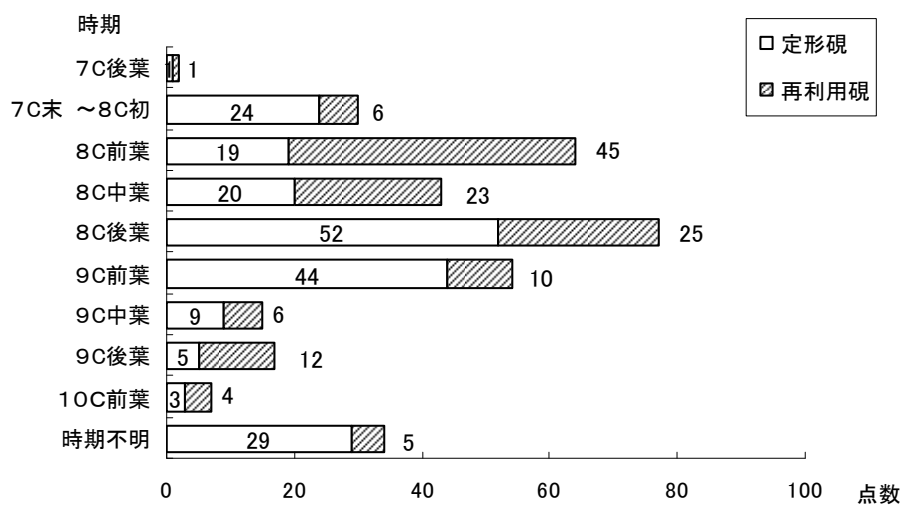
第7図 霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡出土の定形硯

1:霞ヶ関第10次調査1号住居跡 2:霞ヶ関第12次調査12号住居跡 3:霞ヶ関第12次調査16・17号住居跡
 4:霞ヶ関第12次調査1号井戸 5:霞ヶ関第3次調査77号住居跡 6:天王第6遺跡1号堀 7・8:天王第15次調査8号住居跡 9:天王第15次調査2号穴列 10:天王第15次調査3号井戸 11~15:八幡前・若宮第1次調査6号土坑 16:八幡前・若宮第1次調査15号土坑 17:八幡前・若宮第1次調査9世紀包含層

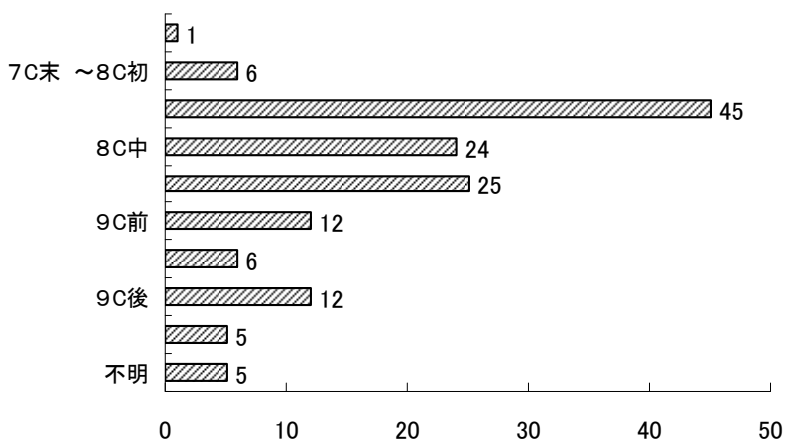


第8図 霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡出土の再利用硯

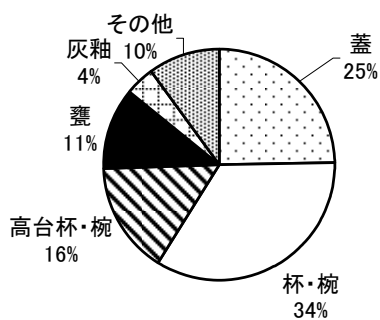
1: 霞ヶ関第12次調査7号住居跡 2: 霞ヶ関第12次調査21号住居跡 3: 天王第3次調査3号住居跡
4: 霞ヶ関第4次調査77号住居跡 5: 天王第15次調査7号住居跡



第9図 定形硯・再利用硯時期別出土状況



第10図 再利用硯時期別出土点数



第11図 再利用硯の器種

表6 再利用硯の時期別出土状況

	7C後葉	7C末 ~ 8C初	8C前葉	8C中葉	8C後葉	9 C 前葉	9 C 中葉	9 C 後葉	10C前葉	時期不明	計
霞ヶ関遺跡群		1	6								7
霞ヶ関関連遺跡			1			2	1				4
武蔵国府関連遺跡			12	7	3	5	2	7	3	3	42
熊野遺跡	1	3			2						6
山王裏・西浦遺跡群			1	1							2
御殿前遺跡											
東の上遺跡				1	1						2
若葉台遺跡*			8	4	5						17
稲荷前遺跡			2		2		1	4	1		10
光山遺跡			4	2	3					1	10
築道下遺跡		1	5	5	7	1					19
北島遺跡		1	1			1					3
落川遺跡			2	1				1			4
将監塚・古井戸遺跡			3	2		1					6
張摩久保遺跡				1	2						3
揚壺木遺跡						2	2		1	1	6
計	1	6	45	24	25	12	6	12	5	5	141

* 若葉台遺跡は坂戸市調査分のみ

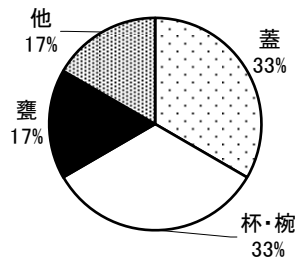
表7 再利用硯に使用された器種

	蓋	杯・椀	高台杯・椀	甕	灰釉	その他	備考(その他の内訳)	計
霞ヶ関遺跡群	2	1	1	3				7
霞ヶ関関連遺跡	1	2		1				4
武蔵国府関連遺跡	8	13	10	4	5	2	2盤	42
熊野遺跡	3		1	1		1	高台付盤1・この外に脚付盤	6
山王裏・西浦遺跡群		2						2
御殿前遺跡	0							0
東の上遺跡		2						2
若葉台遺跡	9	4	2	2			(坂戸市分のみ)	17
稲荷前遺跡	3	1	4		1	1	皿1	10
光山遺跡	3	3		3		1	長頸壺1	10
築道下遺跡	3	11	2			3	長頸壺2・盤1	19
北島遺跡		1				2	脚付盤1・壺1	3
落川遺跡			1	1		2	長頸壺1・緑釉陶器皿1	4
将監塚・古井戸遺跡	1	4				1	高台付壺底部1	6
張摩久保遺跡	1	1				1	盤1	3
揚壺木遺跡	1	3	1	1				6
計	35	48	22	16	6	14		141

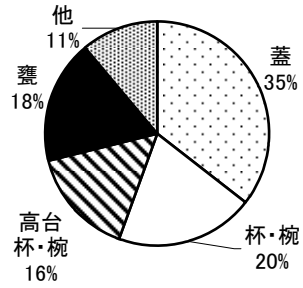
表8 再利用硯時期別出土状況

	蓋	杯・椀	高台杯・椀	甕	灰釉	他	計
7C後葉						1	1
7C末 ~8C初	2	2		1		1	6
8C前葉	16	9	7	8		5	45
8C中葉	3	16	3	1		1	24
8C後葉	9	9	4			3	25
9C前葉	3	6	2			1	12
9C中葉	1	4	1				6
9C後葉		2	5	1	2	2	12
10C前葉				1	4		5
時期不明	1			4			5
計	35	48	22	16	6	14	141

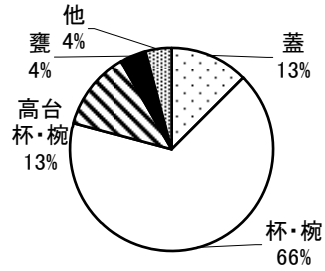
グラフ4 7C末 ~8C初



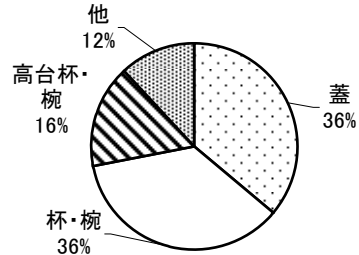
グラフ5 8C前葉



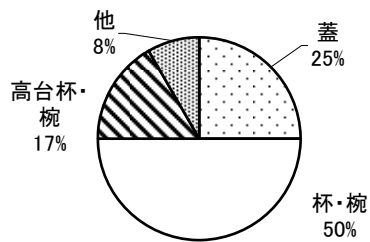
グラフ6 8C中葉



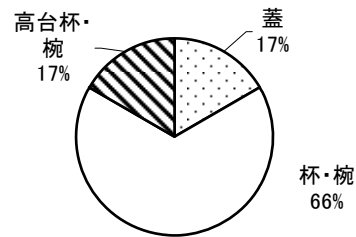
グラフ7 8C後葉



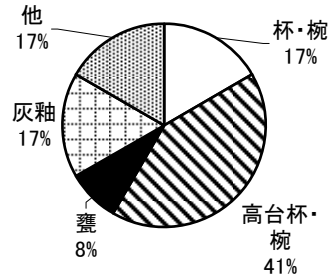
グラフ8 9C前葉



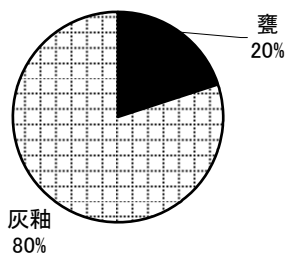
グラフ9 9C中葉



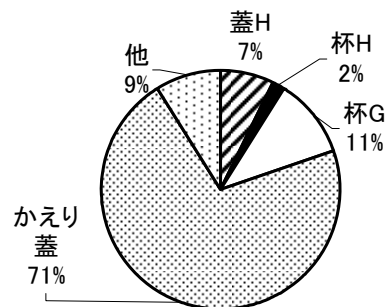
グラフ10 9C後葉



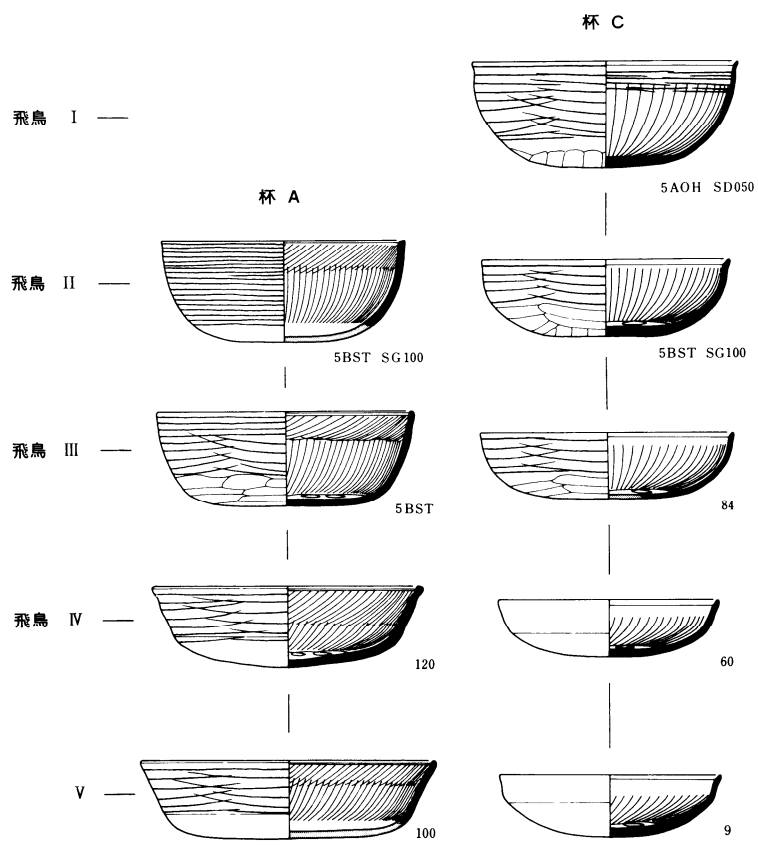
グラフ11 10C前葉



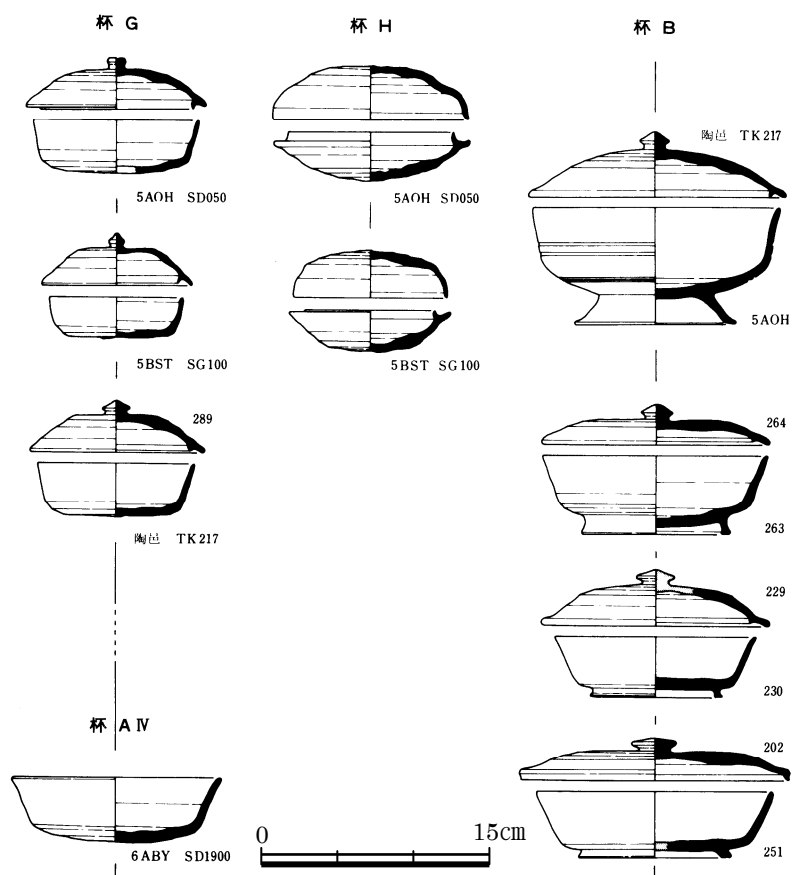
第12図 再利用硯 時期別器種の割合



第13図 八幡太神南遺跡1号住居跡の7世紀後葉の須恵器供膳具器種構成



畿内地域金属器系食器の導入(土師器)



第14図 畿内地域金属器系食器の導入(須恵器) [西1986]

第5章 紡錘車としての土器の再利用

古代における資源の再利用に関して、土器の再利用という視点から、灯火具、硯などと共に、その用途の一つである再利用の紡錘車に着目する。

再利用の紡錘車は、供膳具の坏・埴類を主に素材としている。生産の局面において再利用の道具が使用されている事例である。また、紡錘車は形状から再利用の用途が推定できる数少ない事例でもある。技術的な系譜は大陸に求めることができるため、日本と関係の深い韓半島南部を中心に、再利用の紡錘車の様相や紡織技術について一部言及する。また、再利用が日本に限らず、どの地域においても研究テーマとなる一つの例でもある。

紡錘車の研究のなかでも再利用の紡錘車は、資料報告などを除くとほとんど注目されず、研究は皆無に近い。再利用の紡錘車を含めて、紡錘車を紡織技術全体の脈絡に位置づけ、その関係性を考察することが重要であり、従来とは異なる視点からの分析が可能となる。

織布は一般に、防寒や社会的身分の象徴としての役割だけでなく、古代中国をはじめ、日本の奈良時代には通貨と同じように流通し、税として納められている。このように織物は、古代社会では重要な意味をもっている。

紡錘車以外の木製の紡織具、織布や糸が遺物として発見されることはごく稀である。したがって、考古学的手法で紡織技術の動態を把握するためには、比較的残りの良い紡錘車を有効な資料として分析することが重要であり、かつ残された数少ない分析方法である。

紡錘車の研究のなかでも特に古代の再利用の紡錘車についての研究は皆無に近く、未だに黎明期といえる。再利用の紡錘車は、これのみを取り出すようなかたちでの研究には限界がある。また、再利用の紡錘車を含めて、紡錘車を紡織技術全体の脈絡に位置づけ、その関係性を考察することが重要であり、従来とは異なる視点からの分析が可能となる。したがって、紡錘車及び、紡織技術全体に関して把握することが必要になる。

第1節 紡織研究史と問題点の整理

第1項 紡錘車の概観

紡錘車の変化は、紡織技術の変化と対応している。そのため、はじめに織機の変化も含めて紡織に関する研究を概観して、再利用の紡錘車の位置づけを行い、定形の紡錘車との関係性を明らかにする。

紡織に関する研究は、大別すると4つに分類できる。紡錘車の研究、染色史から残存する布の研究、織機に関して民族学的資料を参考とする研究、及び古代史の分野から文献史料を使った研究である。本稿は、紡錘車の研究を基本としつつ、紡織研究全体の脈絡のなかで再利用を含めた紡錘車を位置づける研究である。

一般に「紡錘車」（第1図）とは、糸に回転運動で撚りをかける道具のことであり、中央に穴が開けられた弾み車で、錘の役を果たす「紡輪」と、回転させる軸棒及び、出来上がった糸を巻く「紡莖」を合わせた全体を意味する。本稿では、「紡輪」のみの場合でも、慣用的に「紡錘車」という名称を使う。

日本の紡錘車の材料は、主に土製・石製・木製（第1図）である。弥生時代には一部骨

製のものや、6世紀後半以降には西日本では鉄製（第1図4）が使用される〔東村 2005〕。土器や砥石などの再利用の紡錘車は、東日本では8世紀後半以降に広く認められる。日本では木製紡錘車（第1図2）が、多数使用されていたと推定されている。しかし、実際に遺物としての出土例は限られている¹⁾。紡茎は主に木製とみられ、一部鉄製である。紡輪と紡茎の組み合わせの材質について、木製と鉄製の紡輪は各々通常、同じ材質の紡茎と組み合わせる〔東村 2006〕。一方、土製（第1図5）・石製の紡輪には木製の紡茎（第1図1）という組み合わせが多く、鉄製の紡茎が組み合わせるもの（第1図3）はわずかであるとみられている²⁾。

1 紡錘車の分類

紡錘車は、はじめから紡錘車の用途として作られた「定形紡錘車」と土器や瓦、砥石などを素材とする再利用の紡錘車に大別できる。定形紡錘車として作られたものは、断面形状によって基本的に、土製・石製の素材に共通して、6類型に分類が可能である。笠形、楕円状、韓半島で多数認められる特徴的な六角形の算盤玉状、長形状、円盤状、日本では「截頭円錐形」と呼称される台形状のものである。台形状のものは、韓半島南部では極めて少ないが、日本の古墳時代後期には、一般的に認められる断面形状である。

紡錘車として再利用されたものは、元の素材から各々土器、瓦、石製品の3種類に分類する。中心部に穿孔される形状のもの全てが、紡錘車という用途で再利用されているわけではない。紡錘車としての用途ではなく、穿孔用などの弾み車や舞錐、錘などが考えられる。瓦再利用の弾み車などの紡錘車形工具は、第2項で後述する通り、重量、孔径などに一定の基準が認められ目安になる。

石製、土製の定形紡錘車として報告されているものについても、織布用の紡錘車であるかどうかの基準から検討を加える必要がある。その際、重量に加え、孔径が1.1cm以上であるものは、石製の穿孔用などの弾み車や舞錐の工具類とする。

以上のように、紡錘車の形状のもの全てが紡錘車としての用途ではないため、本来であれば「紡錘車、及び紡錘車形工具」と表記すべきところであるが、本稿では特にことわりのない限り、慣用的に「紡錘車」とする。

韓半島南部地域の紡錘車は、日本とは異なり木製、鉄製は認められず、基本的には土製と石製である。木製紡錘車は日韓両国で今後、資料が増えることも考えられる。

2 紡錘車の使用方法

日本では紡錘車の使用方法の復元について、二つの方法が考えられている。まず、一般的な①宙吊り法である。この方法は、民俗事例や平安時代末期の『信貴山縁起』など絵巻物をもとにして復元されている。紡錘車に回転を与えるためテシロギ（定置木）あるいはツムスリとテシロという補助具を使う。第2図に示す通り、紡錘を横にし、ツムスリに乗せて軽く手で支え、もう片方の手でテシロを持ち、紡茎をツムスリ上で転がし、紡錘車を

1) 現在まで、日本の木製紡錘車の検出点数は、石製紡錘車、土製紡錘車に比べると極めて少ない。

2) 中国の近代の例では、長方形を呈する獣骨に鉄の鉤状のものを装着して、紡錘車として使用している例が報告されている〔Hommel1937〕。古代においても同様に輪状のものでない紡錘車を使

持ち上げ宙吊りにして、撚りをかける転がし方法である〔竹内 1989〕。

次に②独楽状回転法である。独楽状に回転させ、平坦な面に接触させ皿などで受ける方法である。宙吊り法は紡茎の先端が鉤状であることが必要である〔東村 2006〕。紡茎の検出例はそれほど多くはないが、そのなかでも鉄製の紡茎の先端は鉤状が認められる（第1図3・4）が、木製のものにはほとんど鉤状のものが認められていない。

鉤状のものがない紡茎を使用する時、糸を紡茎の先端で輪をつくって、ねじることで抜けないようにして糸を紡ぐ方法もある。最も効率は悪いが、補助具を使用しなくても、木製紡茎で糸を紡ぐ際には、手軽な方法である。何れの場合でも、糸を紡ぐ際には、予め湿らせておくことが必要であり、乾燥すると撚りが固定される。

②の方法から①宙吊り法へと、紡茎の材質、形状の変化に伴い、効率の良い糸の紡ぎ方向へと変化した可能性を指摘することができる。

鉄製紡錘車の出現時期は、西日本では京都府長岡京市出土例から、6世紀後半とみられている〔國下 1988〕。したがって6世紀後半には西日本の一部では、効率良く糸を紡ぐことができた可能性はある。

紡錘車の使用方法は、吊り下げて使用する際には、その重量が紡ぐ糸の太さと種類に係する重要な属性であることが指摘されている。紡錘車は重いほど速く回り、惰性が加わって長く回ること、同じ繊維を重い紡錘車と軽い紡錘車の2種類で撚ると、重いものは撚りが粗く、軽い紡錘車で撚ったものは、細かい撚りとなるため、紡錘車の重さは重要である〔佐原 1979〕。したがって、紡織には繊維の太さや種類に対応した重さの紡錘車が必要となる。それ故に、紡錘車の研究にとっては、重量が重要な属性となる。

3 紡錘車の重量

日本では紡錘車の重量は、最近報告されるようになってきたが、全てというには程遠い状況である。資料が十分ではない状況で重量から紡錘車を考察し、比較的にとまっているものとしては、関東地方の上野国（群馬県）を中心とする研究である。中沢悟氏は、群馬県の集落出土の紡錘車について弥生時代から平安時代を概観している〔中沢 1996A・B〕。群馬県西部は石製紡錘車が多い特徴のある地域であるが、①弥生時代から古墳時代前期（2世紀～4世紀）までは、土製で長方形の紡錘車が主であり、②古墳時代中期（5世紀）以降では、断面形状が台形の石製紡錘車、③平安時代（9世紀～11世紀）では、鉄製紡錘車と石製台形状の紡錘車が多数使用され、三期に区分されている。

重量は、30g未満、30～50g未満、50～70g未満、70g以上の4つに区分し、検討している。30～50g未満が全体の39%で最も多く、30～70g未満が全体の66%を占める。各時期に30～50gの軽い紡錘車と50～70gの重い紡錘車の2種類が存在する。弥生時代から古墳時代までは50g未満の石製紡錘車が最も多く、平安時代には50～70gが最も多くなり、時代が降ると重い紡錘車が多い傾向となる。古墳時代後期（6世紀～7世紀）以降には、100g以上の重い紡錘車もわずかに認められ、なかには150gに近いものが報告されている。中沢氏は言及していないが、90g³⁾以上で「紡錘車」とされているものについては、後述す

用していた可能性はないとはいえないが、筆者が見た限りでは円形の紡輪であった。

3) 第1節2項で後述するように、重量から織布用紡錘車としての基準としては、90gを一つの目

るように織布用の糸（紡織糸）ではなく、魚網などに撚りをかけるためのもの⁴⁾、あるいは紡錘車以外の工具の用途が考えられる。即ち、紡錘車の形状の道具には、織布用の糸を紡ぐ紡錘車、網などの太い繊維用の紡錘車の2種類と、さらに穿孔や発火用の舞錐などに用いられる紡錘車形の工具や錘という3種類の存在が考えられる。これらを区別する目安については、第1節第2項で整理する。

4 紡錘車で紡いだ糸

紡錘車で撚りがかけられた糸は、主に麻、苧麻、葛、藤などの植物繊維である⁵⁾。植物繊維は、細く裂いて短い繊維を長くつなぐための績む（うむ）作業を行った後、強度を増すため撚りをかけて、糸にする。絹糸は基本的には撚りをかけないという〔沢田むつ代 2005〕。ただし、汚れたり、孔があいたりした繭を使った一部の紬などの糸には撚りがかけられる⁶⁾。繭の段階では、後で糸になる部分がセリシン（silk protein sericin）という蠟物質により膠着しているが、繭を灰汁などの弱アルカリ液に入れて加熱すると蛋白質の一種であるセリシンが一部溶ける。絹糸は柔らかくなった繭から糸口を見つけ糸を引き出し、何本か集め揃えたものである〔竹内 1989〕。即ち紡錘車は、主に植物繊維に撚りをかけるための道具といえる。

日本では7紀後半から使用される鉄製紡錘車に、植物繊維が付着した出土例がある〔堀田 1999〕ことから、紡がれていた糸の大部分は植物繊維と考えられる。したがって、本稿では紡錘車で撚りがかけられた糸は、主に植物繊維であるという前提で論じていく。

紡錘車を使って生産された糸には、太い漁労用の網、あるいは編布⁷⁾（あんぎん）用の糸も含まれていると考えられる。しかし、織布の生産のためには、細く均一に十分な撚りをかけなくてはならない。こうした糸でないと、平織り組織が崩れてしまうという〔角山 1968〕。したがって織布生産のためには、均一に細く撚りをかけることができる紡錘車、即ち一定の規格をもつ、定形化した紡錘車が必要となる。また、特に断りのない限り、「布」は織布のことである。

第2項 日本の紡織に関する研究史

1 織機の型式と系譜

日本の紡織との関係も深く、中国により近い韓半島での古代織物研究は、筆者の知る限

安としている。これは日本と韓半島南部の紡錘車から導き出された目安であるが、今後の資料の増加によっては多少の変更の可能性もある。

4) 近代の魚網用の網糸、釣り糸としての麻糸を作るため使用された紡錘車の重量は、50～270gであるという〔加賀 1969〕。織布用の糸を紡ぐ紡錘車と重量の点で重複する部分があり、90gまでの紡錘車に関しては魚網用と区別できないが、90gを越える紡錘車は、織布用の紡錘車ではないと指摘できる。

5) 布目順郎はで「絹以外での繊維で糸や紐を作ろうとする場合は、絹と違って撚りをかけるのが普通である」と記している〔布目 1988〕。

6) 日本の律令体制下で税（調）として集められた紬（あしぎぬ）は、平絹で撚りがかけられていない糸である〔尾形 1999〕。

7) 編んで製作された布のことで、日本の蓆や簾と同様な作り方によるものである。小笠原好彦氏の論考などがある〔小笠原 1970〕。

り日本よりも少なく、紡錘車にも関心が払われていない状況である。

日本では紡織技術について、染色史の視点による研究〔角山 1968〕、遺跡からの出土繊維に関する研究〔布目 1979・1988、沢田むつ代 2001〕がある。また、紡錘車から糸となる繊維の種類、及び実際に布を織るという広範囲にわたる視点からの成果がある〔竹内 1989〕。

日本の弥生時代における原始機の復元に関しては、経糸の保持方式が「直立式」のものとされていた⁸⁾（第3図1）が、近年「輪状式」の織機であると考えられるようになってきている⁹⁾。

腰当を使い織り手が経糸全体に当たる織機の先端棒を、足で突っ張りながら保持し、刀状の緯打具を使用して緯糸を打ち込む経糸が輪状のタイプの機である。

近年、日本の弥生時代の原始機に関係して、出土木製品を基礎に東アジア周辺諸国の機との比較を通して考察し、「輪状式原始機」（第3図2）〔東村 2007、2008A・B〕であることが報告されている¹⁰⁾。輪状式の機は6世紀前半まで、地域によっては7世紀前半まで存続したことも推定されている。輪状式機に特徴的な部品である木製品の「布送具」（第4図）が、縄文時代晩期～弥生時代早期の福岡県雀居遺跡などから出土していることなどが根拠となっている。布送具は凹形と凸形を組み合わせ布を挟み、腰当てで保持するための木製品である。したがって、弥生時代に日本へ導入された原始機は、輪状式と考えることが妥当であろう。

紡錘車は、先述の輪状式原始機が使用されたと考えられる雀居遺跡では、弥生前期と同様の一定の大きさをもつ紡錘車が出現していることが報告されている。織機技術は、糸作りの技術を含む系統のかつ総合的なものであり、技術の導入背景には人の移動がある。具体的な輪状式機の日本への導入契機や経路については、今後の研究を待たねばならないが、現状での見通しを提示しておきたい。

輪状式の織機を伴う日本への技術導入ルートの一つとして、中国長江流域から、韓半島を経て、稲作技術と同様のルートで日本に導入されたという見通しが立てられる。その時期も稲作導入とほとんど変わらない可能性が高い。

2 紡錘車の系譜と再利用

縄文時代の土器破片再利用の「有孔円板」〔長崎 1978〕が紡錘車であったかどうか、また、縄文時代の編布から平織りへの移り変わりに関する問題など〔小笠原 1983〕は、土器再利用と紡錘車の関係では重要であるが、紡錘車が小型化して、一定の形状に定式化し始める日本の縄文時代晩期～弥生時代早期以降についてみる。

日本の紡織機の系譜や紡錘車について先駆的な研究は、八幡一郎氏¹¹⁾による一連の成果

8) 太田英蔵が復元したものが先駆的である。アイヌや八丈島で使用されている直立式の機が参考となっている。太田氏の織機についての論文は、小林氏〔小林行雄 1962〕の「Ⅱ織機」に引用された部分を参考にしている。

9) 「輪状式」タイプの機に関して先駆的なものとして、岡村吉右衛門氏の論考〔岡村 1977〕がある。民族学からの織機の研究成果からも、日本の原始機について輪状の機が推定されている〔吉本 1987〕。

10) この研究の基礎となる部分に、鈴木敏則氏の論考〔鈴木 1999〕が大きな影響を与えた。

11) 「紡織技術考」として、紡織に関する八幡氏の論文が収集されている。「朝鮮半島の古代紡錘車資料」（初出は『朝鮮学報』49輯 1968年）や、「イラン国アルボルス山中の古墓出土の紡錘車

がある。日本の紡織技術が韓半島や中国大陸と関係し繋がっていること、また、性別と分業にも関心をもち、紡錘車の副葬に注目したことは先駆的研究といえる。しかし、円形土製品を含めて紡錘車として報告している。

佐原真氏は、弥生前期以降の紡錘車について、はじめから紡錘車として作られた定形の紡錘車として A 種と、土器片あるいは、石包丁を再利用した B 種の 2 種類を認識して分類を行い、また、重量に注目してデータを収集する試みを行っている [佐原 1974]。前述の通り、紡錘車の使用法についても、吊り下げて使用する際には、重量が紡ぐ糸の太さと種類に関係する重要な属性であることも指摘している。また、形状が紡錘車に類似する道具として、発火具の舞鑽などにもふれている。

中間研志氏は、中国の新石器時代の紡錘車が韓半島を経て年代的に下り、日本の縄文時代後期から弥生時代前期の紡錘車へと繋がる見通しをもっていた。また、紡錘車としての用途が前提とされていた土器再利用の「土器片円盤類」などは、紡錘車かどうかの検討が必要であると問題提起を行っている。

さらに、日本と一層関連が深い韓半島の紡錘車を考察し、石製や土製の材質の違い、断面の形状に地域差があり、韓半島南部の無文土器に伴う「石製扁平円盤形」紡錘車と、北九州の弥生時代早期の紡錘車が近似することも指摘している [中間 1985]。

松本直子氏は、弥生時代早期から認められる土器片再利用の「有孔円盤」と「土器片円盤」が、紡錘車として用途のみではなかったことを、次項でふれるように具体的に検討している。また、土器片を新たな道具作りの資源と指摘している点では先駆的である [松本 2002]。

筆者も、破損した土器を新たな道具作りの資源と認識し、考察を行っている¹²⁾。日本の古代の土器が紡錘車、灯火具、硯などの用途に再利用されていたことを数量的に分析している。そのなかで、古代の坏底部を加工した紡錘車は、形状から再利用の用途が推定できる数少ない資料である。

3 紡錘車としての基準

本項では改めて従来の紡錘車形の道具が、紡錘車の用途で再利用されたか、紡錘車が織布用か、網などの太い繊維用か、あるいは紡錘車形工具か否かなど用途の区別をするための一定の判断基準を示す。検討する属性は重量に加え、松本氏も指摘している中心孔の大きさを基準に検討する [松本 2002]。また、はじめから紡錘車として製作されたものは、定形紡錘車と呼称する。ただし、太い繊維用紡錘車と紡錘車形工具の一部は区別が困難ではある。

松本氏は弥生時代前期の土器片円盤類の性格について、岡山県の遺跡から出土した土器片円盤と重さ、大きさ、孔径などから紡錘車の数量的検討を行い比較している。特に紡錘車としての機能から、紡茎を差し込む中心孔の直径、孔形という属性について検討し、孔径 0.4cm～0.8cm、円筒形の孔形が紡錘車としては有意とする。

前述したように、重量は紡錘車の属性として重要である。しかし、報告書で紡錘車や円

について」（初出は『上智史学』1969 年）などである [八幡 1979]。

12) 本稿をまとめるにあたり、土器片を資源と位置づける筆者は、松本氏と同様の見解であること

形土製品の重量の測定値が示されていない例も多く、資料的な制約がある。孔径は、報告書の実測図からも計測可能であることから、紡錘車としての汎用性のある属性として重要である。

紡錘車の孔径は 1.0cm を超えると、紡軸の材質が木製であっても、紡軸自体の重量が重くなることが予想されている〔中沢 1996A・B〕。紡錘車などの孔径は報告書から計測する際には、実際の紡茎の大きさと考えられる最小径を対象とする。

中沢氏のまとめた、関東地方の群馬県出土の弥生時代から 9 世紀以降の平安時代の石製・土製紡錘車約 680 点の孔径は、0.5～0.9cm のものが全体の 97% を占めている。1.0 cm 以上のものは、平安時代にわずかに認められ〔中沢 1996A・B〕、西日本の紡錘車の孔径と近似する数値である。

東村純子氏も紡錘車の基準として、松本氏や中沢氏と同様に孔径と孔形に注目している〔東村 2005〕。筆者も、紡錘車の基準として重量の次に孔径が重要と考えている。しかし、孔形については後述するが、石製など硬質の素材の穿孔には鼓形のものが認められること、また製作工程の違いもあり、注意が必要であると考えている。

孔径については 0.3～0.9cm が紡錘車である基準として、松本氏と中沢氏の検討結果から導くことができる。この結果を踏まえ、具体的に古代上野国、群馬県の紡錘車として一つの遺跡で 100 点以上の紡錘車が出土した吉井町矢田遺跡¹³⁾の重量が測定されている 77 点の紡錘車及び、埼玉県と東京との一部の武蔵国内 11 遺跡¹⁴⁾から出土した 104 点の紡錘車について検討する。矢田遺跡では再利用の紡錘車が 1 点も認められていない。重量が測定されている織布用紡錘車と網などの太い繊維用紡錘車、それ以外の紡錘車形工具との区別のため、重量と直径及び、重量と孔径を属性としてグラフ化（第 5～8 図）を行った。

矢田遺跡（第 5 図）では、既に奈良時代に紡錘車に類似する円盤状石製品の存在〔春山 1990〕と、3 点の重量が 100g を超え、断面形状が長方形のものについて紡錘車ではないという指摘〔中沢 1999〕もあるが、重量に関しては 90g 以下を織布用紡錘車の目安とする。孔径は、武蔵国の主要遺跡（第 8 図）では 1.0 cm、矢田遺跡では 1.1cm が紡錘車と紡錘車形工具の一応の基準になる。矢田遺跡では重量と直径（第 5 図）においては、重量 90 g、直径では 7 cm が一応の基準と認められるが、網などの太い繊維用紡錘車と紡錘車形工具が、一部重複している。そこで、孔径から検討すると 2 点が工具と考えられる（第 6 図）。武蔵国内の 11 遺跡では、重量のある土製紡錘車 3 点（第 7 図）は、孔径をみると 9 世紀前葉の 1 点が工具の可能性が高い（第 8 図）。太い繊維用や紡錘車形工具は 7 世紀後半以降に認められ、また、武蔵国では重量から再利用の紡錘車は、織布用であることがわかる。

孔径については土器破片を再利用する際、紡錘車としての基準は、穿孔の際の誤差を考えると孔径が 0.3～1.1cm という誤差を含んだ基準を提示したい。既述の通り、孔径が 1.0cm をこえると装着する紡茎の重量が増すが、紡錘車以外の工具として、現段階では各地域の共通で確実なものとしては誤差を考え 1.2cm 以上を提示したい。ただし、孔径が 1.0cm 以上であるものについては、工具としての可能性を考慮し、具体的に重量との関係で検討す

を知った〔坂野千登勢 2005・2008A・2008B〕。

13) 6 世紀後半から 11 世紀前半までの矢田遺跡出土紡錘車についての測定値を使用している〔中沢 1997〕。矢田遺跡では、再利用紡錘車は認められていない。

14) 第 2 節で既述する 11 遺跡出土の 7 世紀末葉から 10 世紀前葉までの紡錘車である。

ることが必要である。

基本的に重量、孔径、孔形、全体の形状から紡錘車としての用途であるか否かの整理をする。即ち、定形紡錘車及び再利用の紡錘車とも織布用の糸を紡ぐ紡錘車、網などの太い繊維用の紡錘車の２種類と、さらに穿孔の舞錐などに用いられる紡錘車形の工具という合計３種類の用途があり、その目安となる数値を重量、孔径、孔形、形状について検討する（表１）。

まず、織布用の細い繊維用紡錘車としての属性の優先順位は、①重量（90g 以下であるか）②孔径（1.1cm 以下であるか）③孔形（円筒形であるか）④全体形状（円形に丁寧に成形されているか）の順である。直径は 7.0 cm 未満であるかも注意する必要がある。90g を超える一部は、孔径が 1.1cm 以下で孔形が円形のもの、太い繊維用の紡錘車として使用されたと考えられる。重量が 90g、孔径が 1.1cm を越え、孔形が円筒形でないものは、穿孔用の弾み車など、紡錘車形工具としての用途が推定できる。なお、数値は目安であり、誤差があることを含んでおきたい。そして、穿孔する際には、上下からの穿孔になるため、最小孔径の数値を基準とする。紡錘車であるか否かについては、できるだけ多くの属性について検討することも必要であるといえる。

第３項 紡錘車の性格と変化

１ 副葬・供献された紡錘車

台形の断面形状の石製紡錘車は古墳時代中期から認められるが、古墳時代後期になると大多数となり、西日本では性別を問わず中小規模古墳に多く副葬・供献されるようになると考えられている。韓半島にわずかししか認められない断面形状台形のタイプは、明らかに紡錘車の日本化といえる。一方、東日本の特に関東地方では、古墳に紡錘車が副葬・供献された例は、西日本に比べてきわめて少ない¹⁵⁾。

定形紡錘車は集落の住居跡などからだけではなく、古墳の副葬品として検出されるため、時代と地域、形状、石製、土製などの種類により、実用品か祭祀用かという性格の違いと変化が問題になる。

関東地方の古墳時代の紡錘車は滑石製が多い傾向にあり、集落からの出土も多いが、石製模造品との関係から祭祀との関係が問題になる〔埋蔵文化財研究会 2005〕。また、古代では木製品として紡錘車をはじめとする紡織具が、河川や大溝から出土すること〔静岡県考古学会 2005〕、沖ノ島の宗像神社〔岡崎ほか 1978〕をはじめとして、紡織具が神社に神宝として残されていることなど、律令的祭祀との接点が認められているが、明確ではない。こうした祭祀と紡錘車などについては、今後の課題といえる。

古墳に副葬されている紡錘車¹⁶⁾のなかには、被葬者の性格や社会的位置づけに関して考

15) 埼玉県鴻巣市新屋敷古墳群では、6 世紀前葉を中心とする 5 世紀末葉から 6 世紀後葉である 75 基のうち、19 基の周溝から滑石製紡錘車が 23 点検出されている。1 基の「前方後円墳」を除き、ブリッジをもつ円墳であり、紡錘車は周溝のブリッジの右側から多く検出されている。鋸歯文を含む線刻紡錘車が 3 点含まれている。関東地方においてほにの古墳出土例は、同じ元荒川水系の蓮田市椿山古墳群の 3 基と他の数例の遺跡に認められる程度で少数である〔大谷徹 1998〕。

16) 西日本の前期古墳から出土する碧玉や緑色凝灰岩製の紡錘車形石製品については、イモ貝製の円板形装飾品を模倣したとする論考がある〔北條 1996〕。したがって、本稿でもこの紡錘車形石製品は、紡錘車とは区別して扱う。

察が行われている。断面が台形を呈する滑石製紡錘車は、中・小規模の古墳に多く副葬される傾向が指摘されている。特に鋸歯文が線刻された紡錘車は、西日本を中心に認められる。その性格は単に糸紡ぎの実用の道具としての機能のほかに、象徴的な仮器としての性格が付与されたと考えられている¹⁷⁾。

國下多美樹氏は、京都府出土の紡錘車を集成している〔國下 1988〕。中期古墳から多く出土する断面台形の鋸歯文をもつ石製紡錘車は、仮器と考えられているが、出土する古墳は、卓越した規模の古墳ではないことも指摘している。

瓦再利用紡錘車については、長岡京期（AD784～793）に数点認められることを報告している。いづれにしても、検出された点数は多いとはいえない。

特に被葬者や紡錘車の系譜という点で注目されている紡錘車は、断面形状が六角形のいわゆる「算盤玉形紡錘車」である。日本の古墳時代中期前半（5世紀前半）には、主に西日本、及び北部九州においてわずかに認められており〔橋口 1982、西谷 1983、桜井 1993〕、東日本では1例¹⁸⁾を除き、報告例がない。韓半島の大多数の紡錘車が、断面六角形であることから、韓半島からの渡来人との関係が指摘されている。

角南聡一郎氏によれば、紡錘車は水稻耕作と共に日本に伝わったが、副葬品としての意味は伝わらず、第二波としての古墳時代前・中期に、断面算盤玉形の紡錘車が導入され、直後に滑石製有文の断面台形に転化したとする〔角南 2005〕。

日本において紡錘車の古墳への副葬の意味は、時代により変化したと考えられるため、次のような見通しをもっている。第一に古墳への副葬の変化は、織機などの技術変革によるものである。第二は紡織が零細な仕事の象徴として、墓の一部に副葬する段階を経て、布の大量生産及び、品質向上が行われ、社会的に重要な交易品や交換財になったと考えられる。その背景として古墳時代後期における地機の導入などの技術革新が考えられる。第三として西日本ではその結果、多くの富を蓄積した中小集団が形成され、古墳時代後期には群集墳の急激な増加が認められる。紡錘車は、富の象徴的存在に変化したことが推定できる。

2 日本の織機技術革新と社会

中国古代の織機は、漢代画像石¹⁹⁾（第9図）から、居坐機（いざりはた）形態の地機とも考えられている²⁰⁾。

日本への地機導入についての具体的な資料としては、関東地方の埼玉県行田市池守遺跡〔埼玉考古学会ほか 2008〕から、6世紀後半～7世紀とみられる古墳時代後期の地機の木製部品が検出されている（第10図）。古墳時代後期後半から関東地方では、地機が使用されていた可能性が高いといえる。

17) 中山学氏は、広島県内の6世紀中葉～7世紀初頭に集中する線刻鋸歯文の滑石製紡錘車について、古墳出土資料を含めて検討し、祭祀具として、「擬似的に使用」されたと推定している〔中山 1998〕。また、豊島雪絵氏も古墳時代中期には、一部の石製紡錘車は仮器とみている〔豊島雪絵 2001〕。

18) 陶質土器・韓半島系軟質土器は発見されていないため、渡来系の人々との関係については明確ではないが、鉄生産と紡織との関連が推測されている〔高井 1999〕。

19) 織機を描いた画像石は12点が確認されている〔渡部 1991〕。

20) 吉本氏、東村氏は高機と考え、渡部氏は地機と考えている。

地機（第3図3）や高機は、経糸が直状に保持される機であり、織り上がった布の形は矩形で、長さは十数mを織ることが可能である。したがって、地機により織られた布がもつ社会的関係性は、格段に異なると考えられる。日本の高機の導入については、古墳時代中期～古墳時代後期²¹⁾と考えられている。しかし、現状では高機に関する考古遺物は、遺存する布以外は、高機の部材の一部である可能性が認められる、わずかな木製品が報告されているに過ぎない〔黒須 2005、穂積 2008〕。しかし、6世紀後半には、輪状式の原始機とは隔絶した高い技術による、地機という直状式の織機が導入されたと考えられる。

古墳時代中期以降は、少なくとも地機が導入され、紡錘車は台形状が主流となるという大きな変容が推定できる。古墳時代中期の5世紀は、文化と社会変容を伴う変革期である〔坂野和信 2007〕。韓半島経由で須恵器の製作技術、竪穴住居には竈、また、大型甗の導入による蒸すという新たな調理道具、及び供膳具としての各個人の坏や埴などの食器の成立など、新しい生活様式の導入は確実に韓半島経由である。

また、漢代には画像石により、確実に地機が使用されていた中国と韓半島の交流関係は、BC108年に楽浪郡が建郡〔高久 1995〕され、313年まで存在したことからも、日本よりも一層、中国前漢・後漢との関係が深いことは明らかである。列島と中国大陆との直接交渉が全くないとはいえないが、主に韓半島経由、韓半島からの渡来系の人々によって、地機を含む紡織技術が日本にもたらされたと考えている。

従来の輪状式の布と、地機により織り上げられた布を比較すれば、当然、付加価値は異なっている。新たな織機の導入による布生産の効率化は、織布の増産へと繋がり、生産集団及び個人の富の蓄積を可能にしたといえる。

紡錘車の性格には生産具、祭祀具、及び副葬品という多様な側面があり、時代と地域により性格に差異があるといえる。即ち、紡錘車に関係する変化の背景には、織機の変化とその生産物である布の変化を伴うものであり、布の社会的な位置づけが変わるという紡織技術の変化が存在し、これが社会にも変容をもたらすという相互作用が認められる。

西日本では6世紀後半から鉄製紡錘車が認められ、東日本では奈良時代の8世紀後半には、再利用の紡錘車が加わる。再利用の紡錘車は、紡錘車を各使用者が自ら製作する自家製という点では、鉄製紡錘車とは異なるが、紡錘車の属性で重要な重量の点からみると織布用の分布範囲に入っているものが大多数である（第5～8図）。

古代中国では秦代から既に、布帛が通貨と同様に流通している〔太田 1951〕。日本では7世紀中頃から麻や苧麻などの植物繊維の布を基礎におく、律令制による価値表示体系の整備が始まり、やがて貨幣へと制度的に変化した〔吉川 1984〕とされている。実態としては奈良時代の8世紀以降でも、布が貨幣の代わりとして使われていたと考えられている。大量の商布²²⁾による叙位の記録²³⁾や、8世紀後半とみられる南比企窯跡群（第2章第12図）

21) 太田氏、小林行雄氏は、絹機（高機）や布機（地機）は、5世紀から6世紀には日本に導入されたと考えている〔小林行雄 1962〕。吉本氏は古墳時代中期に、中国から直接的導入された高機の可能性を考えている〔吉本 1987〕。東村氏は〔東村 2008B〕の註で、遅くとも6世紀中葉～後半に確認できるとしている。

22) 商布は日本の律令体制下で、調庸という税以外の形で、中央政府に流入する布全般を示す概念と考えられている〔吉川 1984〕。

23) 『東大寺要録』巻二、及び『続日本紀』の天平二十年二月壬戌条に、相模国出身の漆部直伊波という人物が、天平二十年（748年）、二万段という大量の商布の「献物」により、外従五位下に

出土須恵器の壺に値段の表示としての「大瓦長（ミカ）布直六十段」のへう描きが残っている〔鳩山町教育委員会他 1992〕。当時、地方においても布が交易の際に貨幣と同様の交換単位であったことがわかる（第 11 図）。

日本における紡錘車に関する性格の変化は、紡織・布自体の社会での位置づけの変化を反映しているといえる。織機などの技術変革により、布の生産量が増加し交易品として重要な品目となったと考えられる。即ち、紡錘車は衣類の生産道具から、交易品として富を生み出す象徴に、さらに糸生産は一般的かつ日常的に広く行なわれる生産活動になったとみられ、社会的 position づけの変化の過程が推定できる。

第 2 節 古代武蔵国の紡錘車

本節は、再利用の紡錘車の研究事例として、古代武蔵国主要 11 遺跡における土器再利用の紡錘車と鉄製紡錘車に焦点を絞って、分類と考察を行なう。従来、再利用の紡錘車は「調庸布の粗悪化の象徴」、鉄製紡錘車は「調庸布の均質化」と対極の性格のものとして理解されている。

再利用と鉄製の二つの紡錘車は、素材の違いだけではなく、その生産体制においても対極にある存在と考えられている。この紡錘車の性格の差異に着目し、官衙と関連遺跡及び主に紡錘車が出土する遺跡を対象にして、従来の研究では、ほとんど関心が向けられていない、再利用紡錘車の実態に関する分析について、武蔵国を中心に検討する。古代における資源の再利用に関して、土器の再利用という視点から、灯火具、硯などと共にその用途の一つである再利用の紡錘車に着目する。

第 1 項 鉄製と再利用の紡錘車の性格

1 再利用の紡錘車

古代の再利用紡錘車の素材は、関東地方では主に土器である。内訳をみると須恵器坏類の底部が大多数を占める。このほかの紡錘車の素材として認められるのものは少数であるが、須恵器甕の破片、土師器甕の破片に加え、砥石の一部を再利用した紡錘車が認められる。このように再利用の紡錘車は、比較的硬質の素材を選択していることがわかる。

第 3 節で述べるように、韓半島の慶州新羅王京〔国立慶州文化財研究所 2001〕などでは 7 世紀後半以降、8 世紀～9 世紀代の瓦再利用の紡錘車、及び紡錘車形の工具と推測されるものが多数認められている。一方、陶質土器の再利用は、日本の須恵器とは異なり、紡錘車としての細かな加工には不向きなほどの硬度であるため、円形土製品を含めてもわずかである。

日本で瓦再利用紡錘車が認められるのは、筆者の知る限りでは、8 世紀前半とみられる平城京長屋王邸、及び藤原麻呂邸出土の平瓦再利用品である 7 点〔奈良国立文化財研究所 1995〕、長岡京跡出土の長岡京期（8 世紀後葉）とされる 3 点〔國下 1988〕（第 12 図）

叙位された叙位の記録が残るという。「民間私富の導入」と考えられ、「売位のかたち」であると記されている〔榮原 1992〕。

などで数が少ない。平城京出土のものは、重量は記載されていないため不明であり、うち1点の孔径は1cmで整った円形ではない。特に都城での建物の瓦使用は膨大な量であるにもかかわらず、瓦再利用の紡錘車は、ごくわずかに認められているにすぎない。これは都城の場合には建物の移築というものが一般的であり、屋根に葺かれた瓦もその際に再使用されたと考えられる。

関東地方の8世紀中頃に創建された下野国分寺では、9世紀後半代に建てられた南大門の所用瓦は、8割を超える瓦が再使用であるという報告がある〔大橋 2001〕。瓦は官衙や寺院周辺の集落では堅穴住居の竈の構築材として使用されている例も認められる。しかし、瓦として再使用できないものも多数認められている²⁴⁾にもかかわらず、紡錘車の材料としての再利用は限られている。日本では瓦再利用紡錘車が少数である。韓半島南部とは再利用の素材の指向性が異なった状況である。韓半島では日本と異なり、瓦はむしろ、入手し易くかつ、用途に適した重量の素材であったためと考えられる。

長岡京でわずかに認められる瓦再利用紡錘車のうち、重量が測定されているものは一部を欠損する1点（第12図5）である。孔径0.9cm、残存重量は87.9gであることから、90g以上であることは確実である。紡錘車としては重量が重いため、前述の通り、かなり太く丈夫な糸を紡いでいた可能性が高い。この点是新羅王京の瓦再利用紡錘車と同様の傾向であり、瓦再利用紡錘車のなかには紡錘車形工具も含まれていると考えられる。日本では重量のある紡錘車や紡錘車形工具は、土製、石製紡錘車、及び後述するように砥石の再利用紡錘車などに認められる。

再利用紡錘車は、東日本の関東地方では8世紀後半に多く認められる。須恵器の坏底部を再利用（第1図6）した紡錘車が顕著である。このタイプが登場する背景は、須恵器の生産状況との関係が深いと指摘できる。これは武蔵国の南比企窯が8世紀後半から、また東金子窯、末野窯が9世紀前葉から大量生産を行っていた〔加藤 2006〕。特に須恵器の坏類の法量は縮小し、底部の重量が減少して、集落に大量に供給されるようになったことが須恵器坏類の再利用をより促したと考えられる。

つまり、須恵器坏が大量生産される過程で、法量が縮小しこれに伴い、底部が薄く軽量化することで、紡錘車の素材として再利用されたと考えられる〔坂野千登勢 2005〕。8世紀後半には、須恵器の坏底部を紡錘車の素材として、結果的に適した重量に作られるようになり、より加工しやすい素材となるためである。埼玉県若葉台遺跡出土の須恵器坏類の底部残存形状分類Aタイプ（A-1・A-2）、B-1タイプ（第3章1節1図）である底部破片約100点について、重量を計測している。

その結果、8世紀前半は平均重量90g以上であるが、8世紀中葉では約75g、8世紀後葉には約63g、9世紀代で約46gと軽くなっている（第13図）。特に、8世紀後半から坏底部再利用の紡錘車が作られ、9世紀代に比較的多いことから、約60g以下の重量が紡錘車として適していることを、当時の人々が経験的に理解していた可能性が高いといえる。

第3章1節で既述した通り、打ち欠きなどの再加工の技術で、集落において、土器を新たな資源として生産するための道具を製作していると考えられる。また、砥石を素材とし

24) 坂戸市の勝呂廃寺所要瓦のうち再利用されない平瓦、丸瓦が多数あることを確認している。

て再加工した再利用紡錘車が、9世紀代には少数ではあるが認められる〔狭山市教育委員会 1986〕。90 g を越えているものがあるため、織布用ではない紡錘車も含んでいるが、集落で製作されている。

また、石製紡錘車の製作と流通については明確ではないが、群馬県西部地域に紡錘車に適した岩脈があり、多数の石製紡錘車が周辺の集落から出土している〔中沢 1996〕。土器と石製の材質は異なるが、再利用紡錘車が集落で加工されている状況からみると、石製定形紡錘車の一部には、ある程度の加工が施されたものが流通し、実際に使用する集落において仕上げ、穿孔されていた可能性も否定できない。

2 鉄製紡錘車

鉄製紡錘車の出現は、西日本では京都府今里遺跡から6世紀中葉のものが認められ〔國下 1988〕、7世紀には広く使用されている。一方、東日本では7世紀末葉以降に認められる。鉄製紡錘車は、上野国では7世紀末葉の群馬県上野国分寺中間地域Ⅰ区第76号住居跡〔群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992〕、武蔵国では7世紀末葉～8世紀初頭の可能性がある東京都日野市落川遺跡第510号住居〔日野市落川遺跡調査会 1997〕などが挙げられる。東日本の鉄製紡錘車は、8世紀の検出例が増加し、9世紀に普及している。このように現段階では、東日本と西日本では出現と普及の時期に差がある。

鉄製紡錘車の生産については、専門工人集団によるものと考えられるが、具体的にどのような生産体制で、どのように流通していたかは検討されていない。また、完全に残るのは数少ない紡錘車である。腐食あるいは、鉄素材としての再利用が推定されるため、より残存数が少ないと考えられるが、現段階では再利用の実態は不明である。また、鉄製紡錘車の研究においては、実際の紡錘車としての使用の面からも、具体的な検討が行われていないといえる。

一般的には紡錘作業に際して、水分を補給しながら行なうため、鉄素材の欠点である錆や腐食が考えられる。継続的な紡織作業が行われなければ、短期間で錆が糸に移るため紡錘車として使用できなくなることが推測される。市などでの交易あるいは生産集団との直接の取引を含む、安定的な入手ルートを確保する必要もある。鉄製紡錘車については今後、生産から使用までの総合的な検討が必要である。

紡輪と紡茎の組み合わせの材質については、第1項で既述の通り、木製と鉄製の紡輪は各々通常、同じ材質の紡茎と組み合う。紡茎、紡輪とも鉄製のいわゆる鉄製紡錘車の紡茎先端部には、鈎状の細工が施され（第1図3）、第1節2項で述べたように、完全宙釣りができる効率の良い紡錘車である。

鉄製紡錘車は、西日本では6世紀中葉から認められ、7世紀前半には滑石製紡錘車は消滅するとされる〔東村 2005〕が、関東地方では7世紀後半から石製紡錘車と併存する。このため、石製紡錘車は麻布用、鉄製は主に絹糸と推定〔滝澤 1985〕する見方もある。しかし、鉄製紡錘車には、植物繊維が付着した出土例が認められ、麻布の貢納国に顕著に認められること〔古庄 1992、堀田 1999〕、第1項で述べたように絹糸の特性などから、鉄製紡錘車を絹糸用とは断定できない。紡がれていた糸の大部分は、麻や苧麻などの植物繊維と考えられている〔東村 2006〕。

鉄製紡錘車の重量については、紡輪のみの重量を比較して軽量とする意見がある。軽量

の紡錘車で紡ぐ糸は絹であり、重い石製紡錘車では麻として、両者に用途の違いを推定している〔堀田 1999〕。しかし、紡錘車は紡輪と紡茎が組み合って使用されるため、紡茎の重さも考慮することが必要である。使用する際には、紡輪に鉄製の紡茎が装着される鉄製紡錘車全体の重量は、石製、土製紡錘車に比べ軽量とはいえない。

鉄製紡錘車で完存し、重量が計測されているものは極めて数が少なく、以下の通りである。武蔵国児玉町将監塚・古井戸遺跡 9 世紀中葉の H-38 号住居出土例は、紡茎が約 25cm 残存し、約 65 g である。また、9 世紀第 4 四半期とみられる上野国群馬県吉井町矢田遺跡 12 号住居跡〔群馬県教育委員会 1991〕の覆土から、紡茎は円形を呈し約 21cm 残存するのが検出されている。鉄製紡錘車は 51.5 g を量る。

また、滝澤氏による紡茎の有無を区別している鉄製紡錘車の重量グラフ（第 14 図）がある。紡茎がどの程度の残存か不明であるが、紡茎の認められる鉄製紡錘車の重量は、石製紡錘車の紡輪のみの約 25 g ～ 70 g の範囲と同じ重量の範囲である〔滝澤 1985〕。錆が付着する鉄製紡錘車の重量計測は困難であるが、計測された例をみれば、鉄製紡錘車が石製・土製紡錘車に比べて軽量とは、単純にはいえないことが指摘できる。したがって、鉄製紡錘車は絹を紡ぐためとは断定できない。鉄製紡錘車で撚りがかけられた糸は、第 1 節 3 項の通り、ほかの種類の紡錘車と同様、主に植物繊維であると考えられる。

鉄製紡錘車の紡茎の断面形状は円形と正方形の 2 種類が認められる。鉄製紡錘車は紡茎が残存する紡錘車が限られているため、データ収集は難しいが、紡茎の重量からみると、重いタイプと、軽いタイプの 2 種類に大別できる。

鉄製紡錘車は、法量の検討から画一性が注目され、「律令官人の関与」や「調庸布の均質化」として理解されている。鉄製紡錘車は、西日本では 7 世紀には法量が画一化し、一定の規格の存在が指摘されている〔東村 2005〕。そのため、一定の規格の布生産及び導入に際し、律令体制と有機的な関係をもつ紡錘車であると考えられている。

平城京で木製紡織具のみが出土する状況を踏まえ、宮都では製糸部門は行われず、貢納、交易などによって入手した糸を織る分業体制が確立していたと考えられている〔東村 2004〕。しかし、後述するが、武蔵国府関連遺跡では、再利用を含めて多数の紡錘車が検出されている。また、入間郡衙と目される霞ヶ関遺跡の周辺遺跡からも鉄製紡錘車などが検出されおり、武蔵国では国府をはじめ、分業による紡織体制とは明確に断定できない複雑な状況である。

要するに、単独に鉄製紡錘車を取り出して比較するのではなく、石製・土製・再利用の紡錘車との関係性を把握し踏まえたうえで、その位置づけを行うことが必要である。東日本で鉄製紡錘車の導入期の 7 世紀後半から 8 世紀前葉は、官衙や中央との関係が認められる可能性もあるが、後述の通り、紡錘車の数量が増加して紡織の画期ともいえる 9 世紀代における多数の鉄製紡錘車とは、その性格が異なるといえる。即ち、導入期の鉄製紡錘車から、普及期の同紡錘車は、その性格や社会的意味が変容したと考えられる。

鉄製紡錘車が画一的な紡錘車と考えられている一方、再利用の紡錘車は、その対極の性格の紡錘車とされ、「調庸布の粗悪化の象徴」〔堀田 1999〕とする見方もある。群馬県では、土器再利用の紡錘車がほかの素材の補完材料として考えられている。その背景としては、鐙川流域で製作された石製紡錘車が、10 世紀には生産が衰退したこと、また、鉄製紡錘車が不足した可能性が推定されている〔中沢・春山・関口 1988〕。

再利用の紡錘車は、関東地方では8世紀後半に出現し、9世紀に多くなる傾向が認められる。9世紀は関東地方の紡錘車の出土状況からみると、紡織の画期であるといえる。この時期に一定量の再利用の紡錘車が製作される状況からみると、単純に調庸布の粗悪化の象徴とは断定できない。

第2項 武蔵国の紡錘車の出土状況

本項では古代武蔵国の主要遺跡出土の紡錘車について、鉄製紡錘車と従来ほとんど関心がなかった再利用の紡錘車を中心に分析し、古代の紡織に関する新たな側面をみてゆく。古代武蔵国の遺跡からは、多くの紡錘車が出土している。主要遺跡の紡錘車の時期別変遷をみると、武蔵国では7世紀末葉～8世紀初頭には、紡錘車の検出数は少数であるが、9世紀中葉は鉄製、及び再利用の紡錘車を含み、紡錘車全体の数が急増し、布生産の画期が形成されたことがわかる（表2・3、第15・16図）。

各遺跡出土の紡錘車の時期別変遷（第17～27図）は、時期不明のものを除外しているが、第28図の紡錘車の素材別構成グラフに関しては、どのような素材が使用されているかを認識するため、時期不明の紡錘車を含んでいる。また、特に断りのない限り、時期不明の紡錘車は検出点数には加えていない。時期の認定に当たっては、供伴する土器を参考にしているが、各出土遺構で出土位置が具体的に明記されていない紡錘車も、土器と同時期として推定している。時期不明とされている再利用の紡錘車については、素材となった土器の年代を紡錘車の年代としている。

1 武蔵国府周辺遺跡の紡錘車

①武蔵国府関連遺跡（第2章12図1、第17・28図、表2）

武蔵国府関連遺跡では、竪穴住居は約4,500軒、掘立柱建物約1,000棟（2005年現在）が検出されている。遺跡の概要については第4章3節1項で既述している（府中市教育委員会の武蔵国府関連遺跡関係報告書を参照）。

従来、国府において布生産は、武器、紙、墨をはじめとする手工業生産の一つと考えられ、工房の存在も考えられている。また、既述の通り、鉄製紡錘車は導入に際し、律令体制と有機的な関係を考察する紡錘車であるとされている。

第17図の国府関連遺跡の紡錘車について時期別変遷をみると、7世紀末葉～8世紀初頭に石製紡錘車が認められ、9世紀中葉に最も多く、製糸及び紡織の画期であるといえる。鉄製紡錘車は8世紀前葉から認められ、9世紀中葉には7点と多くなる。国府関連遺跡は紡錘車の合計点数では、今回検討した11遺跡のなかで最も多く121点であり、かつ継続して認められる。鉄製紡錘車は8世紀代の武蔵国府関連遺跡が、最も検出点数が多い（表2）。鉄製紡錘車の導入と律令体制との相関関係がうかがえる。

武蔵国府関連遺跡では、木製紡織具の発掘例は筆者の知る限りみられないが、少なくとも、地機を使用した布生産が一部行われていたと考えられる。また、紡錘車の出土状況からすると織布のみならず、製糸も国府関連遺跡では行われていたことがわかる。平城京とは異なり、未分化な手工業生産の在り方といえよう。

一定の規格がある鉄製紡錘車とは対極の性格とされている再利用の紡錘車は、武蔵国府関連遺跡では、8世紀後葉～9世紀初頭以降に認められ、9世紀中葉に7点、後葉には6

点と比較的多くみられる（第 17 図）。鉄製紡錘車の入手という点では、最も容易であると考えられる国府関連遺跡において、再利用の紡錘車が多数認められることは、単に間に合わせあるいは、経済的な側面のみでは理解できない。官衙関連遺跡で再利用の紡錘車への指向性と再利用の紡錘車を前提とした製糸作業が推定できる。瓦再利用紡錘車については、9 世紀中葉に 1 点のみ認められるが、穿孔を途中で止めている。瓦は紡錘車の素材としては選択されなかったといえよう。

紡錘車の素材別構成の第 28 図では、時期不明の 26 点（鉄製 3、再利用 9、石製 12、土製 2 点）を加えているが、鉄製（27%）と再利用紡錘車（24%）は、ほぼ同程度であり、土製がもっとも少数である。国府関連遺跡の第 23 図グラフ 1 の構成比に近似するパターンは、資料点数と時代も異なるが、グラフ 3 の霞ヶ関遺跡群・関連遺跡である。いずれにしても国府関連遺跡は、土器再利用の紡錘車の占める割合が高いことを指摘できる。

②落川遺跡（第 2 章第 12 図 14、第 18・28 図、表 2）

東京都日野市落川遺跡は、武蔵国府とは多摩川を挟んで対岸に位置し、古墳時代後期初頭から 11 世紀末まで存続する〔日野市落川遺跡調査会 1997・日野市落川土地区画整理組合 1998〕。交易拠点も兼ねていたと考えられるが、遺跡の性格については、第 4 章 3 節 1 項で既述している。

落川遺跡は、今回 8 世紀前葉に含めたが、7 世紀末葉の可能性のある鉄製紡錘車が 6 点検出されている。全体として、紡錘車の検出点数は少数である。第 18 図の紡錘車時期別変遷をみても 8 世紀前葉には、紡錘車が一定数認められる。しかし、9 世紀代には認められず、10 世紀前葉以降に比較的多い。鉄製紡錘車は 8 世紀、9 世紀とも一定数みられるが、再利用の紡錘車は 10 世紀前葉の 1 点のみである。

第 28 図グラフ 2 の素材別構成には、時期不明の 11 点（鉄製 2、再利用 1、石製 2、土製 6）が含まれている。落川遺跡の紡錘車は、土製が比較的多く 41%を占め、石製や再利用の紡錘車の割合が少ない。武蔵国府関連遺跡とは紡錘車の構成が異なる遺跡である。

2 入間郡主要遺跡の紡錘車

①霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡（第 2 章第 12 図 6・7、第 19・28・29 図、表 4-1～9）

古代の入間郡衙関連遺跡と考えられる埼玉県川越市霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡では、紡錘車の検出点数は少ないが、2 点の刻書紡錘車が検出されていること、また数少ない 8 世紀前葉とみられる鉄製紡錘車が 1 点認められている（川越市教育委員会の霞ヶ関遺跡群、霞ヶ関関連遺跡関係の報告書及び年報を参照）。

霞ヶ関遺跡群（霞ヶ関遺跡、天王遺跡、龍光・新田屋敷遺跡、第 2 章第 12 図 6、表 4-1～3）からは、石製・土器再利用の紡錘車が出土している（第 29 図 1～3）。

第 29 図 1（表 4-1）は、龍光・新田屋敷第 5 次第 1 号住居北西コーナー出土の蛇紋岩製で、断面形状は台形を呈す。時期は 8 世紀前葉の可能性もあるが明確ではない。漆が塗布され、人面と獣などとみられる線刻が側面に 4 ヶ所施されている。重量は 52 g で、損傷が認められるため、実際に使用されていた可能性がある。

第 29 図 2（表 4-2）は、天王遺跡第 7 次第 5 住居南壁際下位出土の須恵器坏底部再利用の紡錘車である。周縁は丁寧に二次加工が施されている。図 3（表 4-3）は、霞ヶ関遺

跡第 17 次 1 号竪穴状遺構出土のかわらけの底部に穿孔が施されたものである。14 世紀末葉～15 世紀初頭とみられ、穿孔は断面逆三角形を呈し、直径は 0.6～0.3cm、重量 89.0g である。形状は紡錘車に類似するが、織布用の紡錘車の用途ではないと考えられる。中心孔が逆三角形であることと、紡茎の直径は 0.3cm と細い。また、周縁の二次加工も粗雑に打ち欠かれたままであることから、紡錘車としての用途ではないと考えられる。

霞ヶ関関連遺跡（花見堂遺跡・弁天西遺跡・熊野神社西遺跡、第 2 章 12 図 7、表 4-4～9）からは、石製・土製・土器再利用紡錘車・鉄製紡錘車が出土している（第 29 図 4～9）。

第 29 図 4～6 は、花見堂遺跡第 3 次・第 4 次発掘調査出土である。第 29 図 4（表 4-4）は、3 号住居跡出土の 8 世紀前葉とみられる鉄製紡錘車の紡輪で、直径は 4.1cm と小さい。第 29 図 5（表 4-5）は、7 号住居北西部下位出土 8 世紀前葉の滑石製、断面形状台形の紡錘車である。第 29 図 6（表 4-6）は、9 号住居南西部上位出土の 9 世紀中葉に属する須恵器坏再利用の紡錘車で、胎土には白色針状物質を含む南比企窯産の須恵器である。直径 6.8、孔径 0.7cm、重さ 69.0g で、周縁部は丁寧に二次加工が施されている。

第 29 図 7・8 は弁天西遺跡第 15 次出土である。第 29 図 7（表 4-7）は、4 号住居北東コーナー部床面近くの周溝から出土した 9 世紀中葉の滑石製、断面形状台形の刻書紡錘車である。広面には「祥」が少なくとも 2ヶ所、2 人の人物、「目」とみられる線刻、及び側面には「祥」が 4ヶ所と蓮の花と推定されている線刻が認められる。直径 4.9、厚さ 1.6、孔径 0.8cm、重量 62g であり、中心孔には炭化した紡軸が一部残っている。側面には磨耗が認められ、使用されている。第 29 図 8 は 7 と同じ 4 号住居で、カマド床面から検出された 9 世紀中葉の鉄製紡錘車である。紡輪と紡茎長さ 30.0cm が残存し、種類不明の糸が付着している。

第 29 図 9 は熊野神社西遺跡 4 号住居跡周溝出土の 7 世紀末葉～8 世紀初頭の土製紡錘車で、断面形状は長方形を呈す。

このほかに川越市内採集品として、9 世紀初頭の断面台形の滑石製紡錘車には、「大同元年(806)七□(月カ)十四日」と刻書されたものが報告されている[川越市立博物館 1995、大川原・黒済 2009]。川越市内で刻書は 3 例目である。

紡錘車の時期別変遷（第 19 図）からみると、霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡は、7 世紀末葉から 8 世紀初頭の土製紡錘車が認められ、8 世紀前葉には鉄製紡錘車も検出されている。8 世紀後半の紡錘車は検出されていないが、9 世紀前葉から中葉にかけて須恵器坏再利用の紡錘車と鉄製紡錘車が認められる。

第 28 図グラフ 3 は、霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡の紡錘車の素材別構成グラフである。資料点数が少なく参考資料であるが、時期不明の石製紡錘車 1 点を加えている。石製が 37% で最も多くを占め、鉄製と再利用が同じ割合である。

線刻紡錘車は群馬県、及び埼玉県北部地域の 9 世紀に多数認められ、重量は確実に織布用の重量範囲である 50g～70g のものが多いことが報告されている[高島 2006、宮瀧 2006]。第 29 図 1・7 は、この範囲内に該当し、織布用の実用品である。図 7 は「祥」の文字や蓮花とみられる線刻が施され、紡錘車が単に実用品のみの側面ではなく、仏教関係の祭祀などの道具としての用途もうかがえる。出土地域、時期、遺構などを含めて、今後の研究課題といえる。

②若葉台遺跡（第2章第12図2、第20・28・30・31図、表4-10～42、表2）

埼玉県坂戸市千代田遺跡〔埼玉県遺跡調査会 1972〕は若葉台遺跡の一角を占める遺跡であり、鶴ヶ島市富士見一丁目遺跡（第2章第12図3）は、谷を挟み南側に隣接する遺跡〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998A〕で、若葉台遺跡の一部と考えられる遺跡であるため一括して述べる。

若葉台遺跡（第2章第12図2）は、坂戸市と鶴ヶ島市に広がる遺跡で、8世紀前葉からの入間郡地域の核となる集落である（坂戸市分は坂戸市遺跡調査団、及び教育委員会の若葉台遺跡関係の報告書を、鶴ヶ島市分は鶴ヶ島市遺跡調査会、及び教育委員会の若葉台遺跡関係の報告書を参照）。遺跡の性格については、第3章2節1項で既述している。若葉台遺跡は、古代の入間郡の中では紡錘車の出土点数が最も多い遺跡である。出土した紡錘車の構成は、石製が最多で18点を数え、土製4点、鉄製5点、再利用の紡錘車2点である。8世紀後葉～9世紀初頭が最も多く9点が認められ、次に8世紀前葉の6点である。

若葉台遺跡は、8世紀前葉から紡錘車が多く認められ、8世紀後葉～9世紀初頭が最も多い（第20図）。鉄製紡錘車は8世紀後葉～9世紀初頭に認められる。再利用の紡錘車も鉄製紡錘車と同じ時期で、8世紀後葉以降から使用されるが、わずかに2点である（第30図15、第31図30）。

断面形状が六角形の第30図16は凝灰岩製で一部剥離し、断面形状は安定しておらず、古墳時代の断面六角形、あるいは算盤玉状の紡錘車とは異なる。第31図36も凝灰岩製である。石製紡錘車の断面形状は基本的に台形を呈するが、第30図23・28、第31図33・35は厚さがなく、円盤状を呈する。須恵器坏類の底部を再利用する紡錘車と近似する形状である。

文字などを刻書した紡錘車は若葉台遺跡から2点、富士見一丁目遺跡から漢字6文字が記される第31図43の1点で、合計3点が検出されている。T地点出土の第31図38は、重さは40.4gであるが、孔径が1.2cmであるため、織布用の紡錘車として再利用されたものではないと考えられる。

紡錘車の時期別変遷（第20図）をみると、8世紀前葉の紡錘車が6点認められるが、8世紀後葉～9世紀初頭に最も多くなる。該期には石製紡錘車が最も多いが、再利用、鉄製紡錘車も認められる。第15図の武蔵国全体の状況とは異なり、若葉台遺跡は8世紀代には、既に多くの織布用の糸を紡いでいたことが推定できる。

第28図グラフ4は若葉台遺跡の紡錘車の素材別構成で、時期不明の3点（石製3）を加えている。紡錘車の大部分は石製で65%を占め、鉄製と土製がほぼ同じ割合である。鉄製紡錘車は、紡錘車全体では特に出土割合が多いとはいえない。

③東の上遺跡（第2章第12図8、第21・28図、表2）

駅家としての可能性が高い所沢市東の上遺跡から出土した紡錘車は、現時点では時期不明の1点を含めても石製紡錘車4点、鉄製紡錘車2点、計6点と少数である（第21・28図グラフ5）。石製紡錘車は7世紀末～8世紀初頭のものをはじめとして、8世紀代に認められる（所沢市教育委員会の東の上遺跡関係報告書を参照）。鉄製紡錘車は、8世紀後葉～9世紀初頭に2点が検出されている（第21図）。紡織に関する生産活動は低調である。

ただ、今後周辺集落の発掘調査が進むことで、増加する可能性はある。

以上、入間郡の霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡、若葉台遺跡について簡単にまとめる。霞ヶ関関連遺跡では、8世紀前葉には鉄製紡錘車が導入されていたが、その後は紡錘車の出土点数は増加していない。若葉台遺跡では8世紀前葉から紡錘車が多数認められることから、多くの織布用の糸を紡いでいた様相がうかがえる。若葉台遺跡では製糸を行なう一方、入間郡衙と推定されている霞ヶ関遺跡群・関連遺跡では、製糸よりも糸を集めて織布主体の生産に移行している可能性はあるが、明瞭な分業体制がとられていたとはいえない。また、若葉台遺跡は、紡錘車の出土状況からみると官衙的というよりは、豪族による糸や布の生産を行なう、交易拠点集落としての性格が強いといえる。石製紡錘車を多数入手し、集落開始と同時に製糸を行い、8世紀後葉には最盛期を迎えている。

3 各遺跡出土の紡錘車

④熊野遺跡（第2章第12図20、第22・28図、表2）

深谷市熊野遺跡は、榛沢郡衙関連遺跡と考えられている〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002B〕。遺跡の概要は、第4章3節1項で述べている。紡錘車の出土点数は13点と少ないが、石製と土製のものが8世紀前葉から認められる。9世紀中葉には鉄製紡錘車と再利用の紡錘車が各1点認められ、9世紀後葉は鉄製紡錘車が2点である（第22図）。素材別の構成では、石製が高い割合を占める（第28図グラフ6）。資料点数などに異なる面もあるが、各素材の締める割合のパターンは、若葉台遺跡の第28図グラフ4に近似する。検出された紡錘車の数は少ないとはいえ、一定の製糸活動が行われていたといえる。

⑤北島遺跡（第2章第12図19、第23・28・32・33図、表2）

熊谷市北島遺跡は、豪族の居宅や地域開発拠点としての集落と推定されている〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団1989・1998C・2002A・2004A・B・2005A・B〕。紡錘車の出土は時期不明を含めると42点であり、若葉台遺跡よりも多く、麻や苧麻などの製糸及び紡織が、重要な生産活動の一つであったといえる。この遺跡からは、木製紡織具（第32図1）と木製紡錘車（第32図2）が検出され、古墳時代前期と報告されている。また、南1.5kmには諏訪の木遺跡が位置し、8世紀代とみられる糸巻（第33図1）、枠（第33図2）、織機の部品（第33図3）、織機の布送具、あるいは布巻具（第33図4～7）が河川跡C地点から検出されている。第33図4・5と6・7は組み合って使用される織機の部品で、地機と推定できる。

諏訪の木遺跡の河川跡からは、石製紡錘車、再利用の紡錘車も出土している。加えて、北島遺跡の南東約2kmの池守遺跡からは、古墳時代後期の地機の部品である中筒受け（第10図）が検出されている。これらの紡織に関連する遺跡周辺の地名には、「大麻生」などの名称が認められる。このように北島遺跡周辺は、古墳時代から奈良・平安時代には主に麻などの製糸、布生産が行われていた地域であることが推定できる。

北島遺跡の紡錘車は、8世紀後葉から9世紀代に増加し、特に9世紀中葉が最も多く、再利用の紡錘車が8点検出されている（第23図）。再利用の紡錘車は9世紀に特に顕著である。一方、鉄製紡錘車はわずかに2点である。再利用の紡錘車が多く、鉄製紡錘車が少ないことが、この遺跡の紡錘車の構成における特徴である。また、再利用の紡錘車は、末

野窯と南比企窯の両製品を使用している。武蔵国府関連遺跡と同様に、北島遺跡では再利用の紡錘車への指向が明確であると指摘できる。北島遺跡の再利用の紡錘車は、報告書の実測図、及び写真でしか確認していないが、丁寧なつくりとみられる。

第 28 図グラフ 7 は、時期不明の 15 点（再利用 1、石製 13、土製 1 点）が含まれている。石製が約 50%と最も多く、次に再利用 30%、土製 16%、鉄製 5%となる。石製は時期不明も多いが、ほかの遺跡の状況から推測すると 8 世紀前葉、中葉の紡錘車の可能性がある。

⑥将監塚・古井戸遺跡（第 2 章第 12 図 21、第 24・28 図、表 2）

本庄市将監塚・古井戸遺跡は、7 世紀後半に形成された遺跡である。規則的な掘立柱建物群、多量の鉄製品などが出土し、末端官衙の可能性が指摘されている〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986・1988〕。

将監塚・古井戸遺跡では再利用の紡錘車が検出されていない。しかし、7 世紀末葉～8 世紀初頭の石製紡錘車が比較的多く認められ、8 世紀中葉を除き、9 世紀後葉まで 3～5 点の紡錘車が検出されている（第 24 図）。8 世紀代は石製紡錘車が多く、9 世紀は土製が多くなる傾向がある。鉄製紡錘車は 8 世紀中葉に 1 点、8 世紀後葉～9 世紀初頭に 1 点、9 世紀後葉に 2 点認められるが多くはない。

第 28 図グラフ 8 より、将監塚・古井戸遺跡の紡錘車の素材構成をみると、石製と土製が同程度を占める遺跡である。

⑦臼樹原・檜下遺跡（第 2 章第 12 図 23、第 26・28 図、表 2）

埼玉県神川町臼樹原・檜下遺跡は、7 世紀後半から始まる新興集落である〔埼玉県児玉郡神川町臼樹原・檜下遺跡調査会 1990・1991・1992〕。3 基の鍛冶工房及び大溝が検出され、賀美郡の開発に必要な鉄製農耕具などを生産した中核となる集落の一つである。

第 25 図によって、紡錘車は 8 世紀後葉から 9 世紀初頭に最も多く認められ、次は 9 世紀中葉であることがわかる。また、8 世紀代は石製紡錘車が多く、9 世紀代になると減少する。鉄製紡錘車は、製鉄遺構が遺跡内に存在するにも関わらず、9 世紀中葉にわずかに 3 点のみが認められる。再利用の紡錘車は報告されていない。

時期不明の石製紡錘車 1 点を含む臼樹原・檜下遺跡の紡錘車の素材構成（第 28 図グラフ 9）では、石製紡錘車が 70%で、鉄製と土製が 15%であり、石製紡錘車指向であるといえる。この指向性は特に 8 世紀代には顕著である（第 25 図）。この遺跡では製鉄関連の遺構があり、鉄製農具が生産されているのにも関わらず、所有する鉄製紡錘車が少ない理由は何故なのか、交易品としてほかの集落へ供給しているためとみられるが、今後の課題である。

⑧中堀遺跡（第 2 章第 12 図 24、第 26・28 図、表 2）

埼玉県上里町中堀遺跡は 9 世紀前半に形成され、10 世紀後半まで継続している〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997C〕。豪族の居宅、あるいは寺院の「庄」と考えられている。この時期の豊富な緑釉、灰釉陶器が検出されている。

中堀遺跡には再利用の紡錘車が認められず、鉄製紡錘車が多い点が特徴である（第 26 図）。9 世紀中葉が最も多く紡錘車が検出され、4 点が鉄製、3 点が石製である。鉄製紡

鍾車は9世紀後葉に2点、10世紀前葉に3点がみられる。

第28図グラフ10は時代不明の鉄製紡錘車1点を含んでいるが、紡錘車の素材構成をみると鉄製紡錘車が62%であり、高い割合を占める。中堀遺跡は、鉄製紡錘車を指向している。この中堀遺跡は鉄生産遺跡ではないが、鉄製紡錘車を多数入手している。上記した臼樹原遺跡との関連など、どのような理由であるのか問題点である。

⑨新屋敷遺跡（第2章第12図17、第27・28図、表2）

鴻巣市新屋敷遺跡は、平安時代の9世紀、10世紀には竪穴住居跡69軒が検出されている〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団1994B・1996・1998B〕。

古墳時代後期には埼玉古墳群をはじめ、千葉縣市原市山倉一号墳に埴輪を供給したことで知られる埴輪製作工房の生出塚遺跡と関連する遺跡である。新屋敷古墳群では、75基のうち20基の周溝から滑石製紡錘車が検出されている。関東地方では古墳群から多くの紡錘車が出土する例は、同じ元荒川水系の蓮田市椿山古墳群に認められる程度である。新屋敷遺跡の紡錘車は、再利用は多いが、土製紡錘車は認められないという特徴がある。鉄製紡錘車もわずかである。

9世紀後葉は最も多く紡錘車が認められ（第27図）、石製が6点、再利用が5点と、再利用の紡錘車が顕著である。

新屋敷遺跡の紡錘車の素材構成は、石製が53%、再利用の紡錘車が40%である（第28図グラフ11）。これまでに検討した11遺跡の中では、再利用の紡錘車の占める割合が最も高いが、土製紡錘車は認められない。ほぼ同じ時期である中堀遺跡と紡錘車の構成を比較すると、全く異なっている。新屋敷遺跡は再利用と石製が多い。石製紡錘車はほかの遺跡でも9世紀代には減少する傾向にあるが、新屋敷遺跡では継続して使用されていることが特徴である（第27図）。

第3項 武蔵国主要遺跡の紡錘車の特徴

1 紡錘車の動態と社会背景

前項では古代武蔵国の11遺跡に関して、紡錘車の時期別の出土状況、素材別構成を再利用の紡錘車という視点を加えて述べた。その結果、従来の消費地における土器を中心にした分析では理解することができない、各遺跡の特色やその性格の違いがみえる。再利用の紡錘車の分析を通して新たに把握することができる。ここでは11遺跡について、特徴と動態及び傾向をまとめる。

表2及び第15図は、11遺跡の鉄製紡錘車と再利用の紡錘車の時期別変遷をまとめたものである。鉄製紡錘車の導入は、8世紀前葉に武蔵国府関連遺跡、落川遺跡、霞ヶ関遺跡群・霞ヶ関関連遺跡で認められる。官衙関連遺跡や古東山道沿いの南武蔵地域では、その導入が早い傾向を認めることができる。鉄製紡錘車の導入にあたっては、律令体制の整備との関係をもつ可能性がある。

8世紀中葉には将監塚・古井戸遺跡、8世紀後葉～9世紀初頭では若葉台遺跡、北島遺跡、東の上遺跡で認められ、武蔵国の北部地域へ鉄製紡錘車が広まったことがわかる。即ち、8世紀中葉以降の鉄製紡錘車は、官衙遺跡との関係が深い交易や製鉄、紡織などの生産が行われた豪族の拠点集落（中核集落）といえる遺跡に認められる。

9世紀中葉は最も紡錘車の出土点数が多い時期であり、紡織の画期といえる（第15図、表3）。該期にはほとんどの遺跡に鉄製紡錘車が認められる。榛沢郡衙関連の熊野遺跡ではこの時期に、鉄製紡錘車が認められ、ほかの官衙関連遺跡とは時期差があり、例外的に遅いといえる。武蔵国府関連遺跡では、9世紀中葉から鉄製紡錘車の数量が一段と増加している。また、中堀遺跡はほかの遺跡と異なり、鉄製紡錘車の出土点数が多い特徴のある遺跡といえる。一方、臼樹原・檜下遺跡では鉄製農工具を製作しているが、鉄製紡錘車の出土点数は少ない。供給した結果かもしれない。

鉄製紡錘車からも、9世紀中葉は織機の画期として位置づけられる（第16図）。このように鉄製紡錘車が各遺跡で認められることから、この時期には製鉄関係の遺跡が増加し、多数の鉄製紡錘車が生産されたことが推測できる。さらに紡織のみならず、鉄製農工具の増加による新田開発などが行われ、社会全体の生産力の向上が推測できる。したがって、8世紀前葉の紡錘車と9世紀中葉の鉄製紡錘車は、社会的背景が異なるものとして位置づけることができる。

従来、再利用の紡錘車は、消費地で作られた規格性のない紡錘車と考えられ、一定の規格で作られた鉄製紡錘車とは、対極の紡錘車とされてきた。一方、再利用紡錘車の出土状況をみる（第16図、表2・3）と、武蔵国府関連遺跡や若葉台遺跡で、8世紀後葉～9世紀初頭に認められるようになる。再利用の紡錘車は9世紀前葉から増加し始め、9世紀中葉には鉄製紡錘車と同程度の点数が使用されている（第16図）。再利用の紡錘車は、10世紀前葉には数が減少するため、9世紀代に特に多く使用されている。

再利用の紡錘車について重量の検討結果からみると、この紡錘車は織布用のための紡錘車であることが判明している。11遺跡において再利用の紡錘車で重量が測定されているものは、43点中16点である。孔径は全て1.0cm以内である。時期の内訳は、8世紀末葉～9世紀初頭は1点、9世紀前葉は3点、中葉7点、後葉4点、10世紀前葉1点である（第34図）。資料点数としては多いとはいえないが、20.2g～69gまでの範囲で、40～50gのものが多く傾向にある。再利用の紡錘車は、織布用の紡錘車としての重量の範囲内である。

再利用の紡錘車が8世紀後葉以降に認められ、9世紀代に多くなることは、既述の通り、須恵器坏底部破片の平均重量との関係があると考えられる。若葉台遺跡から出土した約100点の須恵器坏底部破片が残存する形状の平均重量をみると、8世紀前半以降は第2節第1項で述べた通り、90g以上であるが、8世紀後葉には約63g、9世紀代で約46gと時期が降るに伴い軽量化することが指摘できる（第13図）。

特に、8世紀後半から坏底部再利用の紡錘車が作られ、9世紀代に比較的多いことから、約60g以下の重量が紡錘車として適していることを、当時の人々が経験的に理解していた可能性が高い。また、再利用の紡錘車が10世紀に減少することは、再利用の素材としての須恵器坏類の生産が減少し、須恵器から軟質のロクロ土師器などへ変化したことが大きく影響したと考えられる（第35図）。

武蔵国の紡錘車で特徴的なことは、①国府関連遺跡や北島遺跡、新屋敷遺跡では9世紀代に多く、再利用の紡錘車への指向性が認められる。②土製紡錘車や鉄製紡錘車の出土が多い遺跡は、国府関連遺跡を除き、再利用紡錘車の出土が少ない。③再利用紡錘車が多く認められる遺跡は、9世紀代に紡錘車の数量が多い傾向の遺跡である。

再利用紡錘車は国府関連遺跡で多く認められること、北島遺跡出土例のように丁寧に作

られているものがあることなどから、単純に経済的側面の理由のみで作られたとはいえない。多数の紡錘車が出土している遺跡に多いという点では、ほかの種類の紡錘車に対して数の補完という側面は否めないが、再利用の紡錘車への指向性も認められる。また、大多数の再利用の紡錘車は、紡錘車として適した重量、円板状という形状、適度な硬度をもち、入手が容易であるという須恵器の坏底部の素材としての利点を生かした紡錘車であるといえる。こうした点からみると、再利用紡錘車は各々の集落において、一定数の紡錘車を確保するため、積極的に合理的な選択を行った結果といえる。

武蔵国では 10 世紀後半の遺跡の発掘例が少ないという一面もあるが、再利用紡錘車を含めて紡錘車そのものが、著しく減少することからみて、糸を紡ぐ技術自体に大きな変革があったと考えられる。

石製紡錘車は 8 世紀には出土点数が比較的多く、9 世紀には少なくなる傾向が認められる。時期別の出土割合（第 35 図）からみても、9 世紀前葉以降には、その割合が少なくなっていることがわかる。したがって、再利用の紡錘車は身近な資源として土器などを有効利用しており、かつ石製紡錘車を補うものとしても、不可欠な道具となった様相が推定できる。

2 武蔵国紡織の類型

今回紡錘車の分析に当たっては、時期不明の紡錘車が 61 点あり、総点数 327 点の 19% を占める。したがって、約 8 割の紡錘車で時期別変遷を把握せざるを得ないが、一定の見解を得ることはできたといえる。

各遺跡の紡錘車の出土状況は、武蔵国府関連遺跡において、多数の紡錘車が出土していることが特徴の一つである。また、郡衙関連の遺跡においても、8 世紀代から一定数の紡錘車が認められている。また、若葉台遺跡や北島遺跡のように紡錘車の出土点数が多い特徴のある遺跡が認められる。北島遺跡では織機の部材が出土し、明らかに布生産を行っていたことから、若葉台遺跡においても、布生産が行なわれていた可能性が指摘できる。また、国府においても多数の紡錘車が出土することから、東日本の新たな紡織の類型として設定することができる。この類型の構図は、国府関連遺跡や周辺の遺跡で紡がれた糸も、紡織を主たる生業とする地方豪族の集落に集積され、布に織られ交易品として独自に交易され、あるいは庸調布として国府に集積されたと考えられる。

武蔵国府では紡織に関しては、製糸とその糸の集積、織り上がった布の管理を行なうことが主体であり、国府域に特別の工房としての区域が付帯しない類型の可能性が高いといえる。一部の布は武蔵国府関連遺跡内で織られた可能性を否定しないが、小規模なものであったとみられる。これは国府のみならず、郡衙と各周辺集落との関係においても同様である。

紡織という生産面からみると郡衙では「製糸と製織の分業体制ができている」と考えられ製織に従事していること、「8 世紀中葉からは派遣官僚が中心となった地域経営が実現し、政治、経済のセンターとしての国衙」であり、新しい国衙主導の地域経営は、地域社会の次の変動期である 10 世紀中頃まで続いた」と位置づけられている〔菱田 2007〕。

しかし、武蔵国の紡錘車の出土状況をみると、各集落は単に官衙を頂点とする政治経済のヒエラルキーの下層という位置づけではなく、独自の性格を維持しつつ機能している。

これは紡錘車の種類からみても、一律、一斉に律令制と共に鉄製紡錘車に変化したという状況ではなく、一定の規格である調布や商布の生産のために、各遺跡では土製・石製・鉄製など多種類の紡錘車入手のネットワークが存在していたこと、及び再利用の紡錘車を集落で独自に製作している例からみて、特定の種類の紡錘車への指向性と独自性がうかがえる。

つまり武蔵国府をはじめとする地方官衙では、紡織では製織のみの分業体制がとられていた状況ではなく、紡織に関する一元的な物流ネットワークの中心的存在の核であったとは考えられない。各集落が紡錘車について独自のネットワークを持ち、入手していたと考えられる。

律令体制の官衙は、新たな律令制という政治システムの地方の中心として位置づけることは可能であるが、各地域の物流、生産など経済的ネットワークの核とは必ずしもいえないと考えられる。地方の生産活動については、古代史により律令制の租税との関係からの視点による研究が中心であったと平川南氏が指摘している〔平川 2008〕。地方官衙では、天皇を頂点とする国家に服属する地方豪族の官人としての意識を再確認するため、官衙としての建物という舞台装置を背景とした、律令的祭祀、及び饗宴や儀礼を繰り返し可視的に行なう必要があったとが考えられる。文字も文書行政のためだけではなく、権威を示すステータスシンボルの一つとして機能していたと考えられる。

しかし、東国においては、経済面で官衙は必ずしも中心となる核ではないと指摘できる。即ち、各手工業分野に特質をもつ古墳時代後期以来の経済システムを背景とする集落、及び同様に各手工業分野に特色をもつ集落は、地域経済において核として独自のネットワークを形成し、地方官衙とは経済的に相互補完関係を有していたと考えられる。

こうした、当時の主要な手工業生産分野である紡織について、若葉台遺跡と霞ヶ関遺跡群、北島遺跡と行田市小敷田遺跡は、集落間の連繋の類型としてみることができよう。

第3節 韓半島南部の再利用紡錘車の様相

韓半島南東部の嶺南地方を中心に、青銅器時代（BC900 頃）から統一新羅時代以降の 9 世紀頃までの約 530 点と限られた資料点数であるが、紡錘車のデータを中心に集計した。韓半島の紡織技術に関しては、紡錘車の動態によって既に検討している²⁵⁾。再利用の紡錘車は、日本と同様に韓国でも、ほとんど研究の対象となっていない。

定形紡錘車で日本と韓半島南部の鉄製紡錘車と再利用紡錘車の主な相違点は、①韓半島では再利用の紡錘車では瓦が多い。②鉄製紡錘車は日本のみで検出されているなどがある。

韓半島南部社会は、三国時代後期後半の 6 世紀中葉～7 世紀後半以降に社会的画期と変容がある。百済の都である扶餘泗沘都城内軍守里地点〔忠南大学校百済研究所他 2003〕、及び扶蘇山城の紡錘車〔国立扶餘文化研究所 2003〕（第 36 図 1～4、附表 70～77）は、三国時代前期に比較すると粗雑に作られ、重量は 100 g を超えるものが認められる。大型で重い紡錘車が認められることが特徴である。即ち、6 世紀後半以降は、三国時代前半の 3 世紀～4 世紀に主流であった断面六角形の紡錘車による紡織体制が崩壊する時期であり、

25) 〔坂野千登勢 2010 年 6 月発行〕に掲載予定。

その形状、種類、紡ぐ対象に関して大きな変容が引き起こされている。この流れが統一新羅時代の8世紀から9世紀へと続き、新たに瓦再利用の紡錘車が認められるようになる。また、成形不良や重量のある紡錘車が定形紡錘車にも多くなる傾向がある。

こうした紡錘車は、布用の糸を紡いだとは考え難い。統一新羅時代以降、韓半島南部の紡錘車はさらに重くなり、瓦再利用の紡錘車が多数となる。この傾向が時代と共に加速され、織布用の紡錘車が衰退する。

日本では、7世紀後半以降、鉄製紡錘車が出現し増加するが、韓国では鉄製紡錘車が使用された形跡は認められない。韓国は日本より技術的に先行し、鉄素材も豊富な輸出国であるにもかかわらず、鉄製紡茎の例としては、5世紀前半の土製紡錘車の1例のみである。鉄製紡錘車の使用に関して大きな差異が列島と韓半島に認められる。

韓半島においても、定形の紡錘車から再利用の紡錘車へ、また、軽量で織布用の紡錘車から、網や太い繊維用の紡錘車、及び紡錘車形の工具へという日本と同様の傾向が認められる。8世紀～9世紀の慶州新羅王京から出土した瓦再利用の紡錘車は、王京の建物の瓦を再利用して、現地で製作及び使用された紡錘車であり、90gを超えるものが多い。

日本では瓦再利用の紡錘車はごく僅かであるが、8世紀～9世紀以降に重量のある90gを超える紡錘車が増加する傾向が認められている。紡錘車は重くなり、糸を紡ぐ道具のほかに工作用具などへと性格が変化し、紡錘車の社会的な意味そのものが変化したと考えられる。

第1項 瓦再利用の紡錘車

瓦再利用の紡錘車は、韓半島南部の特色である。第2節第1項で既述したが、日本の瓦再利用の紡錘車や円形土製品として報告されている例²⁶⁾は、筆者の調べた限りでは、ごく少数である。このような再利用の紡錘車に関して、日本でも研究が進んでいない状況である。また、日本の瓦再利用紡錘車は、都城に限られごくわずかであり、韓半島における状況とは異なる点が認められる。

韓半島では統一新羅時代の7世紀後半以降は、土製（第36図1・2）・石製（第36図4）の定形紡錘車がわずかに認められる一方で、瓦再利用紡錘車（第36図5～8）が、主体となる時期である。この時期の紡錘車は、再利用品を含めて重く、特に大型のものが多く認められることが特徴である。したがって、百済の都である扶餘泗沘都城・軍守里地点、扶蘇山城から新羅王京に至るまで、紡錘車によって都城・官衙としての共通性が指摘できる。都城型紡錘車と呼称できるタイプが認められる。

特に7世紀以降、8世紀～9世紀を中心にして統一新羅時代では、瓦再利用紡錘車（第36図5～8）の点数が急増することが顕著な特徴である。瓦再利用紡錘車（第36図5・6）は、丁寧な仕上げで断面が長方形の定形紡錘車と変わらないものと粗雑なもの（第36図5）、及び加工途中で一時的にストックあるいは、加工を途中で放棄した可能性があるもの（第36図8）も認められる。また、石製容器再利用の紡錘車が1点認められる（第36図9）。

26) 8世紀末葉の長岡京期の瓦再利用紡錘車3点（第12図4～6）や、石神遺跡出土の瓦再利用円板状土製品2点〔石橋2004〕などである。

土器再利用の紡錘車は、韓半島では現段階ほとんど認められていない。再利用の紡錘車として特徴的なものは、瓦再利用紡錘車である。

瓦再利用の紡錘車のなかには形状が紡錘車と同様に、円形で中心は穿孔されるが、工具の可能性を推定できるものがある。厳密に区分ができない場合もあり重量など、以下の基準を総合的に判断することが必要であるが、紡織以外の工具類としての用途については基本的には第1節表1で既述した、日本と同様の基準である。このタイプを紡錘車形の工具（第36図10・11）として区別する。

また、瓦再利用紡錘車も、重量により織布用の紡錘車か、それ以外の太い繊維用紡錘車に大別できる。大まかな基準として日本と同様に90gを超えるものである。7世紀後半以降には、瓦再利用の紡錘車は、重量からみて織糸を紡ぐ紡錘車としては、わずかししか使用されていないことが指摘できる。

定形紡錘車においても8世紀～9世紀の新羅王京で、石製紡錘車として報告されているものは、孔形が不整形の傾向がある。前述の瓦再利用品と同様に、布を織るためではなく、穿孔用などの石製の弾み車やあるいは錘などとして、工作具などの可能性が高いものとして区別できる。

新羅王京などの都城に多く認められる瓦再利用紡錘車は、建物に瓦が多用されるようになった時期と地域に限定されるが、都などの官衙とその周辺地域では入手は容易である。また、陶質土器に比べて比較的加工し易い素材であり、日常生活などに必要な道具として様々な場面で、資源が再利用されたと考えられる。このほかには、滑石製容器の再利用紡錘車（第36図9）が認められる。

日本では、凝灰岩などの砥石の石材を再利用した紡錘車が9世紀代に認められる。瓦再利用の紡錘車は既述の通り、長岡京などの都城にほんの少数認められるが、瓦は基本的に紡錘車としての再利用ではなく、関東地方の官衙周辺集落のように竈などの補強材として用いられている。地域と生活様式の違いも再利用には大きく関係している。

韓半島南部において、日本とは使用する素材の違いはあるが、瓦再利用の紡錘車も明確な使用目的に合わせて、現地で加工・製作した資源即応型の紡錘車である。

第2項 再利用の紡錘車と円形土製品

円形土製品には土器再利用の円形土製品と、瓦再利用円形土製品がある。また、新羅王京などでは土錘としての用途の可能性がある土器再利用の小型軽量品のほかに、瓦再利用の直径約4cm以上のものもある。これらは紡錘車などを製作する際の穿孔用作業台、遊戯具などの用途が考えられているが、それだけではなく、大きさや厚さによって用途は様々であり、当時の人々が再利用の用途を想定し、途中まで再加工したものを含めて、一定期間保管していた可能性が考えられる。

8世紀～9世紀の新羅王京において、瓦再利用円形土製品の重量12点は、第36図では28.4～94.6g（第36図13・14、附表58～69）と重量の分布範囲は広い。しかし、新羅王京の13点中5点の計測結果からみると、3点は50～95gであるため、一部のものは一定の重量の規格と目的に沿って、再加工されていた可能性がある。その主な用途としては、紡錘車が考えられ、加工途中のものとみられるものも認められる（第36図8）。

第37図は、新羅王京出土の瓦再利用紡錘車に関する法量に関して、また、第38図は瓦

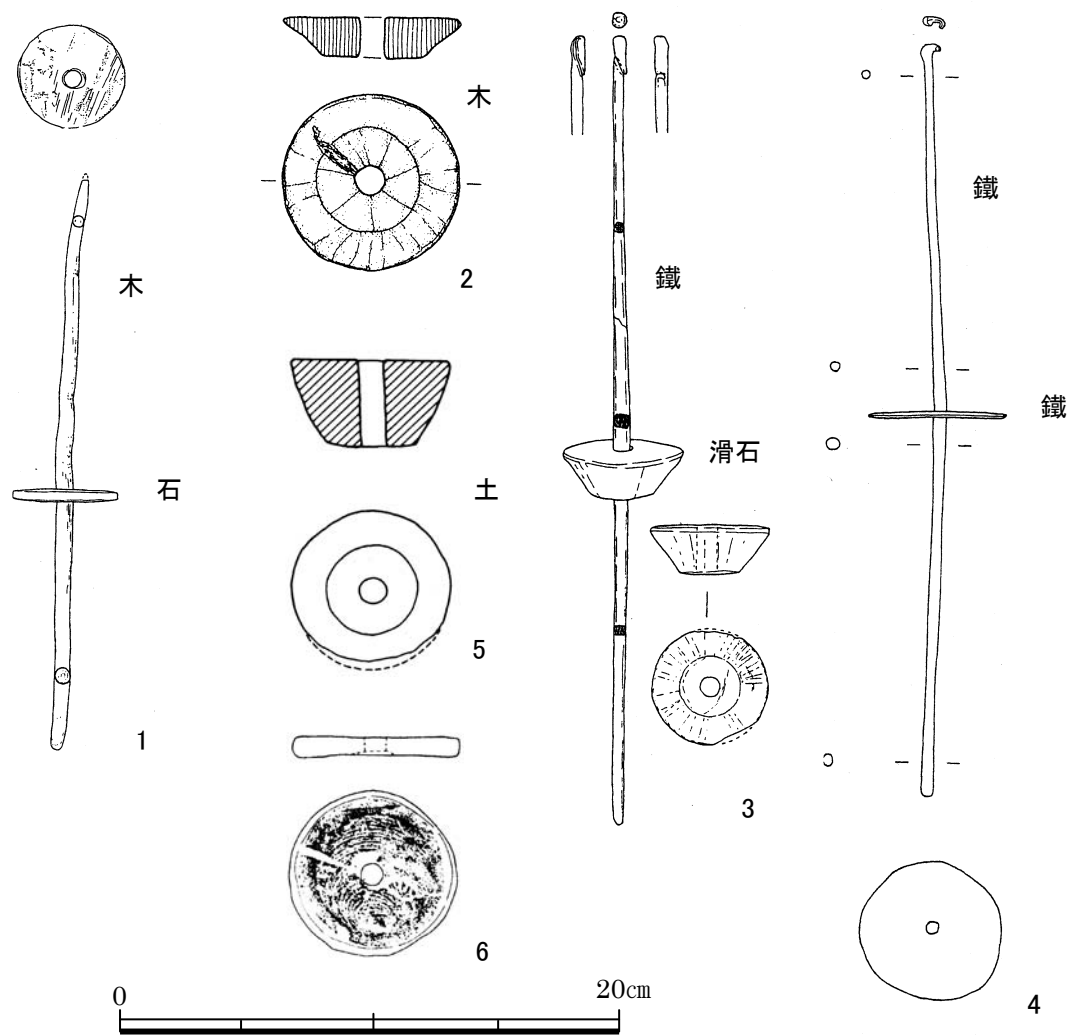
再利用の円形土製品と土器再利用円形土製品を合わせた法量のグラフである。この2つのグラフを比較すると、瓦再利用円形土製品は、軽量の土器再利用円形土製品2点を除き、法量では直径約4～8 cm、厚さ約1～2 cmの範囲で、瓦再利用紡錘車と分布域の大部分が重複する。

したがって、新羅王京では、法量から瓦再利用の円形土製品と瓦再利用紡錘車は有意の関係であるといえよう。即ち、円形土製品を穿孔すれば、紡錘車として使用することが可能である。円形土製品は紡錘車に再加工用するために、蓄えられたものである可能性が指摘できる。

以上に述べた通り、韓半島においても資源の再利用を指向するため用途に合わせて素材を選び、目的に合わせて再加工を施し、一定期間蓄えている多様な様態を分類することができる。このように、再利用の紡錘車からは、地域社会の資源の具体的状況に適応する合理性と指向性が認められる。即ち、再利用の使用の在り方そのものに、古代社会における人々の使用価値、モノに対する価値観が認められるのである。

今後の課題であるが、資源の再利用からの視点として、使用痕や付着物の注意深い観察の積み重ねが日韓両国の考古学に必要である。

従来、再利用の紡錘車は、単に経済的側面や間に合わせの紡錘車として位置づけられてきた。しかし、再利用の紡錘車を分析の対象とすることにより、全体からみればわずかな流れではあるが、モノを合理的に作り、使用するという古代社会におけるモノの再利用を前提とする社会システムが浮かび上がる。生産から消費という枠組みのみではみえない社会的動態とメカニズムが、資源の再利用という視点によって、複雑な歴史像と社会構造を描くことを可能にするといえよう。

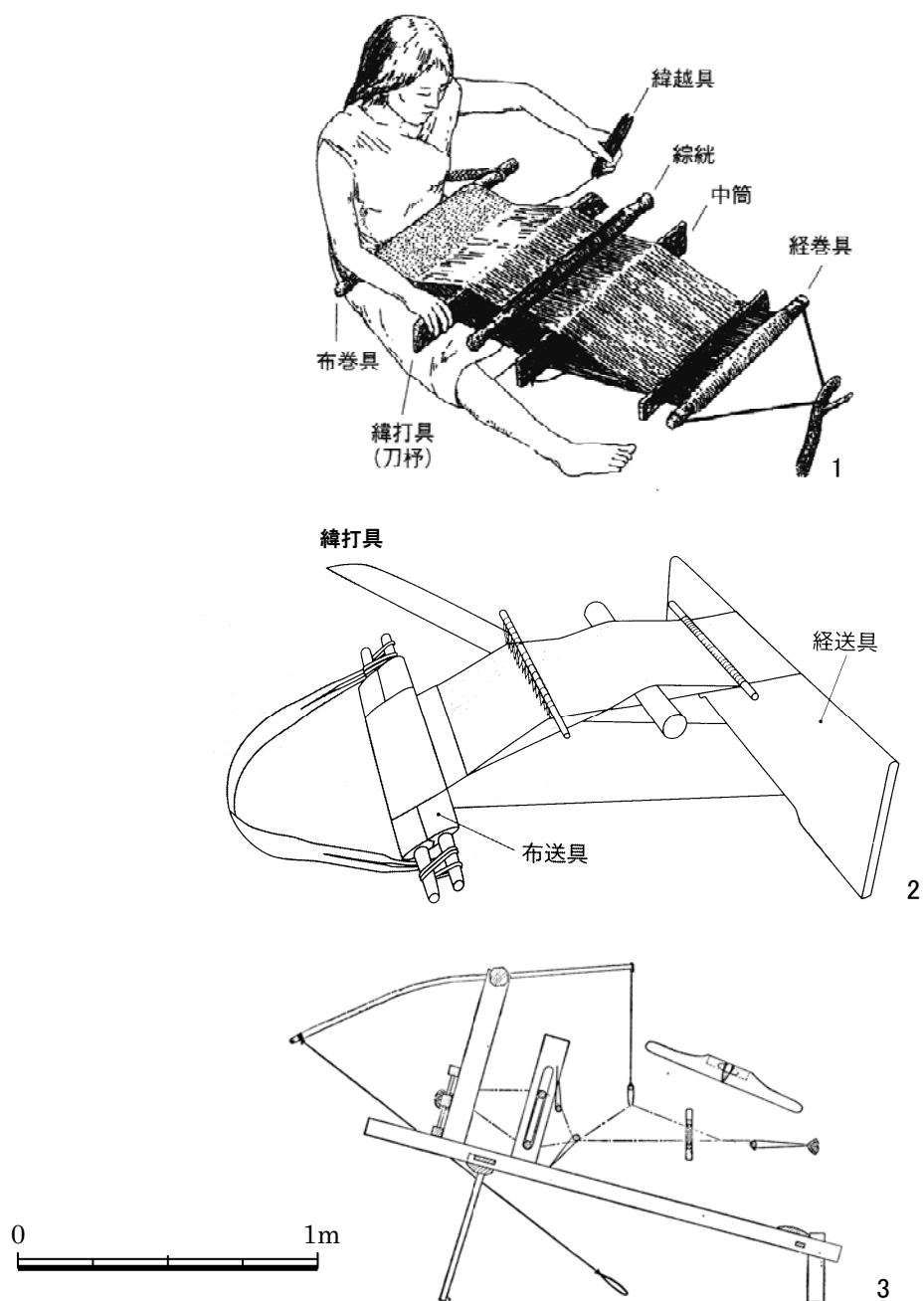


第1図 紡錘車の種類

1:大阪府鬼虎川遺蹟7次溝8・弥生後期 2:三重県六大A遺蹟SDIV層・弥生後期～古墳前期 3:長野県森
 將軍塚2號土壙墓・6C後半～7C前半 4:山梨県梅之木遺蹟77號住居跡・8C末～9C 5:東京都落川遺蹟
 381号住居跡・8世紀末葉～9世紀初頭 6:北島遺蹟36号住居跡(土器再利用紡錘車・9C前葉)

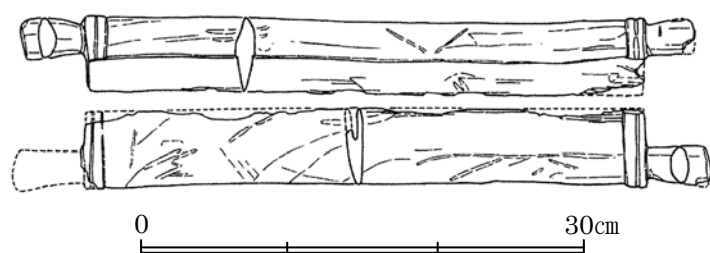


第2図 紡錘車の使用方法[竹内1989]を一部修正

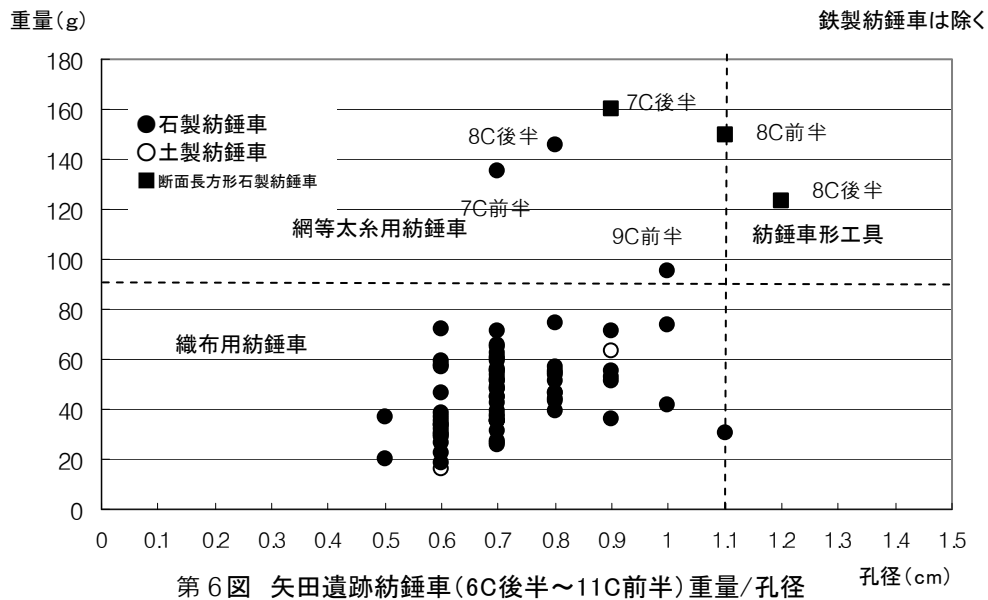
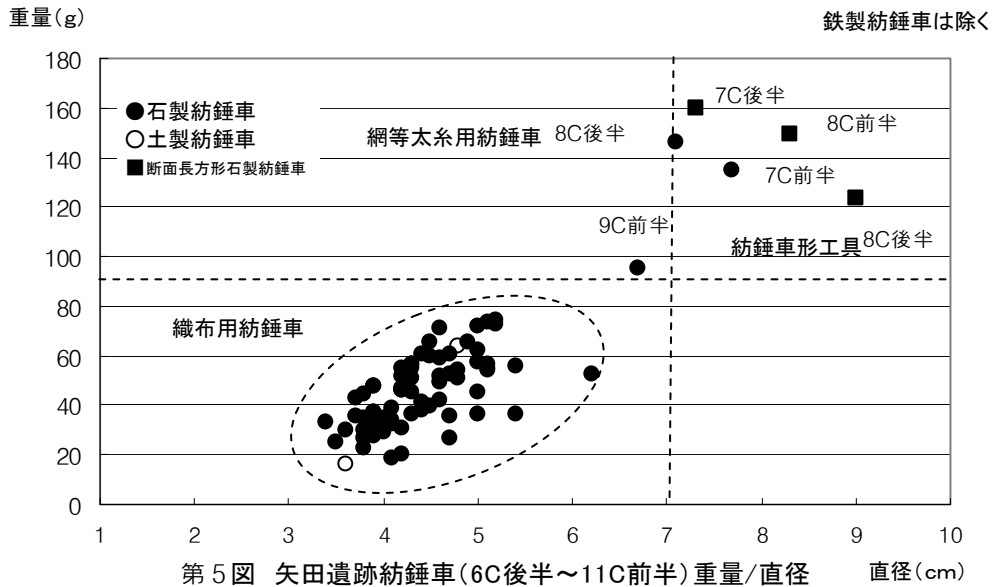


第3図 織機の種類

1:直状式原始機復元図 [森1979] 2:輪状式織機[東村2008B一部改変] 3:西日本の地機[角山1983]



第4図 福岡県雀居遺跡出土の布送具



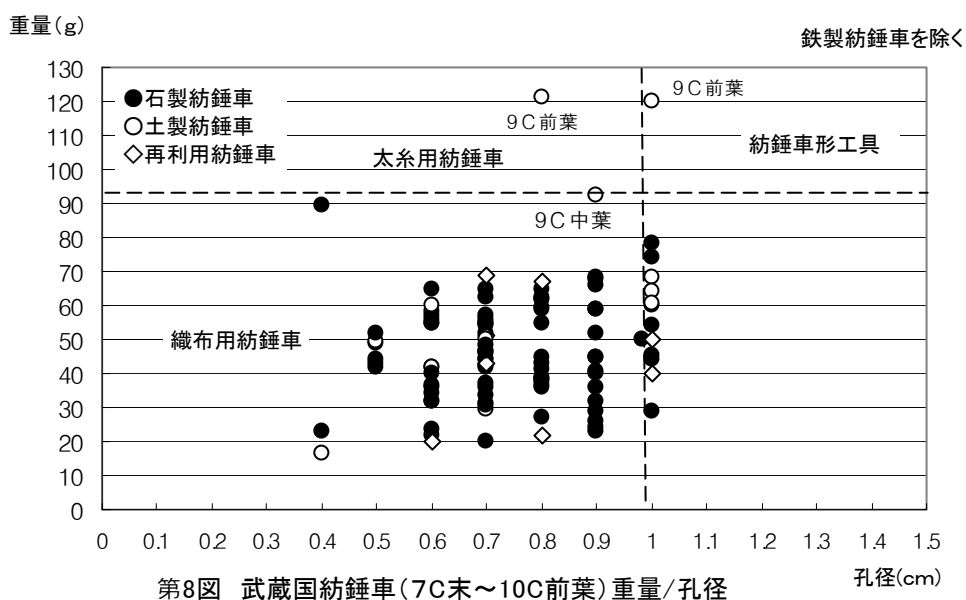
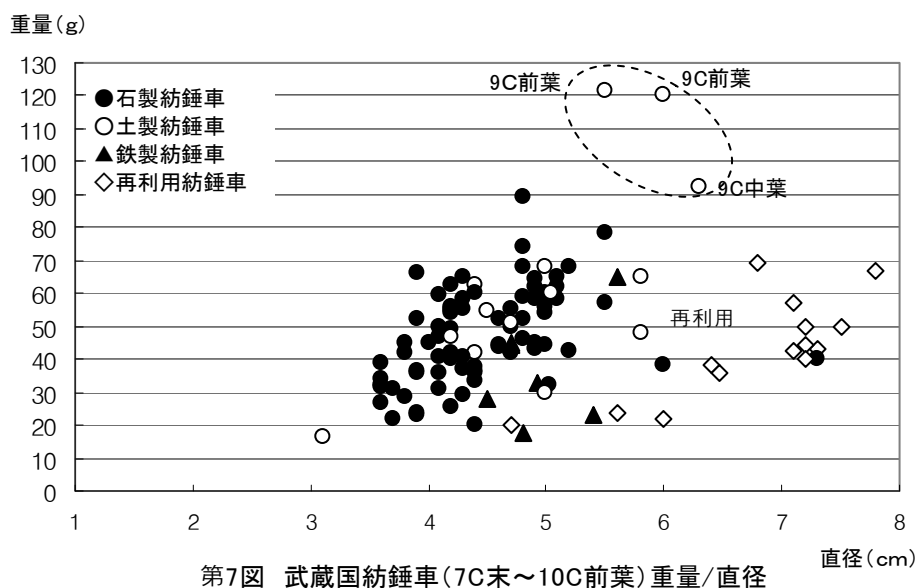


表1 紡錘車と紡錘車形工具の区分基準

		①重量	②孔径	③孔形	④形状
紡錘車	布用の細い繊維用	90g以下	1.1cm以下	円筒形が基本	円形で成形が丁寧
	網等の太い繊維用	90gをこえる	1.1cm以下	円筒形が基本	円形で成形が丁寧
工具		90gをこえる	1.1cmを越える	鼓状他	円形が基本

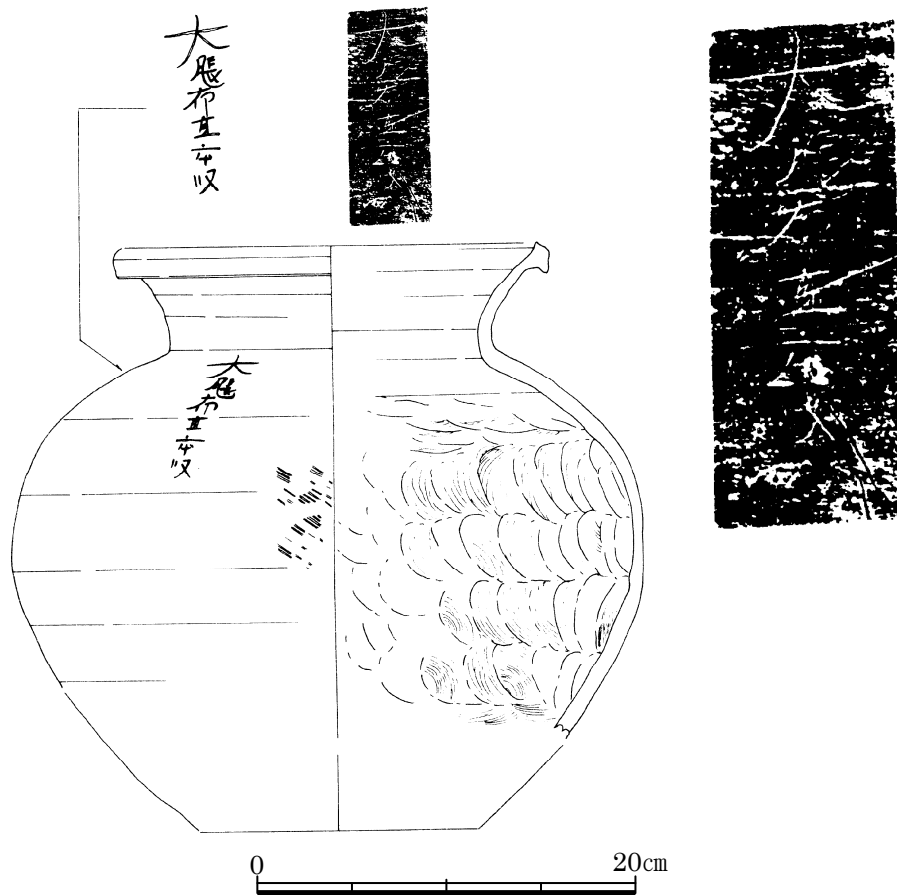
* 重量が最優先される
数値はあくまでも目安であり、誤差はある



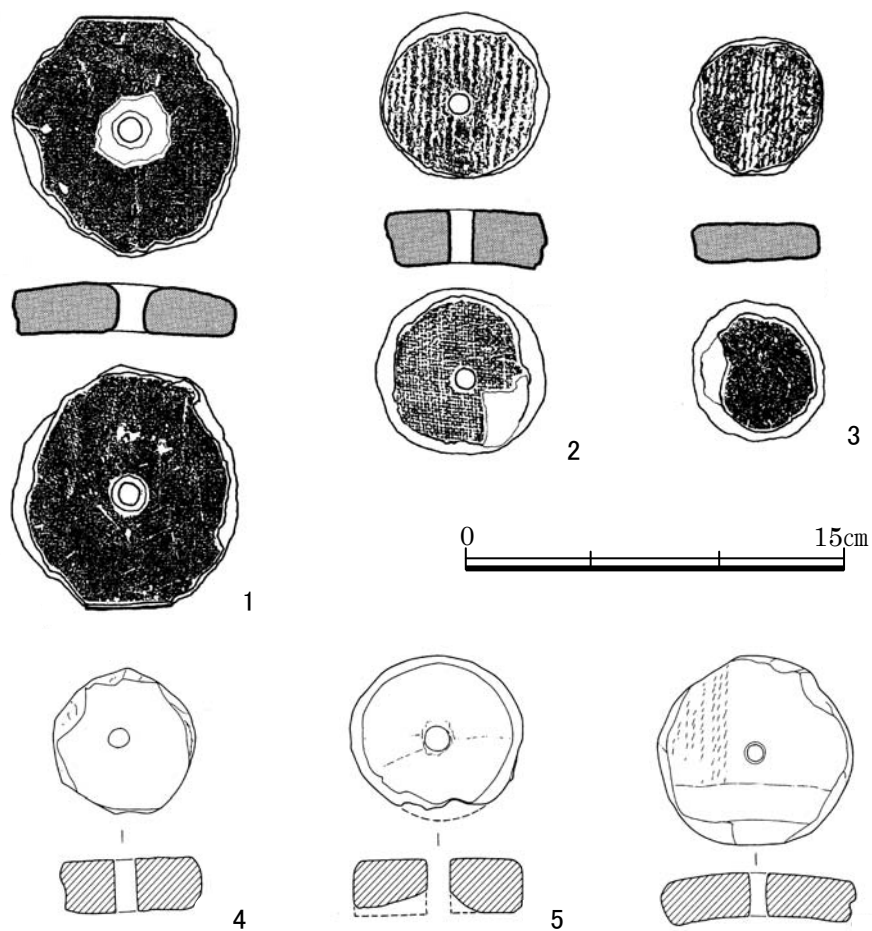
第9図 中国漢代画像石に表された織機と復元された織機[山東省博物館ほか1985]



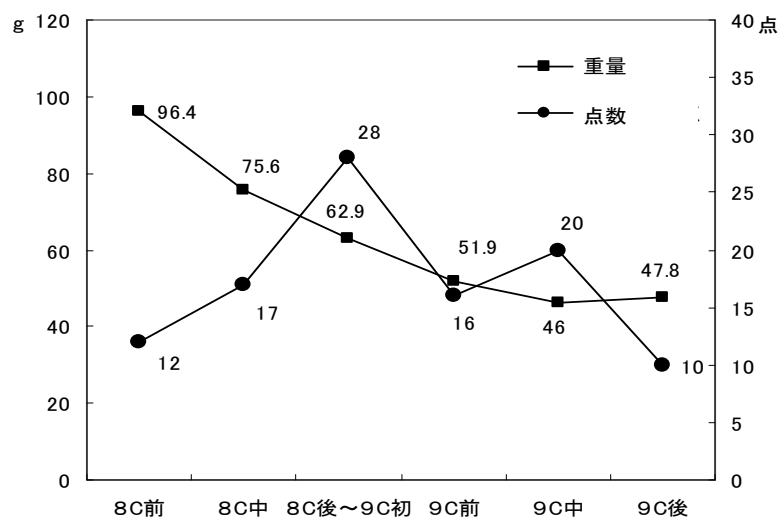
第10図 地機中筒受け[埼玉考古学会2008]
埼玉県池守遺跡・古墳時代後期



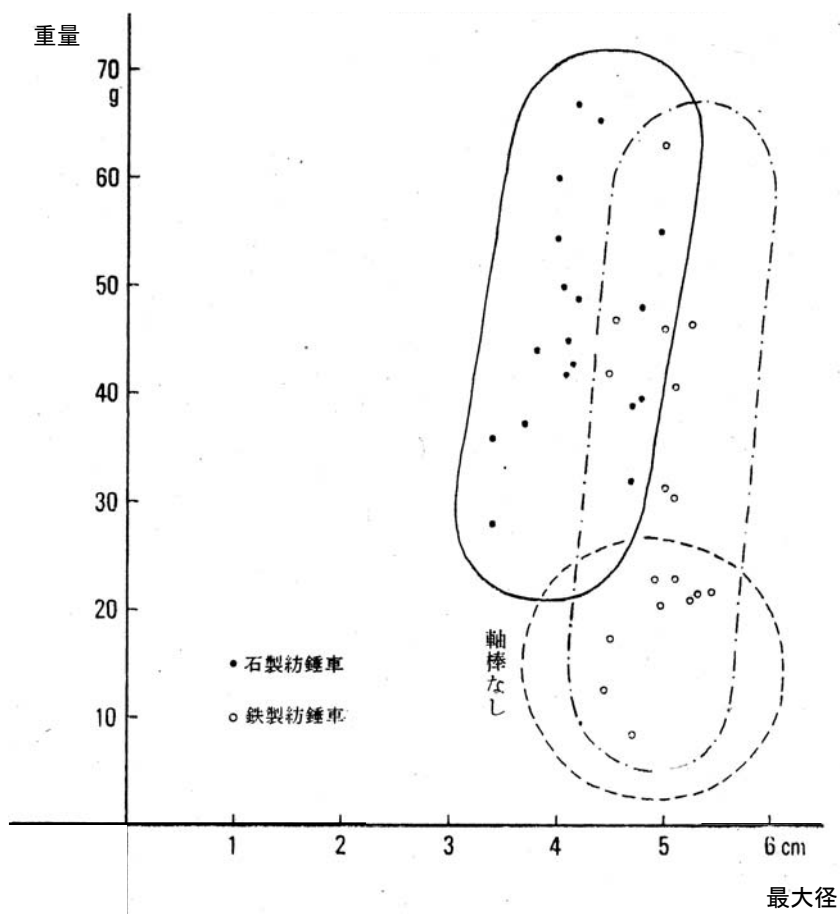
第11図 布を単位とする大型壺の値段表示(南比企窯跡群広町A1号住居跡)



第12図 瓦再利用紡錘車1~3:平城京二条二坊・三条二坊 長岡京:4~6



第13図 若葉台遺跡出土の須恵器坏底部の平均重量と点数



第14図 鉄製紡錘車の重量[滝澤1985]に一部加筆転載)

表2 武蔵国主要遺跡における鉄製紡錘車と再利用の紡錘車出土状況

時期	8C前葉		8C中葉		8C後葉～9C初頭		9C前葉		9C中葉		9C後葉		10C前葉		10C中葉		10C後葉		合計*1			
遺跡名	鉄製	再利用	鉄製	再利用	鉄製	再利用	鉄製	再利用	鉄製	再利用	鉄製	再利用	鉄製	再利用	鉄製	再利用	鉄製	再利用	鉄製	再利用	石製	土製
霞ヶ関遺跡群・関連遺跡	1						1	1	1										2	2	3	1
若葉台遺跡					2	1	1	1	1		1								5	2	21	4
武蔵国府関連遺跡	1		2		1	1	2	2	7	7	7	6	5	4	2		3		30	20	43	16
落川遺跡*2	1				1								2	1			2		6	1	6	11
東の上遺跡					2														2		4	
熊野遺跡									1	1	2								3	1	7	2
将監塚・古井戸遺跡			1		1						2								4		11	9
北島遺跡					1		3		8	1	1								2	12	22	7
臼樹原・櫓下遺跡									3										3		14	3
中堀遺跡									4		2		3						9		4	2
新屋敷遺跡									1		4	1							1	5	8	
	3		3		8	2	3	7	17	18	15	11	11	5	2		5		67	43	143	55

*1 合計の鉄製、再利用の紡錘車は、時期不明を除外しているが、石製及び土製は時期不明を含むため、表3とは数値が一致しない

*2 落川遺跡の8世紀前葉の鉄製紡錘車は、7世紀末葉の可能性もある

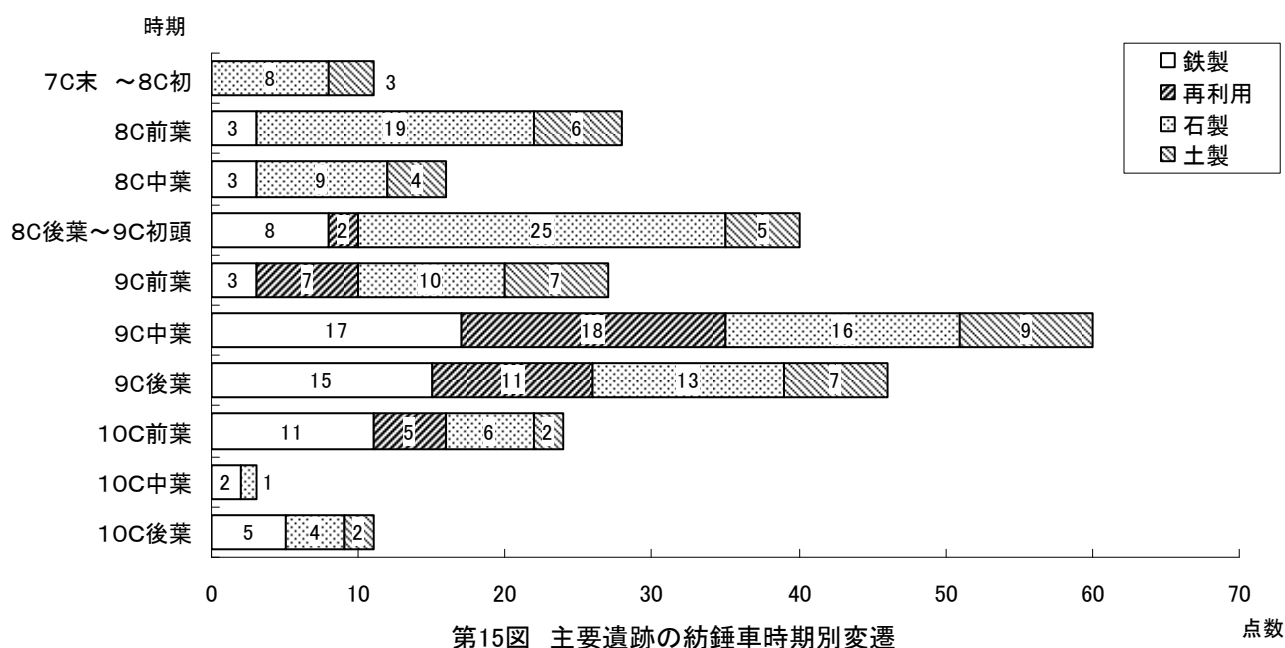
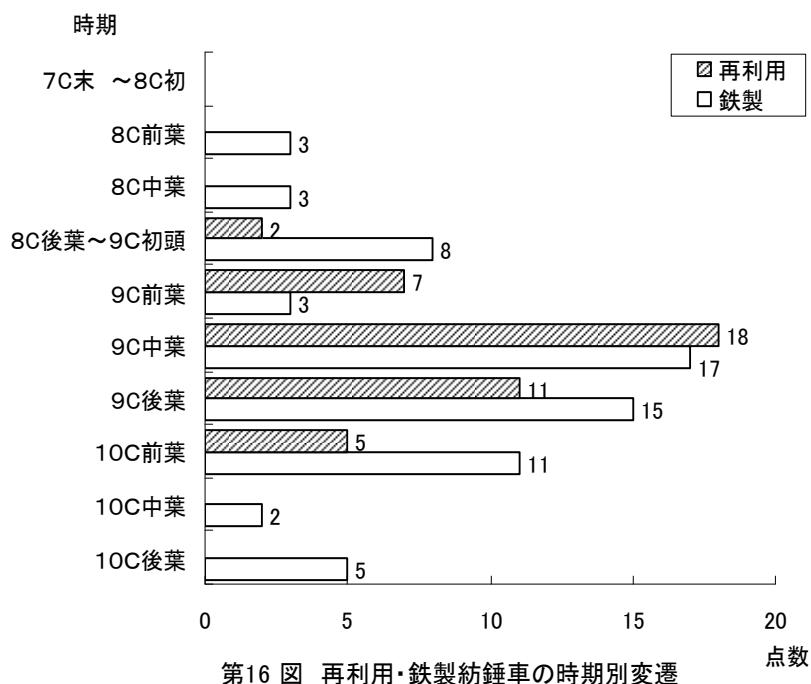
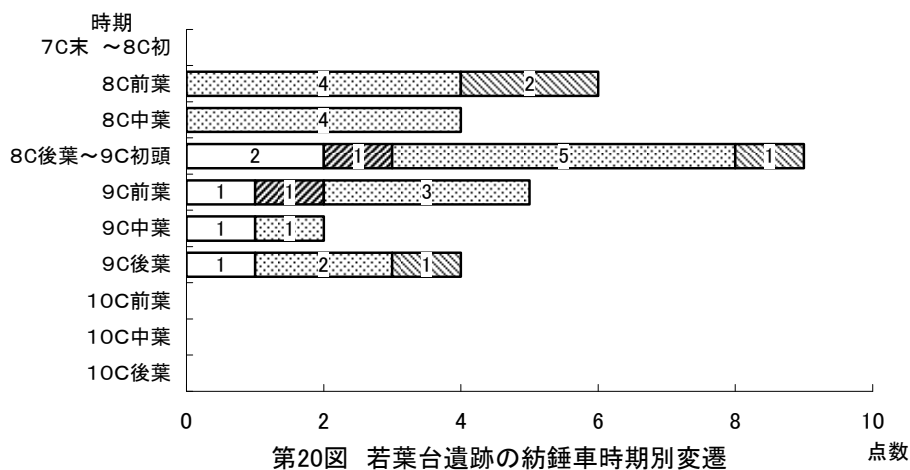
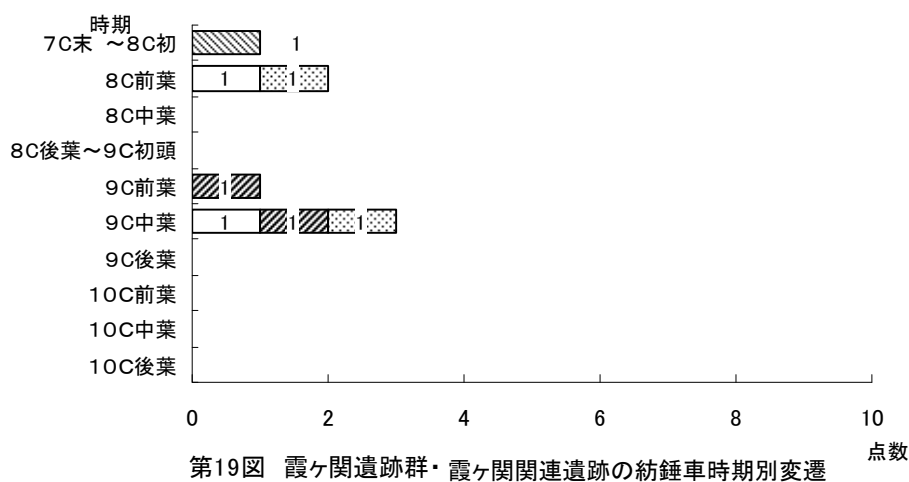
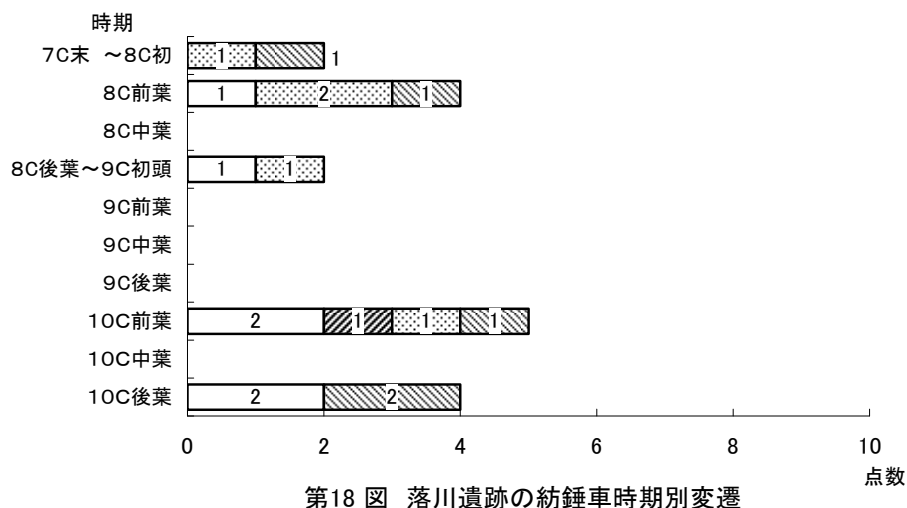
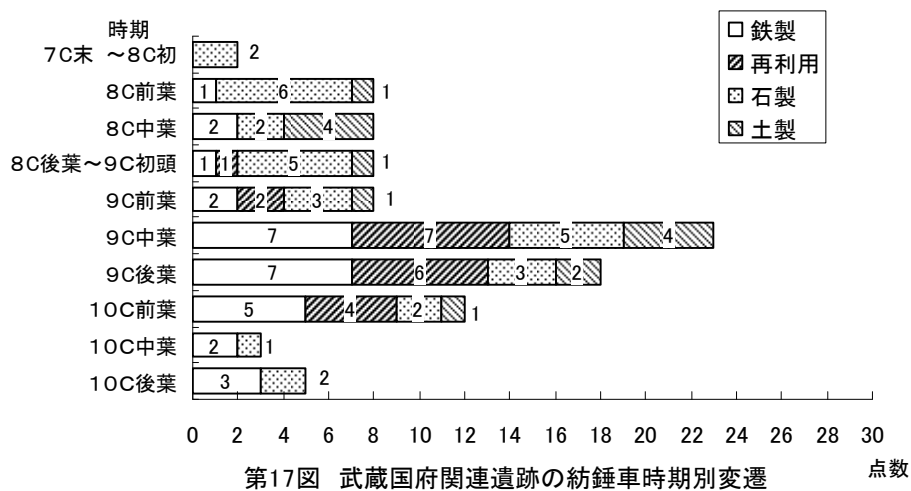
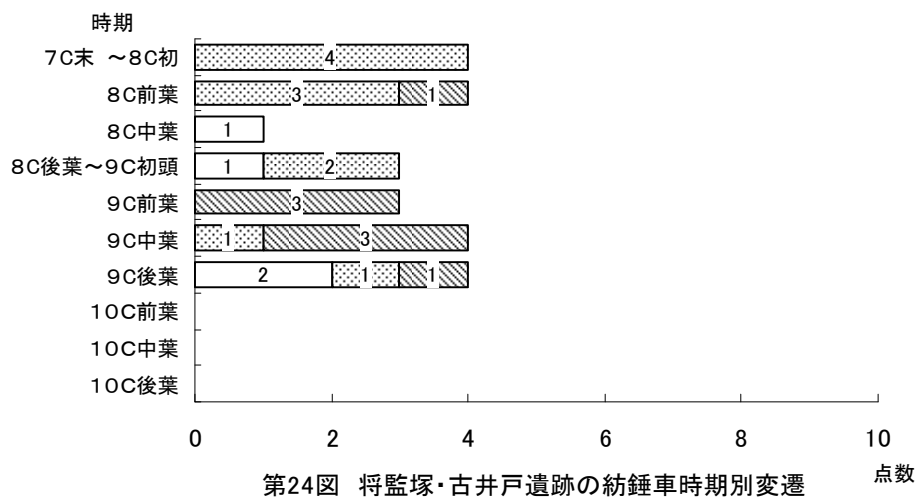
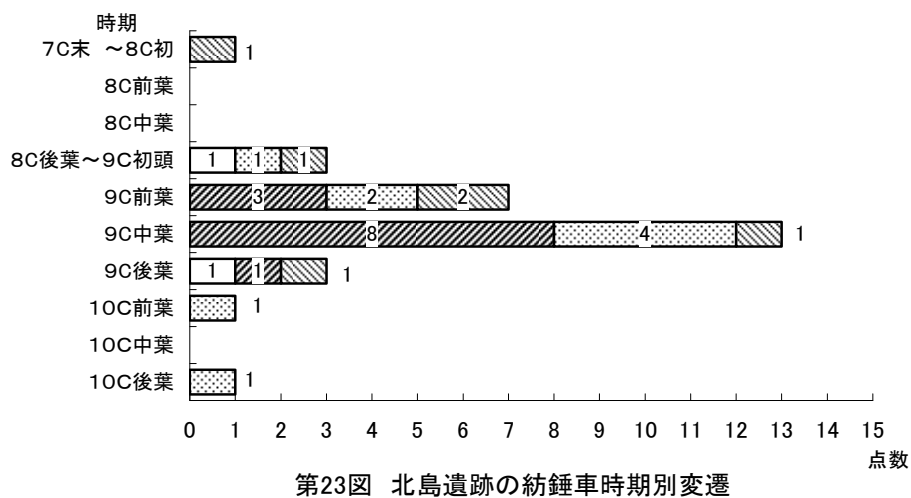
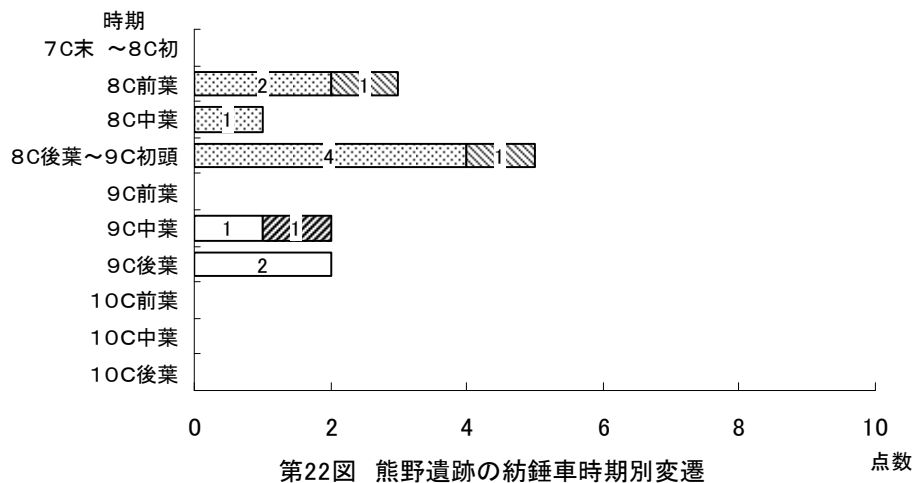
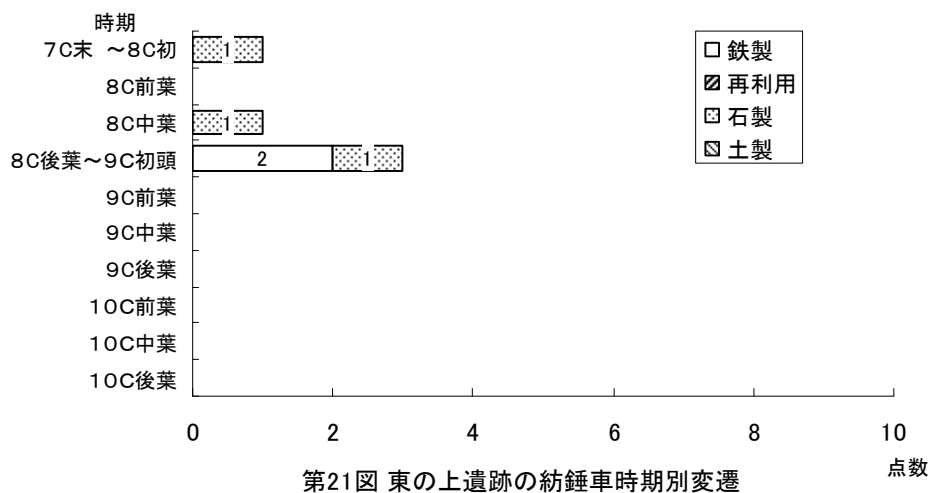


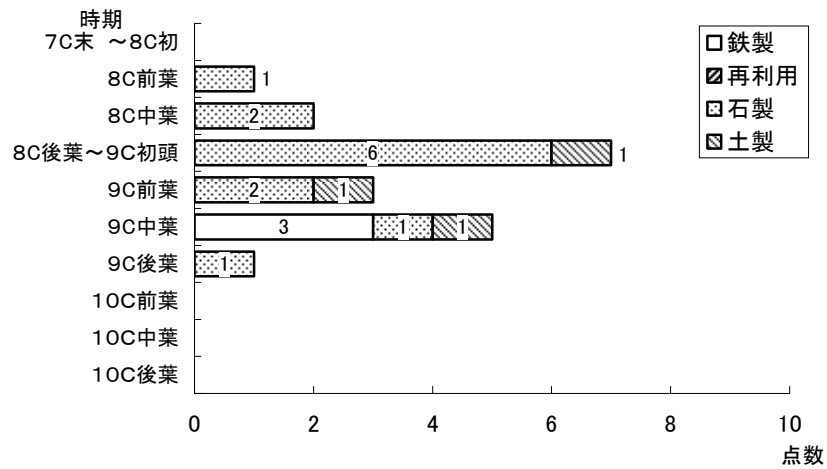
表3 紡錘車主要遺跡の時期別出土状況

	鉄製	再利用	石製	土製
7C末～8C初			8	3
8C前葉	3		19	6
8C中葉	3		9	4
8C後葉～9C初頭	8	2	25	5
9C前葉	3	7	10	7
9C中葉	17	18	16	9
9C後葉	15	11	13	7
10C前葉	11	5	6	2
10C中葉	2		1	
10C後葉	5		4	2

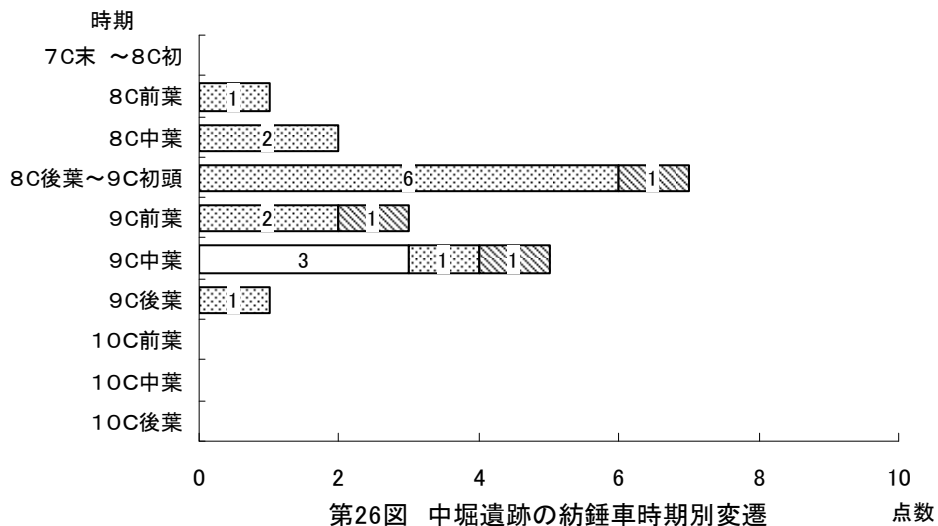




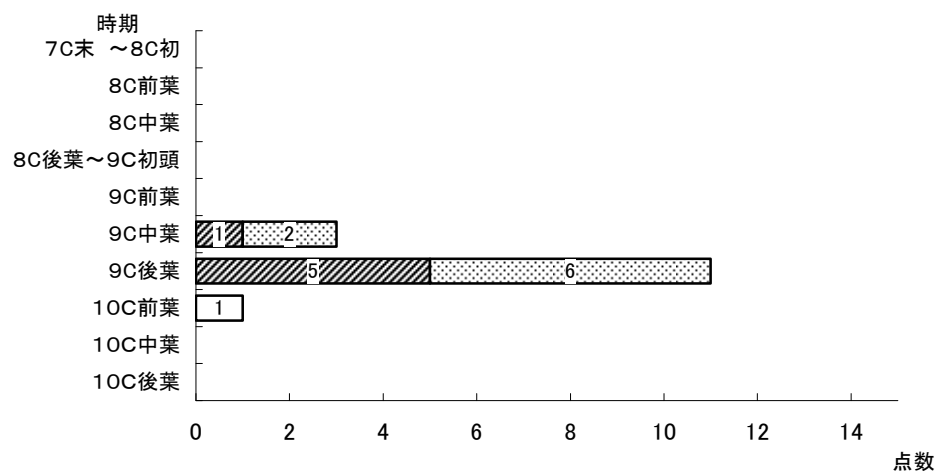




第25図 臼樹原・檜下遺跡の紡錘車時期別変遷

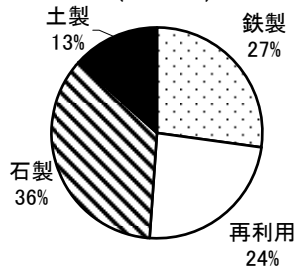


第26図 中堀遺跡の紡錘車時期別変遷

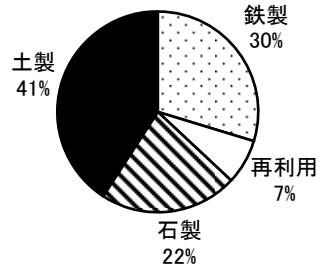


第27図 新屋敷遺跡の紡錘車時期別変遷

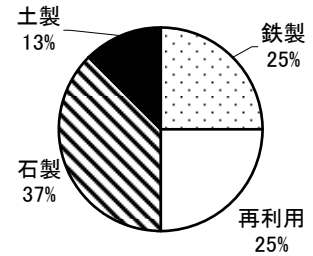
グラフ1 武蔵国府関連遺跡
(n=121)



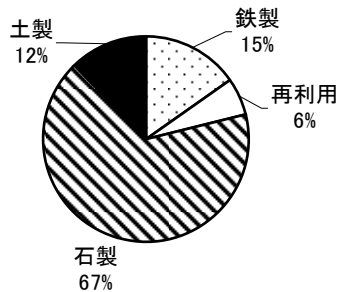
グラフ2 落川遺跡(n=27)



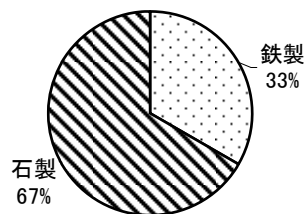
グラフ3 霞ヶ関遺跡群・
霞ヶ関関連遺跡(n=8)



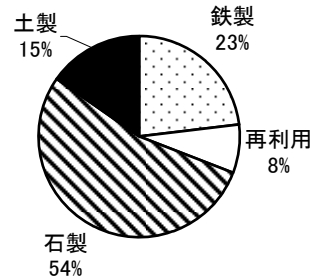
グラフ4 若葉台遺跡(n=33)



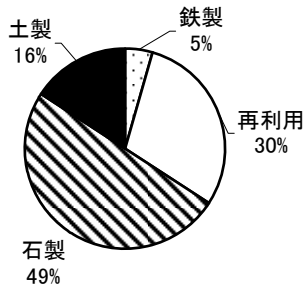
グラフ5 東の上遺跡(n=6)



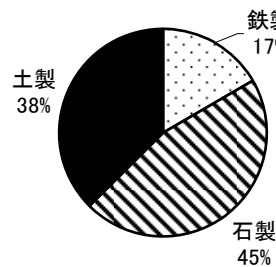
グラフ6 熊野遺跡(n=13)



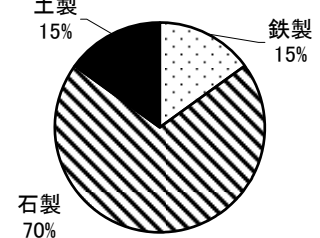
グラフ7 北島遺跡(n=42)



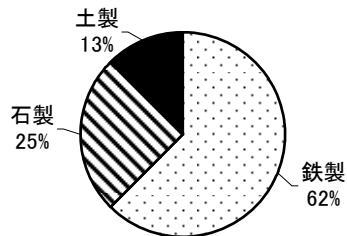
グラフ8 将監塚・古井戸遺跡
(n=24)



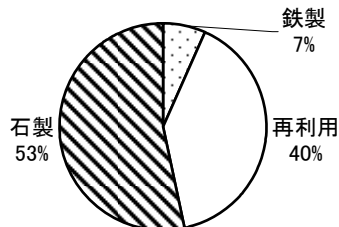
グラフ9 臼樹原・檜下遺跡
(n=20)



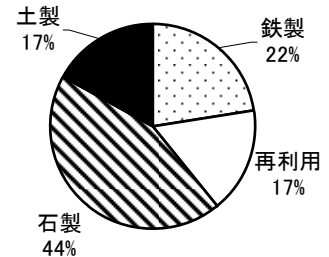
グラフ10 中堀遺跡(n=16)



グラフ11 新屋敷遺跡
(n=15)



グラフ12 紡錘車主要遺跡
種類別

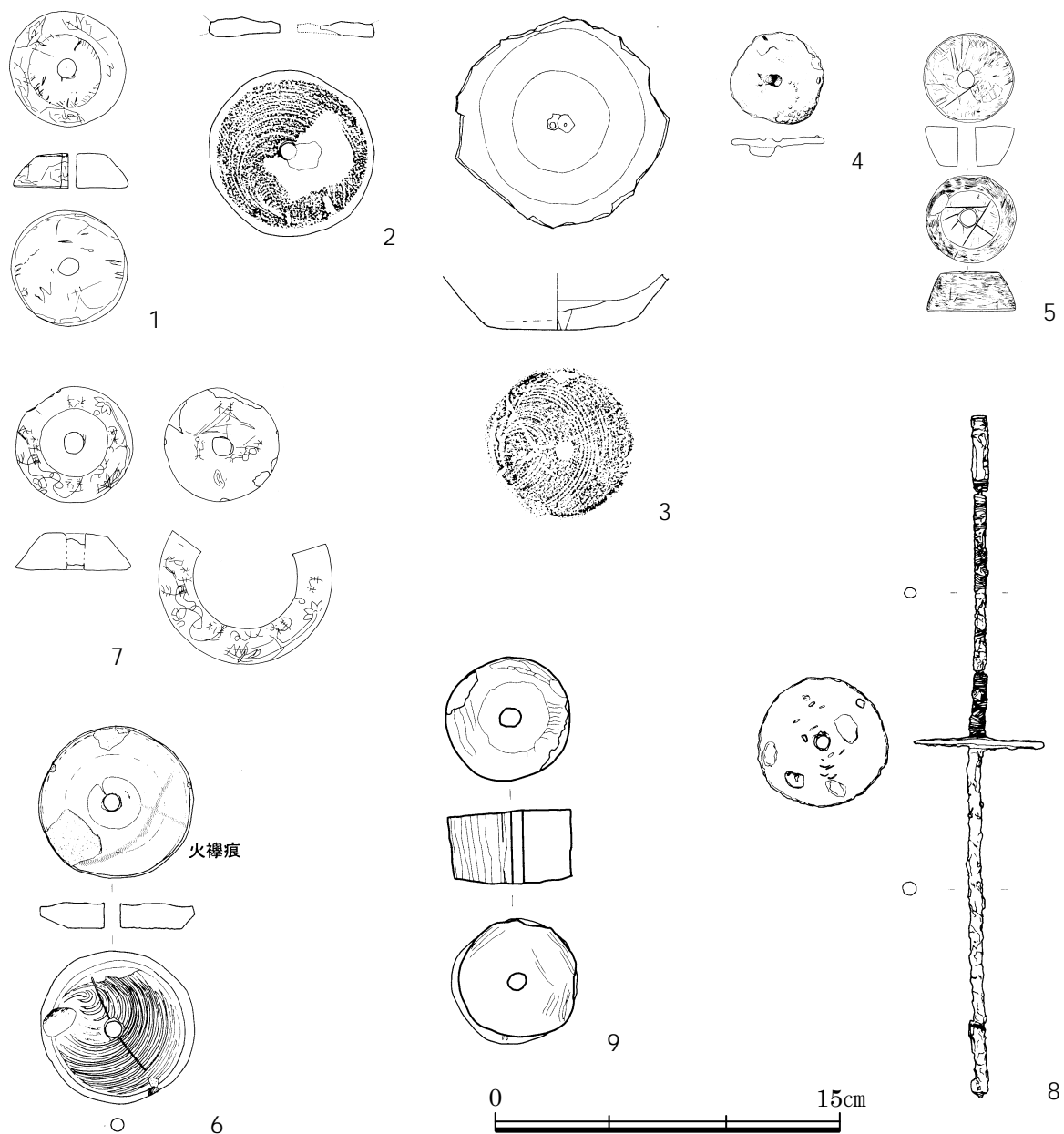


第28図 各遺跡における紡錘車の素材別構成(グラフ1～12)

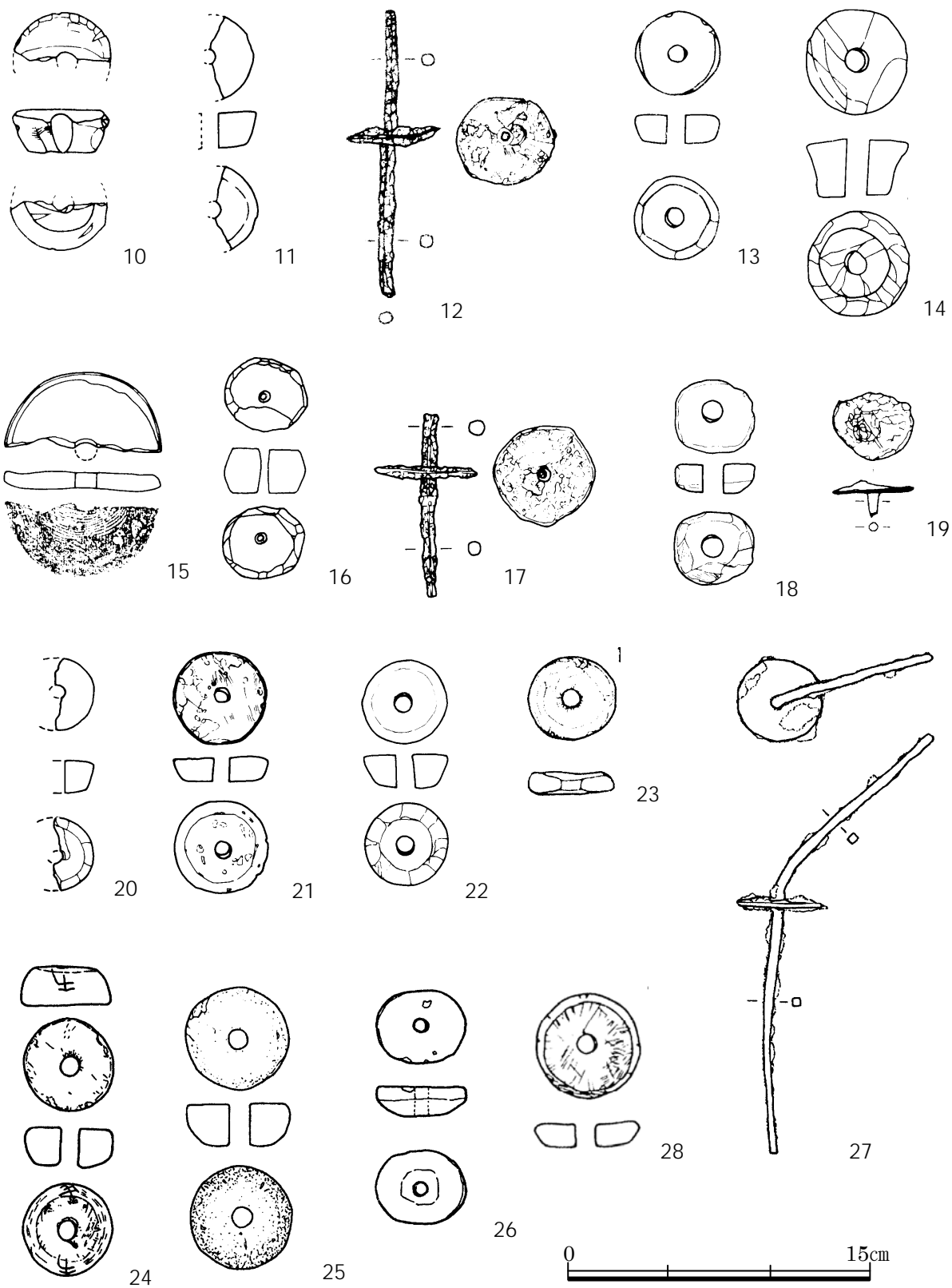
表4 霞ヶ関遺跡群・関連遺跡(川越市)及び若葉台遺跡(坂戸市・鶴ヶ島市)出土紡錘車一覧

()内の重量は復元値、直径は最大径

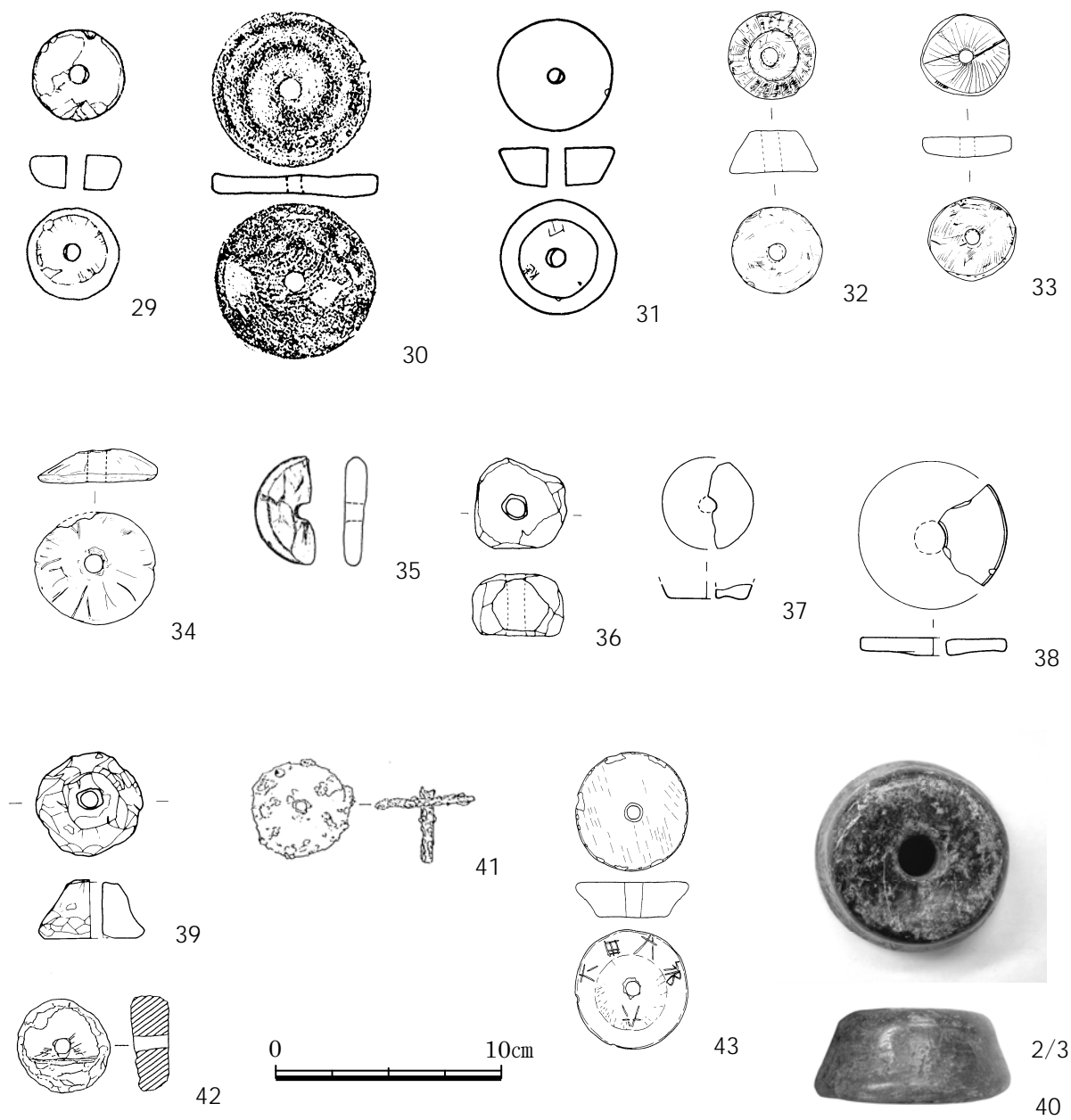
	遺跡名	出土遺構	図版番号	直径	厚さ	孔径	材質	重量g	断面形状	時期	備考
1	龍光・新田屋敷遺跡第5次	1号住居北西コーナー	26-69	4.8	1.4	0.7	蛇紋岩	52.0	台形	(8C前葉か)	漆塗彩・線刻
2	天王第7次	5号住下位	38-13	7.2		0.7	再利用	50.0	-	9C前葉	
3	霞ヶ関17次	1号堅穴状遺構	17-65	6.0	2.5	0.6～0.3	(土製)	89.0	紡錘車か	14C後～15C初頭	孔形三角形 紡錘車か
4	花見堂第3次・4次	3号住	43-40	4.1	0.4		鉄製		-	8C前葉	
5	花見堂第3次・4次	7号住北西部下位	45-24	3.8	1.8	0.8	滑石製	45.0	台形	8C前葉	
6	花見堂第3次・4次	9号住南西部上位	52-27	6.8	1	0.7	再利用	69.0	-	9C中葉	白針・寛記号
7	弁天西遺跡(第15次)	4号住居北東コーナー	11-43	4.9	1.6	0.8	滑石製	62.0	台形	9C中葉	紡錘残・線刻蓮花
8	弁天西遺跡(第15次)	4号住居カマド正面床面	11-44	(5.6)	0.5		鉄製		-	9C中葉	糸付着
9	熊野神社西遺跡第5次	4号住居周溝	35-111	5.3	2.9	0.8	土製		長方形	7C末葉～8C初頭	
10	若葉台遺跡Ⅰ区	1号住床下	15-48	4.8	2.2	1.0	石製	(74.0)	台形	8C前葉	
11	若葉台遺跡Ⅰ区	4号住周溝内	21-11	5.0	1.8	(0.7)	凝灰岩製	(54.0)	台形	8C前葉	
12	若葉台遺跡Ⅰ区	16号住東カマド天井	57-32	4.8	0.5		鉄製		-	8C後葉～9C初頭	
13	若葉台遺跡Ⅰ区	17・20号住中層	62-38	3.9	1.4	0.9	凝灰岩製	36.0	台形	8C後葉～9C初頭	
14	若葉台遺跡Ⅰ区	36号住カマド袖	125-18	5.0	3	1.0	土製	68.0	台形	8C前葉	
15	若葉台遺跡Ⅰ区	42号住覆土	145-194	7.5	0.8	1.0	再利用	(50.0)	-	9C前葉	
16	若葉台遺跡Ⅰ区	出土遺構不明	3-38	4.0	2.2	0.6	凝灰岩製	(41.7)	(六角形)	時期不明9C代か	一部剥離
17	若葉台遺跡Ⅱ区	3号住上層	13-27	4.9	0.5		鉄製		-	9C中葉	
18	若葉台遺跡Ⅱ区	9号住中層	25-3	3.8	1.4	1.0	凝灰岩製	28.8	台形	9C後葉	
19	若葉台遺跡Ⅱ区	10号住カマド焼土	26-11	3.0	0.3		鉄製		-	9C後葉	
20	若葉台遺跡Ⅱ区	19号住覆土	61-47	3.7	1.6	(0.6)	凝灰岩製	(22.0)	台形	8C後葉～9C初頭	
21	若葉台遺跡Ⅱ区	26号住下層	73-7	4.6	1.2	0.7	滑石製	44.2	(台形)	8C中葉	
22	若葉台遺跡Ⅲ区	8号住床	112-22	4.1	1.7	0.9	滑石製	40.6	台形	8C前葉	
23	若葉台遺跡Ⅵ区	13号住カマド焼土	15-13	4.2	1.0	0.9	滑石製	25.6	円盤形	9C後葉	
24	若葉台遺跡Ⅵ区	15号住床	28-40	4.8	1.9	0.9	滑石製	58.8	台形	9C前葉	「万」の刻字
25	若葉台遺跡Ⅵ区	16号住床	36-92	4.9	2.1	1.0	土製	64.4	台形	8C後葉～9C初頭	
26	若葉台遺跡Ⅵ区	16号住中層	36-91	4.4	1.4	0.6	凝灰岩製	36.7	台形	8C後葉～9C初頭	
27	若葉台遺跡Ⅵ区	18号住最下層	45-27	4.5	0.4		鉄製		-	8C後葉～9C初頭	
28	若葉台遺跡Ⅵ区	19号住上層	52-72	5.0	1	1.0	滑石製	44.3	(円盤形)	8C後葉～9C初頭	
29	若葉台遺跡Ⅵ区	21号住最下層	37-25	3.6	1.4	0.8	滑石製	38.9	台形	8C後葉～9C初頭	
30	若葉台遺跡Ⅵ区	28号住中層	79-12	7.1	0.7	(0.6)	再利用	56.8	-	8C後葉～9C初頭	
31	若葉台遺跡不明	不明	3-39	4.9	1.6	0.8	蛇紋岩製	62.8	台形	時期不明	「山継」か
32	若葉台遺跡C地点	複合住居6軒重複	35-16	3.9	1.8	0.8	石製	36.3	台形	8C中葉	
33	若葉台遺跡C地点	複合住居6軒重複	35-17	3.9	0.9	0.6	石製	23.4	円盤形	8C中葉	
34	若葉台遺跡D地点	表土層	64-2	5.3	1.5	0.8	石製	(64.8)	笠形	時期不明	
35	若葉台遺跡F地点	1号住カマド	82-6	4.8	0.8	0.7	滑石製	(46.0)	円盤形	8C中葉	
36	若葉台遺跡Q地点	2号住カマド	114-2	4	2.7	0.7	凝灰岩製		長方形	9C前葉	雑なつくり
37	若葉台遺跡T地点	1号住	146-9	3.6	(0.6)	(0.6)	石製	(31.5)	-	8C前葉	
38	若葉台遺跡T地点	遺構外	151-10	(6.5)	0.8	1.2	(再利用)	(40.4)	紡錘車か	時期不明9C代か	須恵器杯・白色針
39	若葉台遺跡V地点	10号住	44-3	4.7	2.6	0.9	土製	44.5	台形	8C後葉～9C初頭	白針
40	若葉台遺跡J地点	1号住	写真図版	4.2	1.3	0.7	石製	(56.0)	台形	9C中葉	炭化米・布
41	千代田遺跡	1号住	6-5	4.5	0.4		鉄製		-	9C前葉	
42	千代田遺跡	4号住居周溝内	17-4	4.1	1.7	0.7	土製		長方形	8C前葉	
43	富士見一丁目遺跡	3号住居	29-49	4.5	1.6	0.7	石製		台形	9C前葉	「大田大部」



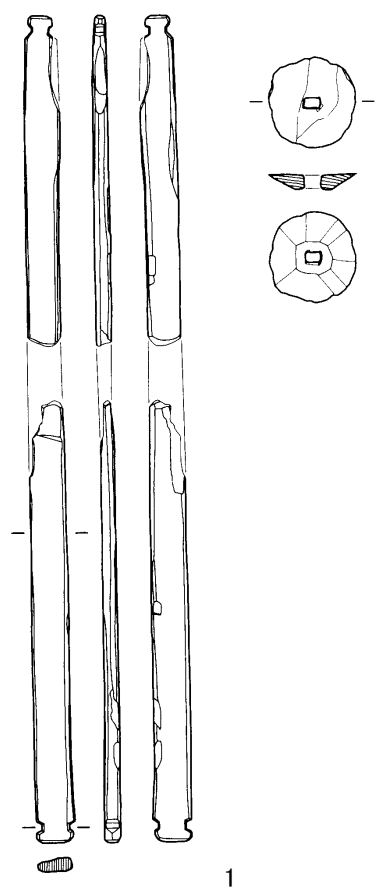
第29図 霞ヶ関遺跡群と霞ヶ関関連遺跡出土の紡錘車(挿図番号は表4-1~9と一致)



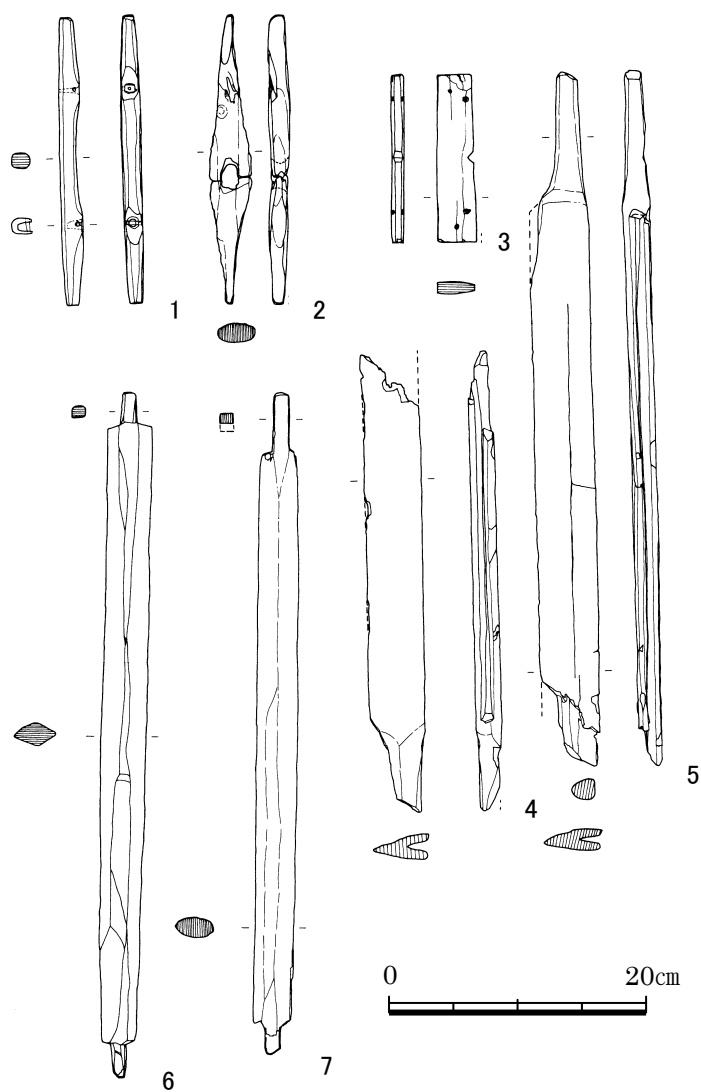
第30図 若葉台・千代田・富士見一丁目遺跡出土の紡錘車-1 (挿図番号は表4-10~28と一致)



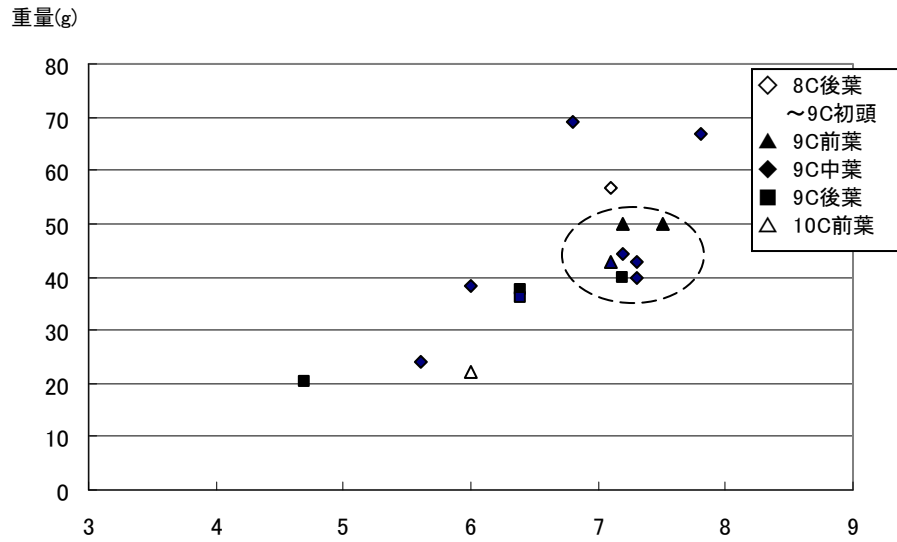
第31図 若葉台遺跡・富士見一丁目遺跡出土の紡錘車-2(挿図番号は表4-29~43と一致)



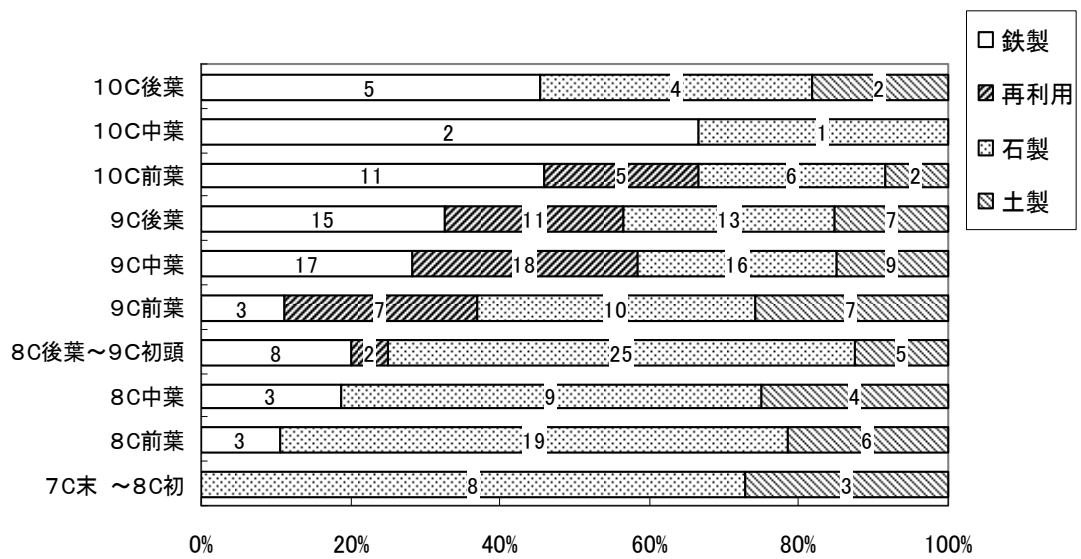
第32図 北島遺跡の木製紡織具
1:北島遺跡 2:423号溝



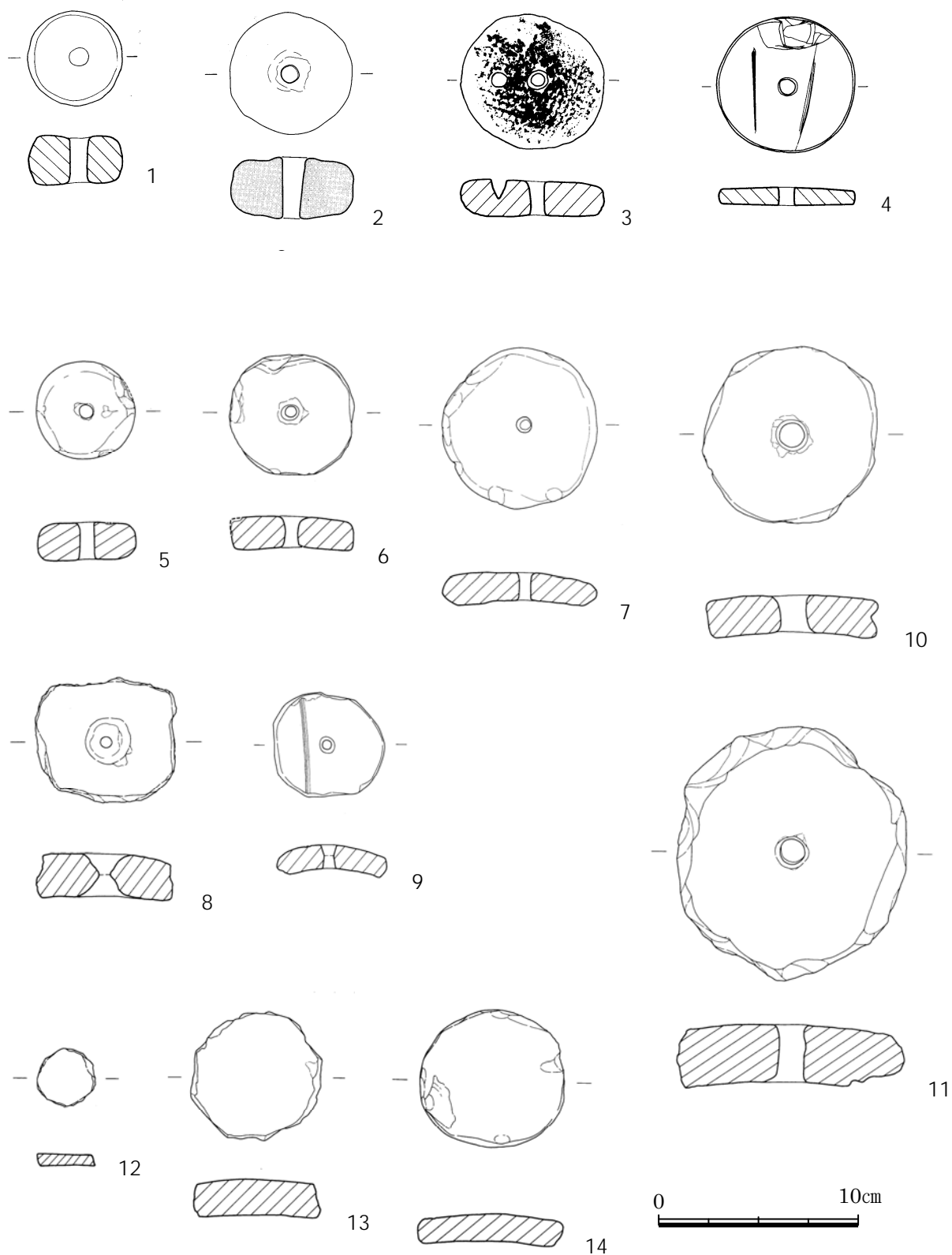
第33図 諏訪木遺跡の木製紡織具
1～7:河川跡C地点



第34図 土器再利用の紡錘車重量 直径(cm)

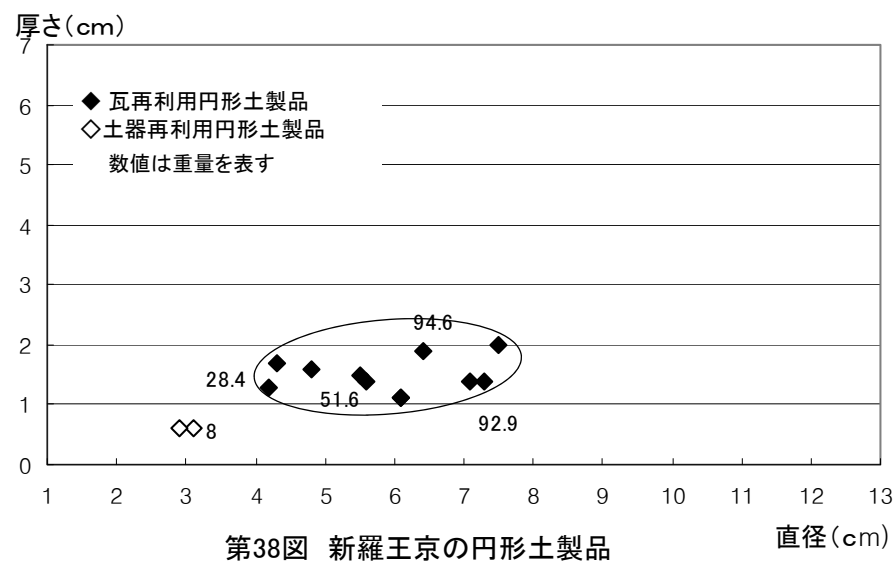
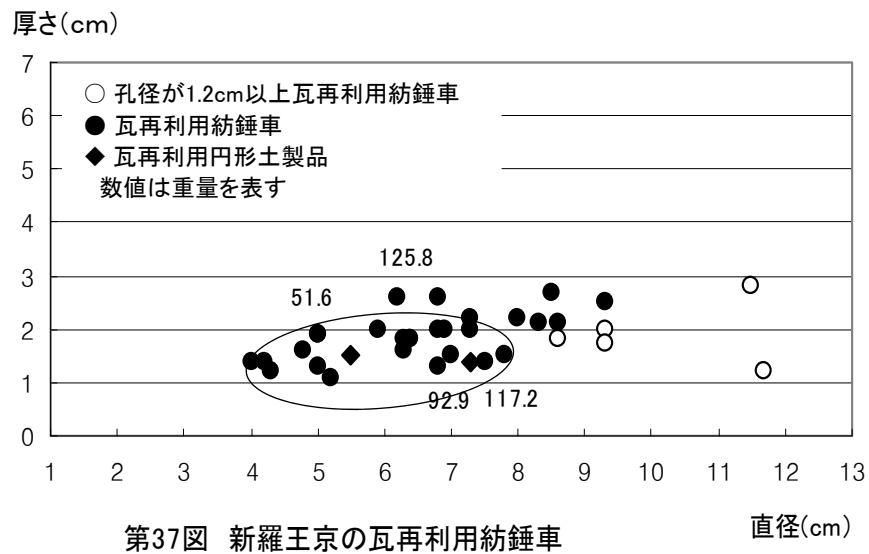


第35図 武蔵国主要遺跡の紡錘車の時期別割合



第36図 韓国7世紀後半以降、8世紀～9世紀の紡錘車と瓦・土器・石製容器再利用の類型

1：泗沘都城軍守里地点S-3號十字状遺構 2：扶蘇山城Ma-2pit 3：泗沘都城軍守里地点SE3pit
 4：泗沘都城軍守里地点NE1pit 5～14：新羅王京
 (1～3：土製定形紡錘車 4：石製定形紡錘車 5～8：瓦再利用紡錘車 9：石製容器再利用紡錘車
 10・11：瓦再利用紡錘車形工具等 12：土器再利用円形土製品 13・14：瓦再利用円形土製品)



第6章 考察

第1節 古代社会における土器の再利用

第1項 再利用の分析

再利用は、従来の律令制の地方における制度的整備や地方豪族の生産活動に関して、中央集権的パラダイムからの転換をはかり、地域社会の実態を描くための視点として有効である。即ち、再利用は、各地域の独自性と特徴ある古代社会を実態として、再資源化活動の考察を行うことを可能とする。

古代社会では細い流れではあるが、モノの再利用を行うことを前提とする社会システムを基礎にしているという問題提起と考察を行った。

古代において、土器は単に消費財ではなく、集落という消費地における新たな資源であり、再利用とは新たな道具作りの再生産活動である。

再利用の実態を把握する方法として、奈良時代・平安時代を中心に集落という、消費地の遺跡から出土した供膳具である須恵器・土師器の坏類、蓋類などを対象に、形状タイプ分類と付着物などの観察に基づき、古代社会において再利用が広く行われていたことを定量的に分析した。その主たる再利用の用途は、灯火具、硯、紡錘車などである。また、再利用を通して、複雑で多面的な集落の性格の考察へ繋がる。

1 灯火具としての再利用

灯火具の使用は従来、官衙や仏教関係、あるいは祭祀との関係が中心に考えられていた。土器再利用の灯火具は、豪族の拠点集落や交易、生産関係の集落にも認められるため、直接的ではないが、地方では豪族の経済活動との関係が深い用途であることを指摘できる。即ち、灯火具としての再利用の様相と紡織などの経済活動との関係性を考察することに繋がる。

灯火具としての供膳具などの土器再利用は、8世紀から都城などでも行なわれている。灯火具専用器種の生産は、一部の単発的なものを除いて実態がない。これが灯火具としての再利用が行われる背景の一つとみられる。

また、武蔵国では8世紀前葉から灯火具としての土器の再利用が、官衙関連遺跡や地域の交易活動などで核となる集落、鉄鑄造関連遺跡などの生産遺跡において行われている。古代においても、破損した須恵器・土師器の坏類や蓋などを再利用して、中・近世の灯火具と同様の機能として、上皿、下皿と灯芯押さえ（かきたて）の3点を組み合わせて使用していたとみられる。

灯火具として再利用される器種は多様であるが、供膳具である土師器・須恵器の坏類が多く、蓋も少数認められる。また、土師器と須恵器では、灯火具としての再利用は、明らかに土師器指向であることが指摘できる。武蔵国の若葉台遺跡でも、土師器の出土点数が多い8世紀前半では、土師器が多く灯火具として再利用されている。

灯火具としての再利用は、古代から中世へ移り変わる時期である9世紀後半から11世紀初頭までを中心とする鑄造関連遺跡でも、坏類に「打ち欠き」が行われ、さらに黒色付

着物から、灯火具としての再利用が実際に行われている。

再利用の灯火具の使用状況では、都城でも貴族層の台所である「厨」や警備関係「衛士」の役所などで、土器の破片を灯火具として再利用していたこと、また、地方では地域の核となる集落遺跡において、灯火具としての再利用の定量的把握を行った結果、従来考えられていたより多数の灯火具としての再利用が認められた。しかし、多くの灯火具としての再利用が認められたとはいえ、現段階では長期間継続的に灯火具として使用されたものはそれ程多いといえない状況である。一度に使用する灯火具の土器の点数は、中・近世の灯火具と同様に組み合わせて複数で使用していること、及び煤、油煙の付着状況からすると短期間のものが多いとみられるためである。しかし、付着物は発掘調査後の洗浄などで剥落し、失われているものもあるため、観察が困難であることも多く、一概に少数であったとはいえない。

灯火具としての土器再利用が多数認められた坂戸市発掘調査分の若葉台遺跡において、再利用硯と再利用・定形紡錘車について相関関係をみる。灯火具は明確に煤・油煙とわかる LA 類（第2章5図）が1点でも出土している場合、あるいは付着物 LB、LC 類を含めて4点以上出土している竪穴住居跡の合計 53 軒を抽出した。これらの灯火具が出土した住居跡において、再利用硯は 15 点のうち9点、円面硯は10点のうち3点、紡錘車は 22 点のうち 13 点が供伴している。これらの灯火具の時期と硯や紡錘車の時期は、ほぼ一致している。大概の傾向ではあるが、再利用硯と紡錘車の約 60%が再利用の灯火具と供伴して出土している。円面硯については、鶴ヶ島市調査分の竪穴住居から円面硯（第5章表1）が多数出土しているが、これらの大型住居のうち3軒には、土器実見の結果、再利用の灯火具が伴出している。即ち、実務用の硯である再利用硯、及び手工業生産の道具である紡錘車と灯火具には、有機的関係が存在することを指摘できる。灯火具は、文字・数字の使用や紡錘車で糸を紡ぐなどの生産のためにも使用されていたことが推定できる。

従来、古代では灯火に使用する油の価格が高いことから、特別の灯火具として、地方では灯火具が寺院や官衙においての使用、あるいは集落内の仏教関連遺跡、及び竈神などの祭祀に関係すると考えられ、地方豪族の生産関連活動のために使用された可能性については、言及されることさえほとんどなかった。しかし、本論で行った再利用の灯火具の検討により、生産及び、交易などに関連する地方豪族層の経済活動に、再利用の灯火具を使用した可能性が指摘できる。

今回、第3章で検討した灯火具としての再利用が認められた若葉台遺跡をはじめとする武蔵国の4遺跡は、基本的には消費地ではあるが、交易拠点や市、官衙関連遺跡、鍛冶関連工房などの多面的な性格が考えられている。このように遺跡の性格は多様であるが、地域のなかで核となる有力集落であり、富豪層と関係し、一定の経済力をもつという点は共通している。こうした集落において、具体的に灯火具の用途をみると、行政及び交易のための事務関係の処理、鉄の铸造や紡織などの生産関係の活動、饗宴のための準備などが推定できる。即ち、灯火具の使用は、従来のように祭祀や仏教関係の行事のみに限定されるものではなく、地域の活発な経済活動のために使用されていた可能性が指摘できる。

2 硯としての再利用

再利用硯の重要性が指摘された研究は、端緒についたばかりといえる。定形硯や再利用

硯をライフヒストリーの視点から、その文化的社会的意味の変化に関してアプローチをする研究、特に、再利用硯の研究はまだ黎明期である。しかし、再利用硯を除いては、古代社会における律令制や地方豪族の経済活動の実態について研究を行うことができないとまでいえる。

硯としての再利用は、地域毎にやや違いもあるが、基本的には灯火具と同様、都城、国府、郡衙をはじめとする官衙関連遺跡、地域の核となる集落において行なわれている。硯は、灯火具としての土器再利用とは異なり、専用器種として定形硯の生産が行なわれたうえで、再利用硯が多く使用されている状況である。いうまでもなく、硯は基本的に文字使用が主目的の道具であり、使用者層や使用される場所はある程度限定が可能である。

官衙関連遺跡では、特に再利用硯の在り方は、補完という役割にとどまらず、再利用硯の使用が前提となっている。古代の律令制において、再利用硯は文書行政に不可欠であると指摘できる。即ち、下級官人用に間に合わせた仮の硯ではなく、行政の実務面では再利用硯を一定数調達し、使用する体制が存在したといえる。地方のみならず、都城でも再利用硯が一定数使用されている。従来の定形硯のみのアプローチでは、律令制の官衙での文書行政の実態を捉えることは不十分であるといえる。

再利用硯のみならず定形硯も含めて硯は、用途が幾つかの局面において多様に変化しつつ使用され、その文化的な意味を変えてゆく、ライフヒストリーの視点からのアプローチが可能となる重要な事例である。

定形硯は、上級官人用でありステータスシンボルと考えられているが、円面硯の場合、脚の一部が破損したものでも、硯面を活かすため全て脚部を意図的に打ち欠き、硯面を再使用した可能性のあるものが認められる。定形硯は、破損してもそのまま廃棄されず、再利用硯と同様に実用的な硯として使用された場合や、あるいは一部破損の後に払い下げなどで使用者が変わって、再利用された可能性のあるものが認められている[荒井健治 2006]。定形硯が特別で貴重な品であったためとみられる。

定形硯の編年に関しては、生産年代、使用年代及び耐用年代、特に廃棄年代に加え、再利用を含めライフヒストリーを踏まえた分析が不可欠である。

須恵器の蓋のほかに坏、及び甕の破片も硯として使用している。再利用硯の問題は、単純に再利用されたかどうかということに焦点があるのではない。この研究の特徴は、土器の用途が幾つかの局面において変化し、使用・再利用されその文化的な意味を変えてゆく、ライフヒストリーの視点からのアプローチが可能であり、モノと人との関係性を追跡してゆくことができる点である。

藤原京、平城京の都城においては、再利用硯の点数は膨大であるが、ごく一部しか報告されていない。

平城宮では定形硯の他に、主に須恵器蓋の内面を硯として使用した再利用硯が多数出土している。また、蓋が坏身より多数検出される傾向が多いことが指摘されている。その理由の一つとして、再利用の硯などに使用するため、ストックしていたと理解することができる。

平城京や国直轄官衙における硯の出土状況から、定形硯と再利用硯の傾向と特徴は、次の①～⑤にまとめることができる。

①硯出土の多い遺跡は、官衙などの公的施設、豪族の居宅、工房関係施設、市などの交易

・流通関係施設、及びこれらの付帯施設の性格が考えられる。

②再利用硯は限られた数の定形硯に対し、補完というより、実用的な硯として使用されていること。

③8世紀後葉には、定形硯及び再利用硯の出土点数が増加する傾向があること。

④再利用硯に使用される器種は、高台坏を含む坏類、蓋と甕が多い傾向にある。

⑤再利用硯は使用する土器型式によって、時期を推定する手掛かりとなる。

従来の定形硯のみに終始した研究は、各地域では大半が小破片の定形硯の資料集成であった。定形硯のみでは、当時の文書行政の実態について、そのごく一部を反映しているだけに過ぎない。資源の再利用という新たな視点から硯を研究することにより、従来の研究では明らかにできなかった律令制の具体的な地域における様相が明らかになる。

定形硯と再利用硯に関する地方の具体的な事例研究として、武蔵国の主要な17遺跡を取り上げた。この地域における定形硯の出土動態をまとめると、①定形硯全体の出土点数の変遷では、7世紀末から8世紀初頭において急増した後、8世紀後葉には2倍以上に増加し、9世紀中葉以降、急激に減少している。②消費地における定形硯の出土数の変化は、生産地である窯での硯の生産量との関係と比例している。③7世紀末から8世紀初頭は律令制が整備される時期であり、同時に生産地周辺の官衙関連遺跡への硯の供給が開始されはじめたと推定できる。

次に、武蔵国の再利用硯で特徴的なことは、①蓋が7世紀末から8世紀初頭に比較的多く再利用硯として使用されていたこと、そして、②高台をもつ各器種の再利用硯への指向性である。高台を堤としその外面を硯面とすることが多い。灰釉陶器の壺も基本的に高台が付くため、再利用硯として多く用いられている。高台が付く器種や蓋という、再利用の機能に対する指向性があったと指摘できる。

8世紀前葉は、再利用硯の出土点数が増加する遺跡が多くなり、再利用硯が硯として一定の位置づけが行われ使用されている状況がみえる。都城と同様に8世紀代には交易、流通関係などの施設とみられる遺跡では、定形硯よりも再利用硯が多く出土する傾向が認められる。また、8世紀後葉は、官衙及び官衙以外の遺跡でも定形硯が多く認められ、硯全体では最も点数が多い時期となる。

このように、武蔵国では硯の使用は官衙関連遺跡、交易流通関係の遺跡、生産関連遺跡、豪族の居宅に多く認められ、8世紀後半に多くなることが指摘できる。硯が官衙以外でも多数使用された理由としては、交易や生産関係など豪族の経済活動にともなう事務処理としての使用が考えられる。

7世紀後葉は、高台をもたない坏Gと返りをもつ蓋の組み合わせ、さらに高台付坏Bと返り蓋を組み合わせる金属器系食器が出現する画期である。坏Bは坏身に高台をもつことから、蓋も坏身のどちらも再利用硯への指向性が高い器種といえる。

これらの供膳具については、硯としての使用、再利用が可能であるという器形がもつ特徴が重要であると指摘できる。即ち、東国への金属器系食器導入には、定形硯の生産・供給が十分でない状況で、実用的な硯として使用・再利用できる器形が重要であったと考えられる。これが金属器系食器の東国への導入要因の一つになったと指摘できる。

東国の中でも上総国と下総国は再利用硯が多く、定形硯の出土が少数であり、武蔵国の出土状況とは大きく異なる。従来の定形硯のみの研究では、上総国、下総国では文書行政

が実態としてほとんど行われていなかったことになる。即ち、武蔵国の状況に比べ、再利用硯の使用が文書行政の前提となっている様相がわかる。

上総国、下総国の再利用硯は大半が甕の破片で、残りは高台坏である。上総国は武蔵国と異なり、7世紀後葉からの須恵器窯がみられないため、定形硯が少ないと考える研究者もいる。しかし、両国の遺跡とも、東海地域の須恵器・施釉陶器が多いことから、硯も同様に東海地方の諸窯などから入手することは十分可能であったと考えられる。また、8世紀前葉には上総国には小規模ながら、須恵器焼成窯が造られていることから推測すると、むしろ実用的な再利用硯を指向していたと考えられる。

上総・下総の国は、官人としての身分や権威を象徴、表徴するために、硯のような間接的なものではなく、平城京などの都城と同様に、より直接的な袴・服装などによる各個人の身分表徴システムを採用していた可能性が高い。つまり、上総・下総国と武蔵では再利用硯に対する考え方、あるいは階層の表徴に対する価値観の違いが社会的背景にあるとみられる。再利用硯からみると、律令制の整備の状況や対応の仕方が地域によって異なっていることが指摘できる。

3 紡錘車としての再利用

紡錘車は付着物などの使用痕跡を基礎とした再利用とは異なり、形状から識別できる素材としての再利用といえる。再利用紡錘車は明確な使用目的に合わせて、現地で加工・製作した即応型の紡錘車である。古代の関東地域では須恵器の坏底部の重量が織布用紡錘車として適する8世紀後半から、再利用の紡錘車が製作されている。灯火具、硯などという土器の再利用の用途とは、基本的に性格が異なり、社会基盤の形成に関わる生産道具という点からも注目すべき再利用の資料といえる。

再利用の紡錘車では織布用の用途か、紡織以外の工具であるかの区別、及び分類を行うことが必要であり、両者には一定の基準が認められる。紡錘車に関係する変化の背景には、織機の変化とその生産物である布の変化がある。紡織技術の変化が存在し、布の社会的位置づけが変わり、これが社会にも変容をもたらすという相互作用が認められる。

鉄製紡錘車は、西日本では6世紀中葉に認められ、東日本では7世紀末葉とみられ、専門の工人集団による生産と製品の規格性がある紡錘車である。一方、関東地方では8世紀後半には、再利用の紡錘車が製作される。再利用の紡錘車は、自家製という点では鉄製紡錘車とは異なり、規格性がないと考えられていたが、重量からみると織布用の紡錘車としての範囲のものが大多数である。つまり、再利用の紡錘車は重量から検討すると、大部分は織布用の紡錘車として使用されていたと考えられる。

武蔵国では8世紀後葉以降、紡錘車の数が増加し、9世紀中葉に最も多く認められる。再利用の紡錘車もこの時期から増加していることから、布の生産量も増加したと考えられる。この背景には、地方における紡織技術の革新として地機の普及などが推定できる。再利用の紡錘車が比較的多く認められる遺跡では、紡錘車全体の数も多い傾向が認められる。

また、武蔵国府関連遺跡を除き、鉄製紡錘車と再利用の紡錘車の2種類には偏りのある遺跡が認められる。北島遺跡などでは多数の再利用紡錘車が認められるにもかかわらず、鉄製紡錘車はわずかである。一方、中堀遺跡では再利用の紡錘車はごくわずかで、鉄製紡錘車が多いことから、各集落では独自の紡錘車の入手ネットワークが存在していること、

また、紡錘車の種類や素材への指向性が認められる。丁寧な作りの再利用の紡錘車が多い北島遺跡では、再利用紡錘車の製作に集落の技術的な裏づけが推定できる。

再利用の紡錘車が製作された理由としては、紡錘車の数の補完という側面は否定できないが、各集落の指向性や、素材となる須恵器坏類の形状変化がある。8世紀後半以降に、生産された須恵器坏は底部が薄く、底径が縮小することで軽量化し、布用の紡錘車に適した重量へと変化した。9世紀にはこの傾向が顕著となる。10世紀に再利用の紡錘車が減少することは、再利用の素材としての須恵器坏類の生産が衰退し、軟質のロクロ土師器などへ変化したことが影響したと考えられる。

古代武蔵国の主要遺跡における紡錘車の時期別変遷をみると、8世紀後葉から9世紀前半までは、武蔵国府関連遺跡を除くと、8世紀前葉に始まる新興集落である若葉台遺跡において、紡錘車の出土数が顕著である。紡錘車全体の出土数は9世紀中葉にピークが認められるが（第5章2節2項）、若葉台遺跡はそれ以前に画期がある。

紡錘車の検出数では、武蔵国府関連遺跡は最も多くかつ継続して認められる。従来、律令制下では都城、国衙及び一部の郡衙において織布用の糸作りは行わず、基本的に機織りの製織のみの分業が行われていたと考えられてきた。しかし、紡錘車の出土状況からすると平城京などの都城とは異なり、織布のみならず、製糸も国府や郡衙関連遺跡では行われていたことがわかる。特に武蔵国府府関連遺跡において、多数の紡錘車が出土することは、東日本の新たな紡織体制の類型である。また、鉄製紡錘車の入手という点では、最も容易な立場であると考えられる国府関連遺跡において、9世紀代を中心として再利用の紡錘車が多数認められている。このように武蔵国府域において、再利用の紡錘車への指向性と再利用の紡錘車を使用することを前提とした製糸作業が推定できる。

武蔵国府関連遺跡の次に、紡錘車が多数認められる遺跡は北島遺跡である。時期不明の石製紡錘車が多いため推測を含むが、周辺遺跡から古墳時代後期の地機の部材が出土していることなどから、継続して製糸と布生産が行なわれていたと考えられる。この遺跡は、7世紀後葉からの新興集落である国府関連遺跡とは異なり、古墳時代後期から手工業生産を行っていた集落である。

再利用の紡錘車を含めた紡織から、各集落の特色のある経済活動が浮かび上がる。東日本においては、経済的側面では官衙を頂点とするピラミッド形ではなく、各地域の各手工業分野で特質をもち従来の古墳時代後期以来の社会・経済システムを背景とする集落、及び新興集落が中心となり、他集落と衛星状に相互の関係を保有していることが推定できる。即ち、各集落が特産品の生産活動を行うことで、地域の経済ネットワークで核となっていく様相が推定できる。

また、資源の再利用を指向するため、用途に合わせて素材を選び、目的に合わせて再加工を施し、一定期間ストックする様相は、日本国内に限らず、韓半島南部でも推定できる。

以上述べたとおり、再利用には地域社会の資源の具体的状況に対応する合理性と指向性が認められる。即ち、再利用の使用の在り方そのものに、再利用の用途と使用価値としての意義が認められるのである。

第2項 再利用からみた古代社会

日本の古代社会における武蔵国を中心とした土器の再利用の考察から、文字で描かれた

律令制とは異なる各地域社会の実態として、古代の地方豪族による活発な経済活動が浮かび上がった。その時期は8世紀後半に顕著となることが指摘できる。

古代社会において、全体の流れに比べればわずかではあるが、供膳具としての使用から再利用により新たな道具としての価値が発生する。即ち、それらは灯火具、硯、紡錘車という用途に再利用される道具であり、付着物や形状の変化などによって供膳具から、硯、そして灯火具へというライフヒストリーを描くことができる。その際に、古墳時代以来の打ち欠きや剥離などの二次加工が施されて、用途に適した形状に整えられるもの、あるいは再利用されずに廃棄されたものや、素材としてストックされたものも認められる。

土器の再利用は、その用途に関する専用器の不足や欠如という状況への対処や問題解決策、即ち、適応の戦略としても理解できる。筆者の戦略とは、ある制約条件や問題に対処するための対応の方法である。即ち、仕方がないという消極的な対処の方法ではなく、合理的に対処する積極的な方法として捉えている。

日本の古代社会において7世紀末葉から8世紀初頭は、中国の唐を模倣した中央集権的国家体制としての律令制の整備時期である。国家として地方の豪族や民衆を支配し、税を畿内の宮都に集中するために、中央から天皇の言葉を伝える国宰（くにのみこともち）としての役割をもつ国司が派遣された。地方豪族は旧国造を含めて、郡司として任命され、律令制の官人として体制に組み込まれた。実際に直接民衆を支配するのは郡司であり、国司は、儀礼や祭祀、これに伴う饗宴を行い、官人としての上下関係を明確にする役割があった。武力による支配ではなく、儒教的な徳治政治が行われ、文書主義によって情報が伝達され、行政が執り行われていた。官人となった地方豪族は、支配される一方で、官人としての立場のメリットとして、公的な高利貸し制度である公出挙などからの利益を得る機会があった。

また、儀礼の場としても国衙など官衙の整備は重要であった。官衙として必要不可欠なハードウェアである正倉には、都に許可を取らなければ開けることのできない「遠年の貯（たくわえ）」としての不動倉があり、飢饉や非常の備えとして粃をつけたままの穀稲を蓄えていた[佐藤信 2002・2007]。

古代においても権力とは、支配と保障であるといえる。正倉は国家支配の「正当性」を示す公共的施設として、官衙、及び律令制の象徴の一つである[山中 1994]。したがって、律令制の整備は、新たに正倉を含む官衙の造営や行政文書作成の必需品である硯、墨、筆などの調達が必要となった。こうした新たな律令制という政治システム導入にあたり、各地域社会は一定期間の間に、様々な適応をしなければならない状況であったと考えられる。

硯は、文書主義の律令官人の象徴であるため、官衙の整備にあたり、主要な窯場に対して定形硯である円面硯を発注したと考えられる。

古代では、文字が使用でき理解できる階層は限られ、地方においては無文字社会に近い状況であったと考えられる。集落では墨書土器に記されている文字の大半は、吉祥の文字一文字であることから、文字は呪力をもつ符号としてまた、権威の象徴でもあった[平川 2000・2008]。

武蔵国ではこの時期に末野窯と南比企窯の2つの窯が稼動しており、郡衙関連遺跡からは、これらの窯の製品である定形硯が検出され、官衙と窯の密接な供給関係が推定できる。しかし、定形硯の生産は順調ではなかったことが推定できる。南比企窯跡群には8世紀代

に出荷されずに残された不良品とみられる定形硯が多数認められ、武蔵国府を除くほかの遺跡の中では最も点数が多い（第5章第6図）。定形硯の生産は、技術的にも困難であったと考えられる。

定形硯は上級官人にとって、身分や上下関係を示すステータスシンボルの一つであり、貴重な品として認識されていた。このため、定形硯は破損した後にも、二次加工として打ち欠きが行なわれ、硯面のみでも硯として再使用されたと考えられる。定形硯の限定された生産状況では、官衙において一定期間に十分な定形硯を揃えることはできない。また、多くの下級官人に定形硯を支給することは、再利用硯と比べればコストの面からみても全く異なると考えられる。このため、須恵器の坏蓋、高台坏、甕の破片を再利用する硯を官衙でも調達していたと考えられる。

多くの文書を作成する下級官人にとっては、硯は日常使用する文房具として必需品であり、再利用硯の調達は文書行政において重要である。金属器模倣の坏や蓋などの供膳具は、硯としての再利用が容易な高台や返りをもつ器形である。供膳具は官衙では饗応のため基本的に必要な器種であり、調達し易いといえる。また、定形硯に比べれば供膳具の生産は容易である。

7世紀末から8世紀前葉は、武蔵国では硬質な静岡県湖西窯産の甕が搬入され、再利用硯に適した素材となった。甕の破片などを再利用硯として使用するために、遅くとも古墳時代後期から認められる伝統的な打ち欠きや剥離などの技術を用いて二次加工を行っている。このように、生産地での窯の定形硯に関する技術的な習熟不足、一定の期間内で多数の定形硯を調達すること、また、コストを考慮して地方官衙の整備を行っていたと考えられ、新たな政治システムに適応するために、実務的には十分な機能をもつ再利用の硯が使用されたともいえる。

平城京などの都城や武蔵国府関連遺跡などにおいて、再利用硯が使用されている。また、上総や下総国は、定形硯の使用は必要最低限ともいえる数に限定し、実用的な再利用硯を指向している地域である。したがって、モノの再利用ということが稀なこと、あるいは間に合わせという意味ではなく、むしろ古代の人々にとって再利用は、合理的なモノの使い方として一般的であるという価値観が推定できる。

文献史学などにより当初、中央集権国家という点から、画一的な官衙の建物と遺構の在り方として、方八町という国府像もあったが、これは考古学の発掘成果から否定されている。遺構のみならず、従来、官人の使用している硯は、定形硯という画一的なイメージであったが、実際に行政文書を作成していた多数の下級官人が使用する硯は、多くの場合定形硯ではなく、蓋や坏、甕の破片を再利用した硯であったことが指摘できる。加えて、定形硯の調達数は国によって異なる。これは各々の地域社会において窯での生産状況のみならず、硯に対する指向性や価値観によるものと考えられる。

従来の中央集権国家という言葉から連想されてきた整然として、画一的であるという官衙のイメージは払拭され、再利用の硯からみると、地域の価値観や地域の状況に対応した多様な実態が反映されたものといえる。

再利用硯は、官衙関連遺跡のみではなく、武蔵国の交易拠点とみられる集落に多数認められることから、地方の豪族による活発な交易活動、経済活動の指標ともなる。即ち、帳簿付けや交易に関する事務処理を行うために、実用的な硯である再利用硯を多く使用して

いると考えられる。

一方、8世紀後半段階には、交易拠点でも定形硯を多数入手している遺跡があることから、当時、官衙のみならず、定形硯が一般的なステータスシンボルの一つとなり、地方豪族にとっては重要な調度品となっていた可能性がある。

従来、律令制の導入により、官衙が地方の政治・行政、経済の中心であり、租庸調という税のための経済活動が地方の経済活動とみなされている。さらに、手工業生産は高度な分業が行なわれ、官衙主導と考えられてきた。当然、交通路や物流ネットワークに関しても同様に官主導によるものであり、特に官道の整備が行なわれ、畿内七道の官衙間を結ぶ重要な陸路とされている。一面では地方豪族が、郡司などの地方官人として登用されるため、官衙が行政と経済の中心として機能していた場合もある。

しかし、地方では古墳時代後期以来の伝統的な豪族と新興勢力の豪族など複数の有力豪族が、特色のある手工業生産による経済活動を行っていた。こうした豪族層は律令制の官人として登用されると、その立場を利用して、自らの手工業生産を拡大することが可能であり、交易活動を活発化させ、自立した独自の経済活動を行う方向へと向かったと推定される。このような地方豪族の活発な経済活動が、律令制社会を変容させていったと考えられる。つまり、地方豪族に実務を任せる政治システムであった律令制は、実際の運用の面では、当初から彼らに実質の地方経営に関する一定の権限を与えると同時に、庸調物の徴収のために地方の経済活動を活発化させるという、矛盾が内在していたともいえる。

豪族の一部は官人として登用され、実務を行っていることから、公的な官人としての権力を行使した経済活動が私的なものに変化したとしても、その区別は困難な部分が多い。このように、地方豪族の経済活動については、地方豪族と官人の立場という二重の構造が浮かび上がる。近年、郡衙関連遺跡として各地で発掘調査が行われているが、その多様な在り方、及び官衙と豪族の居宅との区別が困難である点が問題となっている。この背景には地方豪族と官人の二重構造の存在という点を指摘しておきたい。

「律令国家の二重構造」については、吉田孝氏の論考[吉田孝 1983]などもあるが、従来の律令制が墾田永年私財法を契機として、解体していくという文献史学のパラダイムに対して、吉田氏は新たに律令制と首長制の展開過程において、「国制」や文化が形成される様相を描くことを主眼としている。一方、ここで筆者が指摘した地方豪族と官人の立場という二重の構造とは、地方豪族が律令制という新たな政治制度のなかで、どのようにしたたかに政治的、経済的に適応し、自らのために新たな制度を活用したかという点から着目した事柄である。

こうした地方豪族の活発な経済活動については、中央の視点で記された文献史料からでは知ることはほとんどできない。むしろ、8世紀後半には調庸物が納期に遅れる「違期」

(779)、「粗悪」(785)をはじめ、納入されない「未進」(786)の記事が『続日本紀』に認められるように、地方からの税の徴収が滞り順調でなくなったことが、律令制と手工業生産の発達の問題として考えられている。この国家的対策として鉄製紡錘車の普及が行われ、粗悪品が再利用紡錘車によるものと解釈されてきた[堀田 1999]。

しかし、再利用の紡錘車を含めた紡織という生産活動からは、8世紀後半以降、武蔵国ではより多くの布が生産され、画期を迎えたと考えられる。こうした布の増産は、交易活動をさらに活性化させる。また、各遺跡の紡錘車の出土状況からみて、地方の物流を含め

た経済ネットワークは、必ずしも官衙中心とは言い切れないことを示している。同時に手工業生産は、従来考えられていたような官衙を中心とした分業体制が必ずしも行なわれてはいないことを指摘できる。

再利用の紡錘車は各集落において須恵器坏底部を主に再利用し、独自に製作している生産用具である。武蔵国府関連遺跡では再利用の紡錘車のみならず、石製をはじめ多数の紡錘車が認められることから、紡織という生産活動に関して、製糸も含めて機織りによる布生産が行なわれていたと考えられる。

小型軽量化という紡錘車に適した素材の変化は、8世紀後半以降、須恵器坏類が大量生産され、須恵器生産の技術革新が行われた結果である。南比企窯の製品は8世紀後半以降、武蔵国の北部を除く地域に拡大していることから、須恵器の供給先や流通経路が大きく変化したことが推定できる。この大量生産の背景には、各集落の須恵器の需要が高まったこと及び、窯の製品を管理し、製品を交易していた地方豪族による活発な経済活動との相互作用によるものと考えられる。こうした須恵器や布の交易に関する事務処理などが、交易拠点としての若葉台遺跡などでは行われていたと考えることができる。

灯火具や紡錘車などの再利用の素材として、須恵器の坏の形状が変化した大量生産の背景には、需要層の拡大が不可欠であり、大量の須恵器を求めることを可能にした地方豪族の経済力の増大が指摘できる。

灯火具としての土器再利用は、集落において従来の仏教、祭祀以外に、間接的ではあるが、交易に関する事務や生産活動など地方豪族層の活発な経済活動との有機的関係が推定できる。即ち、再利用の紡錘車、灯火具、硯は、古代の地方豪族による活発な経済活動である交易活動、布や鉄鑄造をはじめとする手工業生産を中心とする生産活動、広い意味では仏教や祭祀活動も含めた、集落独自の道具の再生産であり、再生産活動の一つと考えられる。この動きは全体からみればわずかではあるが、地方豪族の指向性、合理性を反映し、かつ経済的自立性へと向かう指標として理解することができる（第1図）。

地方豪族の経済的自立性は、8世紀後半以降に顕著になったことが土器の再利用から指摘できる。地方豪族は複合的な経営体として、従来からの布生産、鉄製品の鑄造などの手工業生産及び交易、金融業である私出挙などを行い、律令制のもとでなお独自性を増大させていったと考えられる。

第1図に示すように、古墳時代後期以来の豪族の経済活動は、特に地方では、律令制の導入を一つの契機として、一面では官人として二重構造をもちながら、経済活動を活発化させた。その経済活動とは交易活動、生産活動、消費活動であり、特に交易活動は、律令制によって整備された陸上交通や、庸調物などの物資を運ぶために活発化した水上交通、及び各地方豪族の生産活動の活発化による特産品の交易という相互作用によって一層発展した。

こうした地方豪族における経済活動のなかの再生産活動として、土器再資源化の様態が土器再利用の道具製作であり、道具の再生産といえる。この道具の再生産は、さらに豪族の経済活動を促進することになった。土器再利用の道具製作には、定形硯や定形紡錘車など専用器の不足だけではなく、合理性、指向性という価値観が反映されている。また、この再生産活動の背景、即ち、律令制導入が須恵器の大量生産と伝統的二次加工の技術の使用、及び地方豪族における経済活動活発化の契機の一つであり、土器再資源化の条件であ

ったと認識することができる。

8世紀後半は、こうした社会構造の変化が地方で引き起こされた変動の時代といえる。地方豪族の経済的活動が、律令制という日本の中央集権的古代国家の政治システムを、実質的に変容させる要因の一つになったと考えられる。

第2節 古代における再利用の体系化

第1項 古代の再利用

一般的に古代の遺跡から検出される遺物は、当時どのように使用され、いかなる過程を経て考古遺物となったのか。複雑な過程であったと考えられるが、現在の考古学が素朴で単純なこの疑問に答えを出すことは困難といわざるを得ない。この複雑な様相を捉えるための新しい研究領域と視点の一つが、資源の再利用である。

再利用はあくまでも議論の出発点であり、モノが廃棄・遺棄に至る以前の複雑な人間行動の経緯の一つともいえる。再利用は、複雑に絡み合う様相を動的に描くための分析概念として、位置づけることが可能である。

再利用は、わずかな数量であるため、再利用が行われていたという問題意識と注意深い観察がなければ、資料として報告が行なわれることはない。顕著な再利用については、偶然稀に行われたものであるか、あるいは単に経済的側面や間に合わせとして位置づけられてきた。

消費地における土器を資源とする再利用の主な用途は、灯火具、硯、紡錘車である。これらの事例を分析の対象とすることにより、古代社会において、再利用は細い流れではあるが、モノの再利用を前提とする社会システムであったことが指摘できる。生産から消費という従来の枠組みのみではみえない、各遺跡の性格や社会的動態が、資源の再利用という視点によって明らかになった。

古代の再利用には、資源を合理的に使い分けする使用価値が認められ、単に経済的側面としての節約のみでは、その本質は理解できないといえる。また、土器の再利用の様相は官衙の硯などから、生産基盤の道具の紡錘車に至るまで認められる。再利用することは、特別なことではなく一般的なことであったといえる。土器再利用からは律令制という新たな政治システムと、古代の地域社会の特質及び諸関係について、従来見過ごされていた側面を把握することができる。即ち、単に消費地として考えられていた集落遺跡において、多様な経済活動が行われ、各々特色のある性格を浮かび上がらせることができる。

土器の再利用で新たに作られた道具のなかで灯火具、硯をはじめ、今回は検討していない漆の容器などは、使用の際の付着物や汚れなどを洗浄して落とすことが困難なものである。また、灯火具、硯などの専用器は、様々な事情で数が少なく入手が困難という傾向がある。再利用の素材は、紡錘車には重要な属性としての重量や二次加工がし易いなどの属性をもち、かつ身近なものを選択している。入手、加工が容易で、廃棄が気軽にできるものを選択している。

再利用からは、古代の人々によるモノの合理的な使用の仕方という側面が認められる。消費地で資源として、土器を再利用する古代の人々の積極的な適応戦略が理解できる。再利用を通して、文字には書かれていない古代の地域社会の実態を捉えることが可

能となる。

第2項 資源の再資源化モデル

今回の検討は、消費地における灯火具、硯、紡錘車としての古代の土器について、再利用、廃棄の一端を捉えたにすぎないが、現段階では第2図のように、消費地では土器という資源の重層的な再資源化のモデルを見通しとして提示できる。

さらに、Schiffer や Kopytoff のモデルや動態的概念を援用し、個別の再利用の事例観察によるデータから、複雑な様相の各遺跡や地域の遺物に関するライフヒストリーを積み上げて、関係性の分析を行うことが重要である。即ち、それらの様相を丹念に描くことが、人とモノとの関係について、新たな動態的概念やモデルを構築することへ繋がる。再利用は、各地域の複雑な社会構造の変化を分析するための一つの視点である。

消費地における具体的な供膳具の局面の移行をみると、大多数は供膳具として使用された後、破損して廃棄あるいは遺棄されるという動きである。その一部は、破損後に再利用というライフヒストリーの流れに組み込まれ、灯火具、硯、紡錘車などの用途で、価値のある局面内で新たな道具として使用されるというモノの動態に注目した。

資源の再利用とはモノの再資源化であり、再利用という視点からは、価値あるモノの移動と価値のないモノという二つの大きな局面の間におけるモノの動態、及び流れを概念的に整理することができる（第3図）。再利用においては、価値あるモノの局面内で使用価値が重要となる。また、価値あるモノという同じ局面内での細い流れではあるが、第3の局面として、ストックというモノの在り方を認識することが重要である。

使用・再利用されるモノの一部は、ストック、保管が行われていると考えられる。須恵器の蓋を例にとると、平城京では須恵器の蓋の数が、組み合う坏身に比べてかなり多いことが報告されている。蓋を硯とする再利用は、8世紀代に都城や大宰府など国直轄官衙で特に多く、地方の武蔵国府でも比較的多く認められている。また、7世紀後葉の官衙関連遺跡とも推定されている武蔵国八幡太神南遺跡では、1軒の竪穴住居跡から返りをもつ須恵器の蓋が40点と多数検出されている。蓋と組み合う坏身は少数であるため、供膳具としての使用のみを考えることは困難であり、さらに鈕を欠損するものが認められることから、硯としての再利用の可能性が高い残存形状も含まれている。

7世紀末葉から8世紀初頭にかけて武蔵国では、定形硯の生産が官衙用として開始されるが、生産量は限られたものと考えられる。蓋のストックは、定形硯の供給不足が背景にあると考えられる。したがって、円面硯の入手困難な状況において、地方でも硯として使用可能な器種である須恵器の蓋をストックしていたことが考えられる。もし仮に、供膳具以外の用途として硯などの使用を前提としたストック、保管が行われていないならば、組み合う坏身に比べ蓋の検出数が多いことの説明は困難といえる。こうしたストックは目的をもつ積極的なストックともいえる。

また、このほかに何かに使えるかも知れないという予期によるストック、あるいは、消極的なストックとも呼ぶことができる様態が考えられる。ストックする時点では使用目的は明確ではないが、価値があると判断してストック・保管する。遺跡ではこの2種類の様態が混在して、同じ状態で検出されることが多いため、ストックが行われていたかどうか

を、考古学の遺物から判断することが困難となっている。

モノに価値があることというのは、使用価値または交換価値、象徴的価値があることを含む。しかし、本論で価値という場合は、使用価値に重点をおく。価値のある局面は既述の通り、三番目の局面として具体的な使用、再利用が保留状態という、曖昧な状態のストックや保管という局面は小規模ではあるが、三番目の局面として区分できる。したがってストックや保管という局面は、価値あるモノの一部に含まれる。

価値のあるモノのなかには①使用・再利用・再使用、②ストック・保管という2つの局面が認められ、さらに③価値のないモノである廃棄物という局面（第3図）に整理できる。局面間のモノの移行概念図である第3図において、①と③の局面間のモノの流れを具体的に表したものが第2図といえる。

モノの流れという側面からみると、大きな流れとして、モノは価値のある局面から価値のない局面へと移動する。その中で再利用とは、全体の流れからみると細い流れではあるが、使用の後に廃棄・遺棄へと移動する直前で、使用価値が再び付加される逆方向の流れである。この意味では、単なる揺らぎではない動態過程として捉えることができる。そして、ストックや保管という三番目の局面への細い流れも認められる。

また、この3つの局面は、主に消費地における消費活動に認められるが、使用・再利用、及びストックへの移行のなかで二次加工が施され、再利用される場合は、いわば消費活動のなかの生産活動と位置づけられる。即ち、再利用は消費活動の一部であり、同時に重層的に認められる再生産活動ともいえる。消費地を中心に具体的な再利用の用途から、モノの流れを概念図として表したものが第2図であり、重層的な資源の循環過程として捉えることができる。

この局面間には時差が生じる場合がある。即ち、ストックの局面では再利用されるものもあれば、ある一定期間のストックの後に、価値のないものとして廃棄されることも当然ある。したがって、価値あるものから廃棄物へと移行するモノに比べれば、ストックされるものはわずかな量であり一時的であるが、ストックの局面への移行によって、時間差が生じる場合がある。ごくわずかな場合は、ほかの土器との型式差がなく、ストック・保管されたかどうか見分けられない程の時間差であるが、長期に亘ると時期差を生じる。

既述のとおり、ストックや保管という局面に移行したモノの中には、再利用されずにそのまま価値のないものへと移動する流れもある。逆に、価値のないモノから価値のあるモノへ移行する流れがあり収集行動としたが、廃棄物漁りの **scavenging** などを含んでいる（第3図）。

この局面間を移行する流れの全てには、そのモノがもつ属性に対して、社会的文化的価値観、即ち、個人と集団及び組織による価値観というフィルターが存在がある。このフィルターによって、モノの属性が価値あるものか否かが選別される。このうち、価値が不明瞭で曖昧な状態のストックや保管という局面は、一種の「資源」として、価値のないモノは「廃棄物」という用語に置き換えることが可能である。この廃棄物は考古遺物へと移行する。

また、価値のある局面から、ストックや価値のないものへという局面への移行には、完形のまま、あるいは破損や磨耗という形状の変化を伴う場合がある。打ち欠きや削りなどの二次加工が施されたもののなかには、わずかな期間であってもストックや保管の

局面を経て、再利用され廃棄物へと移行するモノの可能性が推定できる。ストックや保管の可能性を考えることが考古学にとっては新たな局面となる。

第3項 モノの局面間の移動

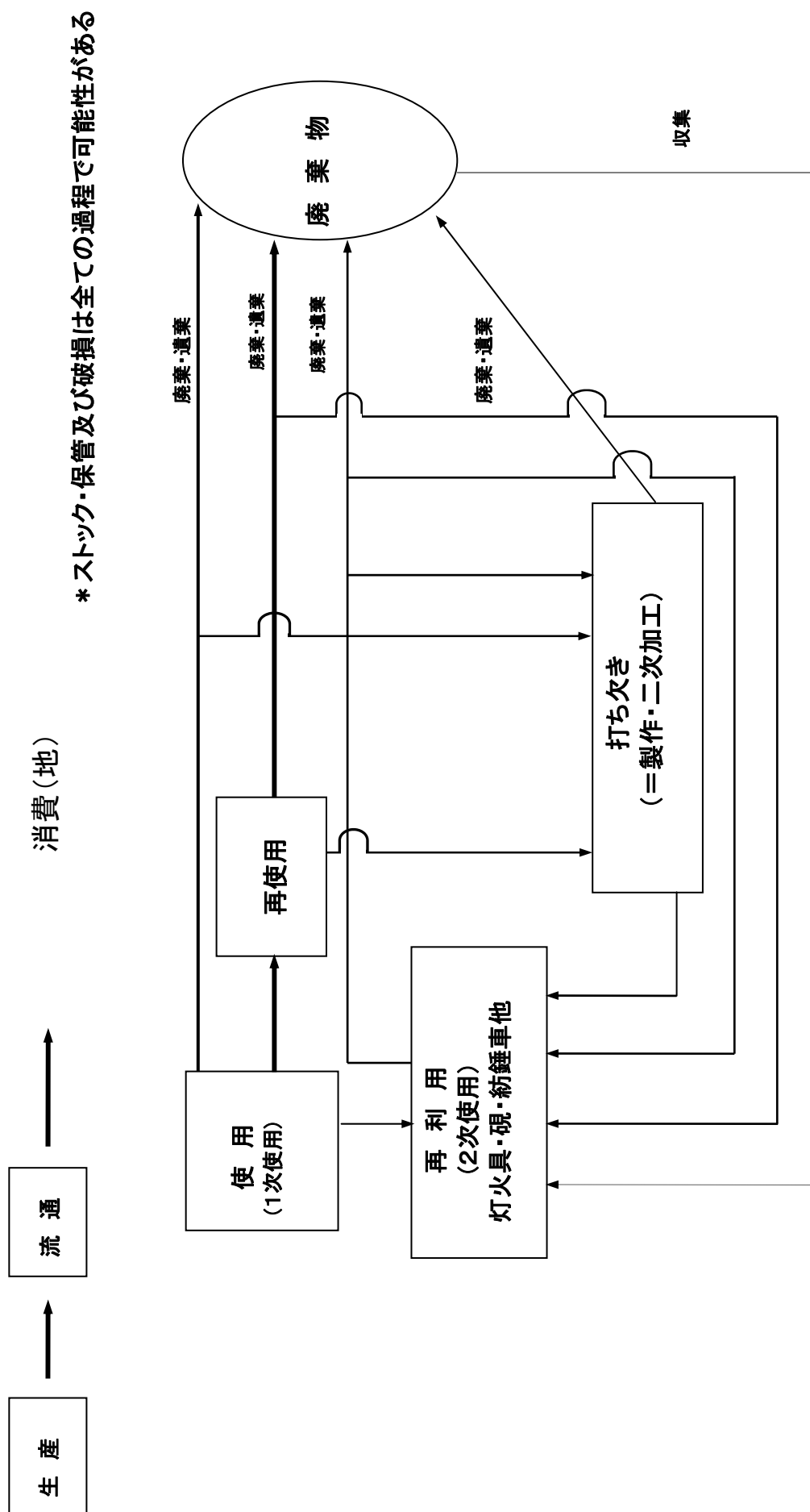
具体的にモノの局面間の移動についてみてゆく（第3図）。例えば、須恵器の坏では多くの場合、価値ある局面で供膳具として使用された後、破損し廃棄へと移行する。一部はストックの局面へ移行し、打ち欠き、穿孔という二次加工を経て、硯、灯火具、紡錘車として使用価値が付加され、再利用されるものがある（第2図）。灯火具のとしての再利用は、獲得、生産、消費などライフヒストリーのなかでは、最終的な段階であり、廃棄直前の使用である。即ち、灯火具として再利用された坏類のなかには、はじめに、供膳具として使用され、破損後、打ち欠きなどの二次加工が施されて、さらに硯として再利用され、その後、灯火具に再度、再利用されたものも認められる。こうして、最終的に使用価値のない廃棄の局面へと移る場合がある。この他にも、供膳具として使用された後に破損して、そのままストックから廃棄・遺棄されるという場合もある。これらの多様な局面間の移動を追跡して分類し、積み上げる作業が必要である。この基礎的作業が本論で採った方法である。即ち、残存した土器についての形状分類であり、付着物の観察、及び使用痕の観察である。こうした分類によるデータの積み重ねを数量的に把握することが、再利用の特徴と傾向を考察することに繋がるのである。

何が価値をもつのか、本来そのモノがもつ多面的価値を発見し、評価することは個人と集団であり、モノからみれば、外側から価値が付与されることである。モノに対して価値が外側から付与されるとは、文化や社会の脈絡における位置づけといえる。また、モノに謂われや由来が付帯することで、威信財やレガリア[山本 2003]など明確な象徴的価値をもつモノへと変化することもあるが、考古学にとっては分析することが困難な部分である。

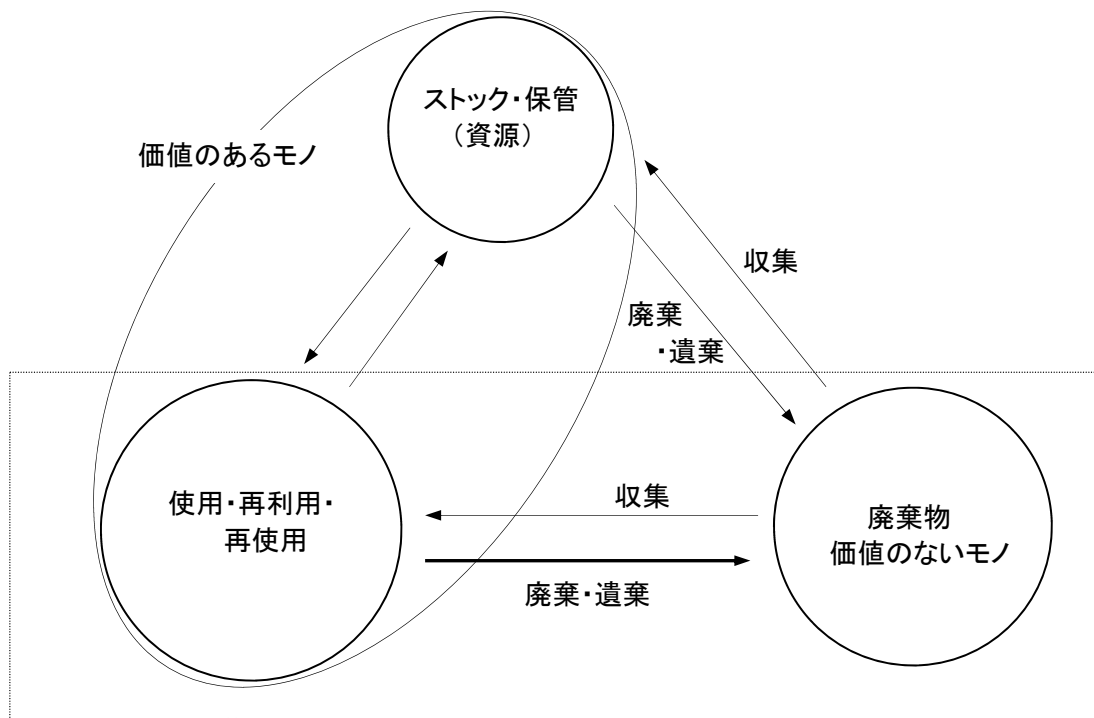
現在のところ再利用は、主に使用価値の側面が重要であり、今後、再利用の用途については、祭祀を含めた象徴的な価値についても分析する必要がある。現状では課題といえる。

前述した Kopytoff の「事物の文化的履歴」という、モノが人々の間を往来し、その文化的な意味を変えてゆくことをライフヒストリーとして迎える視点が研究の基礎となる。また、Appadurai によるモノが局面を出入することで価値が変化するという動態的過程を基礎とする視点から、モノと人との関係を軸とする研究を行うことが重要である。

Kopytoff の動態的な概念や、Schiffer の遺跡形成におけるモデルを基礎に、日本考古学における個別の事例観察と分類によるデータから、複雑な様相の各遺跡や地域の遺物に関するライフヒストリーを積み上げ、その様相を丹念に描き、人とモノとの関係について、新たな動態的概念やモデルを構築することが必要である。その結果として、古代社会においては、各地域固有の複雑なモノの使用のされ方を分析し、検討を行うことに繋がる。再利用という概念を加えることにより、中央体制の視点から描かれ文献史料を使用した、画一的な社会構造のモデルに考古資料をあてはめるのではなく、社会構造の変化、即ち、人と社会変化のメカニズムを捉えることが可能となる。



第2図 消費地における土器再資源化の流れ(概念図)



第3図 局面間のモノの移行概念図

第7章 結論

古代の土器再利用の研究は、消費地である集落における土器の再資源化の究明であるといえる。再資源化の過程でモノが廃棄・遺棄に至るまでの使用のされ方、即ち、モノと人との関係をみることが重要な視点の一つとなる。

本論の研究目的は第1章で述べた通り、次の3点であった。①古代社会における土器再利用の実態を把握し、再利用の意義を認識すること、②日本の考古学における再利用の意味を検討すること、③この研究を通して、現代社会における再利用研究の意義について考察することである。

古代における再利用の実態を捉えるため、考古学的分類手法として残存形状のタイプ分類及び、付着物からのアプローチによって、数量的な把握を行った。残存形状や付着物は、再利用の用途を特定するための重要な使用・再利用の痕跡である。

特に奈良時代・平安時代について考古学におけるモノの静態的な分析に対して、モノの文化的履歴に着目し、モノが人々の間を往来し、文化的、さらに、社会的な意味を変えてゆくという「ものの来歴」による新たな動態的分析を基礎とする、ライフヒストリーの視点からの分析の重要性を指摘して、実際に分析を試みた。

再利用が行われた背景として、専用器の有無や入手のし易さ、及び専用器の不足があり、再利用は専用器の補完や一時的という側面は否定できない。したがって、再利用の研究では、その用途の専用器や使用について研究史や問題点を整理し、専用器を含めた全体の脈絡のなかで関係性を把握することが必要となる。

再利用の実態を把握するため、第2章では残存する形状に対して、形状タイプ分類と主に黒色付着物による分類方法を提示した。関東地方の古代武蔵国を中心にして、第3章以降では、消費地の集落から出土する供膳具である須恵器・土師器の坏類、蓋類などを対象にして用途の特定を行い、定量分析を行った。

第3章では土器再利用の用途のうち、付着物から判明する用途である灯火具に関して、具体的な使用の復元と、その使用目的が従来の祭祀、仏教関連のみではなく、経済活動に関する使用について指摘した。同様に第4章では、律令制の導入整備において、再利用硯は中央及び地方官衙において、実用の硯として使用することが前提であったことを指摘した。また、地域によって再利用硯に対する指向性に違いがあることを明らかにし、地域の交易などで核となる集落において、再利用硯の出土が多いことを考察した。

第5章では再利用の紡錘車が8世紀後半の紡織の発展期に出現し、経済的側面のみでは一括することができない再利用紡錘車への指向性と、また、東国の手工業生産や交易において、必ずしも地方官衙中心とはいえない地域経済ネットワークが存在することを指摘した。さらに、再利用が日本に限らず、どの地域と時代、及び社会においても研究テーマとなる一例として、韓半島南部の瓦再利用紡錘車、円形土製品を分析対象として、その実態の一端を把握した。

東国社会を中心とした再利用の事例ではあるが、灯火具、硯、紡錘車という再利用の道具の再生産という点から、律令制における地方豪族の多様で活発な交易活動、生産活動、及び消費活動の様相が推定できることが明らかになった。また、土器の再利用という視点

からは、主に税を徴収する側面から考えられていた地方の経済活動や、単に消費地としてしかみることができなかった集落遺跡を地方豪族の多彩な経済活動の場として、把握することを可能にした。

再利用の道具や再利用の使用の在り方そのものに、古代社会における人々の使用価値、モノに対する価値観が反映されていることが理解できる。古代における再利用には、主に使用価値という脈絡のなかで、消費地において資源を合理的に使い分けする様態が認められる。単に節約など経済的側面としての価値ではなく、古代における使用価値を反映した人々のモノの使い分けが理解できる。再利用はどの時代と地域社会においても、その当時の人間の行動を考究するために有効なアプローチの一つである。分析対象となった再利用の用途の特定事例は数少ないが、日本の古代においては、社会の上部構造である官衙の硯から、生産基盤の紡錘車に至るまでの土器の再利用が行われ、再利用が特別な行為ではなく、再利用を行うことを前提とする社会であったことが提示できた。再利用は古代社会において全体からみればわずかではあるが、基本的なモノの使われ方の一つであり、再利用を行うことはむしろ一般的なことであったといえる。

考古学において消費地でのモノの動態過程を分析するためには、新たな研究領域として、廃棄との関係も含めた資源としての再利用に関する考察を進めることが必要である。そのため、①使用・再利用、②廃棄物のほかに、第3の局面として③再利用に重要な意味をもつストック・管理を指摘し、3つの局面で概念的整理を行い考察した。即ち、再利用を考察するには、モノのストック・管理という新たな局面を設定することが必要である。考古学では、伝世という長期間のストックという枠組みで一括されてきたが、モノの動態過程において、短期間のストック・管理に関しても注目する必要がある。ストック及び管理には時間差が発生する。なぜこのモノが使用・再利用あるいはストックされ、ほかのモノが廃棄されるかについて議論を深めるため、使用価値を中心に「価値あるモノ」「価値のないモノ」という概念を示し、再利用の背景として価値観の重要性を提示した。また、再利用には適した素材の存在が必要条件となる。

再利用は、古代の人々の資源有効利用という、適応戦略の一つとしても位置づけられる。供膳具である土器再利用の用途として扱った灯火具、硯、紡錘車の事例は、基本的に個別研究として終始していたものであったが、再利用という概念の導入により、古代社会における人とモノとの有機的な関係をもつ研究として結びつけることができた。

また、各地域の律令制という古代の政治システムに対する適応戦略として、土器再利用の意義と各地域における適応の違い、及びその背景にある価値観の違いが明確になった。さらに、土器再利用の用途である灯火具、硯、紡錘車を分析することは、独自の道具の再生産活動として、中央体制による文献史料では知ることのできない地方豪族の活発な経済活動についての考察に繋がり、地方の律令制の実態を把握し、社会構造の変容を起こす要因の一つとして認識することができた。

土器の再利用は、集落という消費地において、土器を素材として新たに必要な道具の生産を行い、資源として再利用するという、古代の人々の積極的で合理的な地域における適応戦略などの違いを読み取ることができる。そして、地域社会が新たな政治体制である律令制に戦略的に適応し、変容する胎動を捉えることを可能にした。

土器再利用の技術的背景には、古墳時代後期以来の技術伝承として位置づけることが可

能な剥離技術、打ち欠きのための技術が存在している。即ち、再利用とは消費地において、土器などを資源として認識したうえでストックを行い、伝統ともいえる技術を必要に応じて使用し製作した新たな道具作りであり、それらが再資源化の様態である。そこには文化的社会的に形成された人々の価値観が反映されていると考えられる。

具体的に考古学遺物において、いかにストック・管理の遺物を認識するかについて見通しを示したい。

ストック・管理されたと考えられる遺物は時間差が生じることを示している。この時間差を遺物から考古学的手法で把握するためには、日本考古学の方法論である遺物の型式学的検討を行うことが、現段階では有効な手法の一つである。各遺物の前後関係を型式学的方法から把握し、分類を積み重ねることにより、各遺構での出土状況に関わらず、時期差を把握することが可能となる。

土器の再利用からは、地域社会の資源の具体的状況に適応する合理性と指向性が認められる。即ち、再利用の使用の在り方そのものに、古代社会における人々の使用価値、モノに対する共通性と差異が認められるのである。

従来、単に節約など経済的側面や間に合わせとして位置づけられてきた、土器の再利用を分析の対象とすることにより、モノの再利用が古代社会に組み込まれた様相を浮かび上がらせる。資源の再利用という視点から改めて考古資料を再検討することにより、従来の画一的で、静態的な古代社会とは異なる複雑で動態的な古代社会像を描くことが可能となる。

再利用の研究は、土器には限定されない。建築部材など耐久消費財については、一般的に再利用が行われていることが比較的多いと考えられている。今回検討した再利用の用途以外にも多数の再利用が行われていたと考えられ、消費財の土器においても同様に扱うことができる。

本稿では幾つかの遺跡で、全ての対象となる主に土器の坏類の形状や付着物の観察を行ったが、他の遺跡において同様な観察を行うことは、現状では物理的に困難である。特定の再利用の用途について、特徴的な残存形状と付着物との関係性の提示を行ったが、さらに、再利用の観察とその用途に適した効率のよい方法を確立する必要がある。また、基本的には坏類を主な観察対象とし、貯蔵具の再利用についてはわずかにふれたのみであった。破片の再利用という点では、坏類以上に多様な再利用の用途が推定できる貯蔵具の再利用は、今後の課題の一つである。

再利用の実態を把握する方法として、本稿で行った付着物の観察の方法は有効ではあるが、限界があることは否めない。その理由としては、土器再利用の具体的な復元を行うためには、物理的な側面である使用痕跡を現代から古代へ逆に辿る際に様々な制約がある点である。付着物に関しては、遺物として発掘調査された後にも、現代の我々の手に触れるまでには、洗い過ぎによる剥落、損失など様々な影響がある。また、付着物などの観察は経験的なものであり、一定の誤差が生じていることは否めず、大要としての傾向を掴んだに過ぎないともいえる。今後、再利用の付着物について、理化学分析など限界を踏まえたうえで、多様な方法を組み合わせて行うことが必要である。

本論は、古代社会の経済活動と土器の再利用に重点をおいた考察であったが、今後は祭祀と土器の再利用の関係についても、改めて研究を進める必要がある。従来、考古学にお

いて用途や性格が不明のものは、祭祀と結びつけて説明された傾向がある。特に灯火具としての再利用については、祭祀、仏教行事以外の経済活動との関連について指摘した論考はほとんどない。確かに灯火具は当時の人々の活動に関しては間接的な道具であり、その活動を特定することは困難がある。しかし、祭祀や仏教行事を消費活動の一部として位置づけたうえで、灯火具としての再利用を検討する必要がある。これにより改めて、灯火具と祭祀及び仏教行事との関連を考察することが可能になるばかりでなく、古代の人々の社会や生活の復元へと繋がる。

再利用の研究は時代、地域社会を越えた共通する課題と理論である。一方、再利用の研究には個別の時代、地域に特徴的な課題もある。本稿では、時代、地域に共通する再利用の研究においては不十分ではあるが、ストックという局面、及び価値観について考察を行った。個別の時代、地域の再利用については、各地域の律令制への戦略的適応の一つであり、価値観が反映されていること、さらに土器の再利用から律令制を中心とした地方豪族の経済活動が社会の変容へと繋がったことを明らかにし、文字では書かれていない古代社会の変容を捉えることができた。また、この時代にもわずかな流れではあるが、再利用が社会のシステムとして組み込まれていたことが明らかになった。

考古学は過去の古い事柄を扱う学問として、一般的には考えられる傾向が強い。一定の制約はあるが、社会の構造や現象を説明するための共通する法則や原理を見つめるための一助として、また、古代の人々の知恵を汲み取り、活かすための学としての意義を現代の考古学は問われている。この課題に答えるための一つが、再利用の研究であると考えている。再利用は、全体からみれば細い流れであるが、古代において再資源化のシステムが社会に組み込まれていたことを指摘できる。古代と現代社会の再資源化の目的やその具体的な方法は異なるが、再資源化を生活や社会において基本的に組み込み、多様な環境への変化に対応する適応戦略とすることが重要であることを指摘できる。

また、再利用のシステムを構築していくために、個人の価値観を含め、社会全体の価値観を転換することが重要な鍵であるといえる。即ち、古代社会において、土器や様々なものの再利用が「あたりまえのこと」であったように、現代社会においても、資源の再利用が同様に「あたりまえのこと」になるための社会システム作りに、わずかながらも考古学からの提言ができると考えている。

今回の研究は、限られた方法で、研究対象も狭い分野であったが、再利用は時代を超えた考古学の課題の一つとして、今後、研究を行うことの意義を強調したい。

引用参考文献

<日本語文>

- 阿子島香 1983 「ミドルレンジセオリー」 『考古学論叢』 I 芹沢長介先生還暦記念論文刊行会
- 荒井健治 2006 「堅穴建物と「刀筆の吏」」 『考古学の諸相 II』 坂詰秀一先生古稀記念会
- 荒井秀規 2006 「文献から見た土器の流通—商品としての須恵器—」 『古代武蔵国の須恵器流通と社会』
- 荒木志伸 1999 「墨書土器にみえる諸痕跡について」 『お茶の水史学』 第 43 号
- 安斎正人 1995 『無文字社会の考古学』 六一書房
- 安斎正人 2004 「システム」 『現代考古学事典』 同成社
- 井川達雄 1991 「黒井峰遺跡出土の土師器・須恵器について」 『黒井峰遺跡』 子持村教育委員会
- 生田和宏 2003 「城柵官衙遺跡における陶硯の様相—多賀城を中心として—」 『古代の陶硯をめぐる諸問題』 奈良文化財研究所
- 石橋茂登 2004 「飛鳥藤原の円板」 『奈良文化財研究所紀要』 奈良文化財研究所
- 石井則孝 1980 「日本古代文房具史の一面—陶硯について—」 『古代探叢 滝口宏先生古稀記念論集』 早大出版会
- 石井則孝 1985 『陶硯』 ニューサイエンス社
- 板谷桃代 2005 「古代における硯の使用痕について」 『淡海文化財論叢』 淡海文化財論叢刊行会
- 糸川道行 2004 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVI—印西市船尾白幡遺跡—』 千葉県文化財センター
- 糸川道行・香取正彦他 2005 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVII—印西市船尾白幡遺跡II—』 千葉県文化財センター
- 井上尚明 2004 「古代の市を探る」 『原始・古代日本の集落』 同成社
- 入間の古代を考える会 2008 「資料編」 『論叢古代武蔵国入間郡家—多角的視点からの考察』
- 内堀基光 2007 「序—資源をめぐる問題群の構成」 『資源人類学』 弘文堂
- 乾哲也 1996 「和泉・万町遺跡の陶硯」 『酒詰秀一先生還暦記念考古学の諸相』 酒詰秀一先生還暦記念会
- 江口桂 1999 「国府の民とひろがり武蔵国」 『幻の国府を掘る—東国の歩みから—』 雄山閣
- 江口桂 2002 「武蔵国府関連遺跡出土墨書土器の基礎的検討」 『府中市郷土の森博物館紀要』 第 15 号 府中市郷土の森博物館
- 江口桂 2008 「古代武蔵国府域の空間構成—円面硯・畿内産土師器・須恵器盤類の検討から—」 『多知波奈の考古学』
- 江戸東京博物館 1995 『明かりの今昔』
- 大阪府弥生文化博物館 1993 「身の回りの品々」 『弥生人の見た楽浪文化』
- 大川原竜一・黒済玉恵 2009 「資料紹介：川越市仲遺跡出土刻書紡錘車の調査」 『古代学研究所紀要』 明治大学古代学研究所第 10 号
- 太田英蔵 1951 「古代中国の機織技術」 『史林』 第 34 卷 1・2 合併号 史学研究会
- 大谷徹 1998 「(4) 石製品 a 紡錘車」 『新屋敷遺跡 D 区』 第 194 集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大橋泰夫 2001 「下野国分寺跡・南大門出土瓦の分析」 『研究紀要』 第 9 号 (財) とちぎ生涯学習文化財団
- 小笠原好彦 1970 「縄文・弥生式時代の布」 『考古学研究』 第 17 卷第 3 号

- 小笠原好彦 1983「編物・布」『縄文文化の研究』第7巻雄山閣
- 岡村吉右衛門 1977『日本原始織物の研究』文化出版局
- 小川望 2001「灯火具 1 油皿」『図説江戸考古学研究事典』柏書房
- 小川望 2003「遺跡からみた江戸のゴミ」『遺跡からみた江戸のゴミ』
- 尾形充彦 1999「裂地としてみた正倉院の調範」『正倉院紀要』第21号宮内庁正倉院事務所
- 小田亮 2005「ありあわせの素材を当面の目的に合わせて用いること」2 特集ブリコラージュ 国立民族学博物館
- 小田和利 2003A「大宰府政庁における土器転用硯のあり方」『水野正好先生古稀記念論文集 続文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 小田和利 2003B「地方官衙と陶硯—大宰府跡出土例を中心として—」『古代の陶硯をめぐる諸問題—地方における文書行政をめぐって—』奈良文化財研究所,
- 小野正敏 1992「遺跡出土の中世陶器・土器からみた油の研究」『研究助成 2』味の素食の文化センター
- 加賀ひろ子 1969「漁村における麻糸撚りの技術」『神奈川県立博物館研究報告』第2号
- 加藤恭朗 2006「武蔵国における中核窯の流通とその実態—南比企窯跡・東金子窯跡—」『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古学会
- 角南聡一郎 2005「古墳副葬・供献紡錘車の研究—近畿地方を中心に—」『井ノ内稲荷塚の研究』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団
- 兼康保明 1993「中・近世の小型円板とその用途」『考古学叢考 中巻』吉川弘文館
- 川越市立博物館 1995『川越学事始め～郷土史の系譜を追う～』
- 川畑誠 1999「須恵器貯蔵具の消費痕跡試論—使用実態の復元に向けて—」『北陸古代土器研究』8号北陸古代土器研究会
- 北野博司 2004「陶硯の使用実態を考える—多賀城政庁跡出土陶硯を中心に—」『第2回東北文字資料研究会資料』
- 北野博司 2005「4 文房具」『文字と古代日本』2 吉川弘文館
- 北野博司 2006「硯を研ぐ」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房
- 桐生直彦 2006『考古学の原点—遺物出土状態の分析集—』六一書房
- 朽木量 2001「物質文化研究における「領有／流用」概念の展開—墓標形態・図案に見る折衷・転用—」『メタ・アーケオロジー』3号メタ・アーケオロジー研究会
- 國下多美樹 1988「京都府下の紡錘車について」『京都考古』京都考古刊行会第50号
- 黒須亜希子 2005「茄子作遺跡出土の木製品について」『大阪府文化財研究』27 大阪府文化財センター
- (財) クリーンジャパンセンター2002『循環型社会キーワード』
- 後藤明 1998「1. 遺跡の形成過程〔1〕考古学的組成の民族考古学的考察」『民族考古学序説』同成社
- 後藤明 2001『民族考古学』勉誠出版
- 小林謙一 2003「江戸遺跡における廃棄研究—廃棄遺構・廃棄の場の検討—」『遺跡からみた江戸のゴミ』
- 小林謙一 2006「AMS14C年代測定を利用した縄文セツルメントのライフサイクルの研究」山梨考古学協会 2006年度研究集会「縄文集落を分析する」資料集
- 小林克 1994「近世照明具の研究と課題—伝世資料の比較から—」『東京考古』12 東京考古談話会

- 小林達雄 1965『米島貝塚』昭和町教育委員会
- 小林正史他 2002「脂質組成からみた中世から近世への灯明油の変化『人類史研究』Vol. 13 人類学会
- 小林行雄 1962『古代の技術』塙書房
- ケヴィン・リンチ 1994『廃棄の分化誌ーゴミと資源のあいだー』工作舎
- 国立歴史民俗博物館 1989『暮らしの中の灯火』
- 国立民族学博物館 2005 月刊『みんぱく特集ゴミの輪郭』3
- 五島美術館 1978『日本の陶硯』
- 湖中真哉 2006『牧畜二重経済の人類学 ケニヤ・サンプルの民族誌的研究』世界思想社
- 湖中真哉 2007「小生産物(商品)の微細なグローバリゼーション」『躍動する小生産物 資源人類学 4』弘文堂
- 埼玉考古学会 2006「資料編」『古代武蔵国の須恵器流通と社会』
- 埼玉考古学会他 2008『第 41 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
- 酒井清治 1993「武蔵国内の東山道について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 50 集
- 柴原永遠男 1992「奈良時代の遠距離交易」『奈良時代流通経済史の研究』塙書房
- 坂戸市教育委員会 2005『埋文さかど年報(平成 15 年度)』
- 桜井準也 2002「近世・近代考古学と生活財研究ー遺物組成と使用期間の問題をめぐってー」『民族考古』6
- 笹森健一他 1986 特別展「あかり」上福岡市立歴史民俗資料館
- 榊莫山 1998『文房四宝 硯の話』角川書店
- 桜井久之 1993「第 2 節古墳時代の算盤玉形紡錘車ー近畿地方出土例の検討ー」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書VI』大阪市文化財協会
- 佐藤浩司 1993「墨書土器、ヘラ書き土器と硯に関する一考察ー律令時代の豊前地域と大宰府を中心としてー」『古文化談叢』第 30 集九州古文化研究会
- 佐藤信 2002「地方官衙と在地の社会」『律令国家と天平文化』(日本の時代史 4)吉川弘文館
- 佐藤信 2007『古代の地方官衙と社会』山川出版社
- 佐原眞 1974「二、土製品」『紫雲出』詫間文化財保護委員会
- 佐原眞 1979「手から道具へ石から鉄へ」『図説日本文化の歴史』1 先史・原史 小学館
- 澤田敦 2003「石器のライフヒストリー研究と使用痕」『古代』早稲田大学考古学会
- 沢田むつ代 2001『上代裂集成ー古墳出土の繊維製品から法隆寺・正倉院裂まで』中央公論美術出版
- 沢田むつ代 2005「出土繊維の記録法」『季刊考古学』第 91 号雄山閣
- 山東省博物館他 1985『山東漢画像石選集』齊魯出版社
- 静岡県考古学会 2005『静岡県考古学会シンポジウム 静岡県における原史・古代の木製祭祀具』(株)出版科学総合研究所 1985『朝鮮考古資料集成 補巻 1』
- 神野恵・川越俊一 2003「平城京出土の陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 杉本宏 1987「飛鳥時代初期の陶硯ー宇治集上り瓦窯後出土陶硯を中心としてー」『考古学雑誌』7 巻第 2 号
- 鈴木敏則 1999「遠江における原始・古代の紡織具」『浜松市館報』第 12 号
- 鈴木康之 2002「考古資料からみた中世集落における消費活動 草戸千軒遺跡における資料形成過程の分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 92 集
- 滝澤亮 1985「古代東国における鉄製紡錘車の研究ー海道諸国の集落例を中心としてー」『物質文化』

44 物質文化研究会

- 高井剛 1999 「3 紡錘車」 『清水内遺跡－6・8・9 区調査報告第1冊』郡山市教育委員会
- 高久健二 2007 「北武蔵における古墳時代の集落動態と外来系文化の定着過程について－中期～後期前半における竈の定着過程と器種構成変化の分析を中心に－」 『韓日聚落研究の現況と課題（Ⅲ）』 韓日聚落研究会
- 高島英之 2006 「第二章古代の墨書・刻書の紡錘車－上野国域内出土資料の検討を中心に－」 『古代東国地域史と出土文字資料』 東京堂出版
- 竹内晶子 1989 『弥生の布を織る－機織の考古学－』 東京大学出版会
- 巽淳一郎 2004 「陶製の枡・油杯」 『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』 奈良文化財研究所
- 巽淳一郎 2004 「Ⅰ－6 紙・筆・墨・硯」 『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』 奈良文化財研究所
- 田所真 2006 「律令制成立期の須恵器の系譜」 『東国の須恵器』 古代生産史研究会
- 田中広明 2006 『国司の館』 学生社
- 田中広明 2007 「古代の官衙や集落と陶硯」 『研究紀要』 第22号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 千葉県教育振興財団 2006 「房総における郡衙遺跡の諸問題－下総国を中心として－」 『研究紀要25』
- 玉田芳英 1995 「漆付着土器の研究」 『文化財論叢Ⅱ』 奈良国立文化財研究所
- 中鉢正美編 1986 『生活学の方法』 ドメス出版
- 角山幸洋 1968 『日本染色発達史』 田畑書店
- 角山幸洋 1983 『日本の織機』 『講座日本技術の社会史 第三巻紡織』 日本評論社
- 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 2003 『律令国家の誕生と下野国－変革の7世紀社会』
- 富田和夫 2002 「飛鳥・奈良時代の官衙と土器」 『坂東の古代官衙と人々の交流』 埼玉考古学会
- 鳥羽英継 2001 「古代のあかり－長野県内出土、古代の灯明具の分析」 『長野県考古学会誌』 長野県考古学会
- 津野仁 1991 「栃木県出土の古代灯明具について」 『栃木県考古学会誌』 第13集 栃木県考古学会
- 豊島雪絵 2001 「古墳時代における石製紡錘車の性格－中国・近畿地方出土例を中心に－」 『古代古備』 第23号
- 内藤政恒 1944 『本邦古硯考』 養徳社
- 内藤政恒 1964 「須恵器利用の硯について」 『考古学雑誌』 50巻第1号
- 長崎元広 1978 「縄文の紡錘車－有孔円板の用途と意義－」 『長野県考古学会誌』 32
- 中沢悟・春山秀幸・関口幸一 1988 「古代布生産と在地社会－矢田遺跡出土の紡錘車の分析を通して－」 『群馬の考古学』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中沢悟 1996A 「紡錘車の基礎研究(1)」 『研究紀要』 13 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中沢悟 1996B 「紡錘車の基礎研究(2)」 『専修考古』 専修大学考古学会
- 中沢悟 1997A 「第5節群馬県内出土紡錘車の編年」 『矢田遺跡Ⅶ』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中沢悟 1997B 「附表群馬県内出土の紡錘車一覧表」 『矢田遺跡Ⅶ』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中間研志 1985 「2. 紡錘車の研究－我国稲作農耕文化の一要因としての紡織技術の展開－」 『石曲り田遺跡Ⅲ』 福岡県教育委員会
- 檜崎彰一 1981 「日本古代の陶硯－特に分類について－」 『考古学論考小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社
- 中野益男 1989 「残留脂肪酸による古代復元」 『新しい研究法は考古学に何をもたらしたか』 クバブ

ロ

- 永嶋正春 1995A「土器内の黒色付着物について」『武蔵国府関連調査報告』第4節日本製鋼所遺跡調査会
- 永嶋正春 2006「縄文・弥生時代の漆研究の現状」季刊『考古学』第95号雄山閣
- 永原慶二 2004『苧麻・絹・木綿の社会史』吉川弘文館
- 奈良文化財研究所 2007『古代豪族居宅の構造と機能』
- 中山学 1998「広島県内出土の滑石製鋸歯文紡錘車について」『文化財論究』第1集東広島市教育文化振興事業団
- 西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社
- 西秋良宏 1994「旧石器時代における遺棄・廃棄行動と民族誌モデル」『先史考古学研究』3
- 西秋良宏 1995「放棄行動に関する最近の考古学的研究」『東海大学校地内遺跡調査団報告』第5号（財）日本のあかり博物館 1997『あかり』
- 西口寿生 2003「畿内における陶硯の出現と普及」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 西谷正 1983「伽耶地域と北部九州」『九州歴史資料館十周年記念大宰府古文化論叢』上巻吉川弘文館
- 布目順郎 1979『養蚕の起源と古代絹』雄山閣
- 布目順郎 1988『絹と布の考古学』雄山閣
- 野田憲一郎・江口桂 2006「武蔵国府出土土器群の再検討」『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古学会
- 橋口達也 1982「甘木・朝倉地方を中心としてみた陶質土器・初期須恵器資料」『古寺墳墓群』甘木市教育委員会
- 春山秀幸 1990「矢田遺跡出土の紡錘車から」『矢田遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂野千登勢 1992「(2)上谷遺跡の出土遺物」『坂戸市史 古代史料編』坂戸市教育委員会
- 坂野千登勢 2005「再利用された土器群の考察」『若葉台遺跡発掘調査報告書』VI坂戸市教育委員会
- 坂野千登勢 2008A「古代における土器の再利用—灯火具を中心とする様相—」『考古学雑誌』第92巻第4号
- 坂野千登勢 2008B「古代武蔵国の陶硯に関する考察—定形硯と再利用硯—」論叢『古代武蔵国入間郡家—多角的視点からの考察』古代の入間を考える会
- 坂野千登勢 2009「古代武蔵国の紡織に関する考察—鉄製と再利用の紡錘車—」論叢『古代武蔵国入間郡家—多角的視点からの考察』II 古代の入間を考える会
- 坂野千登勢 (2010年6月発行予定)「日韓紡錘車考」『東亜文化』第8号東亜細亜文化財研究院
- 坂野和信 1982「北武蔵における古代瓦の変遷」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県史編さん室
- 坂野和信 1997「日本仏教導入期の特質と東国社会」『埼玉考古』第33号埼玉考古学会
- 坂野和信 2003「平安時代の施釉陶器編年」『市原市稲荷台遺跡』市原市教育委員会
- 坂野和信 2007『古墳時代の土器と社会構造』雄山閣
- 東村純子 2004「古代日本の紡織体制—杼・認め・糸杼の分析から—」『史林』第87巻5号史学研究会
- 東村純子 2005「律令国家形成期における鉄製紡錘車の導入と紡織体制」『洛北史学』洛北史学会
- 東村純子 2006「3-3 紡錘の機能と使用方法についての諸問題」『日本出土原始古代繊維製品の分析調査による発展的研究』平成14年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(A)
- 東村純子 2007「(13)輪状式の原始機—上細井稲荷山古墳出土の石製祭器の再検討—」『日本考古学

協会第 73 回総会研究発表要旨』

- 東村純子 2008A「輪状原始機の研究」『古代文化』古代学協会
- 東村純子 2008B「東アジアにおける機織技術の原初形態」『日本考古学協会第 74 回総会研究発表要旨』
- 菱田哲郎 2007『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 平川南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 平川南 2003「第 1 章木簡総論」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館
- 平川南 2005「総説 伝達・記録方法と外交・軍事」『文字と古代日本』2 吉川弘文館
- 平川南 2008『日本の歴史 第 2 巻 日本の原像』小学館
- 平野寛之 2008「古代入間郡家の復元に向けてー川越市霞ヶ関遺跡群の再検討ー」『論叢古代武蔵入間郡家ー多角的視点からの考察』古代の入間を考える会
- 深津正 1983『燈用植物』法政大学出版社
- 古尾谷知浩 2004「坏蓋硯考ー「転用」概念の再検討」『名古屋大学文学部研究論集史学 50』
- 古庄浩明 1992「鉄製紡錘車の研究ー東日本への伝播についてー」『国学院大学資料館紀要』第 8 号
- 北條芳隆 1996「雪野山古墳の石製品」『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団
- 穂積裕昌 2008「古墳時代織機研究の新展開」『三重県埋蔵文化財センター紀要』17-1 三重県埋蔵文化財センター
- 堀田孝博 1999「古代における鉄製紡錘車普及の意義についてー神奈川県下出土資料を中心としてー」『神奈川考古』35 号
- ホンメル Rudolf P. Hommel 1992『中国手工業誌』(国分直一訳)東京：法政大学出版社(原書名：*China at Work*, 1937)
- 埋蔵文化財研究会 2005『古墳時代の滑石製品ーその生産と消費ー発表要旨・資料集』
- 松本直子 2002「弥生時代前期の土器片円盤類ー紡錘車である可能性の検討ー」『瀬戸内海の考古学ー平井勝氏追悼論文集ー』上巻
- 三浦敦 1990「交換・企業家・社会変化ー日本村落社会の過程論的分析の試み」『民族学研究』55 巻 2 号
- 宮崎由利江 1993「打ち欠き土器」『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B-17 号遺跡』大宮市遺跡調査会
- 宮瀧交二 2006「1 群馬・埼玉県下の刻書紡錘車」『古代の信仰と社会』国土舘大学考古学会編
- 宮本敬一 1999『史跡上総国分寺跡ー国分僧寺尼寺とその時代』市原の遺跡(1)市原市文化財センター編市原市教育委員会
- 村上由美子 2004「木器の「ライフヒストリー」考ー生活史の文脈をもとめてー」『往還する考古学近江貝塚研究会論集 2』近江貝塚研究会
- 村上由美子 2009「木製刈払具の検討ー木器の「使い下ろし」に関するー考察ー」『木・ひと・文化ー出土木器研究会論集ー』出土木器研究会
- 森浩一 1979『図説日本の歴史』1 先史・原始小学館
- 八幡一郎 1979『八幡一郎著作集第 3 巻弥生文化研究』雄山閣
- 山口格 1999「小型円板」再考ー陶磁器の二次加工品の性格・用途をめぐってー『研究紀要』第 8 号創立 10 周年記念論文集 三重県埋蔵文化財センター
- 山口辰一 1985「武蔵国府と奈良時代の土器様相」『東京考古』3 東京考古談話会

- 山路直充 2004 「古代における墨の原料と製法（覚書）」『市川市立考古博物館報』第 31 号
- 山下守昭 1983 「若葉台遺跡について」『若葉台遺跡シンポジウム』鶴ヶ島教育委員会
- 山本浩司 2003 「王権とレガリア」『岩波講座 天皇と王権を考える 6』岩波書店
- 山中敏史 1983 『埋蔵文化財ニュース 41 号陶硯関係文献目録』奈良文化財研究所
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- 吉川真司 1984 「常布と調庸制」『史林』第 67 巻第 4 号史学研究会
- 吉田恵二 1985 「日本古代陶硯の特質と系譜」『國學院大學考古学資料館紀要』第 1 輯
- 吉田恵二 1987 「陶製熊脚三足円面硯の発生とその意義」『國學院大學考古学資料館紀要』第 3 輯
- 吉田恵二 1992 「中国古代における円形硯の成立と展開」『國學院大學考古学資料館紀要』第 30 輯
- 吉田孝 1983 『律令国家と古代の社会』岩波書店
- 吉本忍 1987 「手織り機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12 巻 2 号
- 横田龍介 2004 「江戸の“リサイクル”ー考古学的概念規定を中心にー」『続 遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会
- レヴィストロース C. Levi-Strauss 1976 『野生の思考』（大橋保夫訳）みすず書房
- 渡辺一 1988 「第 7 章成果と問題点」『鳩山窯跡群Ⅰ』鳩山町教育委員会
- 渡辺一 1990 「第 4 章成果と問題点」『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山町教育委員会
- 渡辺一 2006 「地方窯とその流通」『古代東国の窯業生産の研究』青木書店
- 渡部武 1991 「第 7 章紡織技術と衣生活」『画像が語る中国の古代』平凡社

< 英語文 >

- Appadurai A. 1986. Introduction: commodities and the politics of value , *The social life of things*
CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS
- Ascher R. 1968. Time's Arrow and the Archaeology of a Contemporary Community, *Settlement
Archaeology National Press Books*
- Binford L. 1962. Archaeology as anthropology *American Antiquity* vol.28
- Binford L. 1968. Post-Pleistocene Adaptations *In New Perspectives in Archaeology ,ed S.R.and
L.R.Binford*
- Binford L. 1981. Behavioral Archaeology and the “Pompeii premise” *Journal of anthropological
Research* 37
- Cameron C. M., Tomka S. A. ed. 1993. *Abandonment of settlements and regions*, CAMBRIDGE
UNIVERSITY PRESS
- Kopytoff I. 1986. The cultural biography of things: commoditization as process, *The social life of
things* CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS
- Michael Deal. 1985. Household Disposal in the Maya Highland: An Ethnoarchaeological
Interpretation, *Journal of anthropological Archaeology* 4, ACADEMIC PRESS
- Renfrew C, Paul Bahn 2001. Archaeology Theories, Methods and Practice *Thames & Hudson*
- Schiffer M. 1972 Archaeological context and systemic context, *American Antiquity* vol.37, No.2
- Schiffer M. 1976 *Behavioral Archaeology*, ACADEMIC PRESS
- Schiffer M., Downing T. McCarthy M. 1981, Waste Not, Want Not: An Ethnoarchaeological
Study of Reuse in Tuscon, Arizona, *MODERN MATERIAL CULTURE The*

archaeology of us, ACADEMIC PRESS

Schiffer M. 1985. Is there “Pompeii premise” in archaeology?, *Journal of anthropological Research* 41

Stevenson M. 1982. Toward an understanding of site abandonment behavior: evidence from historic mining camps in the Southwest Yukon, *Journal of site Anthropological Archaeology* 1

<韓国語文>

李健茂 1992 「茶戸里遺跡出土の筆について」 『考古学誌』4 韓国考古美術研究所

金妍秀 1994 「傳 扶餘発見 中国陶磁硯について」 『考古学誌』6 韓国考古美術研究所

洪思俊 1961 「百済の陶製硯と石製硯」 『考古美術』第2巻 第4号韓国美術史学会

洪潜植 2006 「統一新羅の硯と使用階層に関する試論」 『石軒鄭澄元教授定年退任記念論叢』

高久健二 1995 『樂浪郡古墳文化研究』学研文化社

山本孝文 2003 「泗比期の陶硯一分類・編年と歴史的意義一」 『百済研究』第38輯 忠南大學校百済研究所

山本孝文 2006 「器物と文書行政」 『三国時代律令の考古学的研究』書景文化社

<報告書>第2章・第3章・第4章・第5章

・日本

市原市教育委員会 2003 『市原市稻荷台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告書IX

市原市教育委員会 2009 『上総国分僧寺跡I』市原市埋蔵文化財調査センター報告書 第8集

大宮市遺跡調査会 1993 『氷川神社・氷川神社東遺跡・B-17号遺跡』

岡崎敬他 1978 『宗像沖ノ島』宗像大社

川越市教育委員会 1989 『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書 (IX) 龍光第4遺跡 天王第5遺跡 天王第6遺跡』

川越市教育委員会 1992 『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書 (X) 龍光第5遺跡・花見堂遺跡(第2次調査)・天王遺跡(第7次調査)』

川越市教育委員会他 1996 『花見堂遺跡第1次・第3次・第4次遺跡群』

川越市教育委員会他 1999 『天王・山王久保遺跡(2次調査) 龍光・新田屋敷遺跡(第2次調査)』

川越市教育委員会 2002A 『霞ヶ関17次・18次遺跡』

川越市教育委員会他 2002B 『弁天西遺跡(第15次調査)』

川越市教育委員会他 2005A 『八幡前・若宮遺跡(第1次調査)』川越市遺跡調査会報告書第31集

川越市教育委員会他 2005B 『天王遺跡(第15次調査)』川越市遺跡調査会調査報告 第32集

川越市教育委員会他 2008 『熊野神社西遺跡第4次・第5次発掘調査』

川越市教育委員会 1996 『川越市文化財保護年報』

川越市教育委員会 1997 『川越市文化財保護年報』

川越市教育委員会 1998 『川越市文化財保護年報』

川越市教育委員会 1999 『川越市文化財保護年報』

川越市教育委員会 2000 『川越市文化財保護年報』

川越市教育委員会 2001 『川越市文化財保護年報』

川越市教育委員会 2002『川越市文化財保護年報』

京都府教育委員会 1976「長岡宮跡昭和 50 年度発掘調査概要 7AN7C 地区の調査」

九州歴史資料館 2002『大宰府政庁跡』

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『矢田遺跡』

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991『矢田遺跡Ⅱ』

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992『上野国分僧寺・尼寺中間地域（7）』 4

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『矢田遺跡Ⅶ』

埼玉県遺跡調査会 1972『千代田遺跡発掘調査報告書』第 16 集

埼玉県遺跡調査会 1973『霞ヶ関遺跡第 3 次発掘調査概報』参考資料

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986『将監塚・古井戸遺跡 歴史時代Ⅰ』第 64 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988『将監塚・古井戸遺跡 歴史時代Ⅱ』第 71 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989『北島遺跡』第 81 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『宮町遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 96 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『北島遺跡Ⅲ』第 103 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992『稻荷前遺跡 A 区』第 120 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994A『光山遺跡』第 137 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994B『新屋敷遺跡 A 区』第 140 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994C『稻荷前遺跡 B・C 区』第 145 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996『新屋敷遺跡 C 区』第 175 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997A『山王裏・山川入・西浦・野本氏館跡』第 184 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997B『築道下遺跡Ⅰ』第 188 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997C『中堀遺跡』第 190 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998A『富士見一丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 189 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998B『新屋敷遺跡 D 区』第 194 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998C『北島遺跡Ⅳ』第 195 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998D『築道下遺跡Ⅱ』第 199 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000A『築道下遺跡Ⅲ』第 245 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000B『築道下遺跡Ⅳ』第 246 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002A『北島遺跡Ⅴ』第 278 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002B『熊野遺跡 A・C・D 区』第 279 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2004A『北島遺跡Ⅶ』第 291 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2004B『北島遺跡Ⅸ』第 293 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005A『北島遺跡ⅩⅡ』第 304 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005B『北島遺跡ⅩⅢ』第 305 集

埼玉県熊谷市遺跡調査会 2001『諏訪木遺跡』埼玉県熊谷市遺跡調査会報告書

埼玉県児玉郡神川町臼樹原・檜下遺跡調査会 1990『臼樹原・檜下遺跡Ⅱ』臼樹原・檜下遺跡調査会
報告書 第 2 集

埼玉県児玉郡神川町臼樹原・檜下遺跡調査会 1991『臼樹原・檜下遺跡Ⅲ』臼樹原・檜下遺跡調査会
報告書 第 3 集

埼玉県児玉郡神川町臼樹原・檜下遺跡調査会 1992『臼樹原・檜下遺跡Ⅳ』臼樹原・檜下遺跡調査会

報告書 第4集

- 坂戸市遺跡調査団 1989『若葉台遺跡－若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
坂戸市遺跡調査団 1993『若葉台遺跡－若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
坂戸市遺跡調査団 1995『若葉台遺跡－若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
坂戸市遺跡調査団 1997『若葉台遺跡－若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
坂戸市遺跡調査団 2000『若葉台遺跡－若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
坂戸市教育委員会 2005『若葉台遺跡－若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
坂戸市教育委員会 1992『坂戸市史古代資料編』
狭山市教育委員会 1986『狭山市埋蔵文化財調査報告書 4 楊櫨木遺跡』
田中一郎 1976『上谷遺跡』坂戸市教育委員会
(財)千葉県文化財センター1994『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡』第243集
鶴ヶ島市教育委員会 1983『若葉台遺跡 C～I 地点発掘調査報告書』
鶴ヶ島市教育委員会 1984A『若葉台遺跡 A・B・B 地点南発掘調査報告書』
鶴ヶ島市教育委員会 1984B『若葉台遺跡群 J・K・L・地点調査概報』
鶴ヶ島市教育委員会 1985『若葉台遺跡 J・K・L 地点発掘調査概報』
鶴ヶ島市教育委員会 1989『若葉台遺跡 S 地点発掘調査報告書』
鶴ヶ島市遺跡調査会 1993『若葉台遺跡 O・P・Q・R・T 地点 富士見児童公園発掘調査報告書』
鶴ヶ島市遺跡調査会 1997『若葉台遺跡 V 地点』
東京都北区教育委員会 1988『御殿前遺跡』北区埋蔵文化財調査報告 第4集
所沢市教育委員会他 1976『東の上遺跡』所沢市文化財調査報告書 第1集
所沢市教育委員会 1986『第2次・第3次・第4次・第5次・第6次東の上遺跡』所沢市文化財調査報告書第18集－2
所沢市教育委員会 1995『市内遺跡群調査報告書Ⅰ東の上遺跡第62次』第1集
所沢市教育委員会 2000『東の上遺跡』第21集
所沢市教育委員会他 2001『東の上遺跡第37次調査・第77次調査 山下後遺跡第5次調査』所沢市埋蔵文化財調査報告書 第24集
所沢市教育委員会 2001『市内遺跡調査報告12』所沢市埋蔵文化財調査報告書 第37集
所沢市教育委員会 2002『東の上遺跡第80次調査』所沢市埋蔵文化財調査報告書 第27集
所沢市教育委員会他 2004『市内遺跡調査報告10－東の上遺跡第83・85次調査』所沢市埋蔵文化財調査報告書 第32集
長野県埋蔵文化財センター1999『上信越自動車道長野線 屋代遺跡群・更埴条里遺跡 古代1編』
奈良国立文化財研究所 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』
奈良国立文化財研究所 1976『平城京発掘調査報告書Ⅶ』
日本製鋼所遺跡調査会 1995『武蔵国府関連遺跡調査報告』日鋼地区
鳩山町教育委員会他 1989『鳩山窯跡群Ⅰ』
鳩山町教育委員会他 1990『鳩山窯跡群Ⅱ』
鳩山町教育委員会他 1991『鳩山窯跡群Ⅲ』
鳩山町教育委員会他 1992『鳩山窯跡群Ⅳ』
鳩山町教育委員会 1995『竹之城・石田・皿沼下遺跡』

鳩山町教育委員会 1997『町内遺跡Ⅰー県指定史跡赤沼古代瓦窯跡灰原範囲確認調査報告書ー』
 飯能市教育委員会 1987『飯能の遺跡(6)』飯能市内遺跡発掘調査報告書 4
 飯能市教育委員会 1997『飯能の遺跡(21)』飯能市内遺跡発掘調査報告書 13
 飯能市教育委員会 2000『飯能の遺跡(28) 甲新田遺跡 第2次調査・張摩久保遺跡第28次調査』
 飯能市教育委員会 2009『飯能の遺跡(36)』飯能市内発掘調査報告書 17
 日高市教育委員会 1997『日高市史』原始古代資料編
 日野市落川遺跡調査会 1997『落川遺跡Ⅱ』
 日野市落川土地区画整理組合 1998『おちかわ』
 深谷市教育委員会 2008『律令時代の郡役所』
 ふじみ野市教育委員会 2008『市内遺跡群 3』
 府中市教育委員会他 1979『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅰ』府中市埋蔵文化財調査報告 第1集
 府中市教育委員会他 1980『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅱ』府中市埋蔵文化財調査報告 第2集
 府中市教育委員会他 1981『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅲ』府中市埋蔵文化財調査報告 第3集
 府中市教育委員会他 1981『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅳ』府中市埋蔵文化財調査報告 第4集
 府中市教育委員会他 1984『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅴ』府中市埋蔵文化財調査報告 第5集
 府中市教育委員会他 1984『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅵ』府中市埋蔵文化財調査報告 第6集
 府中市教育委員会他 1988『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅵ』府中市埋蔵文化財調査報告 第10集
 府中市教育委員会他 1996『武蔵国府関連遺跡調査報告 15』府中市埋蔵文化財調査報告 第15集
 府中市教育委員会他 1999『武蔵国府関連遺跡調査報告 16』府中市埋蔵文化財調査報告 第16集
 府中市教育委員会他 1996『武蔵国府関連遺跡調査報告 17』府中市埋蔵文化財調査報告 第17集
 府中市教育委員会他 1997『武蔵国府関連遺跡調査報告 19』府中市埋蔵文化財調査報告 第19集
 府中市教育委員会他 1998『武蔵国府関連遺跡調査報告 20』府中市埋蔵文化財調査報告 第20集
 府中市教育委員会他 1999『武蔵国府関連遺跡調査報告 21』府中市埋蔵文化財調査報告 第21集
 府中市教育委員会他 1999『武蔵国府関連遺跡調査報告 22』府中市埋蔵文化財調査報告 第22集
 府中市教育委員会他 1999『武蔵国府関連遺跡調査報告 23』府中市埋蔵文化財調査報告 第23集
 府中市教育委員会他 2004『武蔵国府関連遺跡調査報告 30』府中市埋蔵文化財調査報告 第32集
 府中市教育委員会他 2004『武蔵国府関連遺跡調査報告 31』府中市埋蔵文化財調査報告 第33集
 府中市教育委員会他 2005『府中駅南口第3地区第1種市街地再開発事業建設に伴う事前調査』府中市埋蔵文化財調査報告 第36集
 府中市教育委員会他 2005『武蔵国府関連遺跡調査報告 35』府中市埋蔵文化財調査報告 第38集
 府中市教育委員会他 2006『武蔵国府関連遺跡調査報告 36』府中市埋蔵文化財調査報告 第39集
 府中市教育委員会他 1978『武蔵国府の調査Ⅳ 昭和53年度府中市調査概報』
 府中市教育委員会他 1980『武蔵国府の調査Ⅹ 昭和54中市調査概報 3』
 府中市教育委員会他 1980『武蔵国府の調査ⅩⅠ 昭和54中市調査概報 4』
 府中市教育委員会他 1980『武蔵国府の調査ⅩⅡ 昭和55年度府中市調査概報』
 府中市教育委員会他 1981『武蔵国府の調査ⅩⅢ 昭和56年度府中市調査概報 1』
 府中市教育委員会他 1982『武蔵国府の調査ⅩⅣ 昭和56年度府中市調査概報 2』
 府中市教育委員会他 1984『武蔵国府の調査ⅩⅤ 昭和59年度府中市調査概報』
 府中市教育委員会他 2001『武蔵国府の調査 18 1983年府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2001『武蔵国府の調査 19 平成10年度府中市内発掘調査概報』

府中市教育委員会他 2002 『武蔵国府の調査 21 1997 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2002 『武蔵国府の調査 22 平成 11 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2004 『武蔵国府の調査 25 平成 7 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2004 『武蔵国府の調査 27 昭和 63 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2005 『武蔵国府の調査 28 昭和 62 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2005 『武蔵国府の調査 29 平成元年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2005 『武蔵国府の調査 31 平成 2 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2006 『武蔵国府の調査 32 平成 3 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2006 『武蔵国府の調査 33 昭和 50～60 府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2006 『武蔵国府の調査 34 平成 13 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2006 『武蔵国府の調査 35 平成 6 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2007 『武蔵国府の調査 36 平成 4 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2008 『武蔵国府の調査 37 平成 5 年度府中市内発掘調査概報』
 府中市教育委員会他 2006 『調査概報武蔵国府の調査概報 32 平成 3 年度分』
 府中市教育委員会他 1993 『武蔵国府 府中市遺跡調査会年報昭和 57（1982）年度』
 三井不動産・（株）武蔵文化財研究所他 2007 『武蔵国府関連調査報告（仮称）府中市府中町 2 丁目
 計画地区のマンション建設に伴う埋蔵文化財調査報告』

・韓国

韓国文化財保護財団 2007 『慶州北門路王京Ⅱ』
 国立慶州文化財研究所 2001 『新羅王京発掘調査報告書Ⅰ』
 国立慶州文化財研究所 2001 『新羅王京』
 国立扶餘博物館 2000 『陵寺』
 国立扶餘文化研究所 2003 『扶蘇山城発掘調査報告書Ⅴ』
 忠南大学校百濟研究所他 2003 『泗沘都城一陵山里と軍守里地点発掘調査報告書』
 文化広報部文化財管理局 1978 『雁鴨池発掘調査報告書』
 文化財管理局文化財研究所 1984 『皇龍寺』
 嶺南文化財研究所院 2003 『慶州皇吾洞 118－6 番地遺跡』

図版出典

第1章

第1図 [Schiffer 1972]

第2章

第12図 [山口辰一1985]

第3章

第1図1・3：[江戸東京博物館1995] 2：[(財)日本のあかり博物館1997]

第2図1～11・13～14～22 [奈良国立文化財研究所1995] 12 [同1976]

第4章

第1図1・7[五島美術館1978] 2 [石井1985転載]

第2図1 [金妍秀1994] 2 [(株)出版科学総合研究所1985] 3～5・7～9 [山本孝文2006]

6 [石井1985] 10[国立慶州文化財研究所2001] 11 [嶺南文化財研究所院2003]

12・13 [文化広報部文化財管理局1978] 14・15 [国立慶州文化財研究所2001]

第3図1 [坂戸市遺跡調査団1993] 2・8～10 [坂戸市遺跡調査団2005] 3～6[坂戸市遺跡調査団1995] 7 [坂戸市遺跡調査団1989] 11 [坂戸市遺跡調査団2000] 12・13 [鶴ヶ島市遺跡調査会1993] 14・15 [鶴ヶ島市遺跡調査会1994]

第4図16 [鶴ヶ島市遺跡調査会1994] 17 [鶴ヶ島市遺跡調査会1993] 18～23 [鶴ヶ島市遺跡調査会1984] 24 [鶴ヶ島市遺跡調査会1989] 25 [鶴ヶ島市遺跡調査会1993] 26 [鶴ヶ島市遺跡調査会1983] 27 [鶴ヶ島市遺跡調査会1984] 28～30 [鶴ヶ島市遺跡調査会1993] 31 [鶴ヶ島市遺跡調査会1984]

第5図1～8 [九州歴史資料館 2002]

第7図1～4・6 [入間の古代を考える会2008] 5 [埼玉考古学会 2006] 7～10 [川越市教育委員会2005B] 11～17 [川越市教育委員会2005A]

第8図1～3 [入間の古代を考える会2008] 4 [埼玉考古学会 2006] 5 [川越市教育委員会2005B]

第14図 [西1986]

第15図 [市原市教育委員会2003]

第5章

第1図1～4 [東村2006] 5 [日野市落川遺跡調査会1997] 6 [埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002A]

第2図 [竹内1989]

第3図1 [森1979] 2 [東村2008B] 3 [角山1983]

第4図 [東村2008A]

第9図 [山東省博物館ほか1985]

第10図 [埼玉考古学会2008]

第11図 [鳩山町教育委員会1992]

第12図1～3 [奈良国立文化財研究所1995] 4・6 [國下1988] 5 [京都府教育委員会1976]

第14図 [滝澤1985]

第29図1 [川越市教育委員会他1999] 2 [川越市教育委員会2002] 3 [川越市教育委員会2002] 4～6 [川越市教育委員会1996] 7・8 [川越市教育委員会2002B] 9 [川越市教育委員会2005A] 9 [川越市教育委員会2008]

第30図10～16 [坂戸市遺跡調査団1993] 17～22 [坂戸市遺跡調査団1995] 23～28 [坂戸市遺跡調査団1997]

第31図29・30 [坂戸市遺跡調査団1997] 31 [坂戸市教育委員会2005] 32～35 [鶴ヶ島市遺跡調査会1983] 36～38鶴ヶ島市遺跡調査会1993] 39 [鶴ヶ島市遺跡調査会1997] 40 [鶴ヶ島市遺跡調査会1984B] 41・42 [埼玉県遺跡調査会1972] 43 [埼玉県埋蔵文化財調査事業団1998A]

第32図 [埼玉県埋蔵文化財調査事業団2005B]

第33図1～7 [熊谷市教育委員会2001]

第36図1・3・4 [忠南大学校百済文化財研究所他 2003] 2・5～11 [国立慶州文化財研究所 2001]

附表 統一新羅時代の紡錘車(都城)

()は推定値で筆者の計測によるものも含む

	遺跡名	出土遺構/図版番号	時期	形状	材質種類	直径	厚さ	孔径	重量(g)	備考
1	新羅王京 I	672	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	6.2	2.6	0.8	125.8	
2	新羅王京 I	677	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	6.3	1.6	0.6		
3	新羅王京 I	690	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	8.5	2.7	0.8		
4	新羅王京 I	664	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	5.0	1.3	0.9		
5	新羅王京 I	682	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	6.8	2.0	0.7	121.8	
6	新羅王京 I	687	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	7.5	1.4	0.7	117.2	
7	新羅王京 I	693	8C~9C	RW	瓦再利用他	9.3	2.0	1.9		
8	新羅王京 I	681	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	6.8	2.6	0.6		
9	新羅王京 I	679	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	6.4	1.8	0.5		孔形不整形
10	新羅王京 I	676	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	6.4	1.8	0.5		孔形不整形
11	新羅王京 I	700	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	4.8	1.6	未貫通		
12	新羅王京 I	666	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	5.0	1.9	0.7		
13	新羅王京 I	665	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	4.3	1.2	0.8		
14	新羅王京 I	685	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	7.3	2.2	0.9		
15	新羅王京 I	674	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	5.9	2.0	1.0		
16	新羅王京 I	692	8C~9C	RW	瓦再利用他	8.6	1.9	1.2		
17	新羅王京 I	695	8C~9C	RW	瓦再利用他	9.3	1.7	1.6		
18	新羅王京 I	696	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	9.3	2.5	1.0		
19	新羅王京 I	684	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	7.3	2.0	0.9		
20	新羅王京 I	691	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	8.0	2.2	0.6		
21	新羅王京 I	698	8C~9C	RW	瓦再利用他	11.7	1.2	1.2		
22	新羅王京 I	659	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	4.0	1.4	0.9		
23	新羅王京 I	662	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	5.2	1.1	0.8		
24	新羅王京 I	663	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	4.2	1.4	0.4		
25	新羅王京 I	680	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	7.0	1.5	0.8		
26	新羅王京 I	658	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	5.0	1.9	0.6		
27	新羅王京 I	675	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	6.3	1.8	0.7		
28	新羅王京 I	683	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	6.9	2.0	1.1		
29	新羅王京 I	686	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	6.8	1.3	0.8		
30	新羅王京 I	688	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	7.8	1.5	0.5		
31	新羅王京 I	689	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	8.3	2.1	1.1		
32	新羅王京 I	694	8C~9C	R	瓦再利用紡錘車	8.6	2.0	1.0		
33	新羅王京 I	697	8C~9C	RW	瓦再利用他	11.5	2.8	1.2		
34	新羅王京 I	657	8C~9C	D	土製	2.6	1.2	0.4		
35	新羅王京 I	660	8C~9C?	C	石製	3.6	1.9	0.7		
36	新羅王京 I	661	8C~9C?	D	土製	3.7	1.6	0.6		
37	新羅王京 I	667	8C~9C?	D	土製	3.9	2.3	0.8		
38	新羅王京 I	668	8C~9C?	B	土製	4.3	2.4	0.9		
39	新羅王京 I	669	8C~9C	C	土製	4.7	2.5	0.4		
40	新羅王京 I	670	8C~9C?	D	土製	5.6	3.3	0.9		
41	新羅王京 I	671	8C~9C	B	土製	5.4	3.3	0.6		
42	新羅王京 I	673	8C~9C	D	(土製)	5.1	1.6	1.0		孔形・成形不良
43	新羅王京 I	678	8C~9C	D	(土製)	4.2	1.2	0.8		孔形・成形不良
44	新羅王京 I	699	8C~9C	(D)	(土製)	4.2	2.9	未貫通		
45	新羅王京 I	701	8C~9C	(D)	(土製)	3.4	不明	未貫通		
46	新羅王京 I	891	8C~9C	D	石製	4.6	1.4	0.7		
47	新羅王京 I	896	8C~9C	D	石製	6.6	3.0	1.0		孔形不整形

48	新羅王京 I	898	8C~9C	sw	石製他	8.5	3.7	1.3		孔形不整形
49	新羅王京 I	899	8C~9C	sw	石製他	9.0	3.5	2.0		孔形不整形
50	新羅王京 I	897	8C~9C	D	石製	7.9	2.4	1.1		孔形不整形
51	新羅王京 I	890	8C~9C	D	石製	4.0	1.5	0.6		
52	新羅王京 I	894	8C~9C	sw	石製他	7.0	3.2	1.9		孔形不整形
53	新羅王京 I	895	8C~9C	D	石製	6.5	3.2	0.8		
54	新羅王京 I	893	8C~9C	D	石製	6.9	2.6	1.1		
55	新羅王京 I	892	8C~9C	S	滑石容器再利用	5.0	1.2	0.8		
56	新羅王京 I	702	8C~9C	Z	円形土製品	3.1	0.6		(8.4)	
57	新羅王京 I	703	8C~9C	Z	円形土製品	2.9	0.6		8.1	
58	新羅王京 I	704	8C~9C	Y	円形土製品	4.2	1.3		28.4	
59	新羅王京 I	706	8C~9C	Y	円形土製品	6.4	1.9		94.6	
60	新羅王京 I	710	8C~9C	Y	円形土製品	5.5	1.5		51.6	
61	新羅王京 I	713	8C~9C	Y	円形土製品	7.3	1.4		92.9	
62	新羅王京 I	705	8C~9C	Y	円形土製品	4.3	1.7			
63	新羅王京 I	706	8C~9C	Y	円形土製品	6.4	1.9		94.6	
64	新羅王京 I	707	8C~9C	Y	円形土製品	4.8	1.6			
65	新羅王京 I	708	8C~9C	Y	円形土製品	6.1	1.1			
66	新羅王京 I	709	8C~9C	Y	円形土製品	6.4	1.2			
67	新羅王京 I	711	8C~9C	Y	円形土製品	5.6	1.4			
68	新羅王京 I	712	8C~9C	Y	円形土製品	7.2	1.4			
69	新羅王京 I	714	8C~9C	Y	円形土製品	7.5	2.0			
70	泗沘都城・軍守里地点	5 SE3pit	6世紀中葉~7世紀後半	E	土製	7.0	1.7	0.7	105.7	他未貫通孔1点
71	泗沘都城・軍守里地点	6 N2E1pit	6世紀中葉~7世紀後半	E	石製	6.7	0.9	0.8	(71.8)	
72	泗沘都城・軍守里地点	7 十字状遺構	6世紀中葉~7世紀後半	C	土製	5.0	2.5	1.0	74.8	
73	泗沘都城・軍守里地点	8 SE1pit	6世紀中葉~7世紀後半	Y	円形土製品	5.0	2.0		52.8	
74	泗沘都城・軍守里地点	9 SE3pit	6世紀中葉~7世紀後半	Y	円形土製品	5.5	1.6		70.4	
75	泗沘都城・軍守里地点	10	6世紀中葉~7世紀後半	Z	円形土製品	6.0	0.6~1		51.5	須恵器壺破片
76	泗沘都城・軍守里地点	11	6世紀中葉~7世紀後半	Y	円形土製品	(8.0)	0.7		(154.0)	
77	扶蘇山城 2003	6 Na2pit	6世紀中葉~7世紀後半	D	土製	6.0	2.7	1.0	134.0	

Summary

Reuse of resources and ancient society
- Basic research of pottery reuse in Japan -

Chitose Banno

2010,3

Graduate School of Cultural Science
Saitama University,
Japan

The purpose of the thesis for doctorate is to look into the recycling of pottery in the settlement of consumption places in ancient Japan and to inquiry the meaning in the society. Study of recycling pottery is a new field for Japanese archeology.

I showed that the recycle of pottery is a kind of basic system in ancient society as adaptation strategies for the change of social cultural environments, even though it is a little.

I studied three uses cases of reuse pottery, which are lamps equipment, ink stones, spindle whorls in Nara (8th century) and Heian (.from 9th to 11th century) periods. I actually observed residual shape and adherent substance of eating utensils that were excavated in archaeological sites. Residual shape and adherent substance of pottery are important evidences to identify the purpose of reuse. Classifying them some types, I made quantitative analyses.

People lived in settlement in ancient times thought that even broken pottery is a kind of resources to reproduce new tools for their purpose. I showed that people reused pottery from the ink stones in the superstructure of society like governmental offices, to spindle whorls in production infrastructure.

Generally, reuse of pottery has been regarded as only economical aspects such as savings and poverty. I pointed out that reuse is the aspects of reproduction activities in the consumption places for local powerful families in Ritsuryo system. This system is introduced from China to Japan at 7th century as a state

administration in ancient. Central government whose top is the emperor, located in Nara influence regional society.

We have many written official paper records about Ritsuryo system and central government; on the other hand, we can get only some tax information about local powerful families from them. Due to investigate reuse pottery of villages in the eastern Japan, I can describe some aspects of local powerful families' tough adaptation strategies in political change as well as economical actual reproduction activities. Their activities lead gradually to break down and change the Ritsuryo system.

I also put the concepts of reuse in order including discard the goods. I have a viewpoint that it is important to see the meaning culturally and socially for reuse study. The life history analyses for goods bring us a new dynamic analysis about relationships between people and material culture. I set up three conceptual aspects that are ① use and recycle, ② refuse and ③ stock and management. Those aspects connect with the value of use and are necessary to explain the flow of goods and reuse. I point out that stock and management aspect especially is important for reuse study. The concept of "cultural biography of things" by Kopytoff is one of the backgrounds of framework.

Through the reuse of pottery, I can understand the sense of rationality, orientation, and value for goods in ancient people.

Research and theoretical issues of reuse are common across time and area. Archaeology can take advantages to draw up the wisdom of ancient people by studying reuse. I believe that recycling is one of the studies to answer this challenge. Through the study, in spite of the big difference between the purpose of recycling ancient and modern society, I point out that the recycle is one of the important adaptation strategies to respond to changes in various environments. It is important to build a reuse system in the societies and to change the values of the society including personal values.